

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成 8 年度

1997年

奈良市教育委員会

1. 文章・文字

ページ	行・位置	誤	正
本文目次	26行	放射線	放射性
調査目次(左頁)	30行	平城京左京四臺四坊十二・十三坪 後出遺構平面図	平城京左京四臺四坊十二・十三坪遺構平面図
調査目次(右頁)	35行 左	十三坪	十三坪
	37行 左	十三坪	十三坪
	19行 左	平城京左京三臺一坊十一坪	平城京左京四臺一坊十一坪・東一坊坊間路
	21行 左	平城京左京三臺一坊十一坪	平城京左京四臺一坊十一坪・東一坊坊間路
	15行 右	松林苑	松林苑跡
	16行 行	松林苑	松林苑跡
平成8年度調査第一版	「344」■	平城京左京三臺一坊十一坪	平城京左京四臺一坊十一坪
	「350」■	475 m	175 m
	「731」■	平城京左京五臺四一坊九坪	平城京左京五臺四坊九坪
		大安寺2丁目	大安寺2丁目1149
		H 9 . 0 3 .	H 9 . 0 3 . 3 1
		史跡大安寺跡境内整備事業	史跡大安寺跡境内保存整備事業
P 1	4行	第351調査	第351次調査
P 2	表「-4発掘区」■	H 7 . 1 2 . 3 0	H 7 . 1 0 . 3 0
	「364」■	青野町42-1、43-1	青野町42-1、43-1他
P 3	3行	第273次調査	第327次調査
	4行	第273次調査	第327次調査
P 5	表「SE520」■	長方形横板組	長方形縦板組
P 15	17行	万年通寶	万年通寶
		神功開寶	神功開寶
P 17	表「SE501」■	曲物底板	曲物底板
P 18	東壁土刷図	(耕土)	(作土)
	北壁土刷図	(耕土)	(作土)
P 19	開スケール(2箇所)	1 0 m	1 m
P 21	1行	1点 6255 E 1点、6255 L 1点	1点、6225 E 1点、6225 L 1点
	5行	26～37	26～47
	5～6行	38が万年通寶	48が硯、49が
P 24	5～6行	神功開寶	萬年通寶
	7行	至同元寶	神功開寶
P 29	13行	第318・325	第318・324・325
P 45	2行	市第164・168調査	市第164・168次調査
P 51	12行	宅地1/32	宅地は1/32
P 58	図	網かけ部	網かけ部
P 59	表	編み側溝SD	東側溝SD 1062
		平安遺構	平安以降
P 60	20行	1期新段階(9世紀前半)	1期新段階(9世紀前半)
P 65	17行	堀形	掘形
P 69	13行	軒丸瓦	軒平瓦
P 72	10行	体内面	体外面
P 75	表	雨落溝	雨落溝
P 97	22行	動物依存体	動物遺存体
P 104	1行	1144-1	1144-1他
P 106	15行	燈籠褐色	燈籠褐色
		暗褐色	暗褐色
P 109	11行	1粘質土	砂質土
P 113	24行	青灰褐色粘質土	砂質土
	27行	青灰褐色粘質土	砂質土
P 114	11行	黄灰褐色粘質土	黄灰褐色粘質土
P 117	図タイトル	東南中坊	東南中坊棟
P 138	9行	東北坊	東北坊棟
P 142	11行	K 211～214	S K 211～214
P 143	4行	S X 4 0 2	S D 4 2 2
P 144	6行	第3～5号墳	第4～6号墳
	15行	3号墳	4号墳
	18行	4号墳	5号墳
図版42	タイトル	坪東1小坊	坪東1小坊
図版49	見出し	境小路	境小路
図版76	見出し	第69次(3)、第71次	第69・71次(3)

2. 挿図

ページ	訂正部分
P 11	P 12 の挿図と差し替え
P 12	P 11 の挿図と差し替え
P 34	図中中央部の文字「S D 3 2」を削除

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成 8 年 度



1997年

奈良市教育委員会



1 鑰(やく)



2 奈良三彩壺Aミニチュア

はじめに

奈良市は、古代の都であった平城京をはじめ、様々な遺跡が数多く残され、今日まで連綿と受け継がれています。

遺跡は、私たちの遠い祖先たちが残してくれた貴重な遺産で、開発事業などが行なわれるにあたり、遺跡の発掘調査は必要で、現在調査を積極的に取り組んでいます。

平城京跡を主とした遺跡の発掘調査が中心ですが、その調査結果を基に史跡整備事業なども行ない、埋蔵文化財の保存と活用を図っています。

また、こうした発掘調査で明らかになった過去の生きた証を過去の遺産としてとどめるだけでなく、現在を生きる私たちはこれを大切に、子孫に誤りなく伝える責務があると考えております。

この報告書は、主に平成8年度に実施しました発掘調査の結果をまとめたもので、多くの人々に広く活用していただくことを願っております。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々、関係機関の皆様に対して厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

奈良市教育委員会

教育長 河合 利一

例 言

- 1 本書は、平成8年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。また、一昨年度及び昨年度に実施した下記の発掘調査の概要報告を併せて掲載した。

平成6年度 平城京第318・324次調査

平成7年度 平城京第325・327・331・334・335・339・344～346次調査、
史跡大安寺旧境内第69・71次調査

なお、本年度の発掘調査のうち、平城京第363～366・368・370・373次調査、西大寺旧境内第10次調査は次年度に報告する。また、平城京第356次調査（史跡平城京朱雀大路跡保存整備事業に関わる発掘調査）、平城京第358次調査（特別史跡・特別名勝平城京左京三条二坊宮跡庭園整備事業に関わる発掘調査）、菅原東遺跡埴輪窯跡群整備に関わる発掘調査（平城京第371次調査）、史跡大安寺旧境内第73次調査（史跡大安寺旧境内保存整備事業に関わる発掘調査）については整備事業完了時に、五ツ塚古墳群第3次調査、正暦寺境内第1次調査については継続調査終了時にそれぞれ報告する予定である。平城京東市跡推定地第19次調査は別に概要報告書を刊行した。

- 2 発掘調査は下記の体制で実施し、各調査の担当者は発掘調査一覧に示した。

社会教育部文化財課 課長 安田龍太郎 主幹 森川倫秀

埋蔵文化財調査センター 所長 高谷明男

庶務係 係長 杉村武史

調査第一係 係長 西崎卓哉

技術吏員 立石堅志 鐘方正樹 松浦五輪美 安井宣也

久保邦江 池田裕英 原田憲二郎

技術員 大窪淳司 田林香織 細川富貴子

調査第二係 係長 篠原豊一

技術吏員 三好美穂 森下浩行 武田和哉 秋山成人

中島和彦 久保清子 宮崎正裕

技術員 山前智敬

- 3 発掘調査と本書の作成にあたって奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会など関係諸機関からご指導とご協力をいただいた。記して感謝いたします。

- 4 本年度の発掘調査や出土遺物整理作業等には、下記の方々の協力があつた。

荒川 茂 今中 勇 植本武義 梅木繁一 奥田秀吉 北村 進

木村喜代之 木村嘉宏 小西綾子 小西貢造 塩野谷八十布 高橋敬輔

瀧田 勘 多久裕三 田口奈美江 辰田吉弘 辻 俊浩 辻中 昊

辻本武雄 仲村繁夫 二宮信隆 林健太郎 原田章英 福田米光

藤沢辰夫	増田義郎	松田十三日	松村茂治	松本 威	吉村 章
市川剛司	岩崎大介	高力美和	小林佐知子	坂倉清彦	島軒 満
甚田真友子	田矢杏子	堂下尚生	徳野裕明	仲川裕美子	久富正登
藤井健太	松田知之	森谷貴弘	森本成絵	森本裕美	山形香保里
山口 均	伊東由美	岩下和江	浦元由紀子	大友明美	小川布子
角谷和美	金戸康子	北井育代	北尾史真	近藤富貴子	斉藤和子
佐伯全子	新谷弘美	芹川順子	芹野恒代	田島千津子	立石京子
手塚真理	中島満寿江	濱井美和	板東剛子	松嶋克樹	松山径子
山村光子	吉川三子	辻 寛子	猪井里佳	虫明富美	

- 5 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した、遺跡ごとの通算次数である。
- 6 本書の執筆は埋蔵文化財調査センター職員が分担して行い、文末に文責を明らかにした。
- 7 平城京第325次調査、第349次調査の採取試料については、下記の方々による理化学分析を行いその報告をいただいた。記して感謝いたします。
放射線炭素年代測定 (株)古環境研究所
花粉分析 金原正明(天理大学附属天理参考館)、金原正子(環境考古研究所)
珪藻遺骸分析 清水 晃(奈良女子大学)
- 8 平城京第327次調査出土の柘については、日本計量史学会 篠原俊次氏のご教示をいただいた。平城京第327・349次調査出土の石製品の石材については、京都府立山城郷土資料館 橋本清一氏に鑑定していただいた。平城京第327・349次調査出土の木簡及び本年度実施した発掘調査で出土した墨書土器の釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所 館野和己氏・古尾谷知浩氏・山下信一郎氏・渡辺晃宏氏のご教示をいただいた。平城京第354次調査出土の動物骨については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 松井 章氏に鑑定していただいた。平城京第355次調査出土の土器の年代については、(財)京都市埋蔵文化財研究所 小森俊寛氏のご教示をいただいた。平城京第335・339次調査にあたっては、奈良国立文化財研究所 臼杵 勲氏、奈良女子大学 高田将志氏のご教示をいただいた。以上、記して感謝いたします。
- 9 本書で使用した遺構の分類記号や遺物の名称、型式は奈良国立文化財研究所および奈良市教育委員会の刊行物に準拠している。ただし、遺構番号は各調査ごとに付した仮番号である。
- 10 本書の遺構図、土層図に示した座標値は国土調査法に定める国土方眼第VI座標系によっている。標高は海拔高である。
- 11 本書の編集は、安田龍太郎の指導のもとに埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て篠原豊一・安井宣也が担当した。

本文目次

I 平城京跡・松林苑跡の調査

1	近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に伴う調査	1
(1)	平城京右京二条三坊二坪の調査	第327-1・351-2次 3
(2)	平城京右京二条三坊六坪の調査	第327-5次 13
(3)	平城京右京二条三坊九坪の調査	第327-2・4次 16
(4)	平城京右京二条三坊十坪の調査	第327-3次 18
(5)	平城京右京二条三坊十一坪の調査	第327-5・351-1次 25
2	J R奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う調査	29
(1)	平城京左京四条四坊十二・十三坪の調査	第164-208・324・331・335・339次 31
(2)	平城京左京四条四坊十四坪の調査	第347-2・353-1次 45
(3)	平城京左京四条四坊十五坪の調査	第318-1-3・325-2~7・347-1次 53
(4)	平城京左京四条四坊十六坪の調査	第334・345次 65
(5)	平城京左京四条五坊三坪の調査	第353-2次 70
3	平城京左京四条一坊十・十一坪の調査	第344次 73
4	平城京左京四条二坊三坪の調査	第346次 76
5	平城京右京一条二坊十一坪の調査	第348次 78
6	平城京右京七条一坊十五坪の調査	第349次 84
7	平城京左京五条四坊九坪の調査	第350次 89
8	平城京左京五条六坊八坪の調査	第352次 93
9	平城京左京三条五坊十三坪の調査	第354次 94
10	平城京左京四条三坊六坪の調査	第355次 98
11	平城京左京三条四坊一坪の調査	第357次 102
12	平城京左京二条六坊十坪の調査	第359次 104
13	平城京左京五条二坊十五・十六坪の調査	第361次 106
14	平城京左京四条五坊十三坪の調査	第360次 107
15	平城京左京八条二坊三坪の調査	第362次 108
16	松林苑跡の調査	第367・369次 110
17	平城京左京四条五坊十二坪の調査	第372次 112
18	平城京左京七条一坊五坪の調査	第374次 113

II 平城京内寺院跡の調査

1 史跡大安寺旧境内の調査	115
(1) 講堂・回廊・僧房の調査 第69次	116
(2) 西面大垣推定地の調査 第71次	119
(3) 食堂推定地の調査 第72次	120
2 元興寺旧境内の調査	125
(1) 東塔院推定地の調査 第42次	126
(2) 東面回廊推定地の調査 第43次	127
(3) 西面回廊推定地の調査 第44次	128
3 史跡東大寺旧境内の調査	129
(1) 西面大垣の調査 第9次	130

III その他の調査

1 鹿野園石器散布地の調査 第1次	133
2 東紀寺遺跡の調査 第4次	135
3 古市遺跡の調査	136
(1) 第3次調査	137
(2) 第4次調査	140
4 七ツ塚古墳群の調査 第1次	144

IV 小規模確認調査・試掘調査・工事立会

1 小規模確認調査・試掘調査	145
2 工事立会一覧	147

付編 自然科学分析

1 平城京第325-7・349次調査採取試料の放射線炭素年代測定	151
2 平城京第325-7・349次調査における花粉分析	153

付図

平城京左京四条四坊十二・十三坪 検出遺構平面図

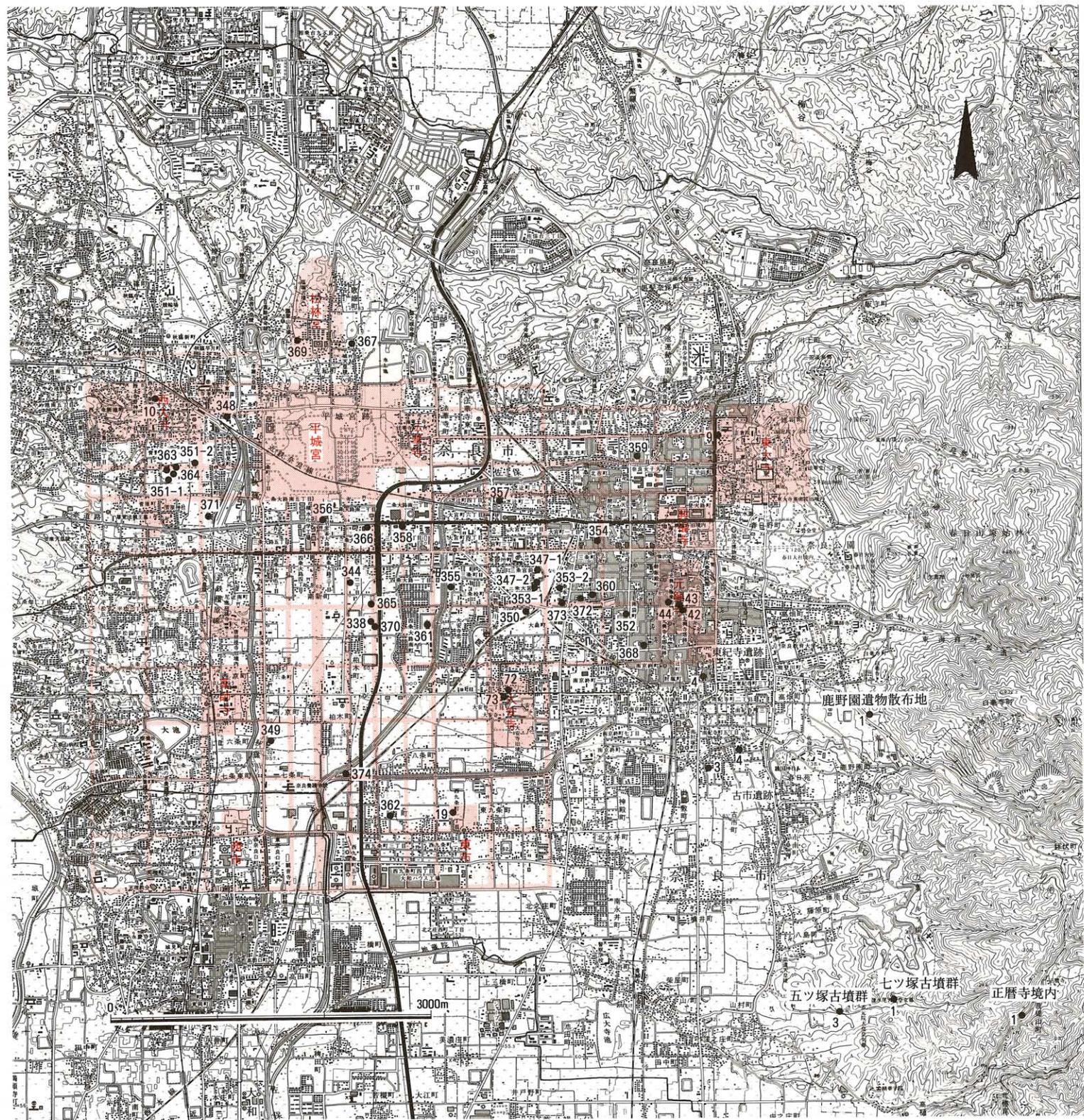
图版目次

卷首图版 平城京右京二条三坊十坪 第327次 S E 504出土遺物

- | | | | | | |
|------|-------------------------------|-----|------|-------------------------------|-----|
| 图版 1 | 平城京右京二条三坊二坪
第327·351次 | (1) | 图版20 | 平城京左京四条四坊十三坪
第335次 | (4) |
| 图版 2 | 平城京右京二条三坊二坪
第327·351次 | (2) | 图版21 | 平城京左京四条四坊十三坪
第335次 | (5) |
| 图版 3 | 平城京右京二条三坊二坪
第327·351次 | (3) | 图版22 | 平城京左京四条四坊十三坪
第335·339次 | (6) |
| 图版 4 | 平城京右京二条三坊二坪
第327·351次 | (4) | 图版23 | 平城京左京四条四坊十三坪
第339次 | (7) |
| 图版 5 | 平城京右京二条三坊二坪
第327·351次 | (5) | 图版24 | 平城京左京四条四坊十三坪
第335·339次 | (8) |
| 图版 6 | 平城京右京二条三坊六坪
第327次 | (1) | 图版25 | 平城京左京四条四坊十四坪
第347·353次 | (1) |
| 图版 7 | 平城京右京二条三坊六坪
第327次 | (2) | 图版26 | 平城京左京四条四坊十四坪
第347·353次 | (2) |
| 图版 8 | 平城京右京二条三坊九坪
第327次 | | 图版27 | 平城京左京四条四坊十四坪
第347·353次 | (3) |
| 图版 9 | 平城京右京二条三坊十坪
第327次 | (1) | 图版28 | 平城京左京四条四坊十四坪
第347·353次 | (4) |
| 图版10 | 平城京右京二条三坊十坪
第327次 | (2) | 图版29 | 平城京左京四条四坊十四坪
第347·353次 | (5) |
| 图版11 | 平城京右京二条三坊十坪
第327次 | (3) | 图版30 | 平城京左京四条四坊十四坪
第347·353次 | (6) |
| 图版12 | 平城京右京二条三坊十坪
第327次 | (4) | 图版31 | 平城京左京四条四坊十四坪
第347·353次 | (7) |
| 图版13 | 平城京右京二条三坊十一坪
第327·351次 | (1) | 图版32 | 平城京左京四条四坊十五坪
第318·325·347次 | (1) |
| 图版14 | 平城京右京二条三坊十一坪
第327·351次 | (2) | 图版33 | 平城京左京四条四坊十五坪
第318·325·347次 | (2) |
| 图版15 | 平城京右京二条三坊十一坪
第327·351次 | (3) | 图版34 | 平城京左京四条四坊十五坪
第318·325·347次 | (3) |
| 图版16 | 平城京右京二条三坊十一坪
第327·351次 | (4) | 图版35 | 平城京左京四条四坊十五坪
第318·325·347次 | (4) |
| 图版17 | 平城京左京四条四坊十二坪
第331·335·339次 | (1) | 图版36 | 平城京左京四条四坊十五坪
第325次 | (5) |
| 图版18 | 平城京左京四条四坊十二坪
第331次 | (2) | 图版37 | 平城京左京四条四坊十五坪
第325次 | (6) |
| 图版19 | 平城京左京四条四坊十三坪
第331·335次 | (3) | 图版38 | 平城京左京四条四坊十五坪
第325·347次 | (7) |

- 図版39 平城京左京四条四坊十五坪
 第318・325次 (8)
- 図版40 平城京左京四条四坊十五坪
 第325次 (9)
- 図版41 平城京左京四条四坊十六坪
 第334・345次 (1)
- 図版42 平城京左京四条四坊十六坪
 第334・345次 (2)
- 図版43 平城京左京四条四坊十六坪
 第334・345次 (3)
- 図版44 平城京左京四条四坊十六坪
 第334・345次 (4)
- 図版45 平城京左京四条四坊十六坪
 第334・345次 (5)
- 図版46 平城京左京四条五坊三坪
 第353次 (1)
- 図版47 平城京左京四条五坊三坪
 第353次 (2)
- 図版48 平城京左京三条一坊十一坪
 第344次 (1)
- 図版49 平城京左京三条一坊十一坪
 第344次 (2)
- 図版50 平城京左京四条二坊三坪
 第346次 (1)
- 図版51 平城京左京四条二坊三坪
 第346次 (2)
- 図版52 平城京右京一条二坊十一坪
 第348次 (1)
- 図版53 平城京右京一条二坊十一坪
 第348次 (2)
- 図版54 平城京右京一条二坊十一坪
 第348次 (3)
- 図版55 平城京右京七条一坊十五坪
 第349次 (1)
- 図版56 平城京右京七条一坊十五坪
 第349次 (2)
- 図版57 平城京右京七条一坊十五坪
 第349次 (3)
- 図版58 平城京左京五条四坊九坪 第350次
- 図版59 平城京左京五条六坊八坪 第352次
- 図版60 平城京左京三条五坊十三坪
 第354次 (1)
- 図版61 平城京左京三条五坊十三坪
 第354次 (2)
- 図版62 平城京左京四条三坊六坪
 第355次 (1)
- 図版63 平城京左京四条三坊六坪
 第355次 (2)
- 図版64 平城京左京三条四坊一坪 第357次
- 図版65 平城京左京二条六坊十坪 第359次
- 図版66 平城京左京四条五坊十三坪 第360次
- 図版67 平城京左京五条二坊十五・十六坪
 第361次 (1)
- 図版68 平城京左京五条二坊十五・十六坪
 第361次 (2)
- 図版69 平城京左京八条二坊三坪 第362次
- 図版70 松林苑 第367・369次 (1)
- 図版71 松林苑 第369次 (2)
- 図版72 平城京左京四条五坊十二坪 第372次
- 図版73 平城京左京七条一坊五坪 第374次
- 図版74 史跡大安寺旧境内 第69次 (1)
- 図版75 史跡大安寺旧境内 第69次 (2)
- 図版76 史跡大安寺旧境内 第69・71次 (3)
- 図版77 史跡大安寺旧境内 第72次
- 図版78 元興寺旧境内 第42次
- 図版79 元興寺旧境内 第43次
- 図版80 元興寺旧境内 第44次
- 図版81 史跡東大寺旧境内 第9次
- 図版82 鹿野園石器散布地 第1次 (1)
- 図版83 鹿野園石器散布地 第1次 (2)
- 図版84 鹿野園石器散布地 第1次 (3)
- 図版85 東紀寺遺跡 第4次
- 図版86 古市遺跡 第3次 (1)
- 図版87 古市遺跡 第3次 (2)
- 図版88 古市遺跡 第4次 (1)
- 図版89 古市遺跡 第4次 (2)
- 図版90 古市遺跡 第4次 (3)
- 図版91 古市遺跡 第4次 (4)
- 図版92 七ツ塚古墳群 第1次
- 図版93 第325・349次 花粉遺体

次号	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	事業者/事業内容	書類受付番号	担当者
6AHJ-338	平城京左京五条一坊十六坪	柏木町552-1他	H7.09.04~H8.07.12	6052㎡	ヒラサワ/事務所ビル新築	H7・3017	中島、田林、山前
344(2)	平城京左京三条一坊十一坪・東一坊坊間路	四条大路2丁目37他	H8.04.03~04.18	475㎡	シェルホーム/分譲宅地造成	H7・3178	山前
347	(1) 平城京左京四条四坊十五坪	三条宮前町313-2・314-2	H8.04.23~06.28	870㎡	奈良市長/JR奈良駅地区土地区画整理事業	S63・3055	松浦、細川
	(2) 平城京左京四条四坊十四坪	三条大宮町344-1	H8.04.30~08.06	1400㎡	奈良市長/JR奈良駅地区土地区画整理事業	S63・3055	久保邦
348	平城京右京一条二坊十一坪	西大寺栄町2317-4他	H8.04.25~07.30	718㎡	奈良市長/近鉄西大寺駅北地区土地区画整理事業	H1・3076	池田、田林
349	平城京右京七条一坊十五坪	六条町94・99	H8.05.15~07.12	1080㎡	医療法人康仁会/老人保健施設新築	H7・3218	三好
350	平城京左京五条四坊一坊九坪	大森西町145-1	H8.05.20~06.25	382㎡	奥田照雄/共同住宅新築	H8・3011	森下
351	(1) 平城京右京二条三坊十一坪	菅原町274他	H8.06.03~08.22	1660㎡	奈良市長/近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業	S63・3056	立石、池田
	(2) 平城京右京二条三坊二坪	青野町12	H8.08.23~12.04	800㎡	奈良市長/近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業	S63・3056	池田、田林
352	平城京左京五条四坊八坪	南新町19-1・4	H8.05.30~06.13	105㎡	松川公明/共同住宅新築	H7・3302	宮崎
353	(1) 平城京左京四坊十四坪	三条大宮町344-1	H8.07.09~11.14	2020㎡	奈良市長/JR奈良駅地区土地区画整理事業	S63・3055	松浦、細川
	(2) 平城京左京四坊三坊三坪	三条本町335・337-1	H8.08.08~10.30	1400㎡	奈良市長/JR奈良駅地区土地区画整理事業	S63・3055	久保邦
354	平城京左京三条五坊十三坪	西之飯町5-1他	H8.07.15~08.21	220㎡	奈良市長/(飯)西之飯児童館他建設事業	H8・3017	中島
355	平城京左京四坊三坊六坪	三条松町168-1	H8.08.02~09.12	380㎡	大西弘/共同住宅新築	H6・3219	山前
356	史跡平城京朱雀大路跡	二条大路南3丁目200	H8.07.25~09.02	400㎡	教育長/史跡保存整備事業		立石
357	平城京左京三条四坊一坪	芝辻2丁目10-2・3	H8.10.02~10.23	136㎡	西田嗣/事務所付共同住宅新築	H8・3086	森下
358	特別史跡・特別名勝平城京左京二条二坊宮跡庭園	三条大路1丁目642-1・7	H8.09.25~11.19	350㎡	教育長/特別史跡・特別名勝保存整備事業		立石
359	平城京左京二条六坊十坪	法蓮南2丁目1144-1他	H8.09.25~10.24	189㎡	五十鈴建設/共同住宅新築	H8・3062	山前
360	平城京左京四坊五坊十三坪	杉ヶ中町11-2他	H8.10.01~10.11	80㎡	松川公明/事務所ビル新築	H8・3079	宮崎
361	平城京左京五条二坊十五・十六坪	大安寺西1丁目	H8.10.07~11.15	300㎡	奈良市長/大安寺大池遺跡範囲確認調査		大窪
362	平城京左京八坊二坊三坪	杏町427-1・2	H8.10.23~11.15	323㎡	奈良市長/杏第11号市営住宅建替事業	H8・3161	原田
363	平城京右京二条三坊七坪	青野町32-1、33-1・2・4	H8.10.23~12.04	750㎡	奈良市長/近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業	S63・3056	鐘方
364	平城京右京二条三坊七坪	青野町42-1、43-1他	H8.11.06~H9.01.29	1550㎡	奈良市長/近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業	S63・3056	鐘方
365	平城京左京四坊一坊十三坪	尻辻町E32-1・2他	H8.11.05~H9.01.09	824㎡	アルペン/店舗新築	H8・3120	森下
366	平城京左京三条一坊十一坪	三条大路2丁目536-1他	H8.11.27~12.12	95㎡	ケイ・エム・ケイ/事務所ビル新築	H8・3183	山前
367	松林苑跡	佐紀東町内	H8.11.18	13㎡	奈良市長/市道中部第194号線改良工事	H8・3094	松浦、久保邦、細川
368	平城京左京五条六坊一坪	西木辻字繪町250-1他	H8.1.03~1.25	150㎡	富士ビル/共同住宅新築	H8・3173	細川
369	松林苑跡	佐紀中町2丁目他	H8.12.10~12.13	69㎡	奈良市長/公共下水道築造工事	H8・3191	松浦、久保邦、大窪
370	平城京左京五条一坊十六坪	柏木町585-1他	H8.12.16~H9.03.28	1500㎡	南都銀行/事務所ビル新築	H7・3017	山前
371	菅原東遺跡輪鑿跡群	横領町409他	H9.01.07~03.31	180㎡	奈良市長/近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業	S63・3055	鐘方
372	平城京左京四坊五坊十二坪	杉ヶ町23	H9.01.10~01.20	144㎡	奈良市長/生涯学習センター建設事業	H8・3289	大窪
373	平城京左京四坊五坊五坪	三条本町7-11	H9.01.20~02.15	150㎡	奈良市長/JR奈良駅地区土地区画整理事業	S63・3055	久保邦
374	平城京左京七条一坊五坪	八条4丁目369-1他	H9.02.10~02.25	502㎡	奈良市長/灰からセンター建設事業	H8・3277	秋山
6ATI-19	平城京東市推定地	杏町584	H8.11.18~12.27	400㎡	重要遺跡緊急確認調査		秋山
6BDA-72	史跡大安寺旧境内	大安寺4丁目1127-1・4	H8.07.16~08.13	98㎡	樹谷絃/個人住宅建替	H7・1060	森下
73	史跡大安寺旧境内	大安寺2丁目	H8.12.16~H9.03.	250㎡	教育長/史跡大安寺旧境内整備事業	H8・1063	立石
6BGG-42	元興寺旧境内	芝突抜町3	H8.05.10~05.20	18㎡	高尾武彦/個人住宅建替	H7・3283	宮崎
43	元興寺旧境内	中新屋町41-2、44-2	H8.09.11~09.20	15㎡	梶谷弘/個人住宅建替	H8・3075	宮崎
44	元興寺旧境内	中新屋町8番地	H9.02.04~02.07	4㎡	今來俊雄/個人住宅建替	H8・3281	宮崎、久保清
6BT D-09	史跡東大寺旧境内	雑司町88-1	H8.12.09~12.24	22㎡	奈良市長/菟野門地区公園整備事業	H8・1020	原田
6BSD-10	西大寺旧境内	西大寺新田町	H9.03.03~03.31	350㎡	奈良市長/緑住づくり推進事業	H8・3062	原田
2XRY-01	鹿野園遺物散布地	白毫寺町	H8.06.04~07.10	78㎡	奈良市長/市道北部第202号改良工事	H8・3044	大窪
4LFS-03	古市遺跡	古市町1560-1他	H8.06.11~07.17	300㎡	奈良市長/古市第10号市営住宅建替事業	H8・3045	原田
-04	古市遺跡	古市町1231-1他	H8.08.05~10.07	466㎡	奈良市長/古市小集落地区改良事業		原田、大窪
4PHK-04	東紀寺遺跡	紀寺町581-5	H8.11.06~11.15	60㎡	奈良市長/梅園地区住環境整備事業	H3・3192	山前
4PIZ-03	五ヶ塚古墳群	山町989	H9.01.13~H9.01.27	40㎡	遺跡範囲確認調査		森下
4PNN-01	七ヶ塚古墳群	山町1020他	H9.02.03~H9.03.27	39㎡	奈良市長/市道南部第478号線改良工事	H8・3	大窪
7BSL-01	正暦寺境内	菩提山町	H8.08.21~12.25	517㎡	奈良市長/市道東部第301号線改良工事	H7・3160	三好



平成8年度 調査地位置図 (1/50,000)

I 平城京跡・松林苑跡の調査

1 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に伴う調査

奈良市教育委員会では、奈良市が進める近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業（総面積約32万㎡）に伴って、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続している。本年度は表に示した5件、計4,940㎡の調査を実施し、初年度からの合計調査面積は76,738㎡に達した。

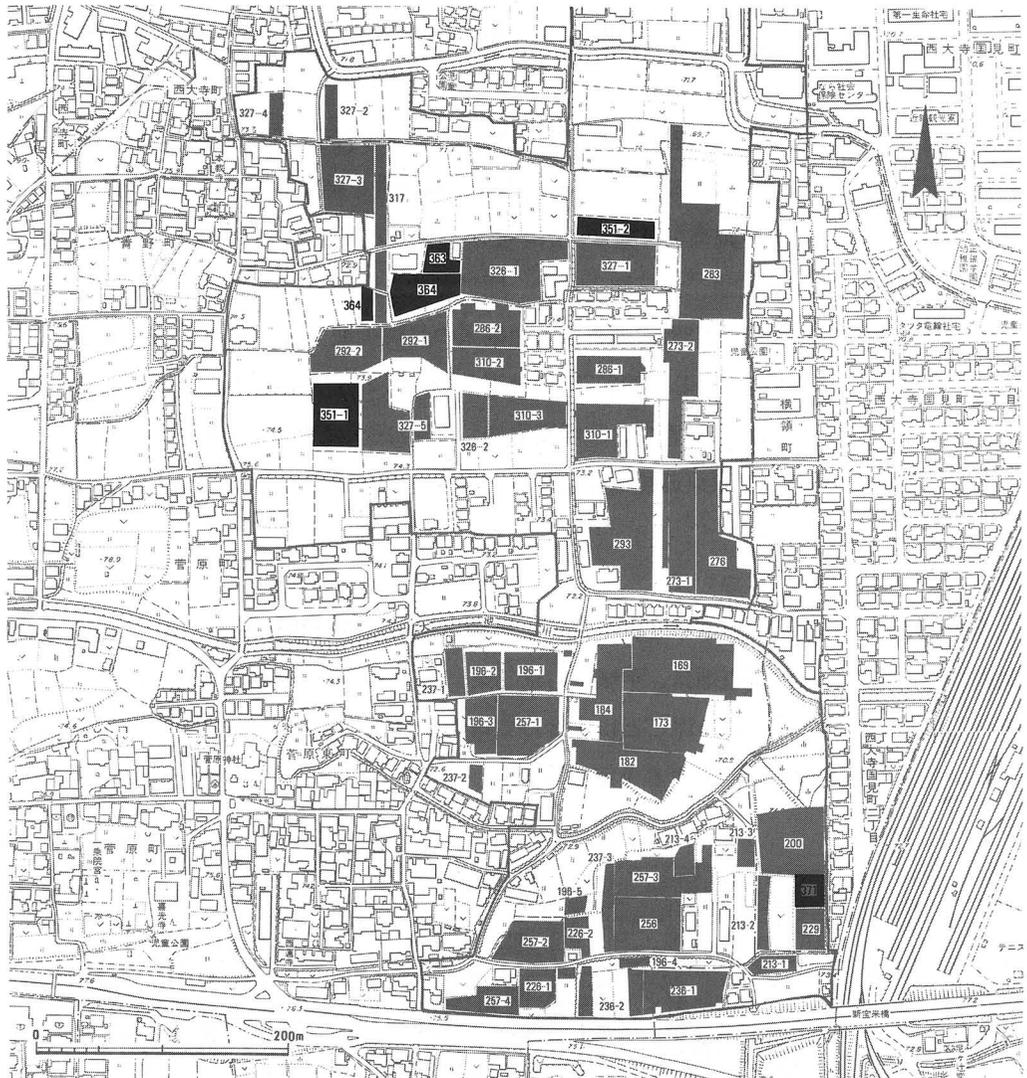
第351調査は、平城京右京二条三坊二・十一坪における調査である。第1発掘区は二坪にあたり、昨年度実施した第327次調査第1発掘区の北隣接地で設定した。第2発掘区は十一坪にあたり、昨年度実施した第327次調査第5発掘区の西隣接地で設定した。第363・364次調査は同七坪における調査で、昨年度実施した第326次調査第1発掘区の西隣接地にあたる。第371次調査は菅原東遺跡埴輪窯跡群の整備に伴う調査である。

●本年度報告する調査について

本書に収録した調査は、本年度実施した第351次調査と、昨年度未報告であった第327次調査である。これらの調査地は、平城京右京二条三坊二・六・七・九・十・十一坪にわたる。ここでは、上記の調査を坪ごとにまとめて報告する。なお、第363・364・371次調査については来年度以降に報告する予定である。



平成8年度の調査地と周辺の条坊（1/20,000 網目の範囲が土地区画整理事業予定地）



発掘調査地位置図 (1/6,000 数字は調査回数)

調査年度	調査回数・ 発掘区	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	備考
平成7年度	327-1発掘区	平城京右京二条三坊二坪	青野町10-1・11	H7.07.07~H8.02.26	2,200㎡	
	-2発掘区	平城京右京二条三坊六坪	西大寺芝町2102	H7.08.18~H7.10.12	450㎡	
	-3発掘区	平城京右京二条三坊九坪	青野町43-1、46-1、47、49	H7.10.02~H7.12.22	1,850㎡	
	-4発掘区	平城京右京二条三坊九坪	西大寺芝町2100	H7.12.30~H7.11.27	300㎡	
	-5発掘区	平城京右京二条三坊六・十一坪	菅原町210・273~277	H7.12.07~H8.03.22	2,500㎡	
平成8年度	351-1発掘区	平城京右京二条三坊十一坪	菅原町274他	H8.06.03~H8.08.22	1,660㎡	
	-2発掘区	平城京右京二条三坊二坪	青野町112	H8.08.23~H8.12.04	800㎡	
	363	平城京右京二条三坊七坪	青野町32-1、33-1・2・4	H8.10.23~H8.12.04	750㎡	平成9年度報告予定
	364	平城京右京二条三坊七坪	青野町42-1、43-1	H8.11.06~H9.01.29	1,550㎡	平成9年度報告予定
	371	菅原東遺跡埴輪窯跡群	横領町409他	H9.01.07~H9.03.31	180㎡	別途報告

平成8年度発掘調査および本概要報告書掲載調査一覧

(1) 平城京右京二条三坊二坪の調査 第327-1・351-2次

I 調査の目的

右京二条三坊二坪では、これまでに坪の南東部で平成5年度に第283次調査、南西部で平成7年度に第273次調査第1発掘区を実施している。今年度は昨年度に引き続き、坪の南西部の様相を明らかにする目的で、第273次調査第1発掘区の北側に近接して発掘区を設定し、第351次調査第2発掘区を実施した。今回は第327次・第351次調査の概要を合わせて報告する。

II 調査地の地形と層相

調査地は西から東へなだらかに下る微高地上に位置し、発掘区内はさらに南から北に向かってゆるやかに傾斜している。基本的な層序は、黒灰色土（作土）以下、灰色砂質土、灰褐色土と続き、地表下0.3～0.5mで黄灰色粘土あるいは黄褐色土、茶灰色砂の地山に達する。その標高は、70.1～70.7mである。なお、遺構はすべてこの地山上面で検出した。

III 検出遺構

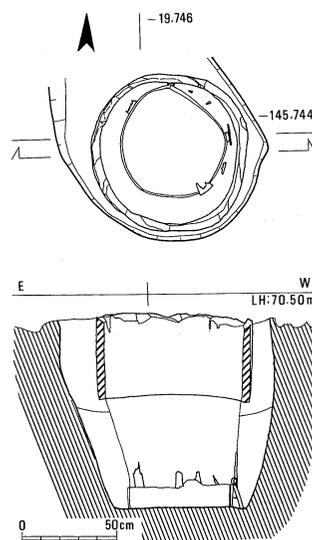
検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑、土器埋納土坑、平安時代以降の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑、溝がある。これらの遺構は重複関係から少なくとも5時期以上の変遷がある。以下、主なものについて記す。

なお、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸については一覧表にまとめた。

奈良時代の遺構 掘立柱建物41棟、掘立柱塀2条、井戸30基、土坑1基、土器埋納土坑2基がある。これらの遺構は、重複関係や配置などから少なくとも3時期以上の変遷がある。

S B 221～247・250・251・260～270・S A 248・249 概要は一覧表にまとめた。建物に伴って出土する遺物が少ないことから、時期区分を明確にすることができなかった。

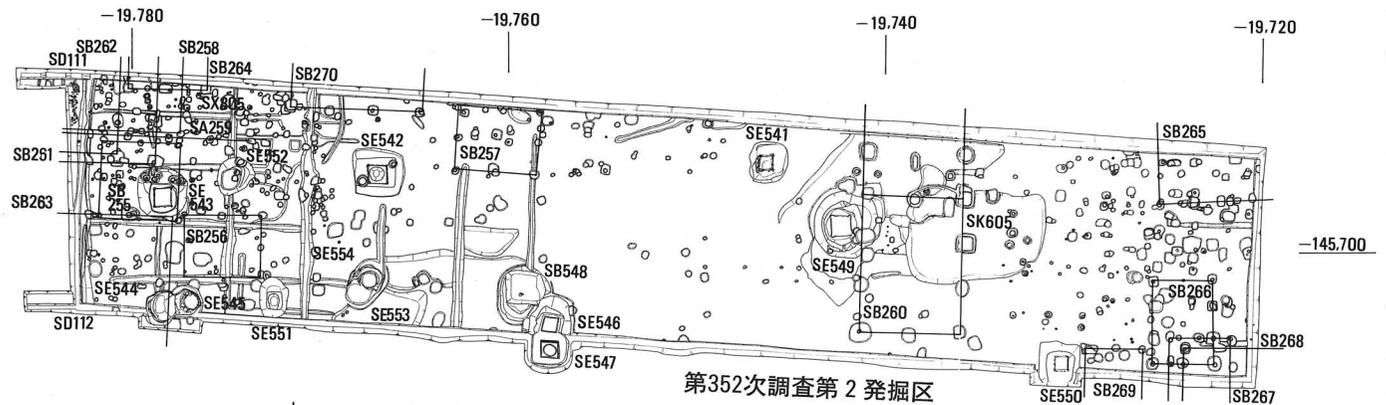
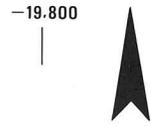
S E 517～536・540～543・546～551 概要は一覧表にまとめた。枿が残存していたものは12基ある。S E 520とS E 524は一枚板を使用した小型の長方形縦板組の井戸である。S E 523は径約0.83mの瓦製円筒管を井戸枿として使用している。掘形の底には曲物を一段据え、その外側に縦板を瓦製円筒管の内側に沿って立て並べている。この瓦製円筒管の上端部には半円形の切り欠きがあり、上下水施設等の他で用途に使われていたものを転用している可能性が高い。15世紀以降では瓦製土管を井戸枿に使用している例はあるが、奈良時代では



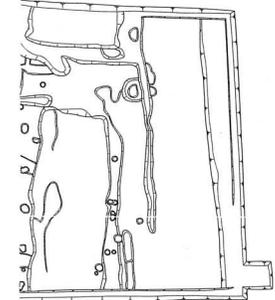
井戸S E 523 平面・立面図(1/40)

遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廂の出 (m)	備考
S B 221	南北	3 × 2 ?	5.7(19)	3.6(12)	北から2.1-1.8-1.8	1.8等間		S B 222と柱筋揃う、妻柱未検出
S B 222	南北	3 × 2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S B 221と柱筋揃う、S B 223より新しい
S B 223	南北	3 × 2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S B 222より古い
S B 224	東西	3 × 2 以上	4.95(16.5)	3.3(11)	1.65等間	1.65等間		S E 531より古く、S E 530より新しい
S B 225	東西	4 × 2	5.4(18)	1.8(6)	1.8等間	1.8等間	西1.8	西廂付建物
S B 226	東西	3 × 2	4.65(15.5)	3.9(13)	西から1.5-1.5-1.65	1.95等間		
S B 227	南北	3 × 2	4.95(16.5)	3.6(12)	1.65等間	1.8等間		
S B 228	総柱	2 × 2	3.6(12)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
S B 229	東西	3 × 2	5.4(18)	3.0(10)	1.8等間	1.5等間		
S B 230	南北	3 × 2	6.3(21)	3.3(11)	2.1等間	1.65等間		
S B 231	東西	3 × 2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		
S B 232	南北	4 × 2	7.35(24.5)	4.2(14)	北から1.8-1.95-1.8-1.8	2.1等間		
S B 233	南北	3 × 2	5.85(19.5)	4.5(15)	1.95等間	2.25等間		S B 237より新しい、6763A出土
S B 234	南北	3 × 2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		
S B 235	南北	3 × 2	4.95(16.5)	3.6(12)	1.65等間	1.8等間		S E 539より古い
S B 236	東西	3 × 2	5.85(19.5)	6.3(21)	1.95等間	2.1等間	南2.1	南廂付建物
S B 237	東西	3 × 2	5.85(19.5)	4.8(16)	1.95等間	2.4等間		S B 233・238・253より古い、6691A出土
S B 278	東西	3 × 2	5.4(18)	3.3(11)	1.8等間	1.65等間		S B 237より新しい
S B 239	東西	3 × 2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		S B 240より新しい
S B 240	東西	3 × 2	5.1(17)	3.6(12)	西から1.5-1.8-1.8	1.8等間		S B 239より古い
S B 241	南北	3 × 2	4.8(16)	3.0(10)	1.6等間	1.5等間		S E 532より古く、S B 239・242より新しい、6691B出土
S B 242	南北	3 × 2	4.8(16)	3.6(12)	北から1.5-1.5-1.8	1.8等間		法隆寺式37E軒丸瓦出土、S B 241より古い
S B 243	南北	3以上×2?	3.6(12)以上	3.3(11)	1.8等間			S E 522より古い、妻柱未検出
S B 244	総柱	2 × 2	3.3(11)	3.0(10)	1.65等間	1.5等間		
S B 245	南北	3 × 2	5.85(19.5)	4.2(14)	1.95等間	2.1等間		
S B 246	南北	5 × 2	10.5(35)	4.5(15)	2.1等間	2.25等間		S K 601・602より古く、S E 520より新しい
S B 247		3以上×2以上	4.8(16)以上	4.2(14)以上	2.4等間	2.1等間		S D 110より古い
S A 248	東西	5	11.4(38)			西から2.1-2.1-2.4-2.4-2.4		S E 532より新しい
S A 249	東西	4	9(30)		2.25等間			
S B 250	南北	3 × 2	6.3(21)	4.5(15)	2.1等間	2.25等間		
S B 251	南北	3 × 2	5.7(19)	3.9(13)	北から1.6-1.6-1.8	1.95等間		S B 253より古い
S B 252	東西	4 × 3	8.1(27)	6.75(22.5)	西から1.95-2.2-5-1.95-1.95	2.25等間		根石あり、S K 604・S E 536より古い、平安
S B 253	南北	3 × 2	6.75(22.5)	4.2(14)	2.25等間	2.1等間		S B 237・251より新しい、平安
S B 254	東西	4 × 2 以上	9.3(31)	1.0	西から2.4-2.4-2.25-2.25		南1.0	南廂付建物、平安
S B 255		2 × 2	4.2(14)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		S B 263・S E 543より新しい、平安
S B 256	東西	2 × 2	4.2(14)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		S E 543より新しい、根石あり、平安
S B 257	東西	2 × 2	4.2(14)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		根石あり、平安
S B 258	東西	3以上×2以上	6.3(21)以上	3.0(10)以上	2.1等間	1.5等間		根石あり、平安
S A 259	東西	4 以上	4.4		1.1等間			平安
S B 260	南北	4 以上×2	9.6(32)以上	5.4(18)以上	2.4等間	2.7等間		南から3間目に開仕切り、S E 540・S K 605より新しい、6697A出土
S B 261		2 以上×2 以上	3.6(12)以上	4.8(16)以上	1.8等間	2.4等間		S B 262より新しい
S B 262		1 以上×2 以上	1.8(6)以上	4.2(14)以上	1.8	2.1等間		S B 261・271より古い
S B 263		3 以上×2 以上	6.3(21)以上	4.8(16)以上	2.1等間	2.4等間		S B 255・S E 543・544より古い
S B 264	南北	1 以上×2		4.2(14)以上		2.1等間		
S B 265	東西	3 以上×1 以上	4.8(16)以上		1.6等間	1.6		
S B 266	南北	3 × 2	4.5(15)以上	3.0(10)	1.5等間	1.5等間		
S B 267	南北	1 以上×2	1.6以上	3.2	1.6	1.6等間		
S B 268		2 以上×1 以上	3.6(18)以上		1.8等間			
S B 269	南北	1 以上×2		3.0(10)		1.5等間		
S B 270		3 以上×1 以上	7.2(24)以上		2.4等間			

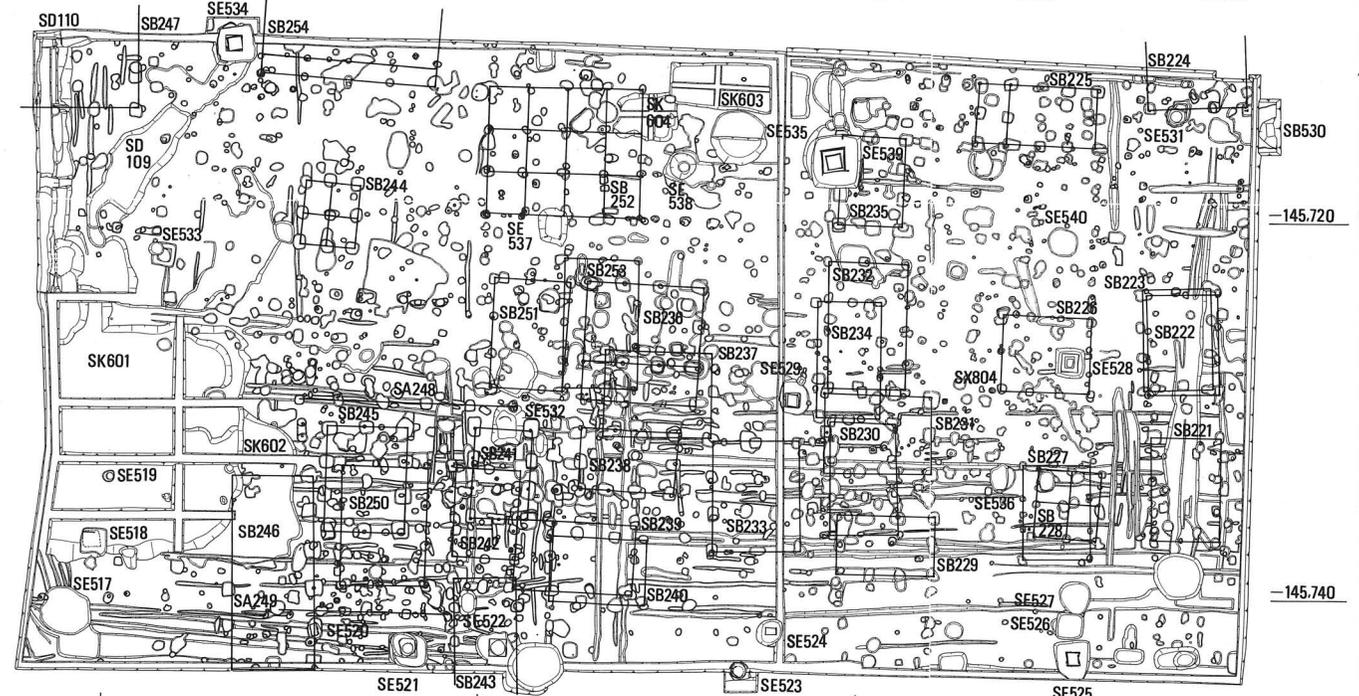
掘立柱建物・堀一覽表



第352次調査第2発掘区



第326次調査第1発掘区



第327次調査第1発掘区



第327次調査第1発掘区 第351次調査第2発掘区遺構平面図 (1/400)

遺構番号	掘形			枿			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	平面形・構造	内法(m)	水溜・濾過装置等		
S E 517	不整円形	長径2.7 短径2.5	1.45				曲物底板	枿は抜き取られている
S E 518	隅丸方形	東西1.45 南北1.45	0.9以上	方形ということのみ判明		木炭敷とその下に礫敷	桃核	枿は抜き取られている。S K 601より古い
S E 519	不整円形	長径0.56 短径0.44	0.5以上			曲物(径0.35) 曲物内木炭・礫敷	曲物	曲物2段分のみ残存、S K 601より古い
S E 520	長円形	長径0.8 短径0.7以上	0.9	長方形横板組	0.35×0.6			四方とも1枚板使用、外側に縦板をあてている。S B 221・222より古い
S E 521	隅丸方形	東西2.0 南北1.85	1.4			曲物(径0.55)、曲物内礫敷	斎串、曲物底板、箸、漆塗板、桃核	枿は抜き取られて、曲物のみ残存
S E 522	隅丸方形	東西2.0以上 南北1.8以上	1.5	方形横板組	0.85	曲物(径0.73)、曲物内木炭・礫敷	桃核、6732 A	枿は2段分残存
S E 523	不整円形	長径1.1 短径0.9以上	1.1以上	円形瓦質円筒	径0.75	曲物(径0.6)と、その外側には縦板を並べている	瓜種、6663 M	瓦質導水管を転用している可能性あり
S E 524	不整円形	長径1.45 短径1.35	1.0	長方形横板組	0.53×0.35			東面のみ2段で、他は1枚板を使用
S E 525	隅丸方形	東西1.9 南北2.1以上	1.0	方形縦板組横棧留	0.6	礫、木炭敷	櫛、有孔円盤銅、桃核	
S E 526	隅丸方形	東西1.4 南北1.4	0.7			木炭敷		枿は抜き取られている。S E 527より新しい
S E 527	不整円形	長径1.7以上 短径1.7	0.7					枿は抜き取られている。S E 526より古い
S E 528	隅丸方形	東西1.55 南北1.58	1.4	方形横板組	0.93×0.85	長方形曲物2段上段(長径0.6、短径0.3) 下段(長径0.4短径0.3)	曲物底板、斎串、銅状工具、墨書土器、桃核、6202 B、6661 A、6665 A、6225 A	枿3段分残存
S E 529	不整円形	長径1.9 短径1.6	1.2	上段方形横板組 下段長方形横板組	0.7 0.6×0.5	礫敷	桃核	上部は枿1段分残存
S E 530	不整円形	東西1.0以上 南北1.7	1.8				斎串、瓜種、ひょうたん皮	枿は抜き取られている
S E 531	円形	径1.0	1.2	円形曲物積み上げ型	径0.6		瓔珞、鉄釘、桃核、6225 A	曲物4段分(痕跡)を確認。S B 246より新しい
S E 532	隅丸方形	東西1.7 南北2.3	1.2			曲物(径0.6)	斎串、桃核	枿は抜き取られている。S A 226より古い
S E 533	隅丸方形	東西1.4 南北1.3	1.1	方形縦板組の可能性	1.1	曲物(径0.65)	箸、桃核、ひょうたん	枿は大部分抜き取られている
S E 534	隅丸方形	東西2.3 南北2.3	1.9	上段 方形横板組 下段 方形横板組	0.85 0.7	木炭敷	墨書土器、箸、斎串、鉄具、クハ、桃核、6132 A	上段2段、下段4段
S E 535	円形	径3.0	1.3					枿は抜き取られている
S E 536	隅丸方形	東西1.3 南北1.4	1.0					枿は抜き取られている
S E 537	隅丸方形	東西1.65 南北2.1	1.4	方形縦板組 隅柱横棧留	1.1×0.8		黑色土器	S B 252より新しい 平安以降
S E 538	円形	径1.5	1.3			曲物(径0.5)	瓦器碗	枿は抜き取られている、平安以降
S E 539	隅丸方形	東西2.6 南北2.85	4.5	方形横板組	1.1	方形横板組(0.7)2段	曲物、爪、木鐺、箸、斎串、刀子柄、瓦器碗	枿11段分残存、枿板に線刻あり。平安以降
S E 540	隅丸方形	東西1.5 南北1.5	1.2			礫敷	曲物底板	枿は抜き取られている
S E 541	隅丸方形	東西2.15 南北2.2	1.8	方形縦板組 隅柱横棧留	0.8×0.75		斎串、鉄斧、鉄鏝、桃種、桃実、梅種、胡桃	
S E 542	隅丸方形	東西2.75 南北2.7	1.67	方形縦板組 隅柱横棧留	0.96×0.99		桃種、6133、6225	掘形は、西辺と揃えて二重になっており、掘り直しが行われた可能性あり
S E 543	隅丸方形	東西2.8 南北2.55	1.45	方形縦板組 隅柱横棧留	0.92×0.93	礫敷	荷札、曲物底板	掘形埋土中より軒丸瓦6311 A 出土
S E 544	不整円形	東西1.4以上 南北1.8	1.75					枿は抜き取られている。埋土中に平瓦が多量に含まれるので、瓦葺井戸の可能性あり、S B 269より古い

井戸一覧表(1)

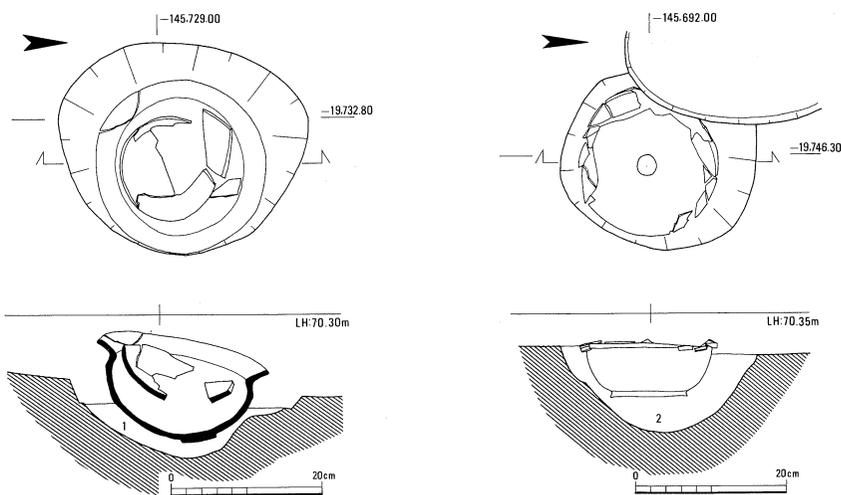
遺構番号	掘形			枿			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	平面形・構造	内法(m)	水溜・濾過装置等		
S E 545	不整円形	長径1.85 短径1.6	2.44	円形瓦積	径0.78 ~0.87		曲物蓋、枿材に刻印平瓦	枿上部は抜き取られている。最上段に幅0.15~0.3、高さ0.15~0.8の石を円形に並べる
S E 546	不整円形	東西2.3 南北1.5以上	1.6	方形横板組 隅柱横棧留	0.7 ×0.71		曲物底板、桃核	枿底中央から須恵器、横瓶出土
S E 547	隅丸方形	東西2.25 南北1.9	2.07	方形横板組	0.9	曲物(径0.6)	横櫓、鉄線、打頭釘、6721C	枿5段分残存
S E 548	隅丸方形	東西3.05 南北2.4	1.7				ひょうたん型容器、枿底から須恵器蓋Q出土	枿は抜き取られている
S E 549	不整円形	東西1.7 南北1.88	1.6			礫敷		枿は抜き取られている。腰縁は方形で四隅に隅柱のあたり痕跡あり
S E 550	隅丸方形	東西2.31 南北1.25以上	2.09	方形縦板組 横棧留	0.67 ×0.7		多角榫、横板、二枚目、線軸 垂形瓦、6663C、6664D、6721C	
S E 551	不整円形	東西2.16 南北1.5	1.6					枿は抜き取られている
S E 552	不整円形	東西2.0 南北4.0	1.36				鬼瓦	枿は抜き取られている。平安以降
S E 553	不整円形	東西1.37 南北1.44	1.41					S E 554より新しい。枿は抜き取られている。平安以降
S E 554	楕円形	長径1.75以上 短径1.69	1.93				箸	S E 553より古い。枿は抜き取られている。平安以降

井戸一覧表(2)

今のところ他に例を見ない。

S K 605 東西7.3m、南北4.8m、深さ0.2mの平面が隅丸長方形の土坑である。埋土からは奈良時代の土器が多量に出土した。重複関係からS B 260より古い。

S X 804・805 S X 804はS B 248の南西角すぐ西で検出した土器埋納土坑である。掘形は東西0.28m、南北0.33mの平面不整円形で、検出面からの深さは0.1mである。坑内には土師器鍋Bが埋置され、鍋の中には土師器杯Aが入れている。鍋の内部には土が充満



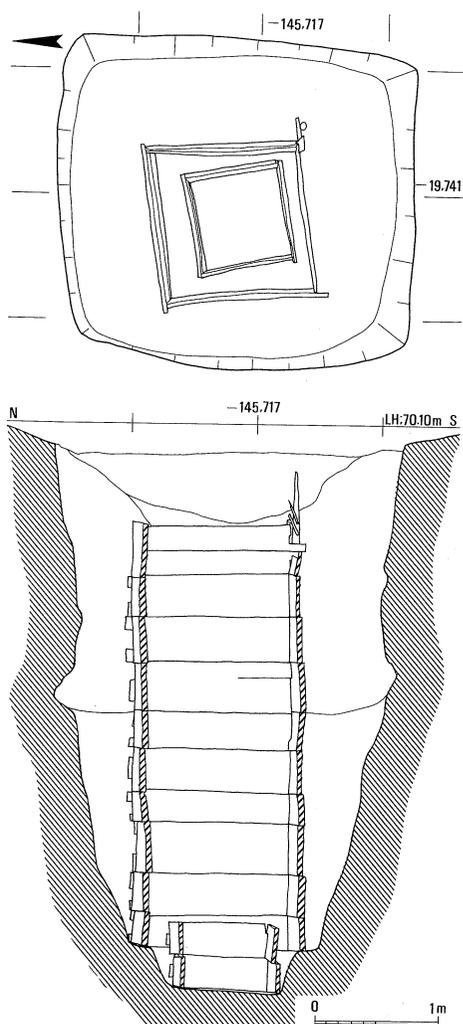
土器埋納土坑 S X 804 平面・立面図(1/10) 土器埋納土坑 S X 805 平面・立面図(1/10)

しており、内容物はなかった。位置的にみて、S B 248に伴う胞衣壺もしくは地鎮に関するものであると考えられる。S X 805はS B 264の南東で検出した土器埋納土坑である。掘形は、径0.25mの平面円形で、検出面からの深さは0.13mである。坑内には須恵器杯Bが須恵器杯蓋をかぶせた状態で埋置されている。内部には土が充満しており、内容物はなかった。位置的にみて、S B 264に伴う胞衣壺もしくは地鎮に関するものであると考えられる。

平安時代以降の遺構 掘立柱建物9棟、掘立柱塀1条、井戸8基、土坑4基、溝4条ある。重複関係や配置から少なくとも2時期以上の変遷がある。

S B 250～258・S A 259 建物9棟、塀1条ある。概要は一覧表にまとめた。それぞれの建物の柱掘形からは瓦器片が出土した。また、S B 252・256～258は掘形底に人頭大の石を柱の根石として据えている。

S E 537～539・544～545・552～554 井戸8基ある。そのうち枠が残存していたものは3基ある。S E 537は方形縦板組隅柱横棧留の井戸で、枠内からは黑色土器が出土した。S B 252よりも新しい。S E 538は枠が抜き取られており、掘形底の水溜部分には曲物が残っていた。抜き取り埋土から瓦器碗が出土した。S E 539は東西2.6m、南北2.85m、検出面からの深さ4.5mの平面隅丸形の掘形で、掘形底に内法一辺0.7mの方形横板組の枠を二段組み、その上段には内法一辺1.1mの方形横板組の枠を11段据えている。さらにその上部には方形縦板組隅柱横棧留の枠が構築されていたことが、南東隅に残存する隅柱と縦板から推察できる。井戸の掘形からは12世紀末の瓦器が出土している。枠内は一気に埋まっており、埋土からは12世紀末の瓦器、土師器皿、木錐、斎串、刀子柄、箸、小型の馬鍬が出土している。さらに、枠内埋土上層からは長径0.52m、短径0.33m、高さ0.19mの長円形の曲物が木製の蓋を釘で止めた上、さらに縄で縛った状態で出土した。曲物の中には木製榫1点と、平瓦4枚、軒丸瓦の瓦当1枚、15cm



井戸S E 539 平面・立面図 (1/60)

大の三笠安山岩が1点納められていた。木製榦以外の瓦礫は曲物を沈めるための重りとして入れた可能性が高い。木製榦は内法寸14.7×14.7×7.5cm、容量は1620.675cm³で、その容量は近世に制定された京榦の1升到近い数値となっている¹⁾。ただ、平安時代後半には律令体制の崩壊に伴い、公定榦だけでなく、私榦もかなり出回っていることから、今回出土した榦がどちらに該当するかは明らかではない。S E 545は円形瓦積の井戸で、掘形底に円形に15cm前後の石を並べ、その上に平瓦を積み上げている。枿材に用いられた平瓦には文字瓦や焼けひずんだものが含まれていた。

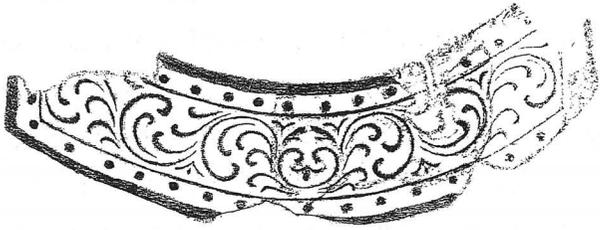
S D 109~112 S D 109は幅1.0~2.5m、深さ0.3m、長さ20m以上の北東方向から土坑S K 601に流れこむ素掘りの溝である。埋土からは瓦器、羽釜が出土した。S D 110は幅1.8~2.8m、深さ0.8m、長さ15.5m以上のS K 601に流れこむ南北方向の素掘りの溝で、埋土からは瓦器、羽釜が出土した。S D 111は幅0.4m以上、深さ0.23m、長さ7.2m以上の南北方向の素掘りの溝である。埋土から多量の瓦器と瓦が出土した。S D 112は幅0.5m以上、深さ0.48m、長さ13.3m以上の南北方向の素掘りの溝である。S D 111よりも古い。これらの溝はS K 601と一連の遺構である可能性がある。

S K 601~604 S K 601は東西11.0m以上、南北12.5m、深さ1.0mの平面が隅丸長方形の池状土坑である。掘形内には灰色粘土が厚く堆積しており、土坑内には常に水が溜まってものと考えられる。また、掘形底では、植物の葉脈や根の痕跡を多数確認した。S D 109・110から水が土坑内に流れこむようになっており、ここで水耕栽培をしていた可能性もある。遺構は発掘区よりさらに西に広がっているが、発掘区のすぐ西には二・七坪坪境小路が想定できることから、この時代にも坪境小路が存続していたならば、小路西側溝につながっていた可能性が高い。もし、さらに七坪まで広がっていたとするならば、その時期には坪境小路は存続していなかったということになる。S K 602は東西6.0m以上、南北8.5m以上、深さ0.85mの土坑でS K 601よりも古い。埋土の堆積状況がS K 601と非常に似ていることから、同様の性格の土坑であると考えられる。S K 603は東西7.5m、南北3.0m以上、深さ0.2mの平面が隅丸長方形の土坑で、埋土からは平安時代後期の瓦器が出土した。S K 604は東西3.5m、南北2.5m、深さ0.2mの平面が隅丸長方形の土坑で、埋土からは平安時代後期の瓦器が出土した。S K 603よりも古い。 (久保清子)

IV 出土遺物

出土した遺物には、奈良時代の瓦類、土器類、木製品、石製品、金属製品、平安時代の瓦類、土器類、木製品がある。以下、主なものについてのみ記す。

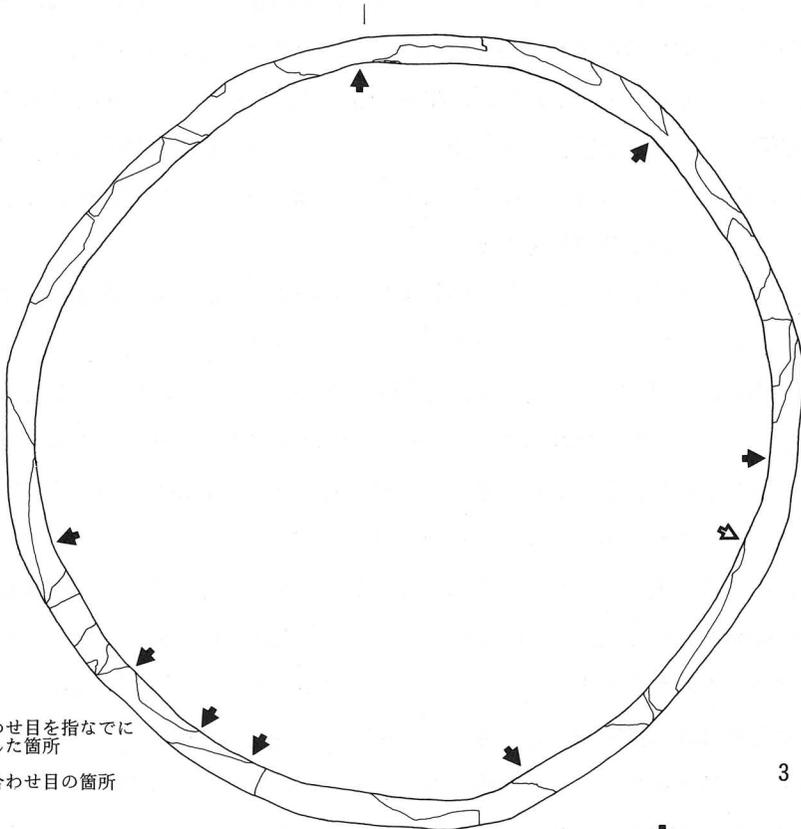
瓦類 瓦類は遺物整理箱で125箱分出土した。丸瓦・平瓦が大半であるが、軒丸瓦30点、軒平瓦30点、鬼瓦1点、施釉瓦2点、文字瓦1点、瓦製円筒1点、埴40点がある。ここでは軒丸瓦、軒平瓦、文字瓦、施釉瓦、瓦製円筒について述べる。



1



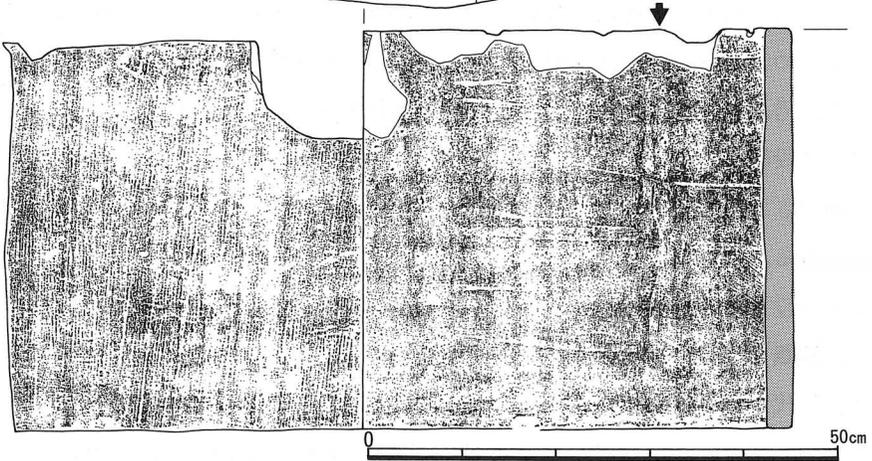
2



← 粘土板合わせ目を指なでによって消した箇所

◁ 布の綴じ合わせ目の箇所

3



0 50cm

出土瓦類（軒瓦、文字瓦1/4、瓦製円筒1/8）

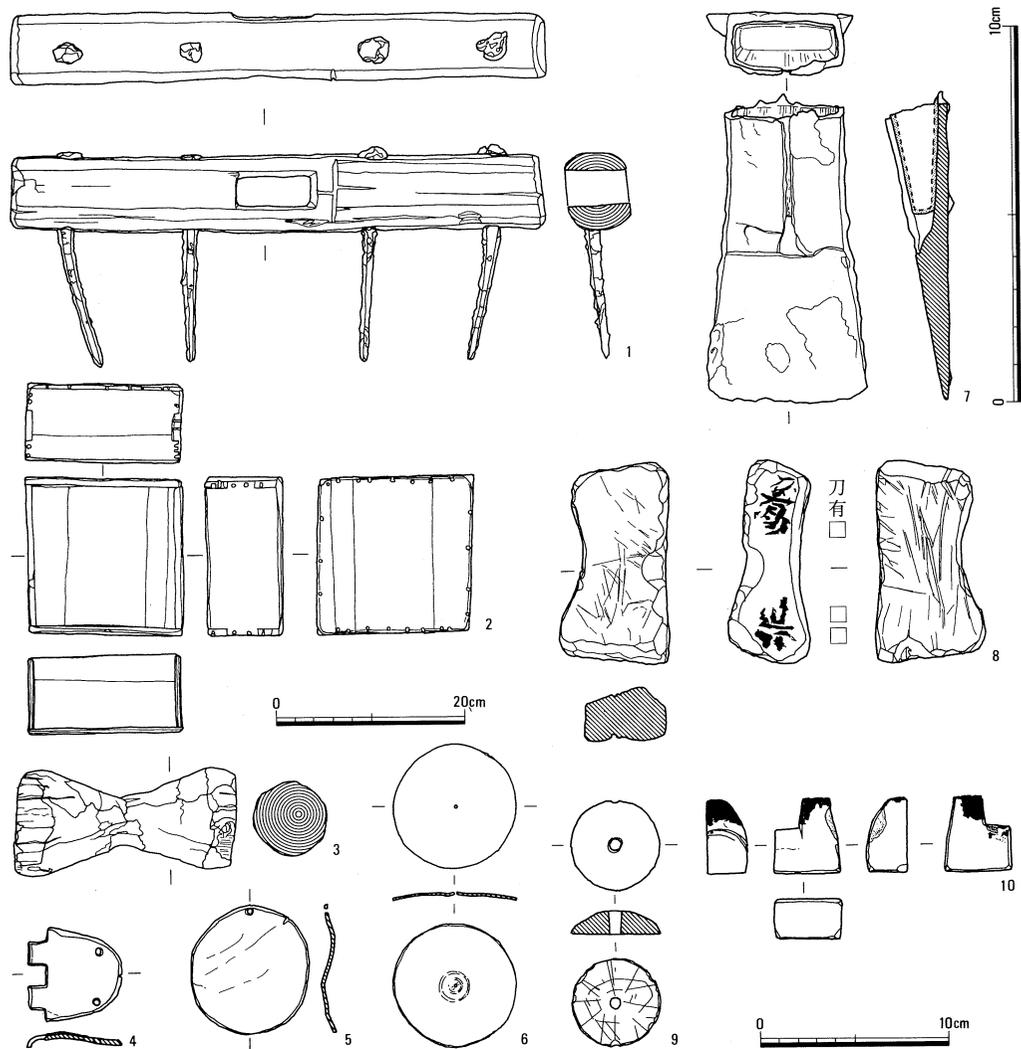
出土した軒丸瓦の内訳は、6132A 1点、6133種別不明 1点、6225A 1点、6225種別不明 1点、6282B 1点、6307B 1点、6311A 1点、法隆寺37E 1点、平安時代以降 2点、型式不明20点である。出土した軒平瓦の内訳は、6641E 1点、6663C 1点、6663M 1点、6664D 1点、6664F 1点、6664G 1点、6664H 1点、6665A 1点、6667A 2点、6689Aa 1点、6691A 1点、6691B 1点、6711B 1点、6721C 5点、6721G 1点、6730A 1点、6732A 1点、6732K 1点、6763A 1点、平安時代以降 1点、型式不明 5点である。1は6730Aの左側半分の破片だが、従来報告されている紋様の欠損部分を補うものなので図示しておく。2は文字瓦「男□」の陽刻で、平瓦凹面の端面に近い位置に縦に並べて押捺されている。西隆寺出土資料に「男男」と横に並べて押捺されたものがあることが知られていることから、「□」の文字も「男」と思われる。なお刻印「男」はa～cの3種類あることが知られているが、今回のものは新資料である。

施釉瓦は2点出土した。2点共に緑釉単彩のものである。いずれも小破片であるが内1点は平瓦凹面部分に施釉したものであることがわかる。

瓦製円筒3は、径約83cm、高さ約42cm、厚さ約3cmで、一方の端部の1箇所に半円形の切り欠きがある。外面には縄叩き目が連続し、内面には布目が残る。内面には端面と垂直方向の布の綴じ合せ目が1箇所、端面と垂直方向の指ナデ痕が8箇所、糸切痕が確認できる。内面の指ナデ痕は布目のうえから施されている。以上の観察から、この瓦製円筒は、粘土角材から切り取った、少なくとも8枚の粘土板を、布をかぶせた円筒状器具に巻きつけ、外面を叩きしめた後、円筒状器具からはずし、内面の粘土板合わせ目を指ナデによって消して成形されたものと考えられる。半円形の切り欠きがある方の端部では歪みがみられ、外面端部付近には縄叩き目は無い。対称的に反対側では縄叩き目が端部にもあり、内面端部付近には丁寧なヨコナデが施されている。このことから成形時は、切り欠きのある方を下にしたものと考えられる。この瓦製円筒はS E 523の井戸枠への転用品として出土したため、当初の用途は不明である。瓦製ではあるが、その形態から屋根上に置かれたものとは考え難い。中国の例ではあるが、りざんしかん 麗山飲官遺跡では、本例と同様の形、大きさのものを8段積み重ね、集水槽として使用されていたと報告されている³⁾。おそらく本例も単体で使用されたものとは考え難く、同様のものを縦にいくつか積み重ねて使用されていたと思われる。その際、半円形の切り欠きを上下合わせ、そこに土管、木樋などを差し込み、集水施設として利用したものとも考えられる。

(原田憲二郎)

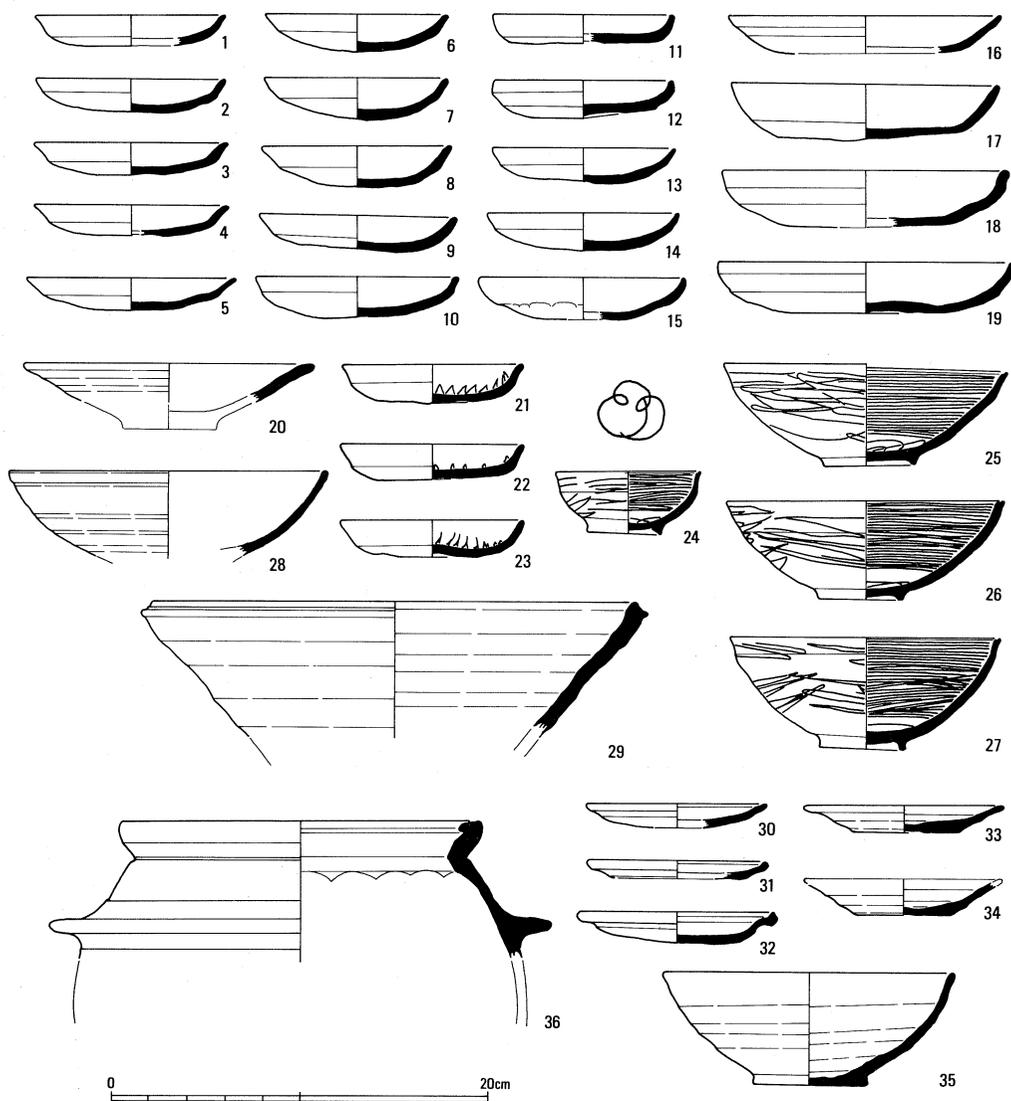
土器類 今回の調査で出土した土器類は、遺物整理箱で約50箱分ある。そのほとんどが奈良時代から中世にかけてのものである。ここではそのうち、S E 538とS E 539出土土器について記す。S E 539出土土器には土師器皿(1～19)、白色土器皿(20)、瓦器皿(21～23)、瓦器小椀(24)、瓦器椀(25～27)、東播系須恵器捏鉢(29)、白磁玉縁碗(28)がある。いずれ



S E 538・539出土土器（1／4）

も12世紀後半から末葉のものである。S E 538出土土器には、土師器皿(30～34)、黒色土器B類碗、瓦器碗(35)、土師器釜(36)がある。これらのうち、33・34の土師器皿と35の瓦器碗の底部には糸切り痕が残る。35は丹波地方を中心に出土例が多く知られるもので、大和北部での出土例は希有である。内外面ともにヘラミガキを施さないもの。11世紀後半から末頃のものと考えられる。(立石堅志)

その他の遺物 1は鍬の一種である。馬鍬と同形態であるが、馬に引かせるのではなく中央の柄孔に柄を通し、人が使用したと思われる。2は楕円形曲物内にあった升である。側板は厚さ4mmの板目材を井籠組みし、底板は厚さ3mmの板目材4片からなる。各片は木釘で留める。3は木錘である。4は銅製鉸具の表金具である。5は佐波理の瓔珞である。



出土木製品・金属製品・石製品（2は1/8、4・5・7は1/2、他は1/4）

6は佐波理の円盤状製品である。中央に小孔があり、その裏の両側に針金状のものを掛けた痕跡がある。蓋か何かであったものの縁を切り落としたものと思われる。7は鉄斧である。袋部内に木柄の一部が残る。8は流紋岩製砥石である。側面に習書がある。9は紡錘車の滑石製紡輪である。裏面に放射状の線刻がある。10は流紋岩製の用途不明品である。突部にはタールが薄く付着している。以上、1～3はS E 539、4・8はS E 534、5はS E 531、6はS E 525、7はS E 541、9は包含層、10は柱穴から出土した。（田林香織）

註1) 日本計量史学会篠原俊次氏よりご教示頂いた。

註2) 小澤毅「第3章遺物3瓦埴」『西大寺防災施設工事・発掘報告書』西大寺1990

註3) 王学理「第五章 歴史的物証(3)滲井与井圈」『秦始皇陵研究』1994

(2) 平城京右京二条三坊六坪の調査 第327-5次

I 調査の目的

調査地の右京二条三坊六坪ではこれまでに第286-2次、第292-1次、第310-2・3次、第326-2次の計5次にわたる発掘調査を行なっている。今回報告するのは、六坪西端中央部から十一坪中央部にかけて調査を行なったものであるが、それぞれの坪内の様相を知ることの他、六坪と十一坪を限る西三坊坊間路の検出や、これに関連する築地の有無の確認を目的に調査を行なった。この調査のうち、西三坊坊間路と十一坪内の発掘調査の概要は、第351-1次調査とともに別項で報告する。

II 調査地の層相

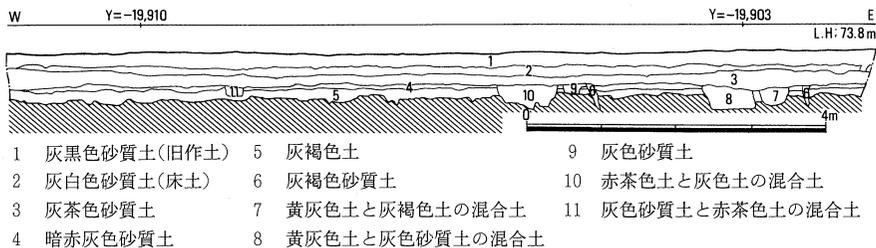
層序は、灰黒色砂質土(旧作土)、灰白色砂質土(床土)、灰茶色砂質土、暗赤茶色砂質土、灰褐色土と続き、地表下約0.6mで、黄灰色土の地山にいたる。暗赤茶色砂質土上面から掘りこまれている溝もあるが、奈良・平安時代の遺構やこれより古い時期の遺構は、すべて黄灰色土の地山上面で検出した。地山上面の標高は概ね72.8mである。

III 検出遺構

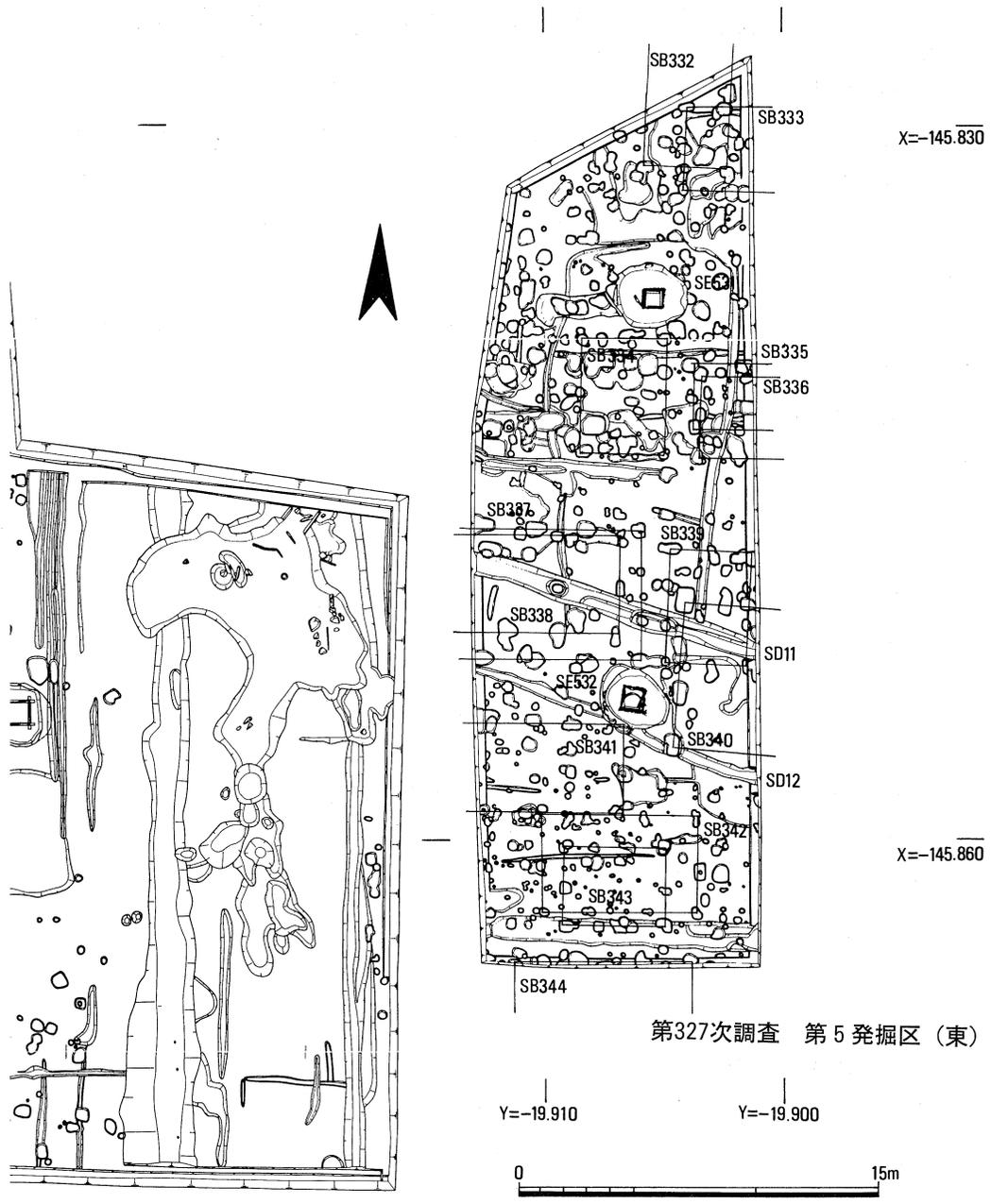
検出した遺構には、古墳時代以前の溝、奈良・平安時代の掘立柱建物、土坑、井戸がある。

古墳時代以前の遺構 素掘りの溝2条を検出した。いずれも国土方眼方位北で西に振れる斜行溝である。S D12は南東から北西方向の長さ24m以上の斜行溝である。幅1.8~2.1m、深さ0.25mである。一部、二段掘りになっている部分がある。S D13は南東から北西方向の長さ24m以上の斜行溝である。幅1.0~1.2m、深さ0.3mである。どちらの溝も遺物は出土しているものの、小片であるため時期を特定することはできないが、周辺の調査例からみて、弥生時代から古墳時代の溝であると考えられる。

奈良・平安時代の遺構 奈良・平安時代の掘立柱建物、井戸、土坑を検出している。この発掘区内では西三坊坊間路の側溝や築地の雨落ち溝はみつからなかった。後述する十一坪の成果ともあわせて、今回の発掘区内では西三坊坊間路には築地がなかったと考えられ



第327次調査 第5発掘区(東)北壁土層図(1/100)



第327次調査 第5発掘区(東)遺構平面図 (1/300)

る。掘立柱建物は13棟検出したが、概要については一覧表にまとめた。建物の位置や重複関係から3時期以上の変遷があると考えられる。S B 341・342・343からは瓦器が出土しており、平安時代の建物であることがわかる。井戸2基についても概要は一覧表にまとめている。いずれも井戸枠が残存している。S E 531は方形縦板組横棧留めの井戸で、隅柱

遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廂の出 (m)	備考
S B 332	南北	3以上×2	3.3	3.6 (12)	1.6-1.7	1.8等間		
S B 333	東西	2以上×2	2.1 (7)	3.6 (12)	2.1	1.8等間		
S B 334	南北	3×2	4.8 (16)	3.6 (12)	1.5-1.6-1.7	1.8等間		
S B 335	東西	2以上×2	2.1 (7)	3 (10)	2.1	1.5等間		
S B 336	東西	2以上×2	1.8 (6)	3.6 (12)	1.8	1.8等間		
S B 337	東西	4以上×3	6.3 (21)	5.4 (18)	2.1等間	1.8等間		
S B 338	南北	3×2	4.8 (16)	3.6 (12)	1.6等間	1.8等間		
S B 339	東西	4以上×2	5.4 (28)	3.6 (12)	1.8等間	1.8等間		
S B 340	東西	3×2	6.6 (22)	4.2 (14)	2.1-2.4-2.1	2.1等間		
S B 341	東西	3×2	4.2 (14)	3.3 (11)	1.2-1.5-1.5	1.5-1.8		
S B 342	東西	3×2	6.3 (21)	4.2 (14)	2.1等間	2.1等間		平安時代
S B 343	東西	3×2	4.5 (15)	3.0 (10)	1.5等間	1.5等間		平安時代
S B 344		東西3間		7.3		2.1-2.7-2.7		平安時代

建物一覧表

遺構番号	掘形			枿			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	平面形・構造	内法 (m)	水溜・濾過 装置等		
S E 531	不整円形	東西3.1 南北2.8	2.4	方形縦板組横棧留	0.83 ×0.83		銭貨(萬年通宝1枚神功開弥4枚)	Ⅱ期新段階(10世紀前半)
S E 532	不整円形	東西2.6 南北2.5	2.1	方形縦板組隅柱横棧留	1.3× 9.4	曲物	黑色土器B類	Ⅱ期古段階(9世紀中頃)

井戸一覧表

がないものである。縦板はそれぞれの面に14~17枚使われている。枿材の長さは0.6~1.8mである。横棧は3段残存していた。S E 532は方形縦板組隅柱横棧留めの井戸で、縦板は西が最も少なく13枚で、東が21枚、南が24枚、北が18枚使用している。枿材の長さは0.3~0.9mである。横棧は3段残存していた。底には径0.63m、深さ0.42mの曲物を据えていて、井戸の底はすり鉢状になっている。この2つの井戸は出土遺物から平安時代初頭から前半のものであることがわかる。

IV 出土遺物

瓦類には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・塙がある。軒瓦は14点出土した。軒丸瓦の内訳は6284C 1点、6282B b 1点、6301B 1点、6282B 1点、型式不明2点である。軒平瓦の内訳は6641E 2点、6685A 2点、6647D 1点、6691A 1点、6721E 1点、型式不明1点である。この内S E 531掘形から6284C・6641Eが、S E 532掘形から6641Eが、S B 337東妻の柱掘形から6271Eが出土した。土器類でまとまったものに、S E 531、532から出土したものがある。S E 531の枿内からは土師器、黑色土器、須恵器が出土し、南都Ⅱ期新段階(10世紀前半)に位置付けられる。S E 532の掘形から土師器、黑色土器、須恵器が、枿内から土師器、須恵器、緑釉陶器が出土した。掘形の土器は南都Ⅰ期新段階(9世紀前半)、枿内の土器は南都Ⅱ期古段階(9世紀中頃)に位置付けられる。銭貨としてはS E 531の井戸枿内から、萬年通宝1枚と神功開寶4枚が出土した。(池田裕英・原田憲二郎)

(3) 平城京右京二条三坊九坪の調査 第327-2・4次

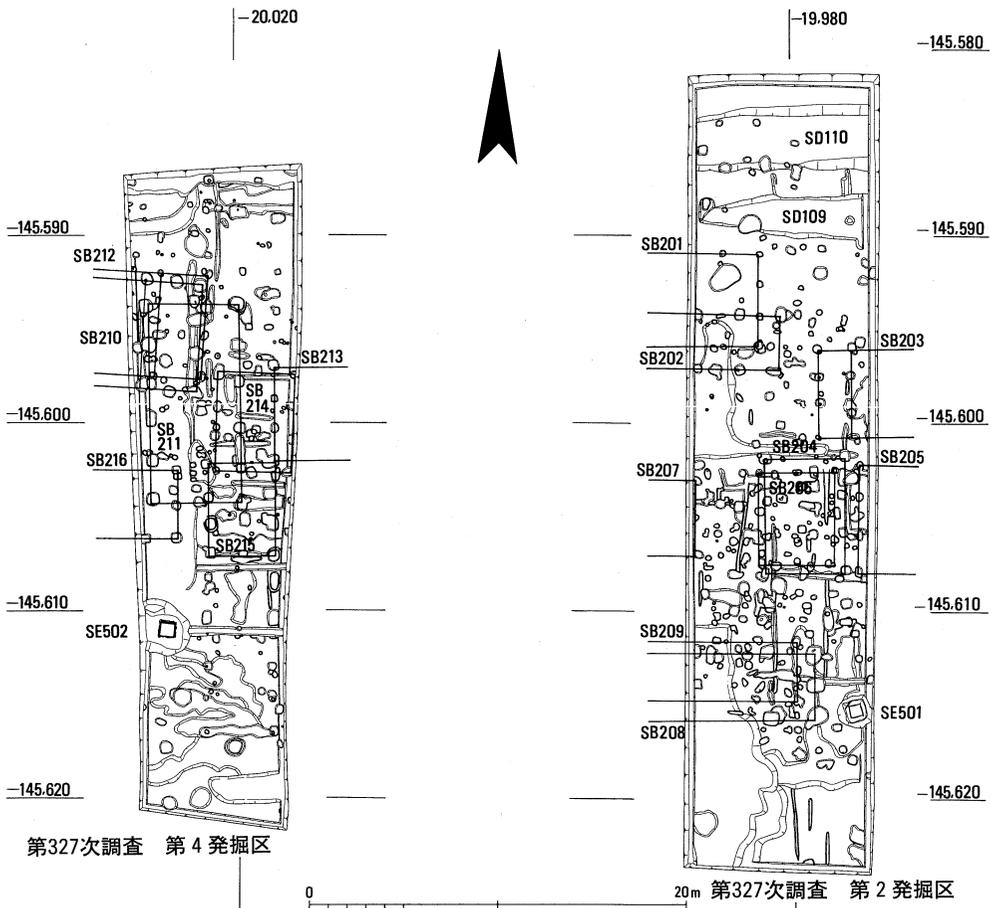
I 調査の目的

右京二条三坊九坪では、坪南辺の様相の確認を目的として、第327次第2・4発掘区の2ヶ所の発掘区を設定し調査を実施した。

II 調査地の地形と層相

調査地は西から東へ延びる微高地の北斜面に位置する。基本的な層序は、黒灰色土（作土）、灰色砂質土、黄灰褐色土と続き、現地表下0.3~0.5mで淡黄灰色粘土もしくは、黄灰色砂の地山に達する。奈良時代の遺構面はこの地山上面で、その標高は、第2発掘区で70.6~70.9m、第4発掘区で71.4~71.6mである。なお、遺構はすべてこの地山上面で検出した。

III 検出遺構



第327次調査 第2・4発掘区 遺構平面図 (1/400)

奈良時代の掘立柱建物16棟（S B 201～216）、井戸2基（S E 501・502）、溝1条（S D 109）と旧河道（S D 110）がある。これらの遺構は、重複関係から3時期以上の変遷がある。なお、掘立柱建物、井戸の概要については一覧表にまとめた。

S D 109・110 S D 109は幅3.0～1.0m、深さ0.2mの東西方向の素掘りの溝である。埋土から奈良時代の土器が出土した。S D 110は幅5.2m以上、深さ2.2m以上の北西方向から南東へ流れる旧河道の南岸である。埋土からは、奈良時代の土器と近世の陶磁器や瓦片が少量出土した。

九・十坪坪境小路は、発掘区内では確認されなかった。恐らく、今回の発掘区と第327次第3発掘区との間に位置するものと想定できる。（久保清子）

IV 出土遺物

奈良時代の瓦類、土器類、木製品等があるが、今回は瓦類についてのみ報告する。

出土瓦類の大半は丸瓦、平瓦で、軒丸瓦8点、軒平瓦3点、埴1点を含む。その内訳は軒丸瓦6225種別不明1点、6278種別不明1点、6281B 2点、6307B 1点、形式不明3点である。軒平瓦の内訳は6641A 1点、6663E 1点、形式不明1点である。この内、6307BはS E 502から、6663EはS B 202から出土した。（原田憲二郎）

遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廂の出 (m)	備考
S B 201	南北	3×2	5.85(19.5)	3.9(13)	1.95	1.95		
S B 202	東西	3以上×1以上	3.9(13)	3.0(10)	1.95			妻柱未検出、軒瓦6663E出土
S B 203	南北	3×2以上	4.65(15.5)	1.8(6)以上	1.5-1.5-1.65		1.8	西廂付建物か？
S B 204	南北	3×2	5.85(19.5)	4.2(21)	1.95	2.1		S B 206より新しい
S B 205	南北	3×1以上	5.85(19.5)		1.95			
S B 206	南北	3×2	4.95(16.5)	3.9(13)	1.65	1.95		S B 204より古い
S B 207	東西	1以上×2		3.9(13)		1.95		
S B 208	東西	3以上×2	5.1(27)以上	3.3(11)	2.55	1.65		
S B 209	東西	3以上×2	4.2(21)以上	3.3(11)	2.1	1.65		
S B 210	南北	3×2以上	5.85(19.5)	2.7(9)以上			2.7	東廂付建物、S B 211より古い
S B 211	南北	5×2	10.5(35)	4.8(16)	2.1	2.4		S B 210・212より新しい
S B 212	南北	3×2以上	5.55(18.5)	2.4(8)以上			2.4	東廂付建物か？S B 211より古い
S B 213	南北	3×1以上	4.95(16.5)		1.65			S B 215より古い
S B 214	南北	3×2	4.95(16.5)	4.2(21)	1.65	2.1		
S B 215	南北	3×2	4.95(16.5)	3.3(11)	1.65	1.65		S B 213より新しい
S B 216	東西	2以上×2	1.8(6)以上	3.6(12)	1.8	1.8		

建物一覧表

遺構番号	掘形			柱			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	平面形・構造	内法 (m)	水溜・濾過 装置等		
S E 501	隅丸方形	東西1.85以上 南北1.8	1.5	方形横板組隅柱	0.6	礫敷	櫨、曲物底枚、桃種、墨書土器	隅柱2本は長押の転用の可能性あり
S E 502	不整円形	東西2.5以上 南北2.8	3.0	方形縦板組隅柱 横棧留	0.7		刀子、斎串、箸、曲物、紡錘車、軒丸瓦6307B	埋土中に桃種、ヒョウタン、クルミ種含む

井戸一覧表

(4) 平城京右京二条三坊十坪の調査 第327-3次

I 調査の目的

調査地は右京二条三坊十坪の北東部に位置し、第317次調査北発掘区の西側に隣接している。十坪としては2度目の調査である。今回の調査は、前回の調査結果とあわせ、十坪内の遺構の把握を目的として実施した。

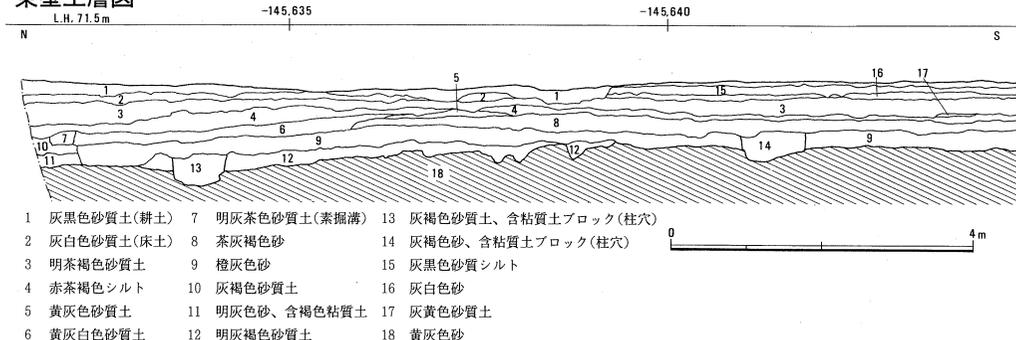
II 調査地の地形と層相

調査地は東へ少しずつ低くなる微高地にある。発掘区南西部の層序は作土(0.3m)の下に部分的に床土(0.1m)、茶灰色土(0.1m)をはさみ、黄灰色砂の地山に至る。地山上面の標高は71.4mである。北東部の層序は作土と床土の下に約0.9mの堆積土があり、明灰色砂または暗灰茶色土の地山に達する。地山上面の標高は70.4mで、南西部との差は1.0mある。奈良時代の遺構面は地山上面である。

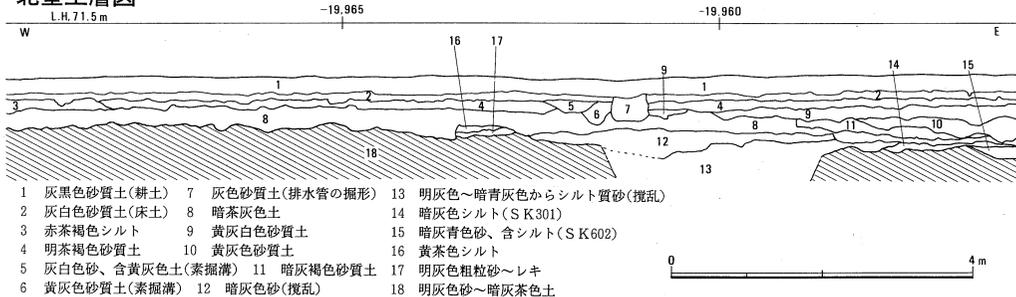
III 検出遺構

検出した遺構には奈良～平安時代初頭の掘立柱建物18棟、掘立柱塀5条、井戸3基、土坑2基がある。以下、主なものについて記す。なお掘立柱建物、掘立柱塀、井戸の概要は一覧表にまとめた。

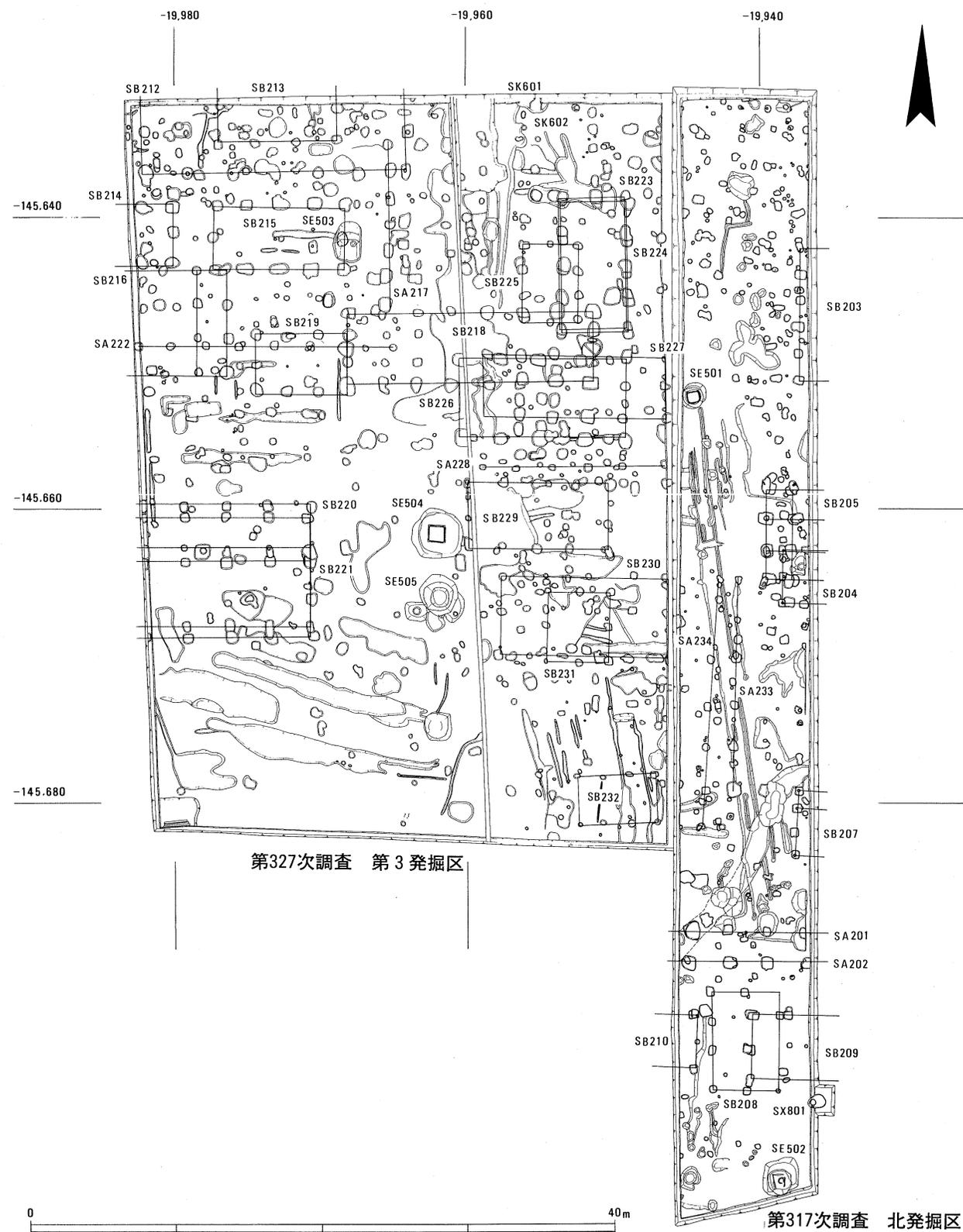
東壁土層図



北壁土層図



第327次調査 第3発掘区北・東壁土層図(1/100)



第327次調査 第3発掘区

第317次調査 北発掘区

第327次調査 第3発掘区 遺構平面図 (1/400)

S A217 発掘区北側のほぼ中央で検出した南北6間の掘立柱塼である。第292-1次調査で検出した六・十一坪境小路(S F0611)道路心から西へ約42mのところにあるので、坪で東西に三分割した場合の、東から約1/3に位置すると思われる。

S A222 発掘区北西部で検出した東西8間以上の掘立柱塼である。S A217と接続してS B214,215の周囲をL字形に区画していた可能性がある。

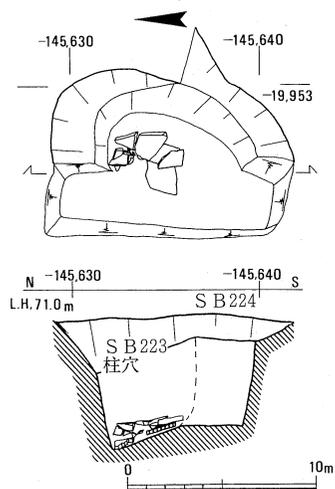
S A228 発掘区西側中央で検出した東西5間の掘立柱塼である。S B227と柱筋がそろうので南廂の可能性もある。しかし、S B227の南側柱列との距離が開きすぎるので、掘立柱塼として考える。

S A233・234 第317次調査地北発掘区で、東廂付南北棟建物S B206の廂として報告していたが、今回の発掘区内で身舎部分を検出できなかったので、掘立柱塼2条に改める。

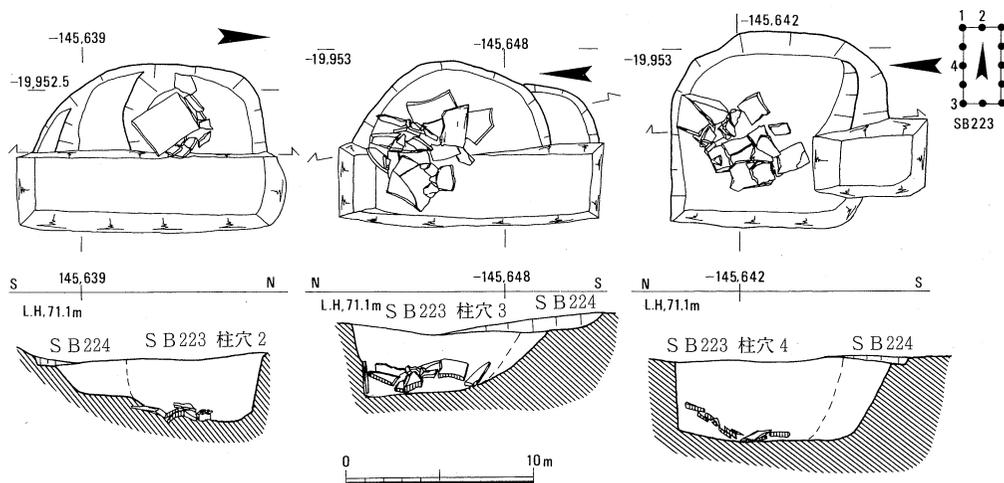
S B215 桁行4間、梁間2間の東西棟建物である。西側のS B214とは北側柱列の筋が揃うので同じ時期の建物である可能性がある。

S B220・221 発掘区南西部で重複して検出した桁行4間以上、梁間3間の北廂付東西棟建物である。2棟は桁行と梁間、それぞれの柱間もほぼ等しい。重複関係からS B220はS B221の廃絶後、少し北にずれた位置で建て替えた建物である。S B220の北側柱列の東から1番目の柱掘形から、軒丸瓦6301Bが1点出土している。

S B223・224 発掘区北東部で重複して検出した桁行4間、梁間2間の南北棟建物である。ほぼ同じ位置で建



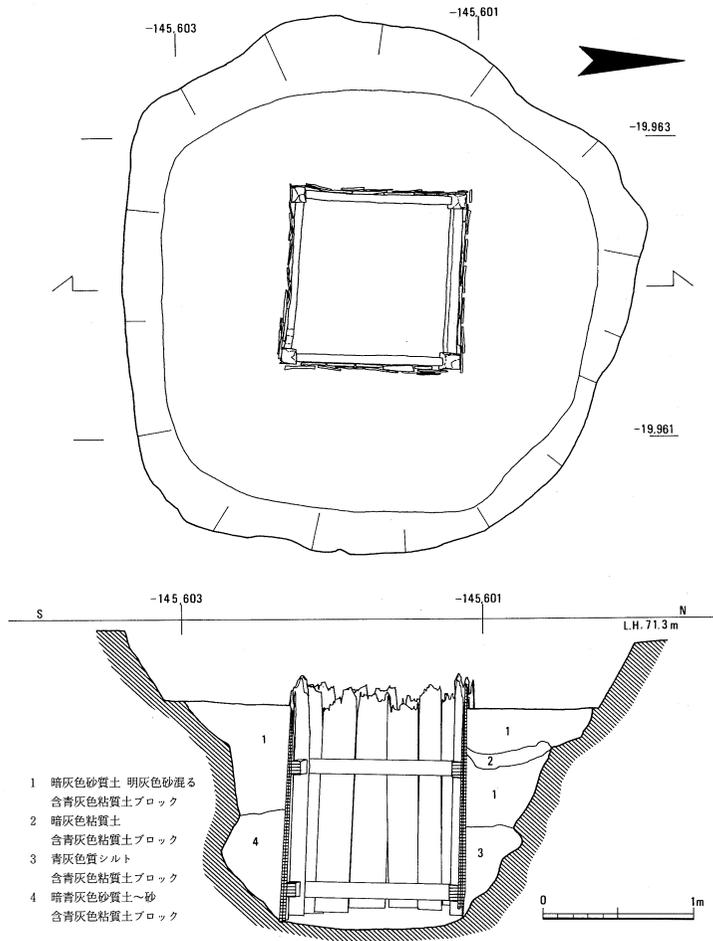
建物S B223柱穴1平面図・立面図(1/40)



建物S B223 柱穴2・3・4 平面・立面図(1/40)

て替えをしている。
北側のS B 224は北側妻柱の掘形と、西側柱列の北から1、3、4、5番目の柱掘形から柱の礎板にしたと思われる平瓦、丸瓦が出土した。出土状況を図示した柱穴は模式図と番号で示した。

S E 503 発掘区北東部で検出した井戸である。井戸枠は抜き取られていてその構造は不明であるが、掘削中に薄い板材が出土しているので縦板組の井戸であった可能性がある。検出時の平面形は楕円



井戸S E 504 平面・立面図 (1/50)

形であるが、井戸枠を抜き取る時に北側から掘った掘形のためで本来の井戸掘形は円形に近い形をしていたと思われる。奈良時代前半の須恵器平瓶、土師器杯などが出土している。

S E 504 発掘区のほぼ中央で検出した方形縦板組隅柱横棧留めの井戸である。枠内から南都I期中段階(8世紀末~9世紀初頭)の土師器、須恵器と軒丸瓦6313A、6252E、6133Oが各1点出土した。

S E 505 S E 504のすぐ南で検出した井戸である。S E 503同様に抜き取られていてその構造は不明である。出土遺物は少なかったが、軒丸瓦6225Lが1点出土している。

(細川富貴子)

IV 出土遺物

瓦類 出土瓦類の総量は遺物整理箱15箱である。大半は丸瓦・平瓦であるが軒丸瓦8点、軒平瓦1点、埴1点を含む。ここでは軒瓦について報告する。軒丸瓦の内訳は6133O

遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廂の出 (m)	備考
S B 212	東西	5 × 2 以上	18(60)	5.4以上	3.0等間	2.7等間		
S B 213	東西	3 × 1 以上	8.1(27)	2.4以上	2.4-2.7-3.0	2.4		
S B 214	東西	1 以上 × 2	2.1以上	4.2(14)	2.1	2.1等間		S B 216より新しい
S B 215	東西	4 × 2	9.0(30)	4.2(14)	2.1-2.4-2.1-2.4	2.1等間		S E 503より新しい、S B 216より古い
S B 216	東西	2 以上 × 2	4.2以上	7.2(24)	2.1等間	2.4等間	東2.1	東廂付
S A 217	南北	6	11.4(38)		北から1.8-2.1-1.8-2.1 1.8-2.1-1.8-1.8	2.4等間		S B 218より新しい
S B 218	東西	7 × 2	16.8(56)	4.8(16)	2.4等間	2.4等間		S A 217より古い、S B 220・S B 227より新しい、西から1間目と2間目に間仕切り
S B 219	東西	3 × 2	6.3(21)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		S B 2 1 8 より古い
S B 220	東西	4 以上 × 3	11.4以上	8.4(28)	2.7-3.0-2.7-3.0	3.0-2.4-3.0	北3.0	北廂付
S B 221	東西	4 以上 × 3	11.4以上	8.1(27)	3.0-2.7-3.0-2.7	3.0-2.7-2.4	北3.0	北廂付、S B 220より古い
S A 222	東西	8 以上	17.4(58)		西から2.1-2.4-2.1-2.1 2.7-2.7-2.1-1.8-2.1			S B 218より古い
S B 223	南北	4 × 2	9.0(30)	4.5(15)	2.7-2.1-2.1-2.1	2.4-2.1		S B 224より新しい、瓦を礎板とする柱穴がある
S B 224	南北	4 × 2	9.0(30)	4.5(15)	2.7-2.4-1.8-2.1	2.1-2.4		S B 223より古い
S B 225	南北	3 × 2	5.4(18)	3.9(13)	1.8等間	1.8-2.1		S B 218・S B 226より古い
S B 226	東西	4 × 2	11.4(38)	5.4(18)	3.0-2.4-3.0-3.0	3.0-2.4		S B 227より新しい
S B 227	東西	5 × 3	12.3(41)	4.2(14)	2.1-2.4-2.4-2.7-2.7	2.1等間	蓋付	S B 218より古い、東西両廂付
S A 228	東西	5	12.6(42)		西から2.4-2.4-2.7-2.7-3.0			
S B 229	東西	4 × 2	9.6(32)	4.5(15)	2.4等間	2.7-1.8		
S B 230	東西	5 × 2	11.4(38)	5.4(18)	2.1-2.4-2.4-1.8-2.7	2.7等間		
S B 231	南北	2 × 2	4.8(16)	4.2(14)	2.4等間	2.1等間		
S B 232	東西	4 × 1 以上	5.4(18)	3.3(11)	1.8等間	3.3		
S A 233	南北	6	14.7(49)		北から2.7-3.0-3.0-3.0-3.0			第317次北発掘区S B 206を改めて、扉2条とする
S A 234	南北	5	17.1(57)		北から5.7-3.8-3.0-3.0-2.1			

建物一覧表

遺構番号	掘形			枿			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	平面形・構造	内法 (m)	水溜・濾過 装置等		
S E 503	円形か	東西1.94 南北1.6	2.15	縦板組か				枿は北側から抜き取られていた。薄い板材のみ残る
S E 504	不整形円形	東西3.55 南北3.42	1.97	方形縦板組隅柱 横残留	0.95 × 0.95		奈良三彩壺A、ニチュア、鍵、櫛扇、木簡、人形、銭貨、軒丸瓦	
S E 505	不整形円形	東西2.6 南北2.85	3.19	不明			軒丸瓦	枿は抜き取られている

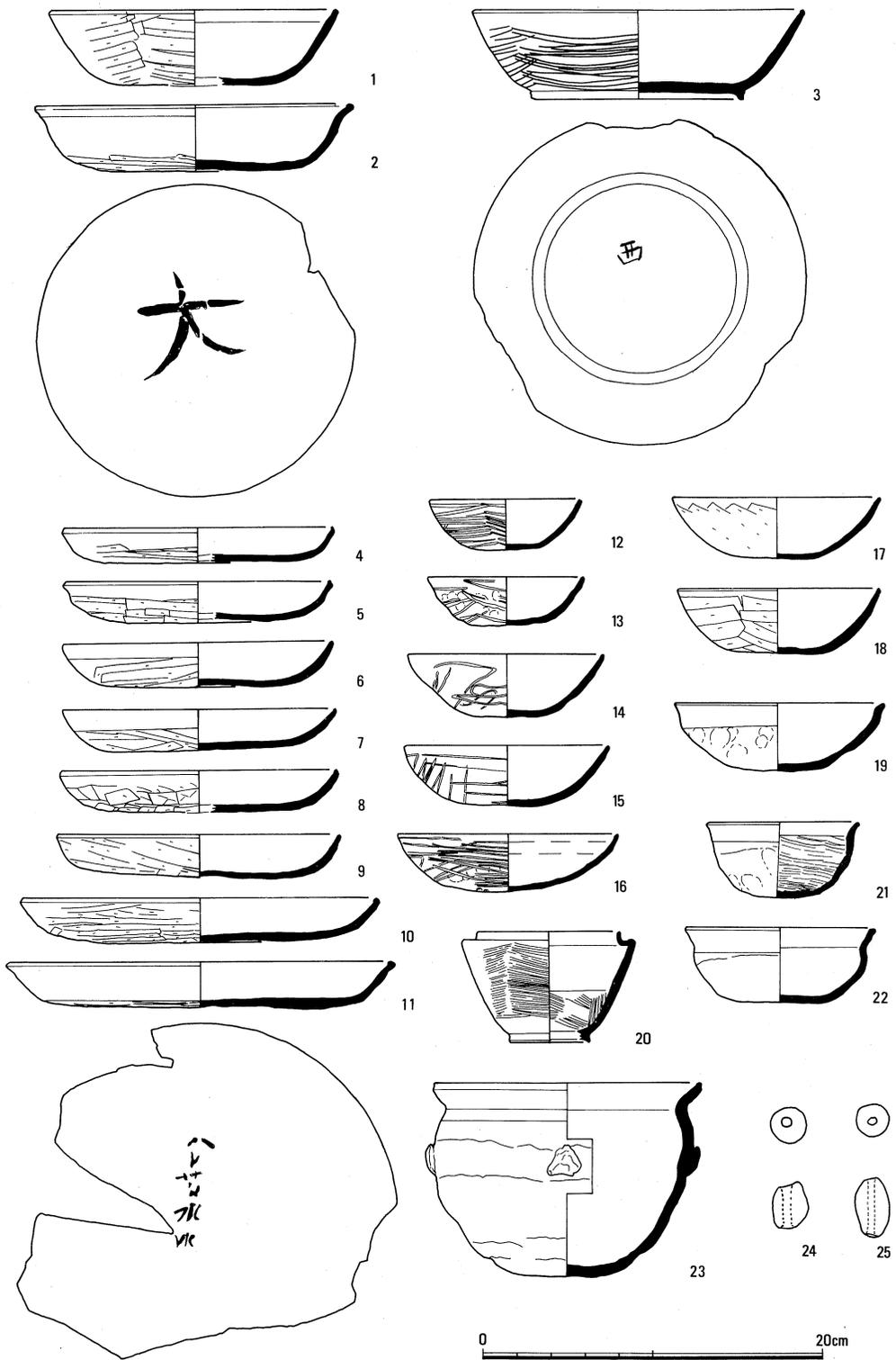
井戸一覧表

1点6255E 1点、6255L 1点、6301B 2点、6313A 1点、型式不明 1点である。軒平瓦は6732Oである。なお、遺構から出土したものは検出遺構本文中に明記してある。

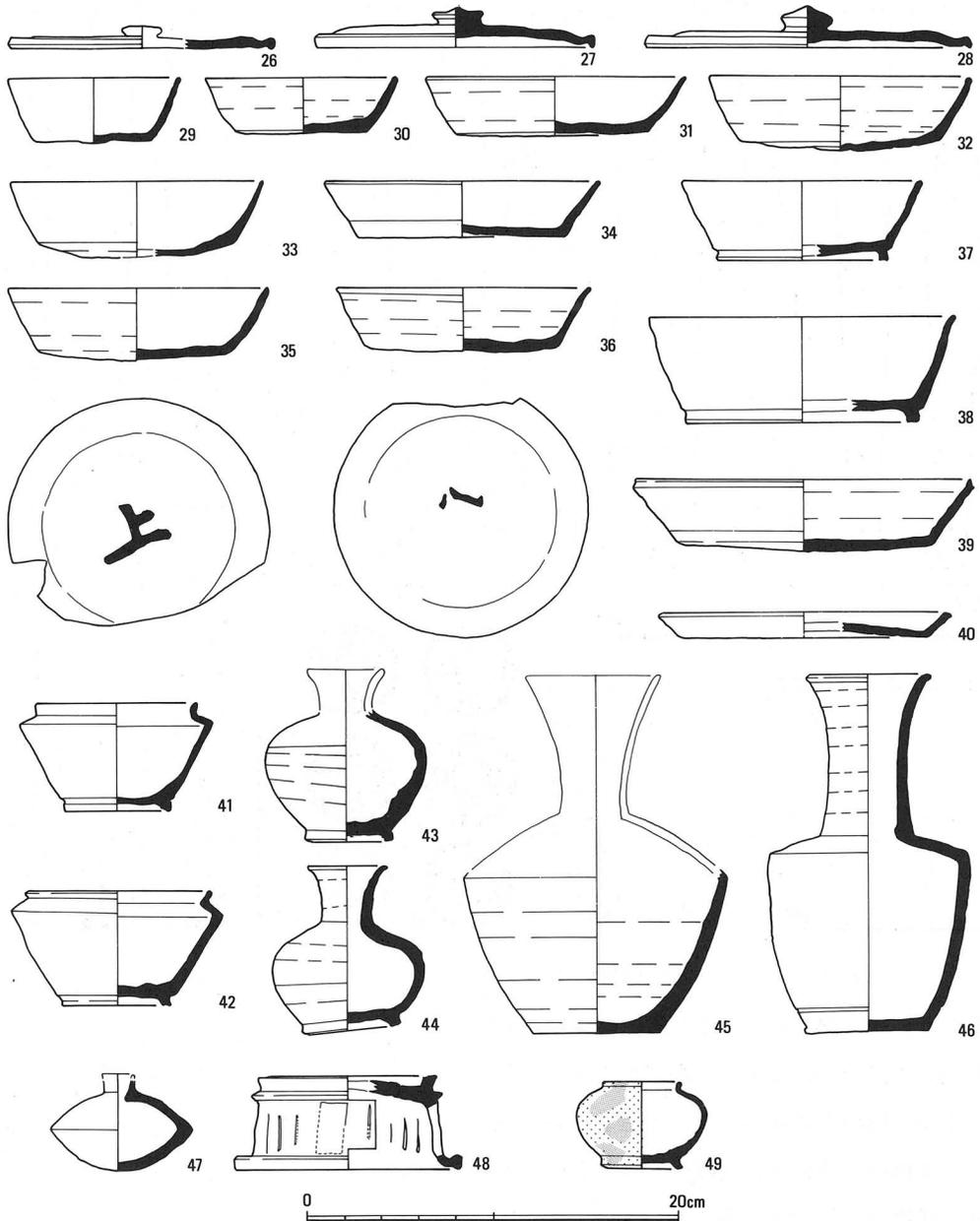
(原田憲二郎)

土器類 遺物整理箱で41箱分の遺物が出土した。今回は S E 504枿内出土のものについて報告する。図示したものは1～23が土師器、24・25が土錘、26～37が須恵器、38が硯、39が奈良三彩壺A(巻頭図版)である。土師器食器類の調整はc手法のものが多いがミガキのみられるもの(12～16)がある。須恵器食器類の調整はいずれも底部外面がヘラキリの後、不定方向のナデ、口縁部が回転ナデである。底部外面に墨書のあるものがあり、2が「大」、3が「西」、11が「□□□□」、35が「上」、36が「八」である。これらの土器は、南都I期中段階(8世紀末～9世紀初)のものと考えられる。(池田裕英)

その他の遺物 S E 504から出土した木製品、銭貨、木簡の主なものについて述べる。特にことわりのないものは井戸枿内から出土した。1～8はAⅢ型式の櫛扇である。要で

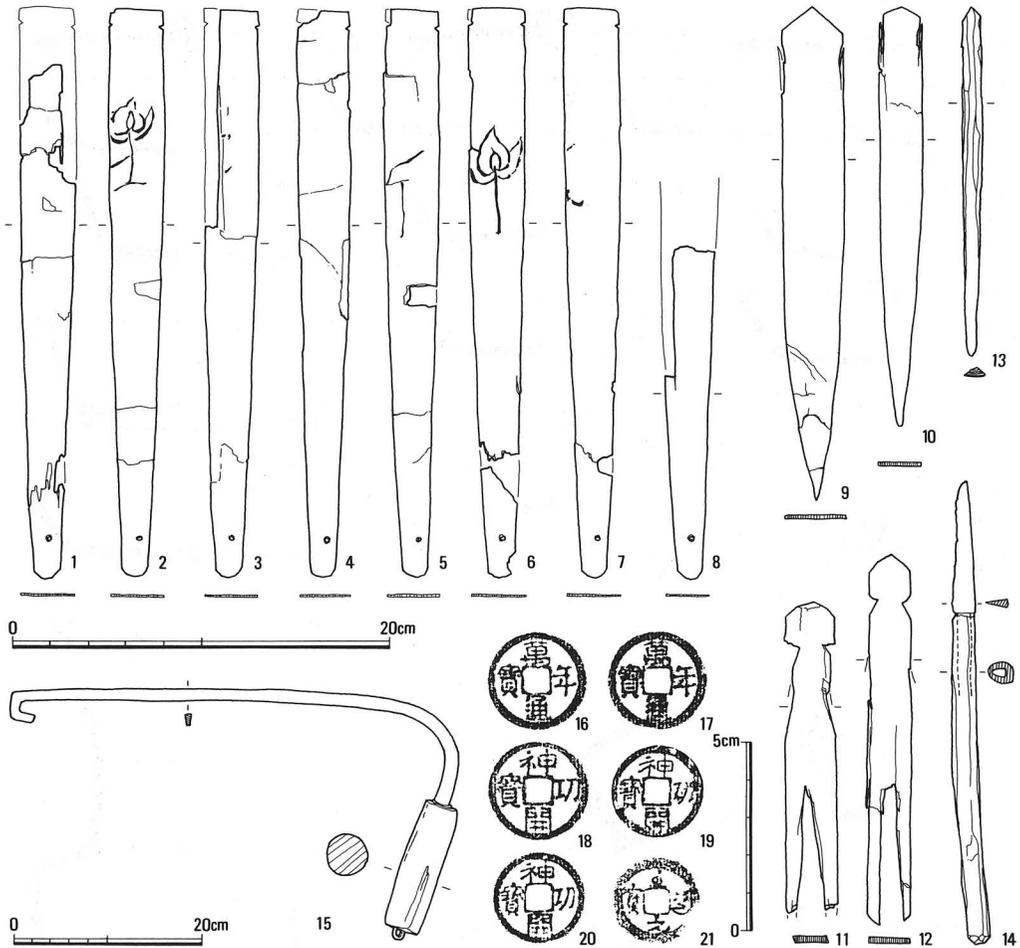


井戸 S E504出土土器・土製品(1) (1 / 4)



井戸SE504出土土器・土製品(2) (1/4)

1つに綴じ、綴り目孔を開けて綴じ紐を通すのではなく、末の両側をV字に切り欠いて綴じ紐をかけ、綴り合わせるものである。8枚とも同一個体のものと思われる。片面に蓮華の墨画がある。9・10はCⅢ型式の斎串である。11・12は人形である。11はAⅠa型式で、股をV字形に切り欠く。12はAⅠb型式で、足先から切れ目を入れ、股で折ってコの字形にする。ともに墨書はない。13は留針か、針耳はないが木針であると思われる。先へ向けてやや扁平に削り、先端は丸くする。14は刀子である。木柄と刀身とは別々の状態で、出



井戸SE504出土木製品・金属製品・銭貨（1～14は1/4、15は1/8、16～21は1/2）

土した。15は鑰（やく）である。倉庫などに使用する鍵の一種である。現代でも古い寺社などで同様のものを使用しているところがある。木柄は、鉄製の勾状部から外れて出土した。銭貨は萬年通寶2枚（16・17）、神功開寶7枚（18～20）、井戸の埋土上部から北宋銭の至同元寶（21）が出土した。木簡は墨書のあるものは全部で7点出土している。ほとんどが破片であるが、その中で文字が判読できるもの3点について釈文を記す。一の「紫菜」とは海苔のことである。二は掘形から出土した。

（田林香織）

<p>三</p> <p>真国</p> <p>長万呂</p> <p>(113) × (16) × 7 019</p>	<p>二</p> <p>春日</p> <p>三六</p> <p>(174) × (18) × 4 081</p>	<p>一</p> <p>「紫菜」斗中</p> <p>99 × 19 × 4 032</p>
---	--	---

(5) 平城京右京二条三坊十一坪の調査 第327-5・351-1次

I 調査の目的

十一坪では平成6年度に坪の北東隅にあたる位置で第292-1・2次調査を行なっていて、古墳時代の溝や六坪と十一坪を限る西三坊坊間路とその両側溝、奈良・平安時代の掘立柱建物、井戸などを検出している。今回の調査地は十一坪の東辺部から中央部にあたり、調査地東端には西三坊坊間路が想定され、これと両側溝の検出、坪内の宅地利用の解明を主目的に調査を行なった。

II 調査地の地形と層相

調査地は、西から東に緩やかに下る微高地上に位置している。また、調査地は水田化のための段差がみられ、南から北に向かって低くなっている。発掘区の基本的な層序は黒灰色土(旧作土)、灰白色土、褐灰色土と続き、黄褐色粘土の地山となる。発掘区内の標高は南西部が最も高く、73.9mで、最も低い北東部で72.7mである。遺構は全てこの地山上面で検出した。

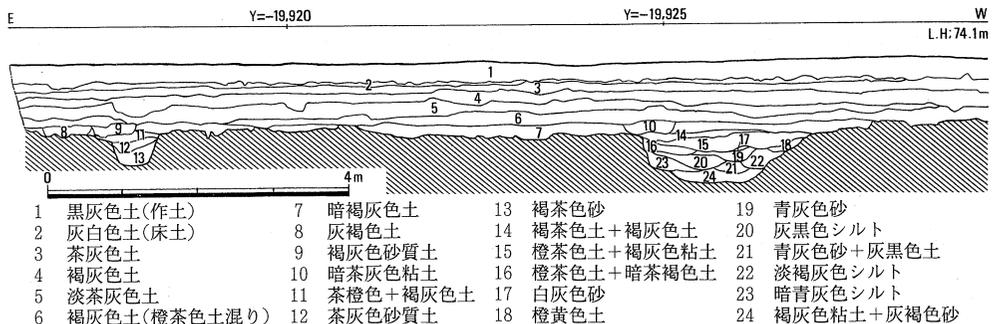
III 検出遺構

主な検出遺構には古墳時代以前の溝、奈良～平安時代の道路、溝、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑がある。

古墳時代以前の遺構 溝4条(SD02～05)を検出した。SD02は幅0.3～0.6mで、深さ0.2mの断面がU字形の素掘りの溝である。六坪で検出したSD11から続くもので、第292-2次調査で検出したSD01とつながることが明らかとなった。SD04は幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.3mの素掘りの溝である。埋土から川西宏幸編年V期の円筒埴輪が出土した。

奈良・平安時代の遺構 道路2条、道路側溝4条、掘立柱建物41棟、掘立柱塀3条、井戸7基、土坑がある。なお、掘立柱建物・塀、井戸については一覧表にまとめた。

SF0611 西三坊坊間路である。路面幅は約6mで、側溝心間では約8mである。第



第327次調査 第5発掘区南壁土層図(1/100)

292-1・2次調査で、この道路は丘陵を南北に切り通して造ったものであることが明らかとなったが、本調査でもこのことを追認できた。また、北半部には灰褐色砂の堆積がみられ、道路が廃絶した後に流路になっていたことも確認できた。路面心の国土座標は $X = -145,870.000$ 、 $Y = -19,921.600$ である。

S D 103 西三坊坊間路西側溝である。幅1.4~3.0m、深さ0.2~0.7mである。溝底は南から北に向かって下り勾配である。埋土から奈良時代から平安時代にかけての土器、銭貨などが出土した。溝心の国土座標は $X = -145,870.000$ 、 $Y = -19,926.100$ である。

S D 104 西三坊坊間路東側溝である。幅0.5~0.8m、深さ0.1~0.5mである。北半部では流路時の侵食によるものか、溝は削平されてしまっていた。溝底は南から北に向かって下り勾配である。埋土から奈良時代から平安時代にかけての土器が出土した。溝心の国土座標は $X = -145,870.000$ 、 $Y = -19,918.200$ である。

S F 901・S D 107・108・109 S D 107は幅0.3~1.0m、深さ0.2m、S D 108は幅0.3~1.5m、深さ0.2mである。いずれの溝からも奈良時代の土器が出土し、この溝間が坪内道路S F 901(幅1.5~1.8m)となり、S D 107・108はその南北両側溝の可能性が考えられるが、327-5次調査区では検出できなかった。S D 107心は第317次調査で確認した二条条間路南側溝S D 102心から南に約80mで、ほぼ270尺の位置にある。S D 109は幅0.4m、深さ0.1mで、S D 108と一連の溝と思われる。西三坊坊間路西側溝S D 103心から東に約60mで、ほぼ200尺の位置にあるが、本調査区内ではこれと対になる溝は検出できなかった。

S A 266~268 掘立柱塀3条を検出した。S A 267は部分的にS B 242と柱筋を揃える。

S B 225~265 掘立柱建物41棟を検出した。これらのうち、S B 258・261・262からは瓦器が出土していて、平安時代の建物と考えられる。建物は調査区中央からやや南側にかけて、廂付東西棟を配し、南端部に南北棟を配する傾向がみられる。建物の位置や重複関係から5時期以上の変遷があると思われる。

S E 508~514 井戸7基を検出した。S E 508・509・512・513・514は、S E 512が隅柱を欠く他は、方形縦板組隅柱横棧留めの井戸枠である。S E 510は二重の井戸枠で、外側は方形縦板組隅柱横棧留め、内側が方形横板組である。内側の枠は最下段に角材を井桁状に組み、その上に横板をのせている。S E 511・513の井戸枠は抜き取られていたが、S E 511は、まなこの曲物のみが残存した。これらの井戸の時期は一覧表に記した。(池田裕英)

IV 出土遺物

瓦埴類 出土した瓦類には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・埴・文字瓦がある。ここでは軒瓦・文字瓦について述べる。軒瓦は59点出土した。大半は西三坊坊間路両側溝から出土した。軒丸瓦の内訳は6012B 1点、6132B 1点、6133D b 1点、6133D 1点、6133Q 1点、6133R 1点、6133種別不明 1点、6134A 2点、6225種別不明 1点、6236D 1点、6273種別

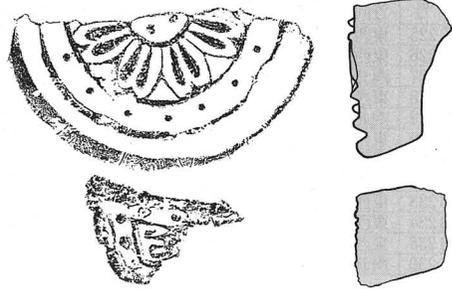
遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廂の出 (m)	備考
S B 225	東西	3以上×2以上	7.2(24)	2.1(7)	2.4等間	2.1等間		
S B 226	東西	4×2	7.2(24)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		
S B 227	南北	3×2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		
S B 228	東西	5×3	10.5(35)	6.3(21)	2.1等間	2.1等間	2.1	南廂付
S B 229	南北	2×2	2.4(8)	3.0(10)	1.2等間	1.5等間		総柱建物
S B 230	東西	2×2	4.5(15)	3.6(12)	1.8-2.7	1.8等間		総柱建物
S B 231	東西	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
S B 232	東西	3×3	7.2(24)	3.6(12)	2.4等間	1.8等間		南廂付
S B 233	東西	5×3	10.5(35)	6.0(20)	2.1等間	1.8等間	2.4	北廂付、間仕切りあり
S B 234	東西	4×2	6.0(20)	6.3(21)	1.5等間	2.1等間	2.1	北廂付
S B 235	東西	4×2	9.0(30)	4.2(14)	敷から2.4-2.1-2.1	2.1等間		
S B 236	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
S B 237	南北	2×2	4.2(14)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		総柱建物
S B 238	南北	3×2	7.2(24)	4.8(16)	2.4等間	2.4等間		
S B 239	南北	3×3	6.3(21)	6.4(23)	2.1等間	2.1	2.7	東廂付
S B 240	東西	3×3	6.6(22)	6.3(21)	敷から2.1-2.1-2.4	2.1等間	2.1	南廂付
S B 241	南北	4×2	8.4(28)	4.2(21)	2.1等間	2.1等間		S B 242と南北妻を揃える
S B 242	南北	4×2	8.4(28)	4.2(21)	2.1等間	2.1等間		S B 241と南北妻を揃える
S B 243	南北	3×3	6.6(22)	5.4(18)	北から2.1-2.4-2.1	1.8等間	1.8	東廂付
S B 244	南北	3×2以上	5.4(18)	1.8(6)	1.8等間	1.8等間		
S B 245	南北	2以上×2	3.0(10)	2.4(8)	1.5等間	1.2等間		
S B 246	南北	4×2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		
S B 247	南北	3×4	6.3(21)	6.6(22)	2.1等間	1.5等間	2.1	東廂付総柱建物、床束か
S B 248	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S B 249より古い
S B 249	南北	3×2	6.3(21)	3.0(10)	2.1等間	1.5等間		S B 248の建て替えか
S B 250	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	敷から2.4-1.5-1.5	1.8等間		
S B 251	東西	3×2	8.1(27)	3.6(12)	2.7等間	1.8等間		
S B 252	東西	3×2	6.3(21)	3.0(10)	2.1等間	1.5等間		
S B 253	東西	3×2	4.5(15)	3.0(10)	1.5等間	1.5等間		
S B 254		3×3	5.4(18)	5.4(18)	1.8等間	1.8等間	1.8	南もしくは東廂付、間仕切りあり
S B 255	南北	4×2	8.4(28)	3.6(18)	2.1等間	1.8等間		
S B 256	東西	3×2	5.7(19)	3.6(18)	敷から1.8-1.8-2.1	1.8等間		
S B 257	東西	3×2	10.5(35)	7.2(24)	2.1等間	2.4等間	西・東・南廂付	
S B 258	東西	5×2	10.5(35)	3.6(18)	2.1等間	1.8等間	2.1	西廂付、平安時代
S B 259	南北	3×2	6.6(22)	3.6(18)	北から1.8-2.4-2.4	1.8等間		
S B 260	南北	5×2	12(40)	5.4(19)	2.4等間	2.7等間		
S B 261	南北	4×2	7.2(24)	3.0(10)	1.8等間	1.5等間		平安時代
S B 262	南北	3×3	6.3(21)	7.2(26)	2.1等間	敷から2.1-2.4	2.7	東廂付、平安時代
S B 263	南北	3×3	5.4(18)	5.4(18)	1.8等間	1.8等間	1.8	西廂付
S B 264	東西	2×2	4.8(16)	3.6(12)	2.4等間	1.8等間		
S B 265		東西3間		5.4(1.8)		1.8等間		
S A 266	東西	5	9.0(30)		1.8等間			
S A 267	南北	5	10.5(35)		2.1等間			
S A 268	南北	4以上	7.4(28)		2.1-1.5-1.8-2.0			

建物・堀一覧表

遺構番号	掘形			枿			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	平面形・構造	内法 (m)	水溜・濾過 装置等		
S E 508	隅丸方形	東西2.2以上 南北3.2以上	3.1	方形縦板組隅柱 横棧留	0.6		土師器、須恵 器、齋串、下 駄、砥石	I期新段階(9世紀 中頃)
S E 509	隅丸方形	東西2.6 南北2.5	3.4	方形縦板組隅柱 横棧留	0.8		土師器、須恵 器、曲物、齋 串、刀子	II期新段階(10世紀 前半)
S E 510	不整形円形	東西3.1 南北2.7	3.6	外側 方形縦板組 隅柱横棧留 内側 方形横板組	0.9		土師器、須恵 器、箸、櫛	最下段に角材を井桁に組み、 その上に横板を置く、I期中 段階(8世紀末~9世紀初頭)
S E 511	円形	東西1.7 南北2.0	0.8	枿は抜き取られ ている、まなこ の曲物のみ残存		曲物(径0.8 深さ0.1)	土師器、須恵 器	奈良時代
S E 512	不整形円形	東西2.6 南北2.8	1.2	方形縦板組横棧 留	0.8	曲物(径0.65 深さ0.4)	土師器、須恵 器、齋串、砥 石	I期新段階~II期古 段階(9世紀前~中 頃)
S E 513	隅丸方形	東西1.3 南北0.9	1.5	方形縦板組(枿 の大部分は抜き 取られている)			土師器、須恵 器	涌水層まで達せず、 奈良時代
S E 514	隅丸方形	東西3.6 南北3.1	2.2	内・外とも方形 縦板組隅柱横棧 留	外 1.2 内 0.85		土師器、須恵 器、鍵、齋串、 箸	II期古段階(9世紀 中頃)、井戸枿は扉 床材の転用

井戸一覧表

不明1点、6275A 1点、6281A 1点、6282
G 2点、6284D 1点、6285B 1点、6307B
1点、6313H 1点、6316D c 1点、6316G
1点、軒丸瓦新形式(1) 1点、平安以降1
点、型式不明11点である。1は、複弁蓮華
紋軒丸瓦で、6316Fに似るが、蓮子、蓮弁、
珠紋の位置関係が合わず異范である。軒平
瓦の内訳は6641E 2点、6664D 1点、6664

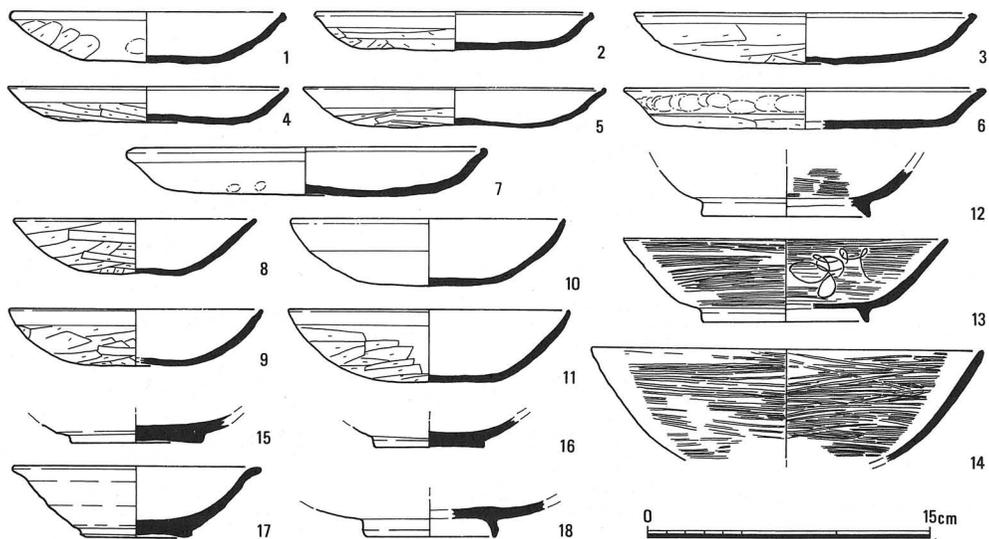


出土軒瓦新形式(1/4)

F 1点、6682A 1点、6685A 2点、6689A a 1点、6689A 2点、6691A 2点、6710C 3点、
6721C 1点、6721E 1点、6721G b 1点、6775C 1点、軒平瓦新形式(2) 1点、型式不明
3点である。2は左端部の小破片である。左側最後の単位の唐草二本がともに上方に巻く
点が特徴的である。文字瓦は2点出土した。2点とも平瓦凹面に刻印「理」が押捺されたも
のである。刻印「理」はa~1の12種類が知られている。今回出土したものは、1点は小片
のため不明、もう1点は1である。(原田憲二郎)

土器類 本調査では坊間路両側溝や井戸を中心に整理箱にして150箱の土器が出土した。
図示したものはS E 509出土土器で、南都Ⅱ期新段階(10世紀前半)のものである。3・5・
10には墨書がみられ、3が「□」、5が「北家」、10が「□調」である。(池田裕英)

その他の遺物 坊間路西側溝S D 103から出土した主なものについて述べる。木製品に
は箸、斎串、石製品は砥石がある。金属製品には鉸具、丸柄、巡方、鉞尾の銅製帯金具、
佐波理の璽珞がある。以上は全て溝の最下層から出土した。銭貨は上層から神功開寶1点、
中層から和同開珎1点、最下層から和同開珎4点、神功開寶7点が出土した。(田林香織)



井戸S E 509出土土器(1~11・土師器、12~14・黒色土器、15~17・緑釉陶器、18・灰釉陶器)

2 JR奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う調査

奈良市教育委員会では、奈良市が進めるJR奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴い、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続している。本年度は表に示した計5,840㎡の調査を実施し、初年度からの調査面積は合計34,516㎡に達した。

第347次調査は、左京四条四坊十四・十五坪における調査である。第1発掘区は十五坪にあたり、昨年度実施した第325次調査第7発掘区の東隣接地で設定した。第2発掘区は十四坪の西1/3の地域で設定した。第353次調査は、左京四条四坊十四坪・四条五坊三坪における調査である。第1発掘区は十五坪にあたり、第347次調査第2発掘区の南隣接地で設定した。第2・3発掘区は三坪の南東1/4の地域にあたる。第373次調査は左京四条五坊五坪の西辺中央付近にあたる部分の調査である。

●本年度収録した調査について

本書に収録した調査は、本年度実施した第347・353次調査と、平成6～7年度に実施した第318・325・331・334・335・339・345次調査である。これらの調査地は、左京四条四坊十三・十四・十五・十六坪にあたる。ここでは、上記の調査を坪ごとにまとめて報告する。なお、第373次調査については来年度に報告する予定である。

調査年度	調査回数・ 発掘区	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	備考
平成6年度	318-1・3発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町306	H6.12.05～H7.03.07	969㎡	試掘
	324	左京四条四坊十三坪	三条本町236-1他	H7.03.06～H7.03.27	544㎡	
平成7年度	325-2発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町314-1他	H7.04.25～H7.08.11	1,284㎡	
	-3発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町311-1他	H7.04.25～H7.08.11	533㎡	
	-4発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町315-8他	H7.04.25～H7.08.11	25㎡	
	-5発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町238-1他	H7.07.18～H7.09.27	707㎡	
	-6発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町238-3	H7.10.20～H7.12.06	532㎡	
	-7発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町238-3	H7.12.07～H8.02.13	309㎡	
	331	左京四条四坊十二・十三坪	三条本町236-1他	H7.08.18～H7.09.12	1,350㎡	
	334	左京四条四坊十六坪	三条宮前町41-1他	H7.08.08～H7.10.18	1,072㎡	
	335	左京四条四坊十二・十三坪	三条本町233-1他	H7.09.01～H7.12.13	1,400㎡	
	339	左京四条四坊十三坪	三条大宮町236-1他	H7.12.14～H8.03.29	2,450㎡	
平成8年度	345	左京四条四坊十六坪	三条宮前町37-3他	H8.02.19～H8.03.29	396㎡	
	347-1発掘区	左京四条四坊十五坪	三条宮前町313-2、314-2	H8.04.23～H8.06.28	870㎡	
	-2発掘区	左京四条四坊十四坪	三条大宮町344-1	H8.04.30～H8.08.06	1,400㎡	
	353-1発掘区	左京四条四坊十四坪	三条大宮町344-1	H8.07.09～H8.11.14	2,020㎡	
	-2発掘区	左京四条五坊三坪	三条本町335、337-1	H8.08.08～H8.10.30	1,400㎡	
	373	左京四条五坊五坪	三条本町7-11	H9.01.20～H9.02.15	150㎡	

平成8年度発掘調査及び本概要報告書掲載調査一覧

(1) 平城京左京四條四坊十二・十三坪の調査 第164・208・324・331・335・339次

I 調査の目的

平城京左京四條四坊十二・十三坪およびその周辺では、平成7年度までに下表の6件計8,844㎡の調査を実施した。下記の調査では主として弥生時代、奈良時代の遺構を検出したが、特に十三坪については宅地部分の約四割に相当する約5,700㎡について調査区を設定し、奈良時代における同坪内の様相を探る上で多くの成果を得た。また条坊関連遺構では、十二・十三坪境小路を約90mにわたって検出したが、一方で存在が予想されていた十三・十四坪境小路については今回の調査では検出することができなかった。ただ今年度に調査地近隣で実施した平城京第350次調査(本報告89頁参照)では同坪の南辺を区切る四條大路の南側溝を検出しており、この他近隣の調査で得られた成果等を参考にすれば、国土方眼方位上の同坪の位置については、計算上ほぼ確定可能な状況にある。

なお、下記調査のうち第324次調査については地下遺構の状況を確認するために第331・335・339次調査に先行して実施したものである。また第331・335次の調査区については、十二坪に該当する部分も含まれているが、十二坪と十三坪は本来的には奈良時代の宅地としては個別の存在であるので、当概要報告内では坪単位で報告することにする。

調査次数	調査地	面積(㎡)	調査期間	既存の概要報告書
第164次	三条本町1番地ほか	1,500	S63/9/26~S63/11/30	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和63年
第208次	三条本町31番地ほか	1,600	H2/9/3~H2/12/27	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成2年
第324次	三条大宮町236-1ほか	544	H7/3/6~H7/3/27	
第331次	三条大宮町236-1ほか	1,350	H7/6/2~H7/9/12	
第335次	三条大宮町233-1ほか	1,400	H7/9/1~H7/12/13	
第339次	三条大宮町236-1ほか	2,450	H7/12/14~H8/3/29	

平城京左京四條四坊十三坪内の調査一覧

II 調査地の地形と層相

左京四條四坊十二坪および十三坪の西半部分については、以前に奈良県経済連の精米工場等の用地として使用されていたことがあり、また十三坪の東半についても旧国鉄操車場用地として使われていたため、いずれも1.5~2.5m程度の盛土がある。これを除去すると旧水田作土が現われる。この層の堆積状況は各所により微妙に異なるが、凡そ0.4~0.5mの厚さで堆積しており、この下層が概ね黄灰色シルトもしくは青灰色砂礫の地山となっている。十三坪が想定される当該地は、春日山麓から西へ派生する扇状地の終末端部分にあり、地山は概ね東から西へ傾斜する傾向にある。加えて、十三坪・十四坪境付近には現在は菩提川が西流しており、その影響で十三坪の北半部ではさらに粘土の堆積が数層あり、土層中には中世の遺物が含まれる。河川の氾濫等による削平のためにか、十三坪の北辺付

近の地山面は比較的低くなる傾向にあり、遺構の密度もかなり低くなっている。

なお、弥生時代および奈良時代の遺構はすべて地山上面で検出した。検出した地山の標高は、十二坪東辺中央および十三坪西辺中央付近では約62.6～62.8m、十三坪北辺付近では約62.4m、十三坪東半部中央では約63.3m、十三坪南半部中央では約63.5mである。

Ⅲ 検出遺構

1 弥生時代の遺構 第208次発掘区では土坑4基を検出した。形状は平面円形や不整形など様々であり、いずれも径1.1～1.8m、深さ0.3m程度の規模である。各土坑の埋土からは土器片が少量出土している。また第331次発掘区の中央東寄りでは土坑1基を検出した。形状は平面円形を呈し、径は約0.7m、深さ約0.35mである。土坑中央には畿内第V様式の特徴を示す甕が埋納されていた。

また、第335次発掘区中央では素掘りの井戸SE29を検出した。掘形は平面ほぼ円形であり、直径約0.8m、検出面からの深さは約1.7mである。埋土からは畿内第V様式の特徴を示す土器数点が出土した。

このほか流路を2条検出した。ひとつは、第208次発掘区北東から南流して中央付近から西に向きを変え、第339・335次発掘区中央付近を経てさらに西流する流路である。幅は広いところでは約6mあり、深さは0.2～0.6m程度である。第208次発掘区内では畿内第IV様式の特徴を示す甕が出土している。さらにもうひとつの流路は、第331次発掘区東側から北西隅方向へと流れるもので、幅は1.0～2.5m、深さは0.3m程度である。遺物は少なく、埋土から弥生時代の土器片が数点出土したのみである。

当該地の東側約200mで昭和60年に奈良市教育委員会が実施した第80次調査においても弥生時代の流路が検出されており、今回の調査で検出した流路と繋がる可能性がある。

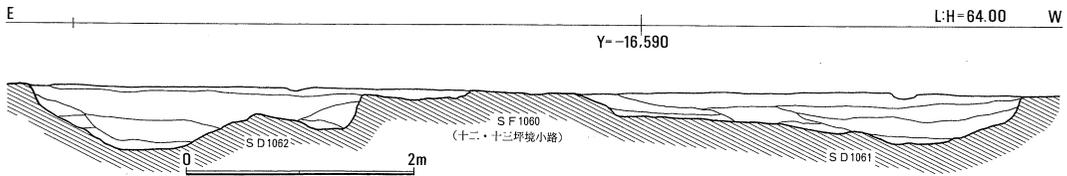
2 奈良時代の遺構 奈良時代の遺構は各発掘区で多数検出した。以下条坊関連遺構および各坪ごとに分けてその概要を説明する。

(1)条坊関連遺構 第331・335次発掘調査において十二・十三坪境小路および両側溝を検出した。また条坊関連遺構ではないが、十二・十三坪境小路路面において奈良時代の土坑を数基検出しており、これらの概要も併せて述べることとする。

S F 1060 十二・十三坪境小路である。発掘区内では約90m分を確認した。幅員は東西側溝心間距離で約6.8mであり、恐らく20大尺(24小尺)に復元できるものと思われる。

S D 1061 十二・十三坪境小路西側溝である。第331・335次発掘区内において約90m分を検出した。幅は削平された部分以外では2m前後、検出面からの深さは同様に約0.3～0.4mである。第331次発掘区の北側では菩提川の氾濫等による削平のためか、徐々に浅くなり最終的には消滅する模様である。埋土からは奈良時代の土器、瓦の破片が出土した。

S D 1062 十二・十三坪境小路東側溝である。同様に発掘区内においては約90m分を検



十二・十三坪境小路 S F 1060 及び両側溝 S D 1061・1062 断面図 (1/50)

出した。幅は削平された部分を除くと 2 m 前後で、検出面からの深さは約 0.3~0.4 m である。S D 1062 同様に第 331 次発掘区の北側部分で徐々に浅くなっていく傾向にある。埋土からは奈良時代の土器、瓦の破片が出土した。

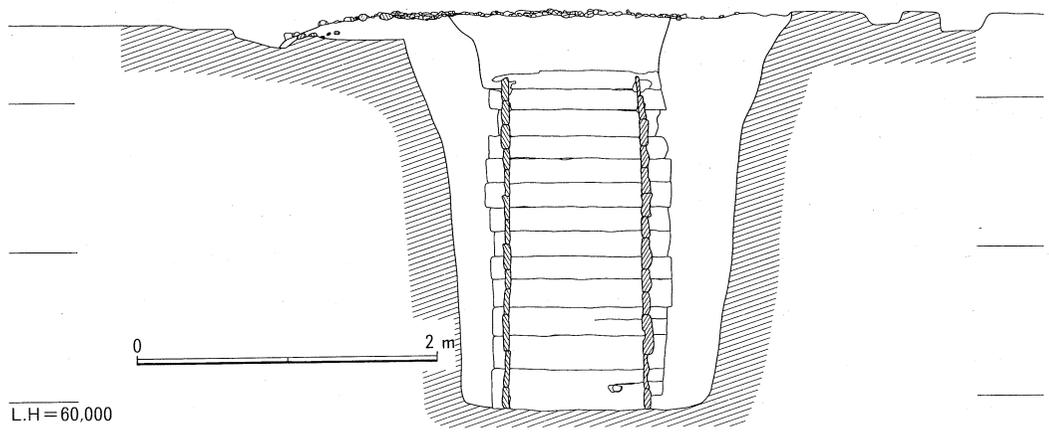
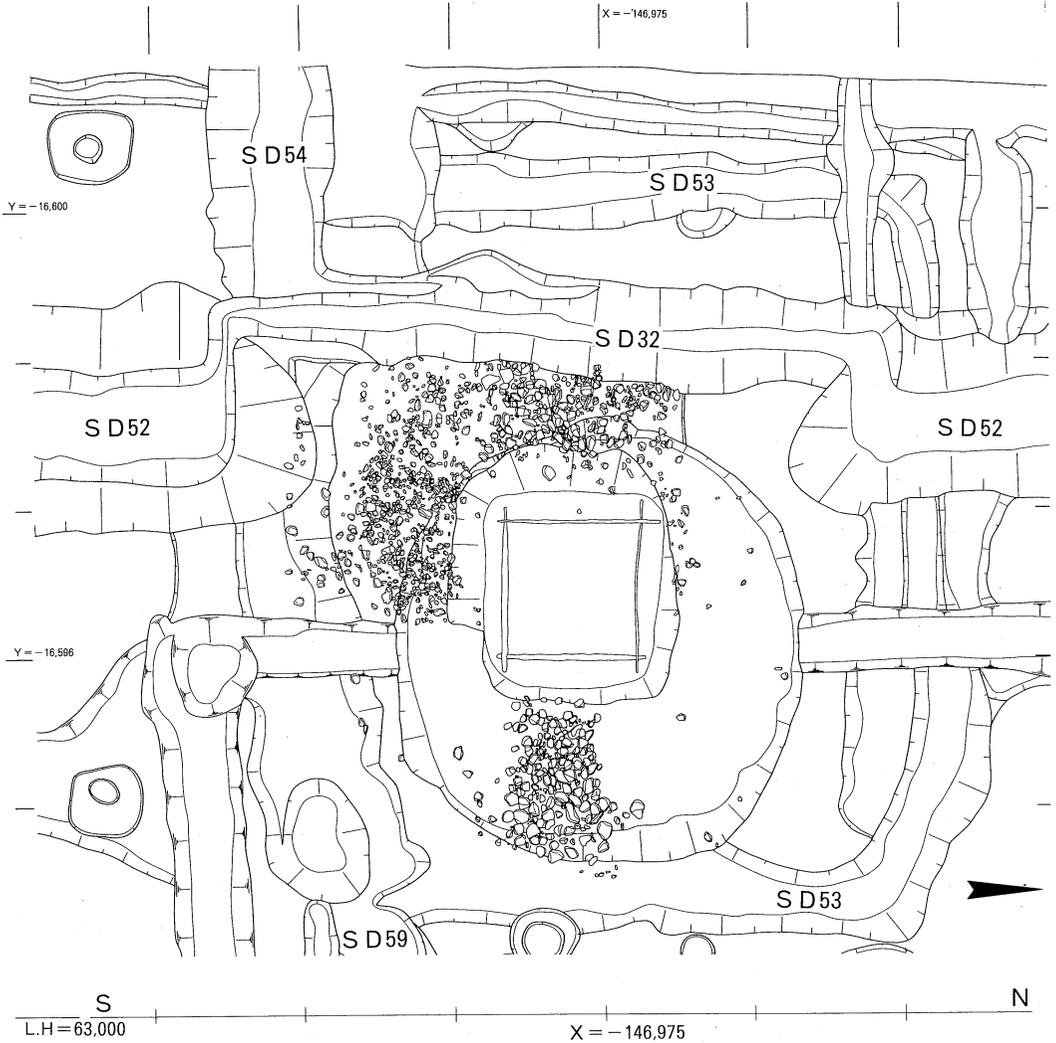
S K 45~48 十二・十三坪境小路路面上で検出した土坑。平面長円形を呈し、規模は長径 5 m 前後、短径 1.5 m 前後、深さは 0.1~0.2 m。埋土から奈良時代の土器片が出土した。

(2)左京四条四坊十二坪内の遺構 当坪内で検出した奈良時代の遺構には、建物もしくは堀 13 棟(列)、井戸 2 基、主要な素掘りの溝 21 条などがある。このうち建物または堀については発掘区の制約上全体を確認できない例が多く、よって最終的に建物となるか、堀となるか判断し難いものが大半である。規模等の詳細については次頁の上段の表に示した。また、素掘りの溝についても主要なものの規模などについても同様に次頁の下段の表に示した。以下井戸等その他の遺構について列挙する。

S E 66 第 331・335 次発掘区で検出した井戸である。位置的には十二坪東辺の北寄りの部分にあたる。井戸の掘形は平面円形で径約 3.0 m、検出面から底までの深さは約 2.7 m に達する。井戸枠の構造は方形横板組で、両端にある上下二段の目違い柄で留める仕組みになっている。井戸枠の規模は内法は東西・南北とも 0.9 m ずつで、深さは 13 段分・約 2.3 m が残存していた。枠材に使用されていた板材は縦 1.2 m 前後、幅約 1.5~2.5 m、厚さ 0.03~0.04 m 程度で、中には柄穴があるものも見受けられることから、建物などの建築部材の転用である可能性が高い。また、井戸枠の東側および西側から南側にかけて敷石を検出した。敷石の多くは河原石で、径 5 cm 程度のものが主流を占める。一部は削平されてなくなっているものの、かつては井戸枠の周辺には石が敷き詰められていたものと推測される。

このほか、井戸の周囲には排水施設と考えられる溝 S D 53 や暗渠 S D 59 が存在する。

S E 67 第 335 次発掘区内に検出した井戸である。位置的には十二坪東辺のほぼ中央付近に該当する。井戸の掘形は平面隅丸方形を呈し、径約 1.8 m、検出面から底までの深さは約 1.4 m を測る。井戸枠の構造は円形割り貫き井戸枠で、枠材は一木を半截した後に厚さ 10 cm 程度に割り貫き、再び縄で組み合わせて据えていたと推定される。また、残存していなかったが、さらに上段には同様の枠材を据えていたらしく、残存する枠材の上部には薄板が敷かれてあり、おそらく上段の枠材との隙間を埋める目的でなされたものと推測され



十二坪 井戸SE66 平面・立面图 (1/50)

遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廂の出 (m)	備考
S A 031	南北・廻	南北8以上東西3以上	南北18.9東西6.9		南北2.1-2.4東西2.1-4.8			築地想定地上、SA30、SB36より古い、東西は坪計画線北辺より1/4
S A 032	南北	4以上	12.0		不揃い			築地想定地上、柱間不揃い、SA31より新しい、SB36より古いかな併存
S A 033	南北	3	4.95		1.65等間			建物である可能性あり
S A 034	南北	2	4.2		2.1等間			建物である可能性あり
S A 035	南北	2	6.0		3.0等間			建物である可能性あり
S B 036	南北	1×1	3.0	0.9	3.0	0.9		四脚門、SA31より古い、SA32より新しいかな併存
S B 037	南北?	4×1以上	9.6	2.4以上	2.4等間	2.4等間		
S B 038	南北?	3×1以上	3.6	2.1以上	2.1等間	2.1		
S B 039	東西	1	2.7		2.7			門か塀の可能性
S B 040	南北	1	3.0		3.0			門
S B 041	南北	2×2	3.0	2.4	1.5等間	1.2等間		S B 43より古い
S B 042	南北	4×2	8.4	4.2	2.1等間	2.1等間		S B 43より古い
S B 043	南北	4×2	7.2	3.3	1.8等間	1.65等間		S B 42より新しい

十二坪内検出掘立柱塀・建物一覧表

遺構番号	方向 (形状)	検出幅員 (m)	検出距離 (m)	深さ (平均・m)	出土遺物・摘要
S D 050	東西	0.5+ α	5.5	0.3	坪計画線北辺より南へ1/4の位置上、S D 55に接続、坪内区画溝の可能性
S D 051	南北	0.9+ α	10.5	0.3+ α	築地雨落ち溝、S D 55・57・58の延長上にあり同時期の可能性
S D 052	南北	0.6~1.6	12.8+19.0	0.3	築地雨落ち溝、S D 55より新しい
S D 053	(周回)	0.3~0.6	17.0	0.1	井戸S E 66を周回、井戸の排水溝か? S D 59に接続していた可能性
S D 054	東西	0.8~0.9	6.0	0.2	坪計画線北辺より南へ1/4の位置上、S D 59に接続、坪内区画溝の可能性
S D 055	南北	1.3~2.1	24.4	0.2	築地雨落ち溝、S D 52より古い、S D 51・57・58の延長上にあり同時期の可能性
S D 056	廻・南北	0.9~1.9	6.5	0.2	L字状に屈曲、東西部分は坪の中心線付近に位置し坪内区画溝の可能性あり、南北部分はS D 52の延長上にあり築地雨落ち溝の残存部分の可能性
S D 057	南北	0.5~1.4	1.6	0.1	S D 51・55の延長上にあり、同時期の築地雨落ち溝の残存部分の可能性
S D 058	南北	0.6~0.8	8.2	0.1	S D 51・55の延長上にあり、同時期の築地雨落ち溝の残存部分の可能性
S D 059	東西	0.4~0.5	1.8	0.1	築地下暗渠、S D 53・54と十二・十三坪境小路西側溝を接続
S D 060	東西	0.4~0.5	3.7	0.2	築地下暗渠、平瓦片等で護岸、S D 55またはS D 50と坪境小路西側溝を接続
S D 061	東西	0.4~0.5	2.1	0.1	築地下暗渠、S D 55と十二・十三坪境小路西側溝を接続
S D 062	東西	0.2~0.6	1.7	0.1	築地下暗渠、S D 55と十二・十三坪境小路西側溝を接続
S D 063	東西	0.5~0.6	1.5	0.2	築地下暗渠、拳大の河原石等で護岸、S D 55と坪境小路西側溝を接続
S D 064	東西	0.4~0.5	4.2	0.2	S X 76と坪境小路西側溝を接続していた可能性あり。S E 67の排水溝か
S D 065	東西	1.8~3.0	3.8	0.7	S E 67より古い、坪中心付近に位置し坪内区画溝の可能性

十二坪内検出の主な素掘りの溝一覧表

る。このほか、枠内には径5cm前後の河原石が敷き詰められていた。

この井戸も前述の井戸S E 66と同様に井戸枠の南側には敷石が残存しており、かつてはやはり井戸枠の周囲前面に敷き詰められていた可能性がある。

またこの敷石の南側に隣接するように、S D 64や拳大の河原石を敷き並べた石敷遺構S X 76があり、井戸枠周囲の敷石とも併せ井戸の排水機能を果たしていたと思われる。

S K 71 S D 65の下層で検出した土坑。平面楕円形を呈し、規模は長径約1.2m、短径約0.8m、深さ約1.0m。埋土に遺物は含まれず、遺構の時期や性格は不明である。

S K 72 S D 72の東側で検出した土坑。平面不整形を呈し、東西約3.5m、南北約3.7m、深さは0.2m程度と浅い。築地雨落ち溝とみられるS D 52の延長上にあることから、その続きの一部である可能性もある。埋土からは奈良時代の土器片が出土した。

S X 76 S E 67の南辺に位置する集石遺構。S E 67南辺に広がる敷石と重複する部分では幅約0.2mの溝状をなし、東西方向に約4.1m分を検出した。溝の南北辺部分は径10cm程度の石により縁取られている。また東側は一辺約0.7mの隅丸形状の石敷遺構となって

おり、ここでは拳大の河原石が使用されている。遺構の状況からみて、井戸S E 67の排水機能を果たしていた遺構と考えられる。また、状況からみて南辺の敷石よりは古いと思われる。遺物は少なく、溝状部分が土器片が少量出土したのみで、時期は不明である。

(3)左京四条四坊十三坪内の遺構 当坪内で検出した奈良時代の遺構には、建物又は塀76棟(列)、井戸4基、主要な素掘りの溝21条がある。このうち建物又は塀については発掘区の制約上全体を確認できないものが数例あり、最終的にどちらか判断し難い例もある。主要な素掘り溝や井戸とも併せ、各遺構の規模等の詳細は下表および次頁表の通りである。

S K 195・196・198 S K 195・196はS D 172の西側で検出、またS K 198は築地雨落ち溝S D 162の南端から東へ約5mで検出した。S K 195は東西約2.6m、南北約7.9mで埋土から奈良時代中頃の土器が出土した。S K 196は東西約3.6m、南北約6.0m、奈良時代末期の土器が出土した。S K 198は東西約3.9m、南北約2.8m、奈良時代末期の土器が出土した。いずれも深さ0.1~0.3mと浅く、形状は概ね長円形を呈す。廃棄土坑と思われる。

S K 199・202 S K 199は十二・十三坪境小路東側溝の東で、またS K 202はS B 134・135の北側でそれぞれ検出した。いずれも須恵器壺が埋納されていた。形状は平面円形、径は0.2~0.3m、深さは0.1~0.2m程度である。(武田和哉・篠原豊一)

遺構番号	方向(形状)	検出幅員(m)	検出距離(m)	深さ(平均・m)	出土遺物・摘要
S D 160	(周回)	0.2~0.7	7.1	0.1	S K 197北側を周回するような形状を呈す
S D 161	(周回)	0.7~0.9	11.8	0.1	S E 188を周回するような形状を呈す、南側は削平されている模様、S K 196より新、奈良時代末期の遺物出土
S D 162	南北	1.5~2.7	40.4	0.2	築地雨落ち溝、S D 167と同時期の可能性あり、奈良時代の遺物が少量出土
S D 163	南北	1.4~1.6	4.1	0.1	築地雨落ち溝と思われる、S D 162の延長上であり同時期のもと考えられる、奈良時代の遺物が少量出土
S D 164	東西	0.7~1.3	26.6	0.1	坪計画線北辺から南へ1/6の位置にあり坪内区画溝の可能性、東側はS D 165と分かれる
S D 165	東西	0.4~0.7	7.7	0.1	坪計画線北辺から南へ1/6の位置にあり坪内区画溝の可能性、東側はS D 164と分かれる、奈良時代の土器が出土
S D 166	南北	0.4~0.5	8.9	0.1	奈良時代末の土器が出土、坪内の区画溝または排水溝か
S D 167	南北	0.5~0.7	8.4	0.1	坪内の区画溝または排水溝か
S D 168	南北	1.0~2.1	15.2	0.2	坪計画線西辺から東へ1/4の位置にあり坪内区画溝の可能性、S B 126・127より古い
S D 169	南北	1.4~1.8	15.4	0.3	S D 168の東側を並行、坪内区画溝の可能性、S B 126・127より古い
S D 170	東西	0.9~1.1	19.5	0.2	坪計画線北辺から南へ1/4の位置にあり坪内区画溝の可能性、平城宮式土器編年IV~V期の土器が出土
S D 171	東西	0.8~1.0	26.9	0.2	坪計画線北辺から南へ1/4の位置にあり坪内区画溝の可能性
S D 172	南北	0.9~1.0	16.1	0.2	坪計画線西辺から東へ1/4の位置にあり坪内区画溝の可能性、奈良時代末の土器が出土
S D 173	東西	0.7~1.5	14.4	0.1	坪計画線北辺から南へ1/4の位置にあり坪内区画溝の可能性
S D 174	東西	0.3~1.0	21.2	0.1	坪計画線北辺から南へ1/4の位置にあり坪内区画溝の可能性、奈良時代の土器が出土
S D 175	南北	0.3~0.7	9.8	0.1	坪計画線西辺から東へ1/4の位置にあり坪内区画溝の可能性
S D 176	東西	0.3~1.3	19.8	0.2	S D 177の北側を並行、坪内区画溝の可能性、奈良時代末の土器が出土
S D 177	東西	0.6~1.0	12.5	0.1	坪計画線北辺から南へ2/3の位置にあり坪内区画溝の可能性、S D 179に接続か、奈良時代の土器が出土
S D 178	東西	0.4~0.5	1.4	0.1	築地下暗渠、S D 166と十二・十三坪境小路東側溝と接続していた可能性
S D 179	東西	0.5~0.6	1.3	0.2	築地下暗渠、S D 177・S K 201と十二・十三坪境小路東側溝と接続していた可能性
S D 180	東西	0.3~0.4	1.9	0.1	築地下暗渠

十二坪内検出の主要な素掘りの溝一覧表

遺構番号	掘形			粹		主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	平面形・構造	内法(m)		
S E 028	隅丸長方形	東西2.5南北2.0	1.9	方形横板組隅柱留め	0.9×0.9	土師器、須恵器(佐波理模倣型)、墨書土器ほか	
S E 185	隅丸長方形	東西2.8南北3.8	2.2	(抜き取り)	不明		S E 186より新しいS B 126より古い
S E 186	隅丸長方形	東西2.8南北不明	2.0	(抜き取り)	不明		S E 185・S B 186より古い
S E 187	円形	径2.3	1.6	(素掘り)	-	土師器、須恵器	
S E 188	隅丸方形	東西1.9南北2.1	2.4	上段: 方形横板組 下段: 素掘り	0.8×0.8	土師器、須恵器(ミニチュア)	奈良時代末の土器出土
S E 189	円形	径2.7~3.0	2.9	上段: 方形横板組 下段: 素掘り	不明	土師器、須恵器、墨書土器、文字瓦、曲物ほか	奈良時代末の土器出土
S E 190	隅丸長方形	東西3.0南北3.0	2.6	上段: 方形横板組 下段: 素掘り	不明	土師器、須恵器、内、繪師、模倣、箸ほか	奈良時代の土器出土
S E 191	円形	径1.5~1.6	2.8	(素掘り)	-	土師器、須恵器、墨書土器	奈良時代後半か?

十三坪内検出井戸一覧表

遺構番号	棟方向	規模(桁行×梁間)	桁行全長(m)	梁行全長(m)	梁行柱間寸法(m)	梁行柱間寸法(m)	廂の出(m)	備考
S A101	南北	8	19.2以上		2.4等間			築地想定地上
S A102	東西	2	3.6以上		1.8等間			
S A103	東西	7	16.8		2.4等間			S B126より古い
S A104	廻・廻	東西3 南北2	東西15 南北10		廻1.5等間 廻1.5等間			S A105より古い
S A105	東西	6	10.8		1.8等間			S A104より新しい
S A106	東西	15	30.3		1.8×4間 1.1間			坪計画線北辺より南へ1/4の位置上
S A107	東西	4	9.0		1.8×1間 4×1間			坪計画線北辺より南へ1/4の位置上
S A108	東西	3	7.2		2.4等間			
S A109	南北	5以上	9.6以上		1.8×4間 4×1間			
S A110	南北	12	23.4		1.95等間			SA111・112・113より新しい、坪計画線西辺より南へ1/8の位置上
S A111	南北	5	10.5		2.1等間			SA110より古い、坪計画線西辺より南へ1/8の位置上
S A112	南北	3	8.4		2.1等間			SA110より古い、坪計画線西辺より南へ1/8の位置上
S A113	南北	5	10.5		2.1等間			SA110より古い、坪計画線西辺より南へ1/8の位置上
S A114	南北	2以上	3.6以上		1.8等間			建物の可能性あり
S A115	東西	2	3.0		1.5等間			
S A116	南北	6以上	9.0以上		1.5等間			坪計画線西辺より東へ1/4の位置上
S A117	東西	4	7.2		1.8等間			
S B008	?	2以上×1以上	3.6以上	1.8以上	1.8等間	1.8等間		
S B009	南北	2以上×3	3.6以上	1.8以上	1.8等間	1.8等間	1.8	西廂付
S B010	南北	4×2	7.2	3.6	1.8等間	1.8等間		
S B011	南北	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間		
S B012	南北	6×2	14.4	4.8	2.4等間	2.4等間		
S B013	?	2×2	3.6	3.6	1.8等間	1.8等間		
S B014	?	2以上×1以上	3.6以上	1.8以上	1.8等間	1.8等間		
S B015	東西?	3以上×1以上	5.4以上	1.8以上	1.8等間	1.8等間		
S B016	東西	3×2	6.3	3.3	2.1等間	1.65等間		
S B017	?	2以上×1以上	3.6以上	1.8以上	1.8等間	1.8等間		
S B018	?	2以上×1以上	4.2以上	2.1以上	2.1等間	2.1等間		
S B019	東西	3以上×2	5.4以上	4.2	1.8等間	2.1等間		
S B020	東西	3×3	5.4	5.4	1.8等間	1.8等間	1.8	北廂付
S B021	東西	5×4	12.0	8.4	2.4等間	2.1等間	北2.1 南2.7	南北廂付
S B022	東西	3×2	4.5	3.0	1.5等間	1.5等間		
S B023	南北	2以上×2以上	4.8以上	3.6以上	2.4等間	1.8等間		
S B024	南北	1以上×2以上	2.1以上	4.2以上	2.1等間	2.1等間		
S B025	東西	3×2	4.95	3.3	1.65等間	1.65等間		
S B026	東西	3×2	5.4	1.8	1.8等間	1.8等間		
S B027	?	3×2以上	5.4	3.6以上	1.8等間	1.8等間		
S B121	南北	2×1	3.9	1.8	1.95等間	1.8		
S B122	南北	3×2	4.95	2.5	1.65等間	2.25等間		総柱建物
S B123	南北	1	2.4		2.4			門
S B124	南北?	2以上×2	4.2以上	3.6	2.1等間	1.8等間		S B125より新しい
S B125	南北	4以上×2	7.8以上	3.0	1.95等間	1.5等間		S B124より古い
S B126	東西	5×2	13.5	4.8	2.7等間	2.4等間		SD161・162・S B127・S A103より新しい
S B127	南北	3×2	6.3	4.8	2.1等間	2.4等間		S B126より古い、SD161・162より新しい
S B128	東西	5×4	8.4	10.2	2.55等間	1.8等間	2.4	南北廂付、S B129より古い
S B129	東西	4×2	14.2	4.65	2.55等間	3.45	1.2	南廂付、S B128より新しい
S B130	南北	2×2	3.9	2.7	1.95等間	1.5-1.2		
S B131	南北	4×2	7.8	3.9	1.95等間	1.95		
S B132	南北	3×2	6.75	4.8	2.25等間	2.4等間		総柱建物
S B133	東西	3×4	6.3	9.0	2.1等間	1.95等間	2.55	南北廂付
S B134	南北	4×5	3.3	10.2	1.65等間	2.55等間	2.55	東西廂付、S B135より古い
S B135	東西	5×2	8.95	4.5	2.65-2.1	2.25等間		新柱間寸法は西から2.65-2.1-2.1、床東付建物、S B134より新しい
S B136	南北	4×3	7.2	6.15	1.8等間	1.8等間	2.55	東廂付
S B137	東西	2×2	3.6	3.0	1.8等間	1.5等間		S B138・139より古い
S B138	東西	3×2	4.95	3.6	1.65等間	1.8等間		S B139より古い、S B137より新しい
S B139	南北	3×1	4.95	3.6	1.65等間	3.6		S B137・138より新しい
S B140	東西?	2以上×2以上	3.6以上	3.6以上	1.8等間	1.8等間		
S B141	南北	3×3	7.2	6.3	2.4等間	2.1等間		
S B142	南北	3以上×2	4.5以上	4.2	1.5等間	2.1等間		総柱建物の可能性あり
S B143	南北	1	2.55		2.55			門、S B144・145より古い
S B144	南北	1	2.7		2.7			門、S B143より新しい、S B145より古い
S B145	南北	1	3.6		3.6			門、S B143・144より新しい
S B146	南北	1	2.55		2.55			門
S B147	南北	1	1.5		1.5			門
S B148	南北	2×3	3.6	3.6	1.8等間	1.2等間	1.2	西廂付、S B149より古い
S B149	南北	2×2	3.3	2.7	1.65等間	1.35等間		総柱建物、S B150より新しい
S B150	東西	2×1	3.6	2.4	1.8等間	2.4		
S B151	南北	3×1	4.95	3.6	1.65等間	3.6		
S B152	東西	2×1	3.3	1.8	1.65等間	1.8		
S B153	南北	3×1	4.95	3.6	1.65等間	3.6		
S B154	東西	3×2	7.2	4.5	1.8等間	2.25等間		
S B155	東西	4×2	8.4	3.6	2.1等間	1.8等間		
S B156	南北	5×2	12.0	4.8	2.4等間	2.4等間		
S B157	南北	3以上×2	4.5以上	3.9	1.5等間	1.95等間		
S B158	東西	4以上×2以上	10.8以上	2.7以上	2.7等間	2.7		
S B159	南北	4?×2	6.6	3.3	1.65等間	1.65等間		

十三坪内検出の建物・堀一覧表

IV 出土遺物

1 瓦類 出土した瓦類の総量は遺物整理箱42箱である。大半は丸瓦、平瓦であるが軒丸瓦17点、軒平瓦11点、文字瓦1点、埴20点がある。ここでは軒瓦、文字瓦について報告する。軒丸瓦の内訳は6134A 1点、6135A 3点、6135種別不明4点、6282G 1点、6314B 1点、形式不明7点である。軒平瓦の内訳は6663D 1点、6663F 2点、6663J 1点、6664H 1点、6671A 1点、6671種別不明1点、6691A 1点、6721I 1点、6721種別不明1点、平安以降のもの1点である。本調査と過去の十三坪内の調査(第208次)で出土した軒瓦を出土場所別にまとめたものが別表である。

軒丸瓦総量は少ないのであるが、十三坪内でこれまで出土した軒丸瓦のなかでは、6135型式のものが軒丸瓦全体の64%と多数を占めることがわかる。また、周辺の十二・十三坪境小路や十二坪内部では6135型式が全く出土していない。これらのことから、十三坪内では6135型式の軒丸瓦が主体的に用いられた建物があった可能性が指摘できよう。文字瓦はS E 189枠内から出土した。平瓦の凹面に「真依」の刻印がある。刻印「真依」には4種類²⁾あることが知られているが、今回の出土例はK J 12Bである。(原田憲二郎)

軒丸瓦	十二・十三坪境小路東側溝	十二・十三坪境小路西側溝	十三坪内部	十二坪内部	出土場所不明	全体
6134A		1				1
6135A			3			3
6135種別不明			4			4
6282G				1		1
6314B		1				1
形式不明	2		3	3		8
平安以降			1			1

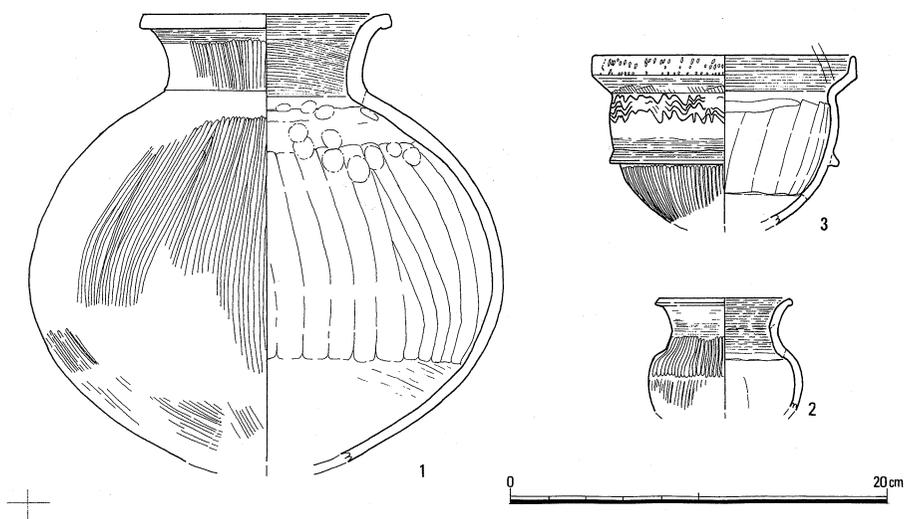
平城京左京四条四坊十二
・十三坪出土軒瓦内訳表

軒平瓦	十二・十三坪境小路東側溝	十二・十三坪境小路西側溝	十三坪内部	十二坪内部	出土場所不明	全体
6663D	1					1
6663F			3			3
6663J					1	1
6664H			1			1
6671A			2			2
6671種別不明			1			1
6691A			1			1
6721I			1			1
6721種別不明		1				1
平安以降					1	1

2 土器類 ここでは第331・335・339次調査で出土した分について述べる。出土した主な土器類には、弥生時代後期の弥生土器と奈良時代の土師器・須恵器・黒色土器がある。

(1)弥生土器 井戸S E 29から出土した土器について記す。器種は、甕、壺(1・2)、鉢、手焙形土器(3)がある。

甕や鉢は、図示していないが、体部外面にタタキ目が残るものとハケメ調整が施されているものがみられる。壺には大型のものと小型のものがある。1は大型のもので、口縁へ体部外面が縦方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。内面は口縁部が横方向のナデ調整、体部が指による縦方向のナデ調整で仕上げられている。頸部内面には、口縁部と体部の接合痕がみられる。2は小型のもので、外面は口縁部が横方向のナデ調整、体部が縦方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。内面は、口縁部が横方向のナデ調整、体部が縦

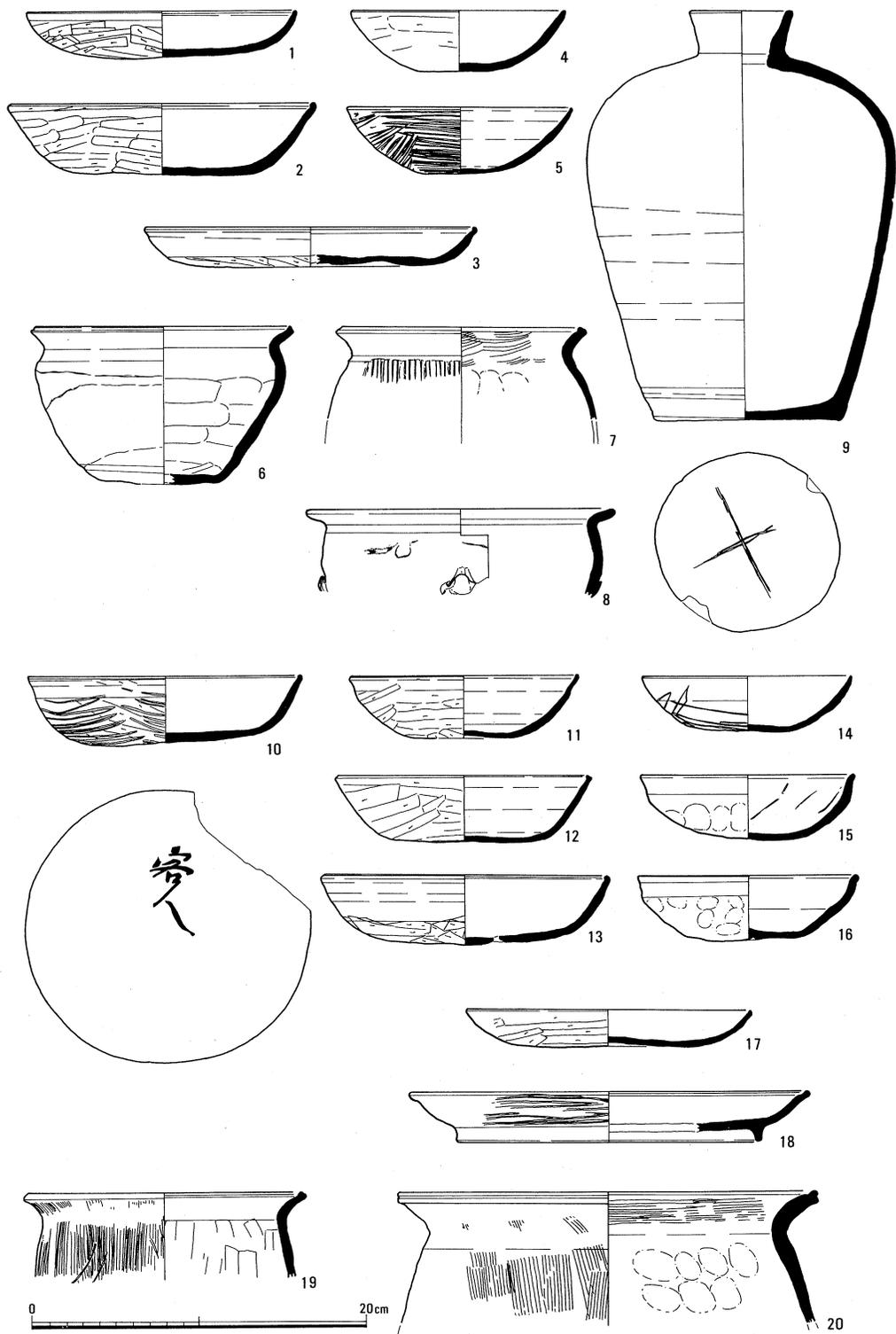


井戸S E 29出土土器 (1/4)

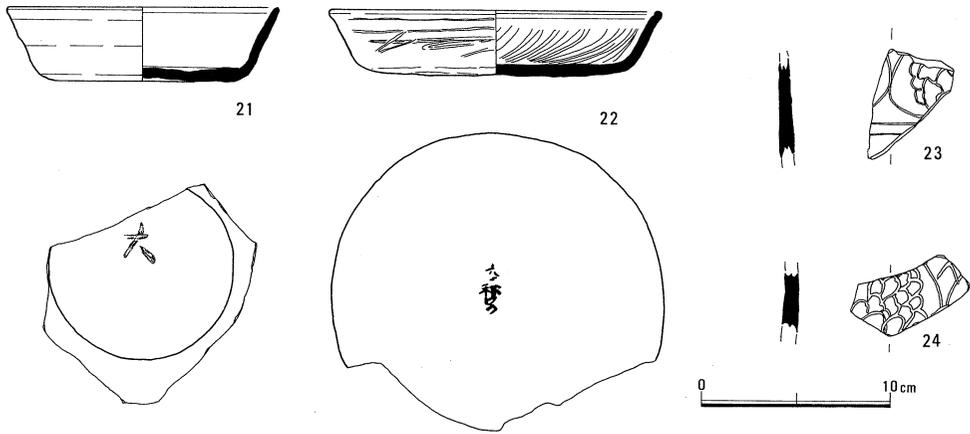
方向のナデ調整で仕上げられている。頸部内面には、口縁部と体部の接合痕がみられる。3は手焙形土器で、口縁部外面に列点文が、頸部内面に櫛描波状文がそれぞれ施されている。外面は、体部中央にある突帯より上が横方向のナデ調整、それより下が縦方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。内面は、全体にナデ調整で仕上げられているが、体部では縦方向のヘラケズリ成形痕が残る。

これらの土器は、器種組成や器形の特徴から、畿内第V様式でも新しい様相を示すものである。
(安井宣也)

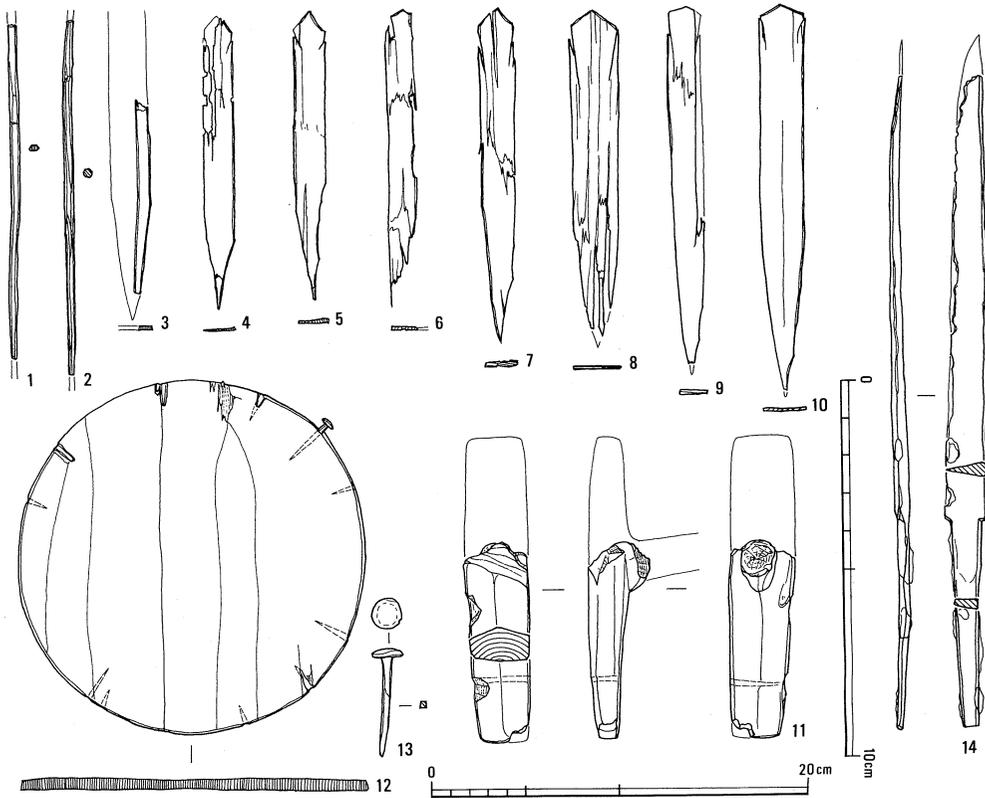
(2)奈良時代土器 1～9はS E 190枠内出土のもので、土師器(1～8)、須恵器(9)の他、黒色土器がある。また、土師器の方が須恵器より量的に多い。器種には土師器は杯A(2)、皿A(1・3)、壺B(6・8)、甕A(7)の他に高杯がある。須恵器は把手のない壺N(9)の他に杯Aがある。土師器食器類のほとんどがc手法で調整しており、ミガキを施すものもある。3の皿Aはb手法で調整している。これらの土器は南都I期中段階(8世紀末～9世紀初³⁾)のものである。10～20はS E 189枠内出土のものである。図示した土師器の他に少量の須恵器が出土している。土師器の器種には、杯A(10・12・13)、皿A(17)、皿B(18)、碗A(11・14)、碗C(15・16)、甕A(19・20)がある。土師器食器類の調整はc手法が多く、ミガキをもつものもある。10には底部外面に「客人」の墨書がある。これらは南都I期中段階(8世紀末～9世紀初³⁾)のものである。23はS D 172、24は十三坪北辺部の遺物包含層出土の須恵器壺類の破片で、同じ様な線刻があり同一個体の可能性がある。22はS E 191出土の土師器杯Aで底部外面に「大麻呂」の墨書がある。21、23、24は相伴遺物が細片ばかりで時期は不明である。22は他に土師器皿A、甕A、壺B、須恵器杯A、平瓶、甕があり、奈良時代中頃のものと思われる。
(細川富貴子)



S E189・190出土土器（1／4）



SD165・SE191・SD172及び十三坪北辺部遺物包含層出土土器（1/4）



井戸SE190出土木製品（1/4）・金属製品（1/2）

3 木・金属・石製品 ここでは第331・335・339次調査で出土した分について述べる。

木製品 箸、斎串、檜扇、横櫛、横斧、曲物、容器蓋、棒状木製品、杓子などが井戸SE190から出土した。1・2は箸で両端を欠くが、表面は丁寧に削られている。3～10は斎串である。いずれも圭頭状の上端左右に一条の切込みをもつものと考えられる。側辺は丁寧に削られるが、表裏には割裂き痕をとどめている。11は横斧で茎部の基部と柄を欠損

する。着装部は両側から削ってやや細くなっている。先端から3.5cmのところに鉄斧の装着痕が残る。12は曲物底板で、径18.3cm、厚さ0.5cmある。側面6ヶ所に木釘痕跡が、4ヶ所に銅鋌留め痕跡があり、うち1ヶ所に頭が円形の銅鋌が残る。銅鋌は後の補強であろう。

金属製品 鉄釘、刀子、鉄滓、銅鋌、鉞尾がある。13は銅鋌で曲物底板(12)に使用されていたものであろう。14は刀子で木質部分を欠損する。刀身は刃先の一部を欠損するがほぼ完形である。残存長17.3cm、刃幅1.1cm、茎長5.5cm、茎幅0.8cmである。

銅 銭 十二坪内の井戸S E 66の井戸枠内最下層から和銅開珎が1点出土した。

石 器 発掘区内の遺物包含層から安山岩製の石器が出土した。有茎尖頭器1点、石鏃2点、スクレイパー3点、楔形石器6点、剝片25点がある。有茎尖頭器は上半部と逆刺を欠損しているが、「柳又型」であり縄文時代草創期のものであろう。(篠原豊一)

V まとめ

条坊関連遺構の位置 今回の報告分も含め、十三坪周辺における発掘調査で検出した条坊関連遺構の国土方眼上における位置は下表の通りである。

条坊関連遺構名	調査回数	X座標	Y座標
東四坊大路東側溝心	第168次	-146,860.00	-16,449.55
東四坊大路道路心	第168次	-146,858.75	-16,457.78
東四坊大路西側溝心	第168次	-146,857.50	-16,466.00
左京四条四坊十二・十三坪境小路東側溝心	第335次	-147,032.00	-16,585.60
左京四条四坊十二・十三坪境小路道路心	第335次	-147,031.00	-16,589.00
左京四条四坊十二・十三坪境小路西側溝心	第335次	-147,030.00	-16,592.40
四条大路南側溝心	第350次	-147,085.75	-16,656.32

平城京左京四条四坊十三坪周辺の条坊関連遺構の国土座標値一覧

左京四条四坊十二坪東辺部の遺構の様相 十二坪内において発掘区を設定できたのは、今回の調査がはじめてである。しかも全体的にみれば坪の東辺部分だけで位置的に偏った傾向があることに加え、面積的にも限られている点などの事情もあって、今回の一連の発掘調査の成果だけでは、十二坪全体の遺構の様相を把握することは到底できない。よって、ここでは坪の東辺部に限定した上で遺構の様相について少しまとめてみたい。

まず今回の調査で明らかになった事実としては、十二坪の東辺に関しては築地の雨落ち溝が2時期あり、しかも位置が異なるということである。古い時期の雨落ち溝S D 55は十二・十三坪境小路西側溝から約1.5m西にあるが、新しい時期の雨落ち溝S D 52はさらに西側に移っており、十二・十三坪境小路西側溝からは約4.5m隔てた所にある。こうした雨落ち溝の位置の変遷が如何なる理由で生じたのかについて、現段階では明確にはできないが、ひとつの手掛かりとしては、井戸S E 66の存在とその周辺の各遺構の問題がある。

井戸S E 66については排水施設と推定される敷石が施されており、周回する溝S D 53を伴っている。しかも十二・十三坪内で検出した奈良時代の井戸の中では比較的規模が大きく、井戸枠やそれに使用された枠材の状況からみても、他の井戸に比べて整備された状態にあったと思われる⁴⁾。さらに、位置的には十二坪の計画線の北辺(つまり十一・十二坪境

小路計画心)から南へ約3分の1の場所にあり、坪を区画する性格の溝と考えられるSD50・54の傍であること、また十二・十三坪境小路にも隣接した場所でもあり、その北側には門SB36が存在していて、小路からの進入が容易な時期もあったと推定できる。このようなことから、井戸SE66は公共性・利便性の高い井戸であったことがうかがわれる。

しかし一方では、井戸SE66の位置は十二坪東辺築地の古い時期の雨落ち溝SD55の延長線上にも該当する。発掘調査では両遺構の重複関係が注目されたが、結果的に溝SD55は井戸SE66の手前で途切れて貫流していないことが判明した。他方、溝SD55が途切れた場所から西へ溝SD50が延びることも確認された。この溝は、前記のように位置的にみて坪内を区画する性格の溝でもあった可能性が高い。また溝SD55が途切れる場所から東へ延び十二・十三坪境小路西側溝SD1061と接続する暗渠SD60・61が存在している。

こうした状況からみて、雨落ち溝SD55が機能していた時期の宅地内の排水は、SD55に流入して井戸SE66の手前に至り、坪内区画溝SD50を流れてきた排水とも合流するが、そこから坪外に排出する経路としては暗渠SD60か61だけであったと考えられる。

次に、新たな雨落ち溝SD52の時期の排水経路について検証すると、前述の区画溝SD50は既に廃絶しており、また溝SD52と暗渠SD60・61が接続していた蓋然性は低い。ところが溝SD52を位置的に幾分西側へ遷した結果、井戸SE66付近では溝の幅員を若干狭めることによって、SE66をかわして北側へ貫流させることが可能となった模様で、当該期の十二坪東辺部の排水は、溝SD52を経て北流し坪の北辺部へ至っていたと思われる。

井戸SE66が比較的長期間使用されていたのは、前述のような井戸の公共性・利便性の良さがひとつの要因と思われる。しかしながら一方では、その位置ゆえに雨落ち溝の貫流を遮り、宅地内の排水に関しては結果的には障害となっていた可能性も想定される。これらの点から十二坪内では井戸SE66の機能を存続させた上で効率の良い排水を図るため、かかる雨落ち溝の位置の変遷があった可能性も考えられる。

左京四条四坊十三坪の遺構の様相 十三坪では全体の四割について発掘区を設定できたこともあり、同坪内の状況についてはある程度の知見が得られる結果となった。

まず、十三坪内は基本的には一坪全体で利用されていた時期はなく、むしろ複数の部分に区画され利用されていたことが判る。その根拠としては次頁の図に示しているように、溝や塀などの区画施設が坪内を縦横に区切るように存在していることが挙げられる。しかも、それらの内の大半は坪計画線間の何分の1かの場所に位置している状況から、こうした区画分割が宅地の造営当初からある程度計画的に実施されていたこともうかがえる。

このほか、十二・十三坪境小路に面する坪の西辺部において門らしき遺構を一定の間隔で複数検出している。中にはSB143・144・145のように、同一場所で三回の建替えをしている例もある。また同坪内で検出された井戸が、坪内の各部分にはほぼ均等に散在してい



十二・十三坪内の区画施設と井戸の配置状況

る事実もある。これらは十三坪内が細分化されていたことを示す現象と言えるであろう。

以上のような区画施設や門、井戸の位置などからみる限りでは、十三坪内は南北は基本的に4等分であるが、東西は3等分の区画と4等分の区画が混在していた可能性がある。

一方で、坪内の建物の状況についてみれば、一部は攪乱等で削平されたと思われるが、棟数は他の宅地に比べて特段多い状況ではない。さらに、桁行5間以上の大規模なものは少なく、また廂付の建物も検出例の約1.5割程度に過ぎない。但し傾向としては、同一場所において同様な規模の建物を建替えをしている例が各区画内で見受けられる点や、溝や塀等の区画施設を横断して建てている建物の例が比較的少ない点が指摘できる。こうした傾向に着目して考えるならば、当坪内における上記のような宅地区分は、奈良時代を通じて余り変化していなかったと推測することも可能であろう。なお建物以外の遺構も含めて総括的に検討すると、坪内の数区画においては最大3~4時期の変遷があったと思われる。

このほかに、坪の北辺部分では遺構をほとんど検出することはできなかった。これは十三・十四坪境小路が想定される場所には現在は菩提川が西流しており、河川の氾濫等による遺構面の削平等が生じたためと推測される。(武田和哉・篠原豊一)

- 1) 奈良市教育委員会「平城京(外京)四条五坊四坪の調査 第88次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告 昭和60年度』1987 参照。
- 2) 上原真人「天平12、13年の瓦工房」『研究論集VII』奈良国立文化財研究所 1984。
- 3) 三好美穂「南都における平安時代前半期の土器の様相 -土師器の供膳形態を中心とした編年試案-」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1995』奈良市教育委員会 1996。
- 4) 平城京内で検出された奈良時代の井戸の実態については、篠原豊一「平城京の井戸とその祭祀」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1990』奈良市教育委員会 1991 を参照されたい。

(2) 平城京左京四條四坊十四坪の調査 第347-2・353-1次

I はじめに

平城京左京四條四坊十四坪においては、これまで東辺で市第164・168調査が行なわれており、東四坊大路および奈良時代の建物群を確認している。今回の2次にわたる調査は坪の西半の様相を明らかにすることを主要な目的とした。前年度からの引続きの事業として坪の北西部に第347次調査第2発掘区、今年度事業として坪の南西部に第353次調査第1発掘区を設けた。両調査区は接しており、遺跡の性格上から両調査成果を合わせて報告する。

調査次数	調査地	面積	調査期間	主要検出遺構
第164次	三条本町1他	1,500m	S 63. 9 / 26~11 / 30	東四坊大路 掘立柱建物5棟 井戸1基
第168次	三条本町300他	2,200m	S 63. 12 / 5 ~ H 1. 2 / 28	東四坊大路 掘立柱建物13棟 井戸3基

調査次数一覧表

II 調査地の層相

調査地は一部宅地造成された場所を除いて水田である。したがって、水田面の高さにもよるが、一様に表土下0.1~1.0mまでは作土が堆積している。作土の下底の標高は全域的に63.0m前後である。第347次調査第2発掘区では、西半で作土の下に明灰色砂質土が0.1m前後堆積しているが、東半にはほとんど認められない。この下に暗灰褐色土が0.2m前後堆積している。色調は場所によって若干異なるが、この層には奈良時代の土器片が含まれ、この層の上から掘り込まれている遺構があることから奈良時代の整地層と考えられる。この直下が黄灰色粘土もしくは砂質土の地山となる。地山上面の標高は63.0~62.6mで北東から南西へ緩やかに下っている。第353次調査第1発掘区でもほぼ同様な状況であるが、整地層は北半のみに認められ、その範囲は地山が掘り込まれている。北半整地部分では地山上面の標高は62.5m前後であるが、南半は62.8m前後で、作土直下もしくは茶灰色砂質シルトを0.1m程度挟んで地山となっている。地山の層相は主に黄白色から橙色の砂質土またはシルトであり、特に調査区の南半を東西に横切る菩提川の旧河道以南ではマンガン粒を含む硬い橙褐色シルトとなっている。

III 検出遺構

遺構検出面は第353次調査第1発掘区北半のみ整地層上面と地山上面であり、それ以外は全て地山上面である。検出遺構は主なものとして奈良時代の坪内道路4条および側溝、掘立柱建物51棟、掘立柱塀8条、井戸10基、土坑9、土器埋納土坑3などがある。なお、遺構番号については市第164・168次調査から継続して付す。

坪内道路 S F 34~37・道路側溝 S D 38~44 S F 34は南北方向の道路で、ほぼ坪の東西1/2に位置する。検出部の北半は西へ振れており、両側溝は北に向かって幅が広がっている。両側溝の心々間距離は2.5m前後で、道路心の座標値は X = -146,855.0、Y = -16,5

27.4である。S F 35は東西方向の道路で、坪の南北1/2に位置する。両側溝の心々間距離は2.0m前後で、道路心の座標値は $X = -146,878.6$ 、 $Y = -16,563.0$ である。S F 34との交差点は不明であるが、おそらく両者は接続しているものと考えられ、これらによって坪が大きく4分割されていた可能性が高い。そして4等分されたうちの北西1/4坪のさらに東西1/2の位置にS F 36がある。両側溝の心々間距離は2.0~2.5mで、道路心の座標値は $X = -146,865.0$ 、 $Y = -16,555.8$ である。そしてさらにS F 36によって1/8坪に区画された北西隅の宅地は、その宅地内の南から南北1/3の位置に東西方向のS F 37があり、最小1/24坪に区割りされた宅地が存在している。S F 37は北側溝が新しい溝に壊されているため、本来の道路幅員は不明であるが、検出路面幅は1.5m前後で他の坪内道路と大差ないことから、道路心の座標値は $Y = -16,565.0$ で概ね $X = -146,858.5$ となろう。

以上の坪内道路によって坪北半は少なくとも $1/8 \cdot 1/12 \cdot 1/24$ 坪の3つの宅地割りが確認でき、東半および南半(1/2か1/4)の宅地割りと合わせて5つの宅地割りが確認できた。なお、坪東半の北から南北1/4の位置に比較的深い東西溝がS D 38と接続して東へ延びている。他の東西素掘り溝との違いが明確にできなかったため、坪の区画施設とは判断できなかったが、あるいは坪北東部もさらに南北に宅地割りされていた可能性があることを示唆しておきたい。

掘立柱建物 S B 45~95・掘立柱塀 S A 96~103 概要については一覧表にまとめた。建物群は宅地割りごとにまとまっており、それぞれの宅地内で建替えが行なわれている。

坪の東半にあたる部分は、第347次調査第2発掘区東端でわずかに認められるだけである。建物は2棟で、S B 38は坪内道路より新しい。坪北西1/4坪はさらに東半1/8坪と北西1/12坪、南西1/24坪に分けられる。1/8坪宅地内には建物18棟、塀4条があり、建物配置は少なくとも4時期の変遷が考えられる。最も大きな建物S B 47は内部に甕の据付け痕跡が10カ所認められる。またS B 60は宅地割り以前の建物と考えられる。1/12坪宅地には建物8棟がある。重複関係から3時期以上の建替えが認められる。1/24坪宅地には建物6棟がある。やはり3時期以上の建替えがある。S B 74内部には甕の据付け痕跡と思われる土坑が認められる。南半の宅地は、建物配置からみて、1/4坪利用だった可能性が高い。建物17棟、塀4条があり、建物配置は4時期以上の変遷が考えられる。S B 81とS B 82、S B 91とS B 92は同規模で同様な建物であり、S B 81・S B 91→S B 82・S B 92と建替えられたものと思われる。

全体的に、それぞれの宅地の東西中心軸上に中心建物となる東西棟を配し、その脇に南北棟を配するのを基本としている。東西棟は南北に2棟以上並ぶ場合もあり、坪内道路による宅地割り以前・以後の建物もいくつか存在しているようである。塀は特に宅地を大きく区画するものは認められず、宅地内の空間を分割するものようである。

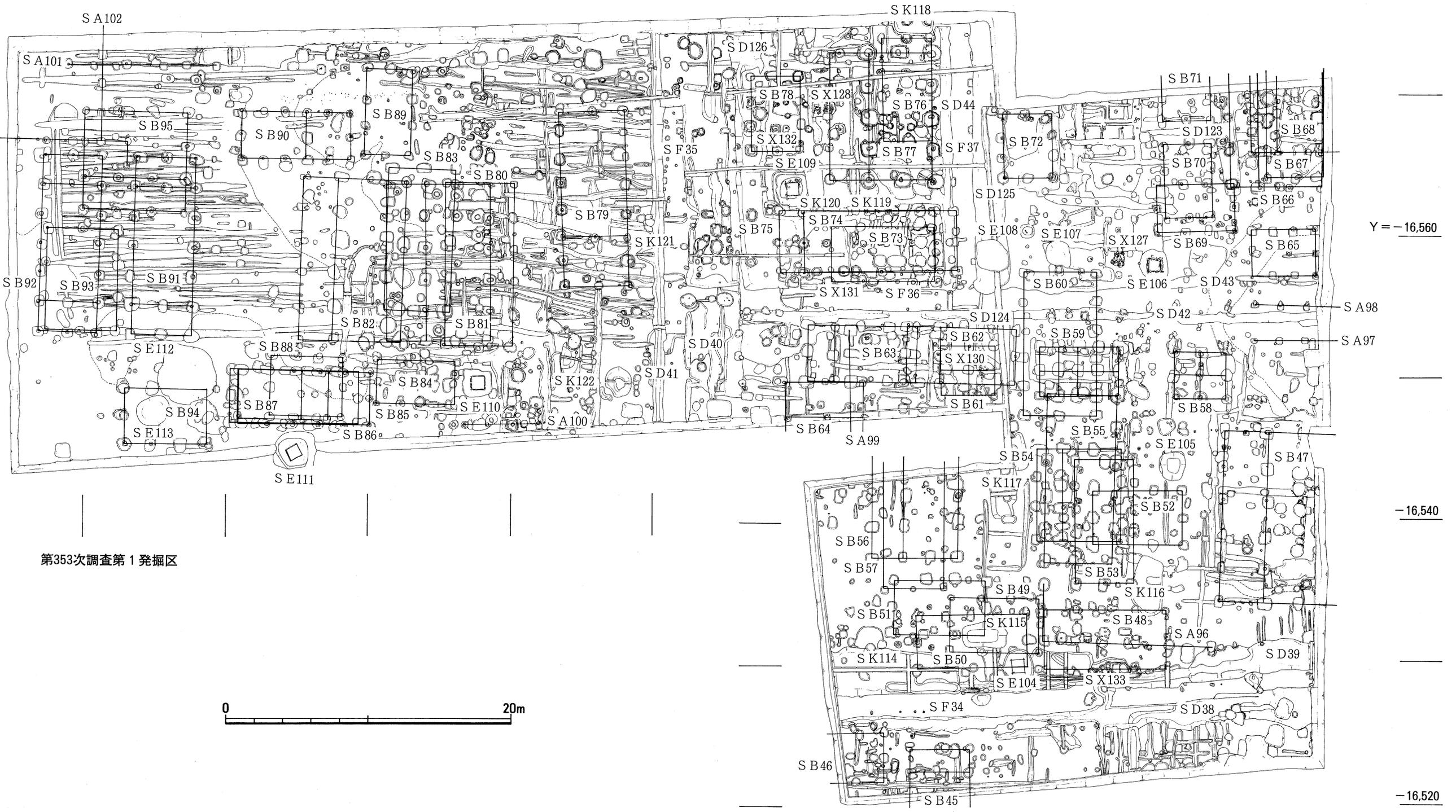
X = -146,920

-146,900

-146,880

-146,860

-146,840



第353次調査第1発掘区

第347次調査第2発掘区

遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廂の出 (m)	備考
S B 45	東西	2以上×2	3.0以上	4.2(14)	1.5等間	2.1等間		総柱建物の可能性あり
S B 46	南北	1以上×2	2.1以上	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		S D38より新
S B 47	東西	5×2以上	12.0(40)	5.4以上	2.4等間	2.4	南3.0	甕据付痕跡10ヶ所
S B 48	南北	4×2	8.7(29)	4.2(14)	2.1-2.4-2.1-2.1	2.1等間		S A96より古
S B 49	南北	3×2	6.3(21)	3.9(13)	2.1等間	1.8-2.1		S E104より古
S B 50	南北	4×2	7.8(26)	3.6(12)	2.1-1.8-1.8-2.1	1.8等間		S E104、S K114より古
S B 51	南北	3×2	6.3(21)	3.9(13)	2.1等間	1.95等間		S K115より古
S B 52	南北	3×2	6.3(21)	3.9(13)	2.1等間	1.95等間		S B54より古
S B 53	東西	5×2	9.0(30)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		S B55より古
S B 54	東西	3×3	6.3(21)	6.0(20)	2.1等間	2.1等間	南1.8	S B52より新、S B55より古
S B 55	東西	5×2	12.0(40)	4.8(16)	2.4等間	2.4等間		S B53・54・59・60より新
S B 56	東西	2以上×3	4.2以上	6.3(21)	2.1等間	2.1等間	南2.1	
S B 57	東西	3以上×2	8.1以上	4.2(14)	2.7等間	2.1等間		
S B 58	南北	2×2	3.6(12)	3.3(11)	1.8等間	1.65等間		総柱建物
S B 59	南北	4×2	5.7(19)	3.6(12)	1.5-1.5-1.5-1.2	1.8等間		総柱建物
S B 60	東西	5×2	10.0	5.0	2.0等間	2.5等間		
S B 61		2×2	3.6(12)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		総柱建物
S B 62	南北	4×2	7.8(26)	4.2(14)	1.8-1.8-1.8-2.4	2.1等間		南1間目間仕切り、S B61・63より新
S B 63	南北	4×2	7.8(26)	4.2(14)	19.5等間	2.1等間		南1間目間仕切り、S B42・S B62より古
S B 64	南北	2×1以上	5.7(19)	2.4以上	2.7-3.0	2.4		総柱建物の可能性あり
S B 65	南北	3×2	4.5(15)	3.3(11)	1.5等間	1.65等間		S D43より古
S B 66	東西	2以上×3	4.8以上	6.3(12)	2.4等間	2.1等間	南2.1	S B67・69・S D123より新
S B 67	東西	3以上×2	6.3以上	3.9(13)	2.1等間	1.8-2.1		S B66より古・S B68より新
S B 68	東西	3以上×2以上	4.5以上	2.4(8)	1.5等間	2.4	南1.8	S B67より古
S B 69	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S B66・S D123より古
S B 70	東西	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
S B 71	東西	1以上×2	1.8以上	3.6(12)	1.8	1.8等間		
S B 72	東西	3×2	4.5(15)	3.6(12)	1.5等間	1.8等間		S D125より新
S B 73	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S B74・S D43より新
S B 74	南北	4×2	10.8(36)	4.2(14)	2.7等間	2.1等間		S D44より新、甕据付痕跡?
S B 75	南北	4×2	10.8(36)	4.2(14)	2.7等間	2.1等間		
S B 76	東西	4×2	7.5(23)	3.6(12)	2.1-1.8-1.8-1.8	1.8等間		西1間目間仕切り、S B77より古
S B 77	東西	4×3	9.0(30)	7.5(25)	2.25等間	2.4-2.1	南3.0	S B76より新
S B 78	東西	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S D125より新
S B 79	東西	7×2	12.6(42)	4.8(16)	1.8等間	2.4等間		東1間目間仕切り
S B 80	東西	5×2	11.5	4.8(16)	2.3等間	2.4等間		S B81・83より古
S B 81	東西	5×3	11.25	7.5(25)	2.25等間	2.4-2.1	南3.0	S B80より新、S B82・83より古
S B 82	東西	5×3	11.25	6.9(23)	2.25等間	2.4-2.1	南2.4	S B81より新
S B 83	東西	4×2	9.9(33)	4.8(16)	2.4-2.4-2.7-2.4	2.4等間		S B80・81より新
S B 84	南北	3×2	5.7(19)	3.0(15)	1.8-2.1-1.8	1.5等間		
S B 85	南北	5×2	9.0(30)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S B86・87より新、S B88より古
S B 86	南北	5×2	9.0(30)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		S B87より新、S B85・88より古
S B 87	南北	3×2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		S B58・86・88より古
S B 88	南北	3×2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		S B85・86・87より新
S B 89	東西	3×2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		
S B 90	南北	5×2	7.8(26)	3.6(12)	1.8-1.5-1.5-1.5	1.8等間		北2間目間仕切り
S B 91	東西	6×2	12.6(42)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		東西各1間目間仕切り
S B 92	東西	6×2	12.6(42)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		東西各1間目間仕切り、S B93より新
S B 93	東西	3×2	7.2(14)	5.4(18)	2.4等間	2.7等間		S B92より古
S B 94	南北	3×2	6.3(21)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		S E112より古
S B 95	南北	3×3	7.2(24)	7.2(24)	2.4等間	2.4等間	東2.4	
S A96	南北	4×2	12.0(40)	4.2(14)	3.0等間	2.1等間		南端で西へ曲がる
S A97	南北	2以上	3.6以上		1.8等間			
S A98	南北	2以上	3.6以上		1.8等間			
S A99	東西	3以上	5.4以上		1.8等間			
S A100	南北	3	5.4(18)		1.8等間			
S A101	南北	5	10.5(35)		2.1-2.1-2.1-1.8			
S A102	東西	3以上	6.3以上		2.1等間			S A103と接続
S A103	南北	4以上×1	7.8以上	1.8(6)	1.95等間	1.8		北端で東へ曲がる

建物・堀一覧表

遺構番号	掘 型			枿			主要出土遺物	備 考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	平面形・構造	内法 (m)	水溜・ 濾過装置等		
SE104	楕円形	東西 2.2 南北 2.0	1.2	方形横板組	0.9 × 0.9		桃の種	S B49より新 裏込め下底に礫
SE105	隅丸方形	東西 1.9 南北 1.7	1.0				墨書土器 製塩土器	枿抜き取り 埋土に炭層あり
SE106	不正円形	東西 1.9 南北 2.0	1.5	方形縦板組 横棧留	0.8 × 0.8		三彩・製塩土器 桃の種	
SE107	円形	直径 1.8						枿抜き取り
SE108	隅丸方形	東西 2.1 南北 2.1	1.3		0.85 × 0.85		製塩土器	枿抜き取り
SE109	隅丸方形	東西 2.2 南北 2.2	2.3	方形縦板組 隅柱横棧留	0.95 × 0.95		鉄釘	裏込めに円礫多し S D120より新
SE110	隅丸方形	東西 2.0 南北 2.1	10.1	方形縦板組 隅柱横棧留	0.8 × 0.8		ミニチュア土器・刀の柄・ 斎串・箸	枿材は横板組(井籠 組)井戸枿材の転用
SE111	円形	直径 2.8	1.3	方形縦板組?			箸・曲物底板 桃種入り小壺	最下段の横棧のみ残存 主軸が45° 振れる
SE112	円形	直径 4.0	2.3				製塩土器・刀子の柄・ 鉄釘	枿抜き取り。円形縦 板組の可能性あり。
SE113	円形	直径 2.4	0.7					枿抜き取り。剝抜 きのある柱あり。

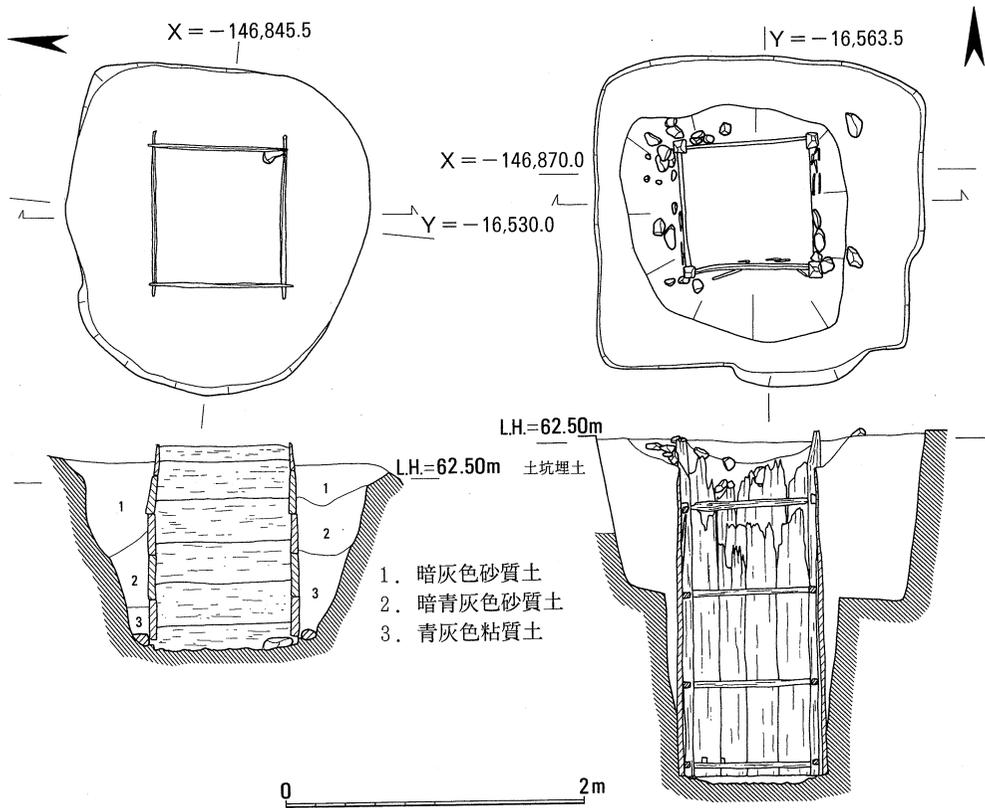
井戸一覧表

井戸SE104~113 概要については一覧表にまとめた。このうち最も古いと思われるものはSE111で、8世紀中頃の土器が多く出土した。下底の横棧のみが残存するが、四隅がそれぞれ東西南北に位置し、他の井戸枿と45°向きが異なっている。SE112は枿が抜き取られていたが、埋土から楔が数本出土しており、円形縦板組もしくは一木半割削抜きの井戸であったと考えられる。各宅地内には1基以上の井戸があり、枿を残しているものは各1基ずつのみ認められる。このことは、各宅地内において1時期に使用された井戸が1基のみであり、宅地内の建物建替えなどによって井戸が移設もしくは同時に作り替えが行なわれるたびに、枿材が再利用されていったことを推測させる。そして各宅地内に1基ずつ存在する、枿材ごと廃棄された井戸は、その後その宅地の単位が大幅に変更されたか、居住空間として用いられなくなったことを示すと考えることもできる。

土坑SK114~122 SK114はSF34の南端西脇に掘られた、東西約3.0m、南北8.5m以上、深さ0.1~0.2mの平面長方形の土坑。さらに南へ続き、溝状になると推測される。SD39より新しい。SK115は東西1.5m、南北3.0mの平面長方形の土坑。底部北半はさらに一回り小さな掘形で深くなっており、最深部で深さ約0.65m。SK116は長径4.0m、短径2.0m、深さ0.2mの平面楕円形の土坑。SK117は東西4.0m以上、南北2.0m、深さ0.1~0.15mの平面長方形の土坑で、さらに西に続く。埋土から奈良三彩の獣脚が出土した。以上は全て建物より新しい時期のものと考えられるが、性格は不明である。SK118は東西1.0m以上、南北2.5m、深さ約0.3mの平面隅丸方形の土坑になると考えられる。埋土から、墨

書で蓮華の描かれた須恵器杯蓋が出土した。SK119は東西約2.5m、南北約2.0m、深さ約0.3mの平面台形状の土坑。埋土はほぼ均等な厚さで5つの層が水平に堆積している。最下層は炭層で、壁面から底面にかけて土坑の内面を覆っている。南北の壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平らで、断面は長方形を呈する。一見窯跡のようであるが、埋土に遺物がほとんどなく、あるいは炉などの防湿施設とも考えられる。SK120は東西約2.8m、南北約4.0m、深さ0.7mの平面長方形の土坑。埋土は小礫を多く含み、遺物を含まない。SD126より新しく、SE109より古い。SK121は東西約1.0m、南北1.3m以上の平面楕円形状の土坑で、北端はSD41によって壊されている。底面は北へむかって下っており、最深部は深さ0.15mでSD41の底とほぼ同じになる。埋土に炭が混じり、土器片が多く含まれることから、ゴミ処理用の土坑と考えられる。SK122は東西2.0m、南北1.3m、深さ0.5mの平面隅丸長方形の土坑。南辺に偏って急激に深く掘り込まれており、段をなす掘形となっている。これらの土坑については、現在出土遺物が整理中であるため詳細な時期・性格は不明である。

溝SD123~126 SD123は幅約1.2m、長さ7.5m以上、深さ0.2m前後の東西素掘り溝で、



井戸SE104 平面・立面図 (1/50)

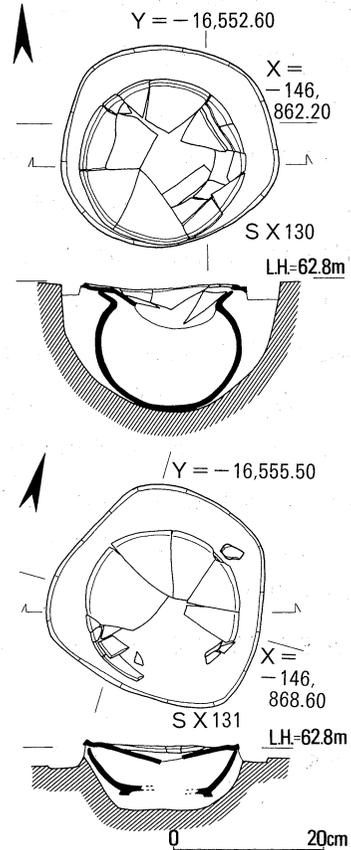
井戸SE109 平面・立面図 (1/50)

西端が広がっており、さらに西へ続く。1/2坪宅地のほぼ南北1/2の位置にあり、宅地割りのための溝の可能性はある。S D124は最大幅1.6m、長さ6.0m以上、深さ約0.1mの東西素掘り溝。幅が一定でなく、平面形は不定形であり、東端はS D42に接している。埋土上面には拳大の礫が多数散っているが、溝自体からは遊離している。土坑S K117とした遺構と一連のものとなる可能性もある。S D125は幅2.4m、長さ19.0m以上、深さ約0.3mの東西素掘り溝。坪内道路S F37の北に沿っており、S D124とは坪内道路S F36を挟んで西側に位置する。建物S B72や井戸S E108より新しく、坪内道路が無くなってからの区画施設の可能性はある。S D126は幅約2.0m、長さ15.0m以上、深さ約0.3mの東西素掘り溝。建物S B78や土坑S K120より古く、坪内道路による宅地割り以前の区画施設と考えられる。

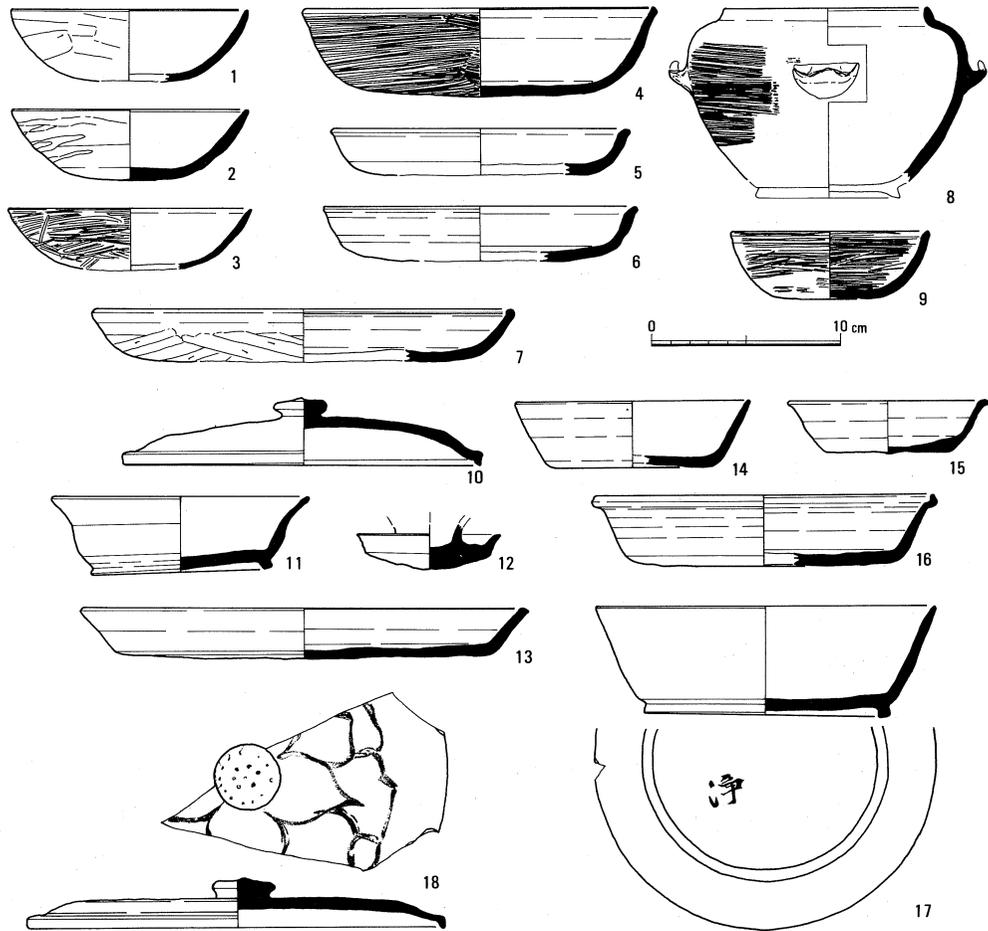
S X127~133 S X127~129は拳大の円礫と土器および瓦片の集中部である。いずれも1.0m×1.5m程度の長方形で平坦に広がっており、掘形はなく、性格は不明である。個々に若干の違いがあり、S X127・128は礫が多く、S X129は土器・瓦が多い。S X129には9世紀中頃の土器が含まれている。S X130~132は土器埋納土坑である。S X130は直径約0.23m、深さ0.13mの平面円形の掘形に、須恵器杯蓋で塞いだ土師器甕Aを納めたものである。S X131は直径約0.24m、深さ0.09mの平面円形の掘形に、須恵器杯蓋で塞いだ須恵器杯Bを納めたものである。内部には和同開珎2枚が入れられており、坪内道路S F36上に埋められていた。S X132は直径約0.14m、深さ0.08mの平面円形の掘形に土師器甕Aを納めたもので、整地層の上から掘り込まれている。これらの土器内の土壌は未分析であるが、特にS X131はその出土位置から、胞衣壺としての可能性が考えられる。S X133は長さ3.6m以上、幅約0.1m、厚さ約0.01mの薄板が、坪内道路S F34の西側溝S D39の西壁に沿って横向きに立てられているものである。S D39より新しく、溝の護岸用ではないと思われるが性格は不明である。

IV 出土遺物

出土遺物のほとんどは奈良時代の須恵器・土師器で、総数は第347次調査第2発掘区が整理箱94箱、第353次調査第1発掘区が同139箱である。現在整理中であるため一部についてのみ報告する。



土器埋納土坑S X130・131 平面・断面図 (1/10)



出土土器（1/4、1~8は土師器、9は黒色土器、10~18須恵器）

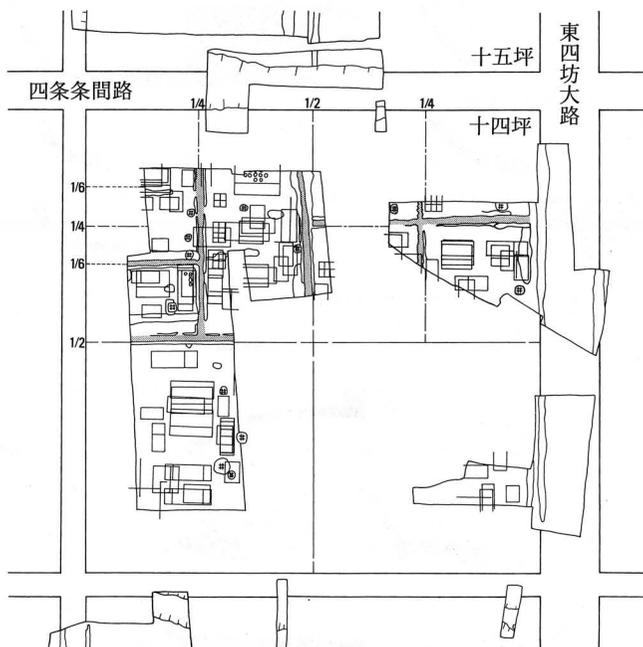
土器類は18を除きS E104から出土したものである。黒色土器碗（9）は奈良時代末のものと考えられる。18はS K118から出土した須恵器杯蓋で、蓮華を模したと思われる文様が墨書されている。この他、坪内道路の側溝からは主に8世紀後半の土器類が出土している。瓦類については、丸瓦・平瓦が少量出土しているのみである。この他井戸枠内などから、刀子の柄、斎串、箸等の木製品や帯金具、鉄釘等の金属製品が出土している。第347次調査第2発掘区では万年通寶1枚、神功開寶4枚が出土している。また両発掘区を通じて石鏃4点、他25点の安山岩製の剝片が出土している。

V まとめ

今回の調査成果として特筆すべきは、坪内道路の検出と宅地割りの様相である。当坪内は道路によって宅地が少なくとも4通りの大きさに区画されていたことが確認できたが、そこにはいくつかの問題点もある。ひとつは最小の宅地が1/24に区画されていることである。これまでの発掘調査や文献史料から、平城京での宅地1/32坪を最小単位としており、

その次に小さい宅地はその倍の1/16坪が知られている。1/24坪宅地として明確なものは現在知られていないようであり、当時の宅地班給制度を考えるうえでも貴重な例と言えるが、これが特殊なものか、ある程度普遍的なものかは類例の増加を待って検討しなければならないだろう。

さらに問題となる点は、坪内道路の多さである。今回の状況を鑑みて、第168次調査の遺構検出状態を見



十四坪遺構概念図 (1/2,000)

てみると、同様に地山が带状に削り残された部分が認められる。参考までにそれらを示したのが右上の遺構概念図である。これらが仮に宅地の区画施設だとしても、今回検出のものを含めて全てが道として機能していたかどうかには疑問が残る。遺構検出時の残存状態からは、路面であったのか土塀があったのかは判断できなかった。しかし今回検出した遺構について敢えて坪内道路とした理由は、まず1/8以下の宅地割りを土塀で区画していた例が確認されておらず、それが考えにくいこと、S F 36上に朶衣壺の可能性のある土器が埋納されていたことがあげられる。また、東四坊大路に面した坪の東半では、宅地割りの状態によっては坪内道路を必要とする場合が十分考えられる。しかも現在坪の南辺を流れる菩提川の当時の河道によっては、開門できる方向がさらに制約されていた可能性も考えられるのである。ただし、それでも西端の1/24坪宅地が道路によって区画される必要性は理解し難く、今後の検討課題とせざるをえない。

以上のような問題点は残るものの、建物や井戸の配置からみて十四坪内が区画施設によって分割されていた時期があるのは間違いのないものと考えられる。全体的に3～4時期の遺構の重複関係が確認でき、整然とした区画が行なわれていたのは半ばから後半の2時期くらいの間である。区画自体が一斉に行なわれたか随時分割されたかは遺構・遺物からは判断できなかったが、最も出土量の多い、坪を南北に2等分するS F 35の南側溝の土器は8世紀後半のもので、坪内の区画が行なわれていたのは奈良時代後半から平安京遷都までの間くらいであったと考えられよう。

(松浦五輪美・細川富貴子)

(3) 平城京左京四条四坊十五坪の調査 第318-1・3、325-2～7、347-1次

I 調査の目的

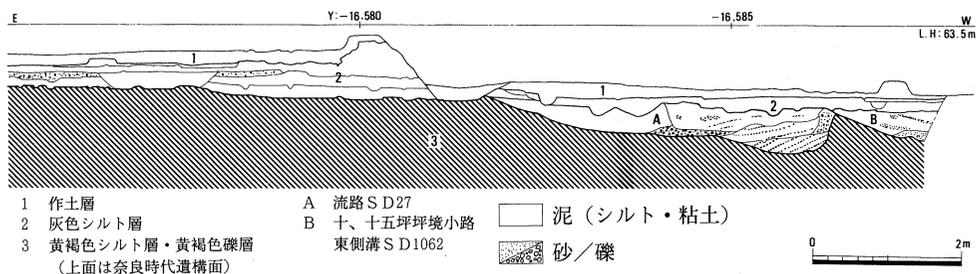
平城京左京四条四坊十五坪の調査は、市民ホール建設予定地において、十五坪西半部の宅地利用の様相の解明を主な目的として、平成3年度から平成8年度にかけて下記の表に示す発掘区を設定して実施した。今回報告する第318次調査第1・3発掘区、第325次調査第2～7発掘区、第347次調査第1発掘区は、平成6～8年度に主に十五坪西南部にあたる地域で実施したものである。

調査次数・発掘区	調査地	調査面積	調査期間	既存の概要報告
第234次	三条宮前町242-2他	500㎡	H 3・10・1～H 3・12・7	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成3年度 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度
第253次	三条宮前町242-2他	1,340㎡	H 4・6・1～H 4・9・18	
第318次	三条宮前町306	969㎡	H 6・12・5～H 7・3・7	
第325次	三条宮前町314-1他	1,284㎡	H 7・4・25～H 7・8・11	
	三条宮前町311-1他	533㎡	H 7・4・25～H 7・8・11	
	三条宮前町315-8他	25㎡	H 7・4・25～H 7・8・11	
	三条宮前町238-1他	707㎡	H 7・7・18～H 7・9・27	
	三条宮前町238-3	532㎡	H 7・10・20～H 7・12・6	
	三条宮前町238-3	309㎡	H 7・12・7～H 8・2・13	
	三条宮前町313-2他	870㎡	H 8・4・23～H 8・6・28	

平城京左京四条四坊十五坪内の調査一覧

II 調査地の地形と層相

調査地は、菩提川によって形成された扇状地の扇端部にあたり、東から西へ下る緩傾斜地となっている。現状は、水田・畑地及び旧国鉄宿舎に伴う造成地である。調査地の地層は、水田・畑地では上から作土層（厚さ0.2m）、2～3層の灰色シルト層（厚さ0.2～0.4m）があり、黄褐色シルト層や扇状地の礫州の一部である黄褐色礫層となる。黄褐色シルト層や黄褐色礫層の上面に奈良時代の遺物包含層がみられる部分もある。造成地では作土上に盛土がなされている。灰色シルト層・黄褐色シルト層の各上面には乾田が営まれていたことを示す橙色の班鉄がみられる。奈良時代の遺構面は、黄褐色シルト層と黄褐色礫層の上面（標高62.3～63.3m）である。なお、第325次調査第7発掘区では、黄褐色シルト層以下2.1m分の地層を確認しており、最下位の腐植混じりシルト層について、層中に含まれた流木片の¹⁴C年代測定と花粉・珪藻遺骸分析を行った。（付編参照）



第325次調査 第6発掘区南壁土層断面図 (1/100)

Ⅲ 検出遺構

遺構検出は、奈良時代の遺構面である黄褐色シルト層と黄褐色礫層の上面で行った。検出した遺構には、古墳時代、奈良・平安時代及び中・近世のものがある。

古墳時代の遺構 流路1条がある。流路SD27は、第325次第2・6発掘区で検出した南東から北西に流れる流路で、幅3～7m、深さ0.5mである。埋土は、上位が奈良時代の土器片と黄褐色シルトブロックを含む褐灰色シルト、下位が古墳時代中・後期の土器片を含む褐灰色砂・礫である。平城京造営の際に埋め立てられたものとみられる。

奈良・平安時代の遺構 坪境小路東側溝、掘立柱建物29棟、掘立柱門・堀18条、溝6条、井戸4基、土坑3、池状遺構2がある。重複関係から3時期以上の変遷が認められる。

条坊関連遺構 十・十五坪坪境小路東側溝SD1062は、幅3～4.2m、深さ0.2～0.3mの素掘りの溝である。溝底は北から南に向かって低くなり、その標高は61.9～62.3mである。埋土は奈良時代の瓦・土器片を含む灰色シルトである。溝心の国土座標値は、 $X = -146, 672.0$ 、 $Y = -16,587.2$ である。なお築地や雨落ち溝は、関連する遺構が検出されず不明である。また、第325次第3発掘区では四条条間路が予想されたが、後述する中世の流路SD91があり、関連する遺構は検出されなかった。

建物SB28～56、門SB59～62・69、堀SA57・58・63～68・73・74 主軸の方向や規模等については、一覧表に示すとおりである。なお一覧表には、第234・253次調査で確認した遺構で、今回の調査の結果解釈を訂正したものも記載した。

これらの遺構のうち、互いに重複して同時併存があり得ないものは下記の通りである。

先後関係がわかるもの：SB32→SB33 SB42→SB43 SB52・53→SB54

(旧→新) SA72→SB51

先後関係が不明のもの：SB29－SB31 SB31・32－SA61 SB32－SA62

SB37－SB38 SB41－SA66 SB47－SA67

SB48－SB49 SB54－SA74 SB55・56－SA61

建物には、柱筋を揃えて建てられたものがある。建物SB27・28、SB31・33・46は、いずれも東側柱列を揃えて南北に並ぶ。また、建物SB30・34も第253次調査第3発掘区で検出した建物SB22と東側柱列を揃えて南北に並ぶ。建物SB35・36は西側柱列を揃えて南北に並ぶ。建物SB37・43は北妻柱列を掘立柱建物SB39の南側柱列と揃えている。建物SB39・40は、第253次調査第1発掘区で検出した建物SB10・12と西妻柱列を、建物SB11と東妻柱列をそれぞれ揃えて南北に並ぶ。建物SB42は、第234次調査及び第253次調査第1発掘区で検出した建物SB01・08・09と東側柱列を揃えて南北に並ぶ。建物SB41・43は東側柱列を揃えて南北に並ぶ。建物SB41・43は東・西妻柱列を揃えて南北に並ぶ。

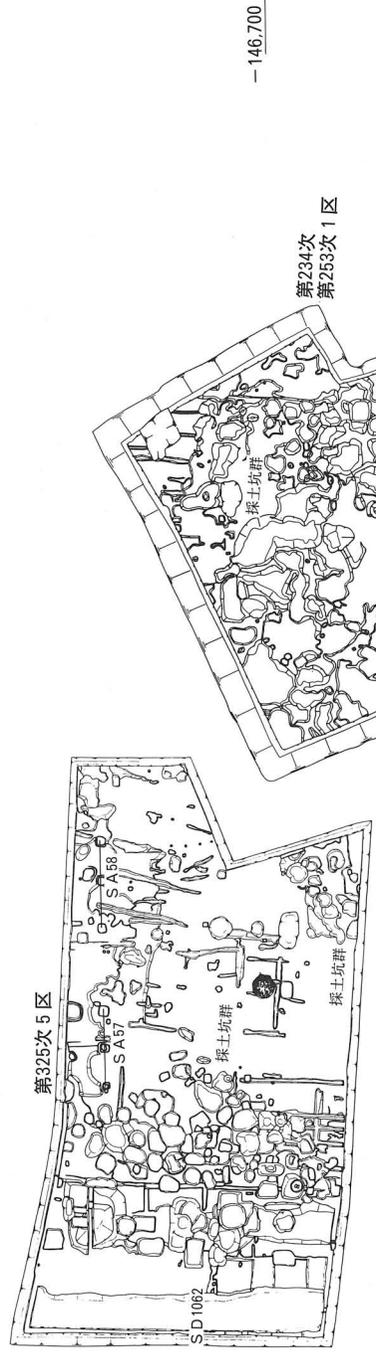
Y = -16.580

-16.560

-16.540

-16.520

X = -146.680



第325次 5区

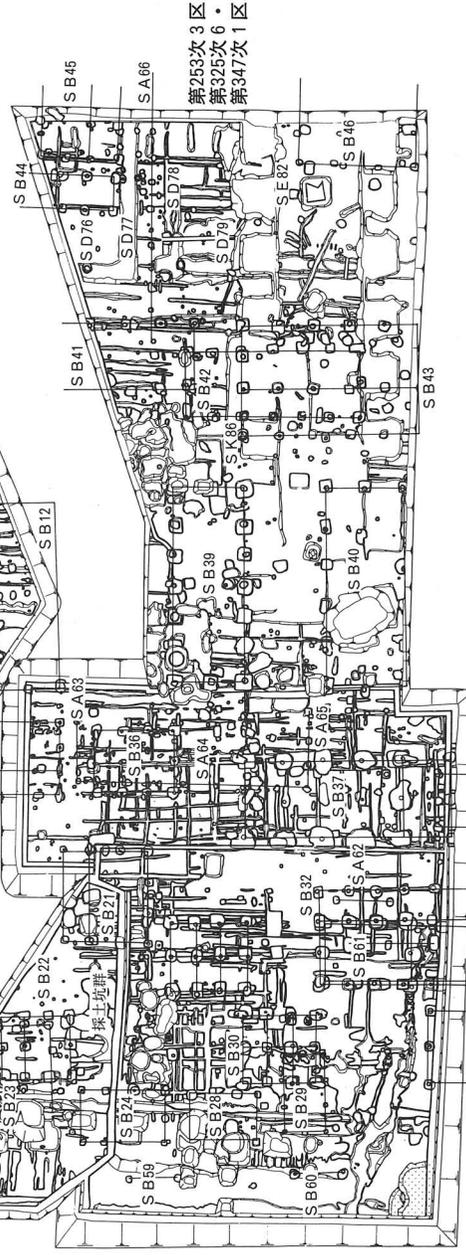


第234次
第253次 1区

-146.700

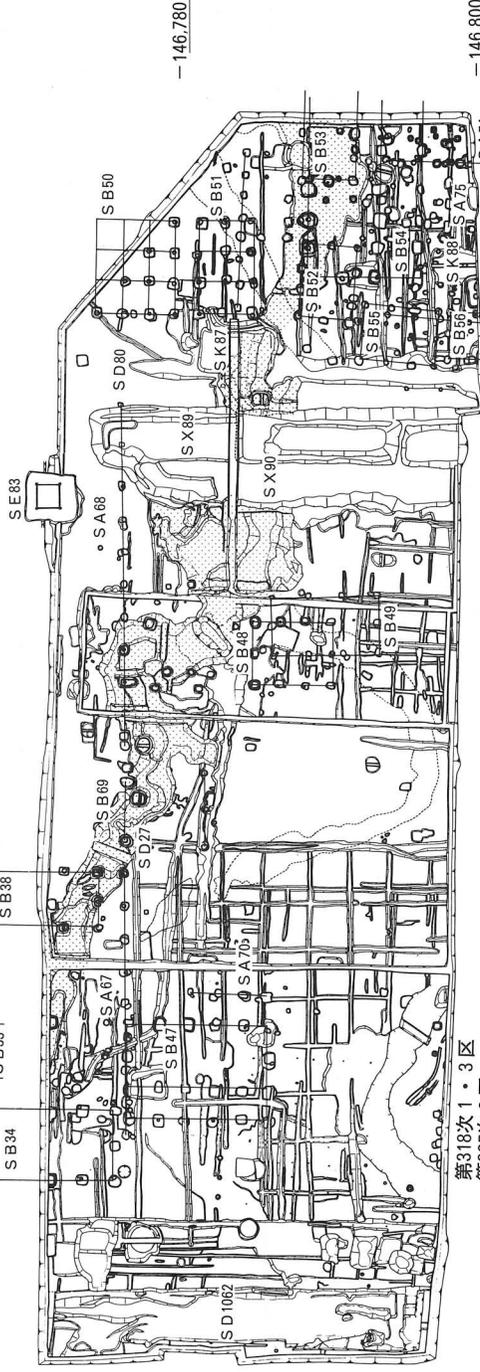
-146.720

-146.740



第253次 3区
第325次 6・7区
第347次 1区

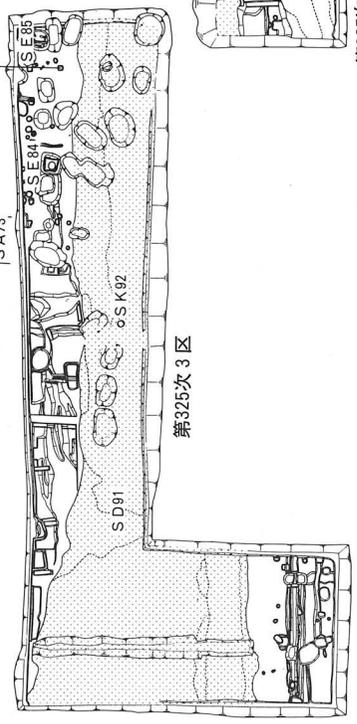
-146.760



第318次 1・3区
第325次 2区

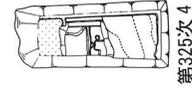
-146.780

-146.800



第325次 3区

-146.820



第325次 4区

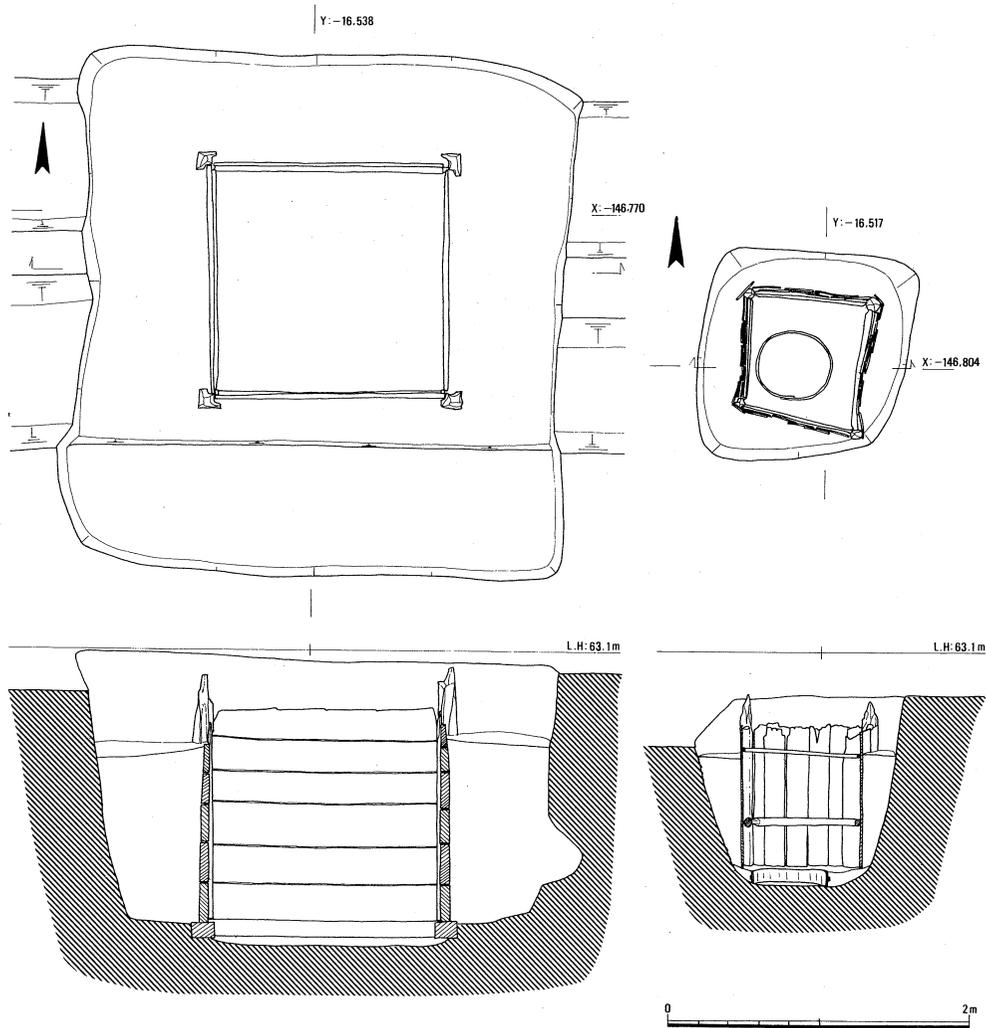
第318次調査 第1・5発掘区、第325次調査 第2～7発掘区、第347次調査 第1発掘区 遺構平面図 (1/400)

遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廂の出 (m)	備考
S B 12	東西	6 × 3	12.6(42)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間	北2.4	第325次調査で西妻柱列を確認
S B 21	東西	3 × 3	6.3(21)	3.9(13)	2.1等間	1.95等間	北1.8	旧S A 21 第325次調査成果による解釈変更
S B 24	南北	3 × 2	5.7(19)	3.6(12)	1.5-2.1-2.1	1.8等間		第325次調査で南半部を確認 一部解釈変更
S B 28	南北	3 × 2	4.5(15)	3.3(11)	1.5等間	1.65等間		
S B 29	東西	3 × 2	5.4(18)	2.7(9)	1.8等間	1.35等間		
S B 30	南北	3 × 2	4.8(16)	4.5(15)	1.5-1.8-1.5	2.25等間		総柱建物
S B 31	南北	3 × 2	5.1(17)	4.5(15)	1.8-1.8-1.5	2.25等間		総柱建物
S B 32	南北	5以上×3	7.5以上	4.2(14)	2.1+1.8×3間	2.1等間	東2.1	
S B 33	南北	5以上×2	7.5以上	3.9(13)	2.1+1.8×3間	1.95等間		S B 32より古い
S B 34	南北	(5)×2	10.8(36)	4.8(16)	(2.1×4間+2.4)	2.4等間		南2間分と北妻柱列を確認
S B 35	南北	1以上×3	1.8以上	3.3(11)		1.65等間	西1.5	
S B 36	南北	3 × 2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		
S B 37	南北	5 × 2	10.2(34)	5.1(17)	2.55等間	2.55等間	南3.0	身舎に床束あり
S B 38	南北	(4)×2	9.6(32)	3.6(12)	(2.4等間)	1.8等間		南1間分と北妻柱列を確認
S B 39	東西	6 × 2	12.9(43)	4.8(16)	2.4+2.1×5間	2.4等間		
S B 40	東西	5 × 2	13.5(45)	5.4(18)	2.7等間	2.7等間		
S B 41	南北	4以上×2	7.2以上	4.5(15)	2.4等間	2.25等間		
S B 42	南北	6 × 2	11.4(38)	4.2(14)	$\frac{1.8 \times 2 \text{間} - 2.1}{1.8 \times 2 \text{間} - 2.1}$	2.1等間		S B 41・44より古い
S B 43	南北	5 × 3	12.0(40)	4.2(14)	2.4等間	2.1等間	西3.0	
S B 44	南北	3以上×1	3.3以上	2.1(7)	1.65等間	2.1		
S B 45	東西	2以上×3	2.4以上	3.3(11)		1.65等間	南1.8	
S B 46	南北	3 × 2 以上	7.8(26)	2.1以上	3-2.4-2.4			
S B 47	南北	5 × 3	9.3(31)	4.2(14)	2.1+1.8×4間	2.1等間	西2.1	
S B 48	南北	3 × 2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		
S B 49	南北	3 × 2	7.2(24)	3.9(13)	2.4等間	1.95等間		
S B 50	東西	3 × 3	6.3(21)	5.4(18)	2.1等間	1.8等間		総柱建物
S B 51	東西	3 × 2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		総柱建物
S B 52	東西	3 × 2	4.8(16)	3.6(12)	1.5-1.8-1.5	1.8等間		S B 55より古い
S B 53	東西	3以上×2	3.0以上	3.6(12)	1.5等間	1.8等間		
S B 54	東西	5以上×3	8.7以上	4.8(16)	1.95-1.95-2.4-2.4	2.4等間	南2.7	
S B 55	南北	3 × 2	5.1(17)	3.6(12)	1.5-1.5-1.8	1.8等間		
S B 56	南北	2以上×2	1.8以上	3.0(10)		1.5等間		
S A 57	東西	2	4.8(16)		2.4等間			
S A 58	東西	2	6.0(20)		3.0等間			
S B 59	南北	1	4.2(14)					門の可能性
S B 60	南北	1	4.2(14)					門の可能性
S B 61	南北	2	7.2(24)		3.6等間			門の可能性
S A 62	南北	1	4.2(14)					
S A 63	東西	2	4.8(16)		2.4等間			
S A 64	南北	8	19.2(64)		北から2.1-2.1-2.7-2.1-2.7-2.1-2.7-2.7			S A 63・66と直交
S A 65	東西	3	6.3(21)		2.1等間			
S A 66	東西	9以上	14.4以上		西から2.1-1.5×3間-2.4-1.8×3間			
S A 67	東西	8	21.6(72)		2.7等間			
S A 68	東西	10	28.2(94)		西から2.7×8間-3.3×2間			S A 70と接続
S B 69	東西	1	4.8(16)					門の可能性
S A 70	南北	3	6.3(21)		2.1等間			
S A 71	東西	2	6.0(20)		3.0等間			
S A 72	東西	7	13.244(〇)		西から2.1×2間-1.8×5間			
S A 73	南北	4以上	7.2以上		2.4等間			
S A 74	南北	(6)	14.4(48)					
S A 75	東西	2	3.612(〇)		1.8等間			

建物・堀一覧表

遺構番号	掘形			枠			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	平面形・構造	内法 (m)	水溜・ 濾過装置等		
S E 79	隅丸方形	東西 2.0 南北 2.0	1.7	方形縦板組横 棧留の可能性	1.3 × 1.3			最下段横材のみ 残存
S E 80	隅丸方形	東西 3.2 南北 3.4	1.8	方形横板組隅 柱留	1.5 × 1.5		土器類 (須恵器、土師器) 横櫛、高串、曲物、萬年 通寶	
S E 81	隅丸方形	東西 1.4 南北 1.4	1.3	方形縦板組隅 柱横棧留	0.8 × 0.8	曲物(径0.5)	土器類 (須恵器、 土師器)	
S E 82	円形	直径 1.4	1.5	方形縦板組横 棧留	0.8 × 0.8			枠材最下位と棧材 の一部のみ残存

井戸一覧表



井戸 S E 83 (左)・84 (右) 平面・立面図 (1/50)

なお、建物S B32は建物S B31の後身建物とみられる。建物S B43の北西隅の柱穴は、後述する平安時代初頭の土坑S K86に破壊されている。塀S A68の東から2番目の柱穴は、後述する池状遺構S X89の平安時代初頭の堆積層上面から掘り込まれている。建物S B39の柱穴からは文字瓦が出土した。

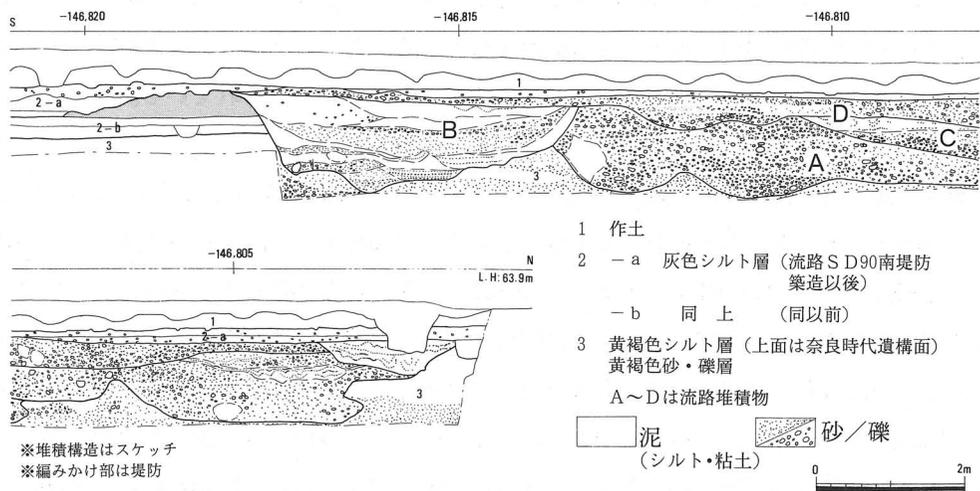
溝S D76～81 溝S D76は第347次調査第1発掘区の北東部で検出した南北方向の溝で、溝の南端部は東西方向の溝S D77の西端部とL字状に接続する。溝S D78は溝S D77の南に1.8m隔てて平行に掘削された東西方向の溝で、溝の東端は溝S D76の南延長上にある南北方向の溝S D79の北端部とL字状に接続する。溝S D80は第325次調査第2発掘区で検出した南北方向の溝で、位置は溝S D76・79の南延長上にあたる。いずれも素掘りの溝で、幅0.3～1.8m、深さ0.1～0.4mである。また、埋土は奈良時代の土器片を含む灰色シルトである。溝S D76・79・80の位置は、第168次調査等で得られた東四坊大路の道路心の西方約67mで、十五坪の東西中軸線付近にあたる。また、溝S D77・78の位置は、第199次調査で得られた十五・十六坪坪境小路の道路心の南方約67m付近で、十五坪の東西中軸線付近にあたる。溝S D77・78間の空間地は坪内道路の可能性はある。

溝S D81は、幅1.0m、深さ0.1mの素掘りの溝で、埋土中から銅製の鉸具が出土した。

井戸S E81～84 規模や構造等については、一覧表に示すとおりである。いずれの井戸も黄褐色シルト層の下の礫層まで掘り込んで作られており、礫層中の被圧地下水を取水したものとみられる。井戸S E81・84は井戸枠が抜き取られている。井戸S E82・83の井戸枠内からは奈良時代末～平安時代初頭の土器類が出土した。

土坑S K85～87 土坑S K85は、建物S B43の北西隅の柱穴を破壊して掘削された径0.8m、深さ1.2mの平面円形の土坑で、埋土は暗灰色粘質土である。埋土中から奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土した。土坑S K86は、建物S B51の西側に位置する東西3.0m、南北5.4m、深さ0.4mの平面長方形の土坑で、埋土は暗灰色シルトである。埋土中から奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土した。土坑S K87は、建物S B56の東側に位置する東西2.4m、南北3.3m以上、深さ0.3mの平面長方形の土坑である。埋土は奈良時代の土器片と炭粒を含む灰色シルトで、炭粒は下位に集中する。

池状遺構S X88・89 池状遺構S X88は、溝S D80の西側に位置する。平面長方形で、規模は東西4.5m、南北30m、深さ0.4mである。南から20mまでの底面には東西2.5m、南北10mの平面長方形の掘形が2箇所南北に並ぶ。掘形の底面からの深さは、北側が0.8m、南側が0.4mである。南端部中央には幅0.6m、深さ0.2mの南北方向の素掘りの溝が接続する。埋土は主に灰色系のシルトである。ただし、北側の掘形の下位の埋土は砂とシルトで形成されており、北から南へ水が流れたことを反映する互層状の堆積構造がみられる。位置関係を考慮すれば、当初は前述の流路S D27と接続していた可能性がある。埋土中から



第325次調査 第3発掘区西壁 流路S D90断面図 (1/100)

奈良時代半ば～平安時代初頭の土器が出土した。また、北側の掘形の底面から篋とみられる編物が出土した。池状遺構S X90は、池状遺構S X89を西側へ東西3m、南北27mにわたって拡張したものとみられる。深さは0.2mで、埋土は池状遺構S X89と同じである。南端部中央には池状遺構S X89と同様に幅0.6m、深さ0.2mの南北方向の素掘りの溝が接続する。溝内には木樋の底板が残っていた。

中・近世の遺構 流路1条、土坑と耕作に伴うとみられる素掘りの溝がある。

流路S D91 流路S D91は、第325次調査第3発掘区で検出した流路で、平城京四条条間路の推定地を東から西へ流れる。幅は発掘区西端部では15mである。埋土は主に砂と礫で、奈良時代の土器片を含む。底面は奈良時代遺構面より低い。発掘区西壁の断面では、流路内の埋積が進むにつれ次第に岸寄りを流れるようになり、最終的には埋没する過程が観察できた。堤防は南岸側で確認した。黄褐色シルトの盛土で構築されたもので、幅2.5m、高さ0.5mである。構築された際の遺構面は奈良時代遺構面上に堆積した灰色シルト層の上面である。北岸側は、発掘区東・西壁の断面観察では認められなかった。直線的に流れることや堤防が盛土で構築されていることから、人工的に掘削されたものと考えられる。流路上面で検出した土坑(S K92)からは平安時代後期の瓦器碗が出土した。

なお、土坑は主に奈良時代遺構面上に堆積した灰色シルト層上面から掘削されている。掘削が黄褐色シルト層にとどまるものとそうでないものがある。前者は採土坑とみられ、複数が重複して群在する傾向がある。後者は耕作に伴うものとみられる。(安井宣也)

IV 出土遺物

出土遺物には、縄文時代の土器・石器、古墳時代の土器、奈良時代の瓦・土器・木製品・石製品・金属製品・銭貨、中・近世の土器がある。以下主なものについて報告する。

瓦類 出土瓦類の大半は丸瓦、平瓦であるが、軒丸瓦21点、軒平瓦16点、埴4点、面戸瓦1点、熨斗瓦1点、文字瓦1点を含む。ここでは軒瓦、文字瓦について報告する。軒丸瓦の内訳は、6233A b 1点、6275



新型式軒瓦(1/4)

I 1点、6279A 2点、6282B a 1点、6282B 2点、6301A 1点、6301B 1点、6308B 1点、6314F 6点、型式不明4点、平安時代以降1点である。軒平瓦の内訳は、6652A 1点、6663A 1点、6663B 1点、6664F 1点、6667A 1点、6668A 1点、6691A 3点、6702A 1点、6721D 2点、6734A 1点、型式不明2点、新型式1点である。軒平瓦新型式は、左側部分の破片であるが、三回反転均整唐草紋の左第2、第3単位部分と思われる。唐草第3単位の主葉が界線に接続せずに巻き込み、唐草第3単位の左上に一本の遊離した支葉をもつ点が特徴的である。上下外区及び脇区には珠紋をめぐらす。顎は段顎である。平瓦部凸面に横位の縄叩き目が残る。調整は平瓦部凸面の瓦当近くと顎部を横方向にナデ、平瓦部凹面を横方向にヘラケズリする。文字瓦は建物S B 39から出土した。丸瓦の凸面玉縁近辺に「終」の刻印がある。刻印「終」にはaからgまでの7種類が知られているが、今回の出土例はcである。

本年までの十五坪周辺での調査で出土した軒瓦をまとめると別表のようになる。

十五坪内で出土した軒丸瓦の中では、6314Fが出土軒丸瓦全体の29.6%を占める。さらに6314Fは平城京内では十五坪内と十・十五坪境小路東側溝以外では確認されていない型式の軒丸瓦である。以上のことから、十五坪内では6314Fが主体的に用いられた建物があったことが指摘されよう。(原田憲二郎)

1)奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料V 瓦編5』(1977)

軒丸瓦	十・十五坪坪境小路東側溝SD	流路SD91	十五坪内部	合計
6233Ab			1	1
6275I	1			1
6279A			2	2
6282Ba			1	1
6282B			2	2
6282種別不明			2	2
6301A			1	1
6301B		1		1
6308B			1	1
6314F	1		7	8
形式不明			6	6
平安遺構			1	1

軒平瓦	十・十五坪坪境小路東側溝SD	流路SD91	十五坪内部	合計
6652A			2	2
6663A			1	1
6663B			1	1
6664F			1	1
6667A			2	2
6668A			1	1
6691A			3	3
6702A			2	2
6721D			2	2
6734A	0.5*		0.5*	1
新型式			1	1
型式不明			2	2

* : 同一個体

軒瓦集成表

土器類 ここでは、流路S D27と井戸S E81の出土土器について記す。

流路S D27出土土器 縄文時代の縄文土器、古墳時代の土師器・須恵器と時期不明の土師器がある。

縄文土器は、縄文時代後期のものとみられる深鉢の口縁部の破片が1点出土している。口縁端部の外面には3条の凹線がみられる。胎土には石英・長石の粗粒砂を多く含む。

古墳時代の土師器には、小形丸底壺と杯がある。1は小形丸底壺である。器表の状態が悪く調整痕はみられないが、体部中央外面に指頭圧痕が残る。2は杯である。器表の状態が悪く調整痕はみられないが、体部下半外面に指頭圧痕が残る。いずれも中期後半から後期にかけてのものである。

古墳時代の須恵器には、杯蓋・杯身・高杯・長頸壺がある。3は杯蓋である。体部は丸みを帯び、口縁端部内面には段がみられる。4は杯身である。口縁部は真っすぐに立ち上がり、口縁端面や蓋受け部端面は平坦に仕上げられている。5・6は長頸壺である。5は肩部外面に沈線と櫛状の工具による刺突文とで構成された文様帯がみられる。6は頸部外面に2条の沈線が施されている。体部外面には焼き膨れがみられる。3・4は中期後半、5・6は後期後半のものである。

その他に、時期不明の土師器長胴甕がある。口縁部はかすかに外湾し、口縁端部はわずかに上方へ立ち上がる。外面の調整は、口縁部が横方向のナデ、体部が縦方向のヘラケズリである。内面の調整は、口縁部が横方向のナデ、頸部が横方向のハケメ、体部が縦方向のハケメである。

(安井宣也)

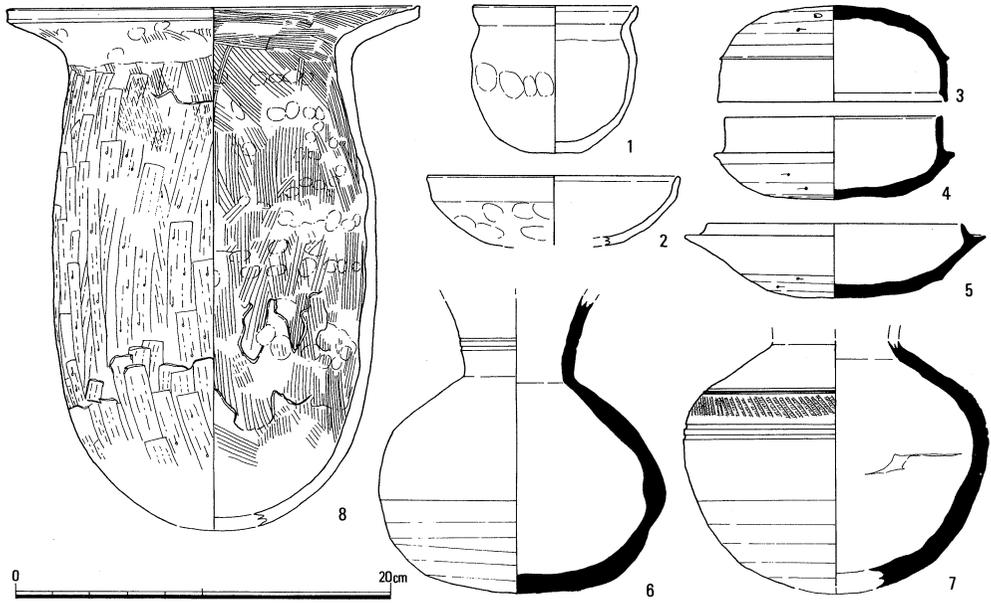
井戸S E81出土土器 南都土器編年のI期新段階(9世紀前半)に属する土師器・須恵器がある。ここでは残存状態が比較的良好なものを選び図示した。

土師器 杯A(6・7)、皿A(5)、椀A(1~3)、椀C(4)等がある。杯Aには、外面全体にヘラケズリを施した後ヘラミガキを施す_c手法のもの(6)と口縁部だけにヨコナデを施すもの(7)とがある。7は口縁端部が強く外反する特徴をもち、河内系の製品の可能性がある。底部外面に「八」と墨書きされている。皿A(5)は、器高が低く、口縁部がかなり開き気味に立ち上がる。I期新段階の特徴的な形態である。椀Aには、ヘラミガキを施すもの(1・3)とヘラケズリだけで調整するもの(2)とがある。椀C(4)は口縁部だけにヨコナデを施し、それ以外は成形時の凹凸をそのまま残す。

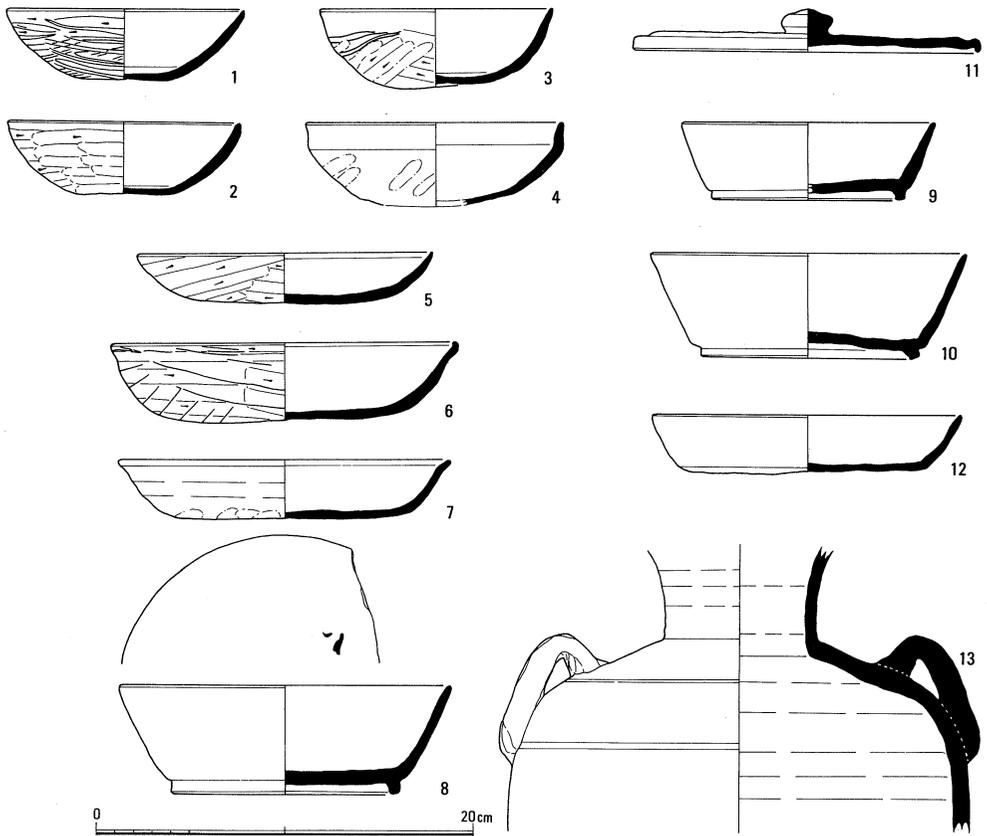
須恵器 杯A(12)、杯B(8~10)、杯蓋(11)、壺(13)等がある。杯B(10)の底部外面には文字が墨書きされているが、残存状態が悪く判読できない。杯A・Bは、いずれも口縁部内外面ともロクロナデ調整で、底部外面はヘラキリのままである。壺(13)の肩部内面から体部内面下半にかけて、灰白色の物質が付着している。

(三好美穂)

註)『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1995』奈良市教育委員会(1996)



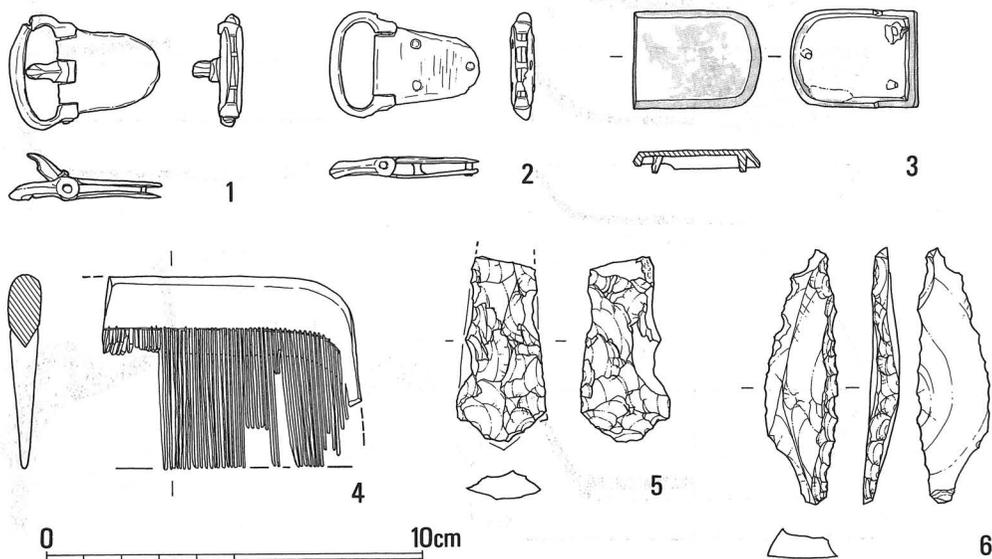
溝S D27 出土土器 (1/4)



井戸S E85出土土器 (1/4)

その他の遺物 奈良時代の遺物の他、弥生時代以前の石器が出土している。1・2は銅製の鉸具である。1は長さ4.0cm、幅3.0cm、板金具の厚さ0.5cm。外枠金具に図下方から軸を通し、刺金は軸と別造りとなっている。板金具は2本の鉸足で綴じ合わされている。2は長さ4.0cm、幅2.9cm、板金具の厚さ0.5cm。1とほぼ同じ大きさであるが刺金を持たない。同様の型式のものが、欠損品ではあるが、平城京左京二条二坊の東二坊坊間路西側溝から出土している。板金具は3本の鉸足で綴じ合わされている。1は建物S B54の柱穴埋土、2は溝S D81から出土。3は銅製の蛇尾の表金具である。長さ3.4cm、幅2.6cm、厚さ0.6cm。表面には黒漆（網部）が残存している。鉸足は3本である。土坑S K86から出土。4は横櫛である。現存幅6.9cm、高さ5.1cm、厚さ0.9cm。齒の挽き出しは3cmあたり24本。挽き出し線は櫛の上縁に平行し、肩部もその丸みに沿って平行している。復元推定幅は12cm前後である。井戸S E83枠内から出土。5は縄文時代草創期の有茎尖頭器である。残存長4.9cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm。欠損は著しいが、復元的にみると、左右の縁辺は上方に向かってすぼまり、逆刺は直線的にわずかに張り出しており、「柳又型」と判断される。安山岩製。第325次調査第2発掘区遺物包含層出土。6は旧石器時代のナイフ形石器である。長さ6.8cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm。横長剥片を表材とし、一側縁に調整を施す。「国府型ナイフ形石器」と考えられるが、表材剥片の底面にネガティブな剝離面が認められ、瀬戸内技法以外の方法で作られた可能性も考えられる。安山岩製。第318次調査第1発掘区遺物包含層出土。この他全発掘区を通じて、和同開珎3枚、萬年通寶2枚、神功開寶2枚、洪武通寶（加治木銭）1枚、寛永通寶1枚、石鏃3点他剝片類11点が出土している。

(松浦五輪美)

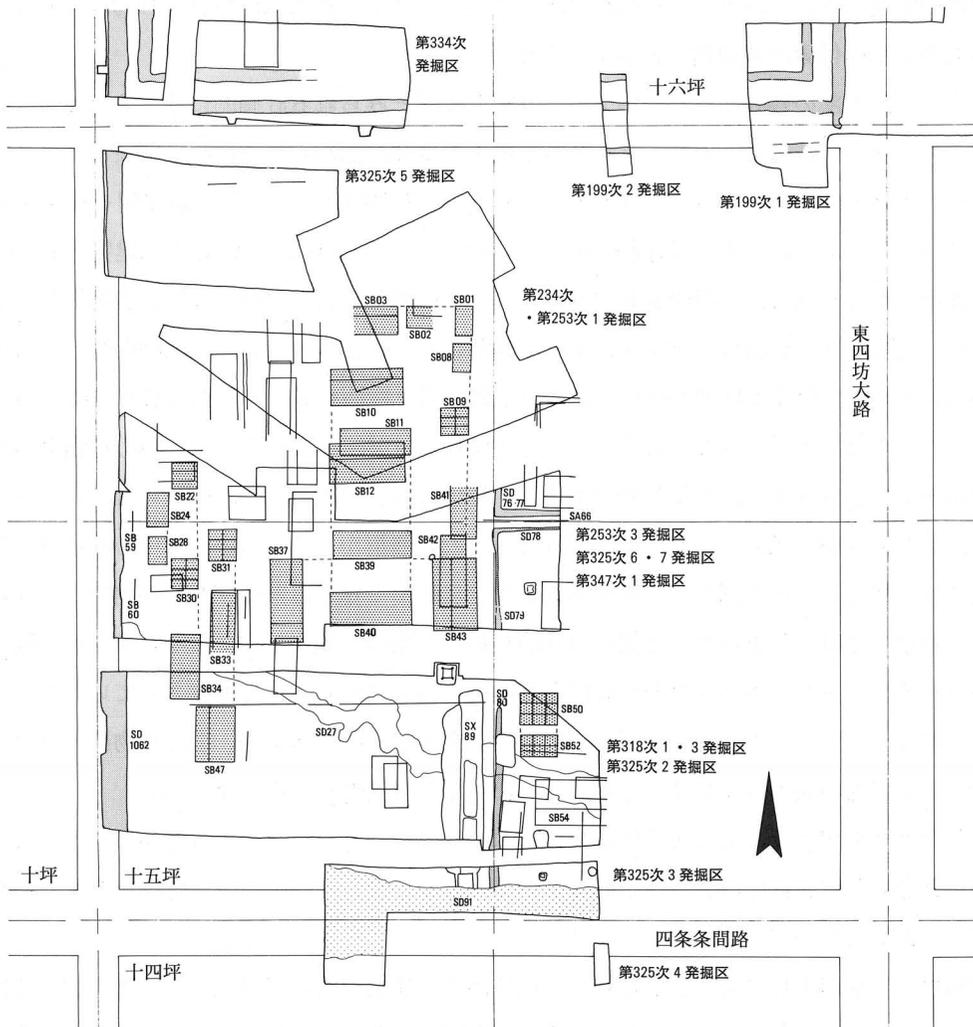


金属製品・木製品・石器（1/2）

V まとめ

平成3年度から今年度までの一連の発掘調査で得られた左京四条四坊十五坪に関する主な成果は、以下のとおりである。

条坊関連 十・十五坪坪境小路は東側溝SD1062を確認した。東側溝に沿う築地や雨落ち溝については、遺構は検出されなかったが、推定線上に門SB59・60以外の構造物がみられないことから、存在した可能性が高い。十四・十五坪坪境小路は推定地が中世の流路SD91となっていた。この流路の成立の経緯については、今後検討する必要がある。なお、十五・十六坪坪境小路は発掘区外であり、確認できなかった。



※ アミ目の建物は柱筋を揃えて建ち並ぶもの

十五坪遺構概念図

十五坪内の区画 十五坪の東西中軸線付近には南北方向の溝S D76・79・80がみられる。また、十五坪東半部の南北中軸線付近には1.8m間隔をおいて平行に掘削された2条の東西方向の溝S D77・78がみられる。これらの溝をまたいで建てられた建物や塀はみられない。また、十五坪の南北二等分線付近の塀については、東半部では2条の東西方向の溝S D77・78の間の空間地に東西方向の塀S A66がみられるのに対し、西半部では建物はみられるが東西方向の塀はみられない。したがって十五坪内は、東西に二等分され、さらに東半部が南北に二等分されて3つの区画に分かれていたものと考えられる。

建物配置と占地 十五坪東半部の建物配置については、調査範囲が東半部西辺付近に限られているので全容は不明であるが、少なくとも3時期以上の変遷が認められる。東半部南側の宅地では、東西の妻柱を揃えて南北に並んで建てられた総柱建物S B50・51と比較的大型の南廂付東西棟建物S B54がみられる。

十五坪西半部の建物配置については、コ字形配置とみられる計画的に建てられた建物群がみられるのが特徴で、少なくとも3時期以上の変遷が認められる。西半部東寄りにある比較的大型の建物S B10～12・37・39・40・43は中心建物とみられる。妻柱列を揃えて南北に並んで建てられた東西棟建物5棟（S B10～12・39・40）については、建物S B39・40に比べその北側にある建物S B10～12がやや小振である点を考慮すれば、建物S B39が正殿、建物S B40が前殿、建物S B10～12が後殿とみなされる。また、南北棟建物S B39・40は、それぞれの北妻柱列を建物S B39の南側柱列と柱筋を揃えて建物S B40を挟んで建てられており、脇殿とみなされる。その他の建物は付属建物とみられる。中心建物群の西側にある建物は大半が南北棟建物であるが、建物S B22・30・34、S B31・34・48のように同じ側の柱筋を揃えて南北に並んで建てられた建物群がみられる。また中心建物群の東側には建物S B01と東側柱の柱筋を揃えて南北に並んで建てられた南北棟建物群が、北側には建物S B01の北妻柱列に北側柱の柱筋を揃えて東西に並んで建てられた東西棟建物群がそれぞれみられ、中心建物群の東側と北側をL字形に画すように配置されている。

占地については、十五坪東半部の建物配置の全容が不明であるが、中心建物群の位置が十五坪西半部の東寄りにあることから、一坪利用の可能性も否定できない。

なおコ字形配置とみられる建物群の性格については、井戸枠内や土坑等から出土した遺物を考慮すれば、官庁のような公的なものではなく、むしろ邸宅の中心建物と考えるのが妥当であると思われる。

利水 生活用水は、確認された井戸の掘形が全て難透水層の黄褐色シルト層下にある砂礫層に及んでいることから、砂礫層中の被圧地下水を取水して利用していたとみられる。

存続時期 十五坪内の宅地の存続時期は、池状遺構S X89や井戸枠内の埋土から出土した土器から判断すると、奈良時代半ばから平安時代初頭までと考えられる。（安井宣也）

(4) 平城京左京四條四坊十六坪の調査 第334・345次

I 調査目的

調査地は平城京左京四條四坊十六坪南西部分に相当し、左京四條四坊九・十六坪坪境小路及び同十五・十六坪坪境小路の確認を主目的とした。

II 調査地の層相

層序は、造成土、赤黒色極細砂、暗灰色極細砂（作土）、暗灰色極細砂（やや褐色気味床土）、暗灰色極細砂（褐色気味、床土）、暗灰色極細砂（黄灰色シルト混在、作土）と続き、現地表下約0.9mで暗橙黄色シルト質極細砂の地山となる。遺構面は地山上面であり、標高は概ね63.0m前後である。旧地形は南西から北東に向かって緩やかに高くなる。

III 検出遺構

主な検出遺構は、奈良時代から平安時代初頭の左京四條四坊九・十六坪坪境小路および同十五・十六坪々境小路、道路側溝2条、雨落溝2条、築地2条、掘立柱建物3棟、掘立柱塀7条で、他に中世の粘土採掘坑がある。この内、掘立柱建物・塀・築地の添柱痕跡については概要を一覧表にまとめた。重複関係から、これらの遺構は少なくとも2時期の変遷があると考えられる。以下、特記すべきものについて述べる。

S F 1060 九・十六坪坪境小路。路面東端から約1m幅分を検出した。

S F 1020 十五・十六坪坪境小路。路面北端から約1～2m幅分を検出した。路面の標高は63.0m前後である。なお路面上面で土師器の甕がほぼ1個体分出土している。堀形はなかった。また後述のS D 1021 Aから土馬の破片が出土していることから、何らかの祭祀が行なわれていた可能性がある。（第199次調査S F 02に対応）

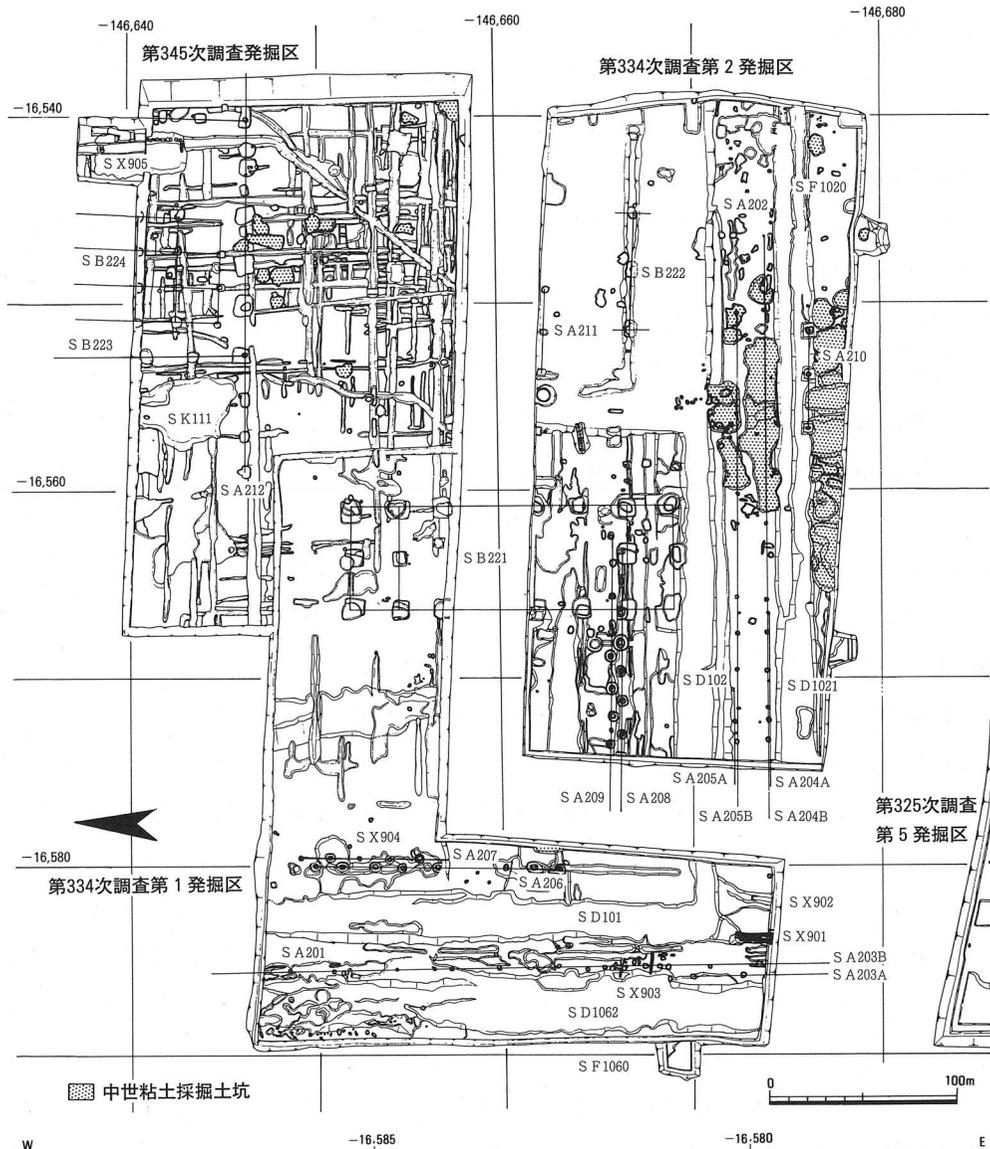
S D 1062 A・B 九・十六坪坪境小路東側溝。一度改修されており、古段階をA、新段階をBとして表示する。Aから8世紀後半～9世紀初頭の土器、Bから8世紀末～9世紀初頭の土器が出土した。本側溝心はX = -146,673.50のときAがY = -16,587.65、BがY = -16,587.62、X = -146,653.07のときAがY = -16,587.87となる（Bは不明）。

S D 1021 A・B 十五・十六坪坪境小路北側溝。改修が一度あり、古段階をA、新段階をBと表示する。A・Bから8～9世紀の土器が出土した。本側溝心はY = -16,574.50のときAがX = -146,675.55、BがX = -146,675.49である。（第199次調査S D 04に対応）

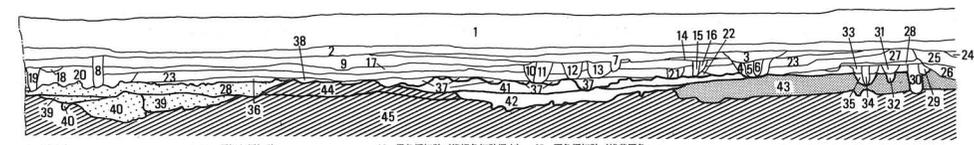
S D 101 A・B 九・十六坪坪境小路東側築地の雨落溝。改修が一度あり、古段階をA、

調査回数・発掘区	調査地	面積(m ²)	調査期間	備考
第178次	三条宮前町43-3	100	H元・7/4～同・7/5	平成2年度報告
第199次	三条本町31他	1,450	H2・7/2～同・8/22	同上
第218次	同上	870	H2・12/17～H3・2/28	同上
第253次第2発掘区	三条宮前町242-2他	330	H4・6/1～同・9/18	平成4年度報告

十六坪内調査一覧表



W L.H: 64.200m -16.585 -16.580 E



- | | | | |
|---------------------|----------------------|--------------------|-----------------------------|
| 1 造成土 | 13 灰褐色極細砂 | 25 黒色極細砂 (橙褐色細砂混在) | 37 灰色極細砂 (黄灰色シルト質極細砂ブロック混在) |
| 2 赤黒色極細砂 | 14 暗灰色極細砂 (暗褐色極細砂混在) | 26 暗灰色極細砂 (灰色細砂混在) | 38 暗灰色極細砂 (黄灰色シルト混在) |
| 3 暗灰色極細砂 (白色細砂混在) | 15 暗灰色極細砂 (褐色極細砂混在) | 27 暗褐色極細砂 | 39 暗褐色シルト質極細砂 |
| 4 暗灰色極細砂 (暗褐色気味) | 16 暗灰色極細砂 (褐色極細砂混在) | 28 黄灰色シルト質極細砂 | 40 灰色中砂 |
| 5 暗灰色極細砂 (やや暗褐色気味) | 17 暗灰色極細砂 (やや暗褐色気味) | 29 灰色極細砂 | 41 白い黄色シルト |
| 6 暗灰色極細砂 (暗褐色極細砂混在) | 18 暗灰色極細砂 (褐色気味) | 30 暗褐色極細砂 | 42 明灰白色シルト |
| 7 暗灰色極細砂 | 19 暗灰色シルト | 31 明灰褐色極細砂 | 43 暗褐色シルト質極細砂 |
| 8 暗灰色シルト質極細砂 | 20 暗灰色シルト質極細砂 | 32 灰白色極細砂 | 44 暗褐色黄色シルト質極細砂 |
| 9 暗灰色極細砂 | 21 暗灰色極細砂 | 33 暗灰色極細砂 | 45 暗褐色シルト質極細砂 |
| 10 灰色極細砂 | 22 暗褐色極細砂 | 34 灰色極細砂 (褐色気味) | |
| 11 暗灰色極細砂 (やや褐色気味) | 23 暗褐色極細砂 (褐色気味) | 35 灰色極細砂 | |
| 12 暗灰色極細砂 | 24 暗褐色極細砂 | 36 灰色極細砂 (褐色気味) | |

第334・第335次調査 遺構平面図 (1/400) 第334次調査 北壁土層図 (1/100)

新段階をBと表す。Aから8世紀の土器が出土した。(第178次調査S D18に対応)

S D102A・B 十五・十六坪坪境小路北側築地の雨落溝。一度改修されており、古段階をA、新段階をBとして表示する。Aから8世紀、Bから8～9世紀の土器が出土した。なお発掘区東部分は攪乱による削平で残存していない。(第199次調査S D10に対応)

S A201 九・十六坪坪境小路東側築地堀。堰板留の添柱痕跡があり、これをS A203A・Bと表す。ただし東側の添柱痕跡は存在せず、S D1062Bの造成によって削平されていると考えられる。このことから、ある時期から築地が存在しなかった可能性がある。

S A202 十五・十六坪坪境小路北側築地堀。堰板留の添柱痕跡があり、これをS A204A・B、S A205A・Bと表す。両者のAとA、BとBは対をなす。さらにAとBは列が揃い、柱間も一致することから、築地が二時期ある可能性がある。これは添柱痕跡の状況からS A201でも同様と考えられる。なお築地幅はAで約1.8m、Bで約1.6mである。

S X901 十五・十六坪坪境小路北側築地の木樋暗渠。十五・十六坪々境小路北側築地の雨落溝と九・十六坪坪境小路東側築地の雨落溝の取り付け部分に位置し、両溝の水を十五・十六坪々境小路北側溝に排出していたと考えられる。幅員約0.6m、深さ約0.4m。底面には拳大の礫が敷き詰められていた。礫の上には側板が2枚立てられており、素掘り溝側面と側板の間には粘土が裏込められていた。また蓋板は検出していないが、側板の上端が腐食で損なわれていることから、同様に蓋板も損なわれている可能性がある。

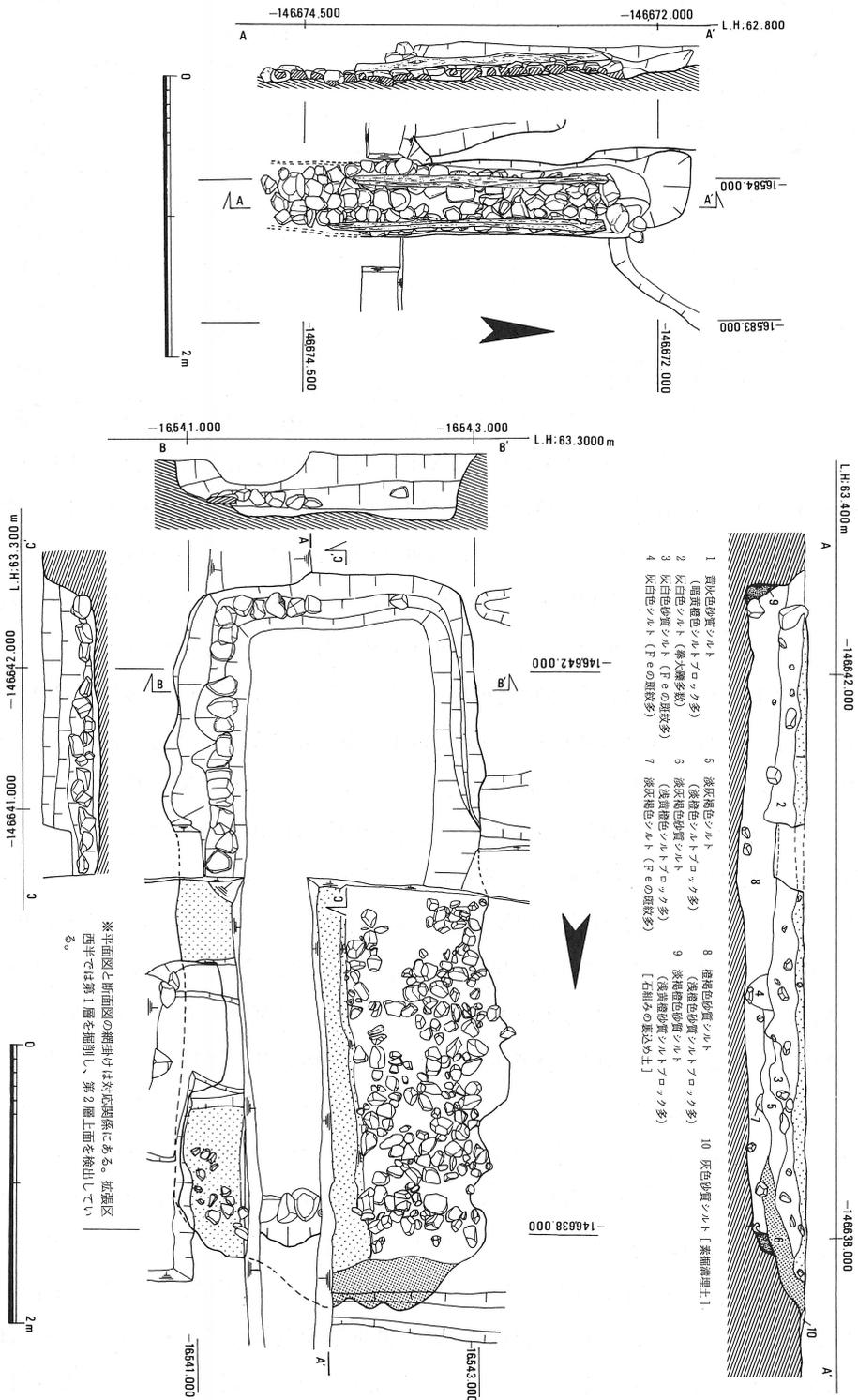
S X902 S X901の前身の暗渠と考えられる。幅員約0.8～1.0m、深さ約0.3m。重複関係からS D102Bより古い。S D102Aに伴う可能性がある。

S X903 S D1062・101間に位置する東西方向の2条の溝状遺構。幅員約0.2m、深さ約0.1m。重複関係からS D1062B・101Bに伴う開渠の可能性がある。

遺構番号	棟方向	規模(桁行×梁間)	桁行全長m(尺)	梁行全長m(尺)	梁行柱間寸法(m)	梁行柱間寸法(m)	廂の出(m)	備考
SA203A	南北	2以上	2.7(9)以上		2.7			S D102Bより古い。S A203・204・205は築地の堰留板の添柱痕跡と考えられる。
SA203B	南北	13以上	23.1(77)以上		※			※北から2.4-0.6-2.3-2.1-0.9-2.4-3.3-1.5-2.1-2.4-2.4
SA204A SA205A	東西	10以上	27(90)以上		2.1-1.8をくり返す			
SA204B SA205B	東西	3以上	5.7(19)以上		同上			
SA206	南北	7	12.4		※			S X904より新しい※北から1.5-1.5-1.5-1.6-4.5-1.5-1.5
SA207	南北	6	9.9(33)		※			S X904より新しい※北から1.5-1.5-1.5-1.5-2.1-1.5
SA208	東西	7以上	10.5(35)以上		1.7等間			S B221より新しく、S D102Aが埋没するより新しい
SA209	東西	8以上	12.6(42)以上		1.8等間			S D102Aが埋没するより新しい
SA210	東西	2	5.2		2.8-2.4			S D102Bより新しい。発掘区外に続く建物になる可能性もある。
SA211	東西	2	4.4		2.2等間			発掘区外に続く建物になる可能性もある。
SA212	東西	10以上	19.2(64)以上		2.1～2.4不揃い			坪南辺より坪約1/4の位置にある
SB221	南北	7×2	17.4(58)	5.4(18)	2.7-2.4-2.4-2.4-2.4-2.4-2.7	2.7等間	(南・北)2.7	寄棟造建物の可能性もある。
SB222	南北	2以上×2		4.6		2.3等間		S B221と柱列の筋、規模がそろう。南北棟建物の可能性がある。
SB223	東西	5×3以上	13.5(45)	5.4(18)以上	2.7等間	2.7等間		
SB224	南北	3以上×3	4.2(14)以上	5.7(19)	2.1等間	1.9等間		

建物・堀一覧表

暗集 S X 901 平面・立面図 (1/50)



石組遺構 S X 905 平面・立面・断面図 (1/50)

S X 904 中心に幅員約0.6m、全長約4.2m、深さ約0.2mの南北方向の素掘りの溝があり周囲に南北方向約7.3m、東西方向約0.6~3.2mの浅い土坑、素掘りの溝の南北端に直径約0.4m、深さ約0.2mの土坑がある。S A 206・207と重複関係にあり、これより古い。

S X 905 南北方向約5.2m、東西方向約2.2m、深さ約4.5mの方形石組土坑。側面に拳大から人頭大の礫が積まれていたと考えられるが、ほとんど取り去られている。石組最下段を南東部・北部で確認した。また発掘区を北に拡張し、全体の範囲を確認した。なお第8層から8世紀中葉の土器、拡張区の第2層上面から8世紀の土器が出土しており、当施設は少なくとも9世紀までに廃棄されている可能性が高い。

S K 111 南北約6m、東西約4mの平面楕円形、深さ約0.2mの土坑。埋土から8世紀前半の土器が出土した。

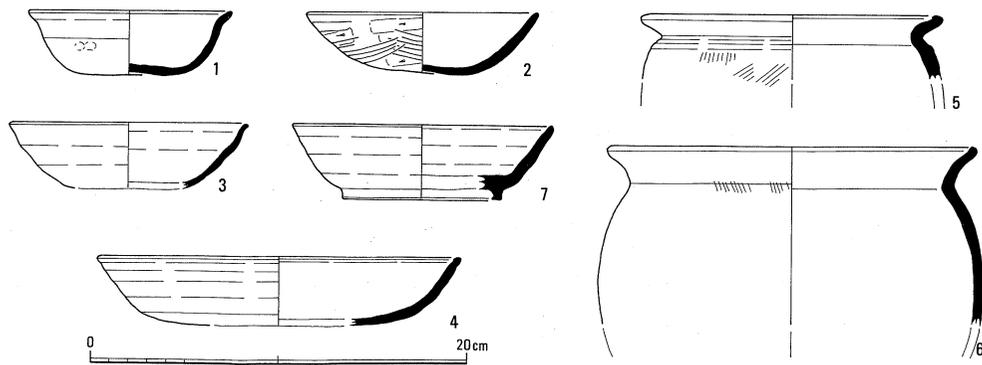
IV 出土遺物

奈良時代から平安時代初頭の土器類が遺物整理箱で4箱分、同時代の土馬が1点、奈良時代の瓦類が数点、鎌倉時代の瓦器が数点出土した。

瓦類には軒丸瓦(6685A)1点および丸瓦、平瓦が少量ある。

土器類は大半が奈良時代末から平安時代初頭のものである。ここではS D 1062出土の土器を報告する。3はS D 1062B出土、3以外はS D 1062A出土のものである。

1の土師器は摩滅が著しく調整が分かりにくい、口縁部だけをヨコナデし、体部~底部にかけては未調整のようである。椀もしくは壺Bに近い形態である。2は土師器の椀Aである。c₃手法によって調整している。3は土師器の椀、4は土師器の皿Aである。両者共に口縁部をf手法によって調整している。4は河内系のもと考えられる。6・7は土師器の甕Aである。いずれも裏面および口縁部から頸部にかけてヨコナデし、体部表面をハケ調整、裏面をナデ調整している。6は体部を2次ハケ調整している。7は須恵器の杯Bであり、全面を回転ナデ調整している。体部と高台との接合痕が残る。(大窪淳司)



溝S D 1062出土土器(1/2)

(5) 平城京左京四条五坊三坪の調査 第353-2次

I 調査の目的

調査地は平城京の復元では左京四条五坊三坪の東端の中央に相当する。この坪は市第168次調査（昭和63年度調査）で西端の一部が調査されたが、本格的な調査は今回がはじめてである。調査地の東隣の同六坪では第311次調査が実施されており、その西端で池状遺構S X02の東岸を確認した。今回はS X02の範囲と、敷地東端に推定されている三・六坪の坪境小路の確認を目的として調査を行なった。

II 調査地の地形と層相

調査地付近の地形は南側に菩提川が西流しており、それによって形成される扇状地の微高地上にあるため、西と南にむかってなだらかに低くなっている。

調査地の現地表面から0.5mまでは造成盛土である。調査地の西1/3は水田耕作によって地下げされ、その部分では造成盛土の厚さは0.9mである。造成盛土以下の層序は暗黒灰色粘質土（旧水田作土、0.15m）、淡灰色土（0.2m）、灰褐色土（奈良時代の遺物包含層、0.25m）と続き、現地表面下約1.1mで黄褐色粘質土または、茶褐色砂礫の地山に達する。遺構面は2面あり、灰褐色土の上面（以下第1遺構面）と地山上面（以下第2遺構面）である。灰褐色土層は南にいくほどが薄くなり、南半では地山上面で遺構を検出した。遺構面の標高は上面で概ね64.8m、地山上面で64.4mである。

III 検出遺構

第1遺構面で検出した遺構には、中世～近世の土坑・素掘りの溝がある。また、第2遺構面で検出した遺構には、弥生時代の土器を含む自然流路、条坊遺構の可能性のある時期不明の溝、奈良時代の土坑、中世～近世の土坑がある。

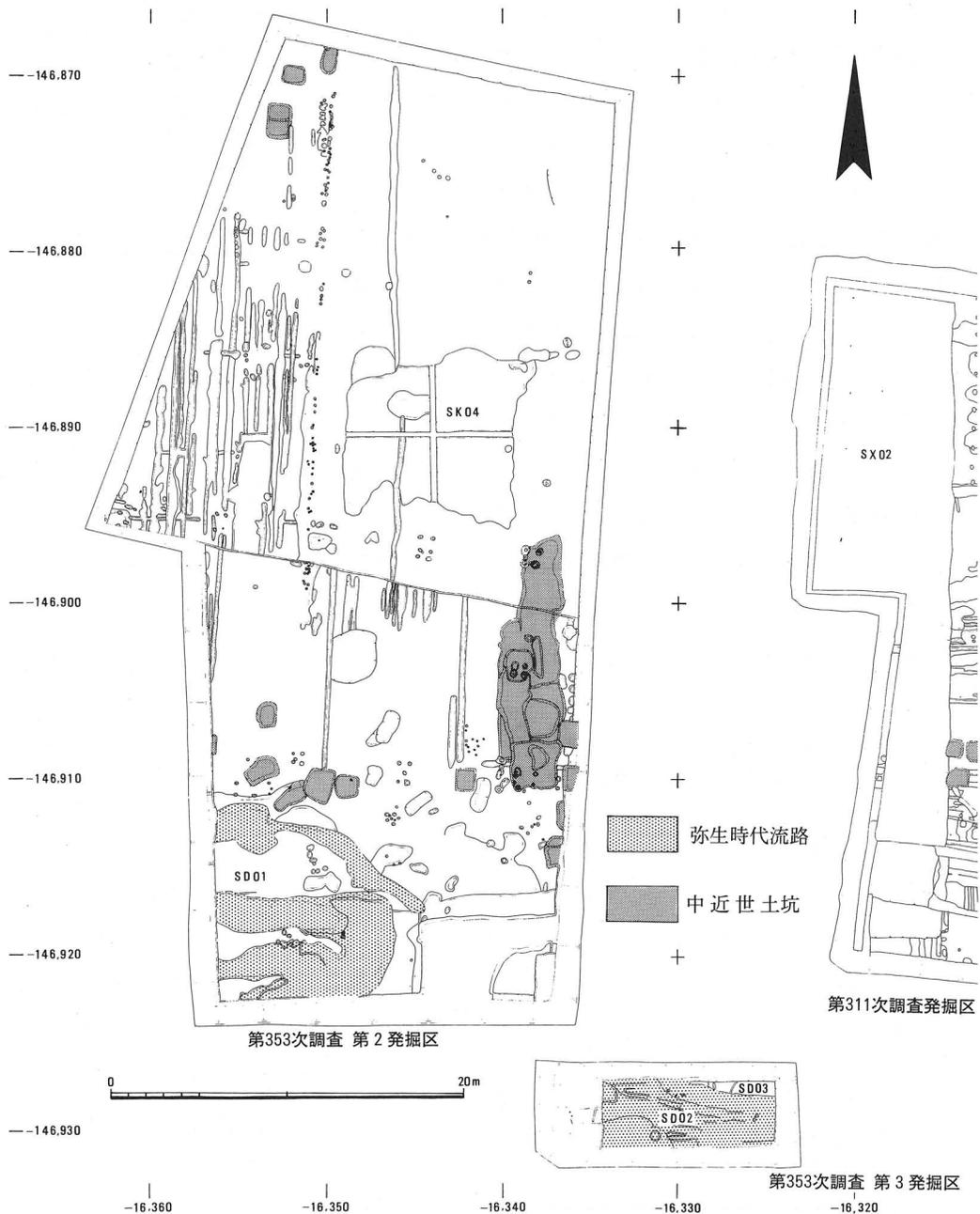
自然流路S D01・02 検出状況から3条に分かれるが、第2発掘区の南端で検出した2条は同じ流路である可能性がある。自然流路S D01は流路底のレベルから水は南東から北西方向に流れていたと考えられる。埋土が灰色粗砂で弥生時代後期後半の土器が出土した。自然流路S D02は第3発掘区で北岸を検出。埋土は2層にわかれ、下層は灰色粗砂、上層は灰色粗砂に灰色粘土が混じる。両層から古墳～奈良時代の遺物が出土している。

S D03 第3発掘区の北端で検出した南北方向の素掘りの溝である。溝の南側は自然流路で破壊されており、土坑であった可能性がある。条坊復元では三・六坪坪境小路の東測溝の位置にあたりその可能性もある。幅1.7m、検出面からの深さ0.1mである。埋土は茶褐色土で、遺物が確認できなかったため時期不明である。

S K04 第1発掘区中央部の第2遺構面で検出した平面不整形の土坑である。東西・南北とも約9.5m、検出面からの深さ0.1mである。埋土は茶褐色土で奈良時代の土馬、須

恵器、土師器が出土した。

中・近世土坑群 第2発掘区北西隅と同発掘区中央よりやや南寄りで検出した。いずれも地山が黄褐色粘質土の箇所検出されており、土を採掘するための土坑と考えられる。多くは平面形が隅丸方形である。同様のものが東隣の市第311次調査で確認されている。



第353次調査 第2・3発掘区 遺構平面図 (1/400)

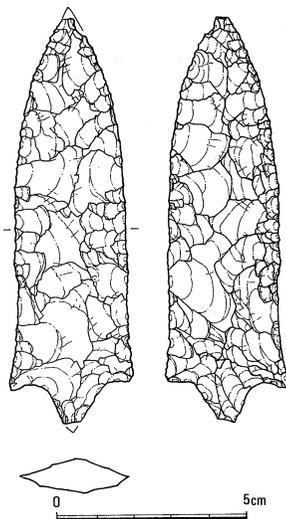
IV 出土遺物

出土遺物には石器、弥生土器、奈良時代の土馬、土器類、中近世の土器類・時期不明の瓦類がある。

石器 第2遺構面から安山岩（サヌカイト）製の有茎尖頭器が1点出土した。横方向の押圧剝離によって丁寧に仕上げられている。縄文時代草創期のものと考えられる。

土器類 自然流路S D01出土の弥生土器について記す。

器種は、甕・壺・鉢・高杯がある。1は甕で、体部外面にはタタキ目がみられる。2・3は壺である。2は大型のもので、体部内面には一部タタキ目が残る。体部内面には板状工具によるナデ調整が施されているが、指頭圧痕が残る。3は小型のもので、肩部内面に接合痕がみられる。4～6は鉢である。4は体部外面にタタキ目がみられる。5・6は体部外面が平滑に仕上げられている。5は底部に穿孔が施されている。これらの土器は、器形や組成の特徴から、弥生時代後期の畿内第V様式でもかなり新しい様相を示すものである。

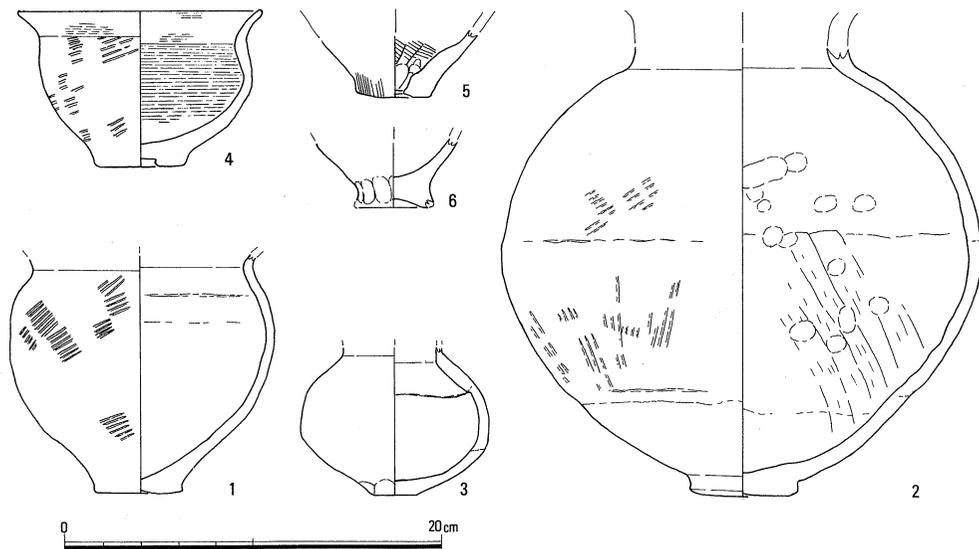


石器（1/2 有茎尖頭器）

V まとめ

今回の調査では第311次で検出した池状遺構S X02を確認することができなかった。ただしS X02の西岸が今回の第2発掘区より東に、南岸が第3発掘区より北になることが判明した。また、弥生土器を含む自然流路を確認した。周囲の調査で確認している自然流路、弥生時代の遺構とともに検討していく必要がある。

（久保邦江・安井宣也）



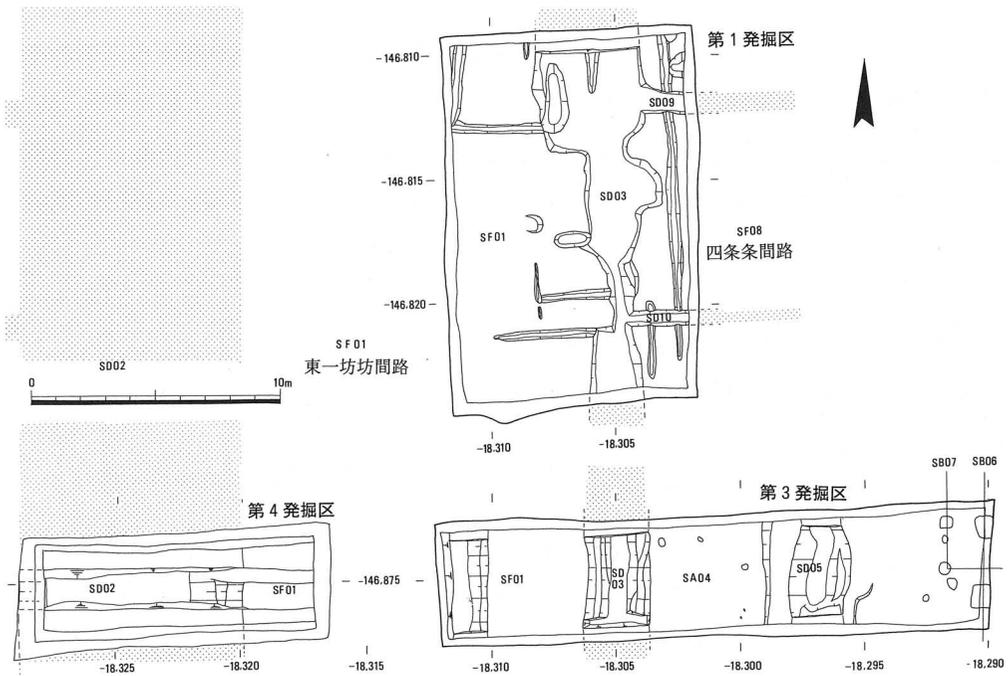
自然流路出土土器（1/4）

3 平城京左京四条一坊十・十一坪（東一坊坊間路）の調査 第344次

所在地 奈良市四条大路二丁目37他
 調査期間・面積 平成8年2月5日～3月6日（平成7年度） 300㎡
 平成8年4月3日～4月18日（平成8年度） 175㎡
 調査原因 宅地造成（株式会社シェルホーム届出地）

I 調査の目的

調査地は平城京の条坊復元では、左京四条一坊十・十一坪にあたり、調査地の西辺には東一坊坊間路が、北は四条条間路が想定されている。ところで、宅地造成面積は7960㎡におよぶが、工事による地下遺構への影響は擁壁部分に限られることから、奈良県教育委員会と協議の結果、今回は条坊に関わる遺構と十一坪内の遺構面を確認する調査に留めることとなった。このために、平成7年度は、東一坊坊間路と四条条間路交差推定位置に150㎡（第1発掘区）、十一坪内に150㎡（第2発掘区）、平成8年度は、東一坊坊間路推定位



第344次調査 第1・3・4発掘区 遺構平面図（1/300）

置に175㎡（第3・4発掘区）をそれぞれ設定し2ヵ年にわたり調査を実施した。

II 調査地の層相

層序は、黒色土（作土、厚さ0.1～0.2m）以下、第1発掘区では、茶灰色粘土（整地土、厚さ0.1～0.2m）と続き、現地表下0.4mで明黄灰色シルトの地山に至る。また、第2発掘区では、暗黄色粘土（厚さ0.05m）、北半では暗黄褐色粘土（整地土、厚さ0.1m）と続き、現地表下0.35mで暗茶褐色砂礫の地山に至る。なお、南半には整地土はない。第3・第4発掘区では、灰茶色砂質土（厚さ0.1m）、灰黄色粘土（厚さ0.1m）と続き、現地表下0.3mで、黄褐色粘土の地山に至る。なお、第4発掘区では、1.4m程盛土がなされている。地山上面の標高はいずれの発掘区も概ね60.6mである。

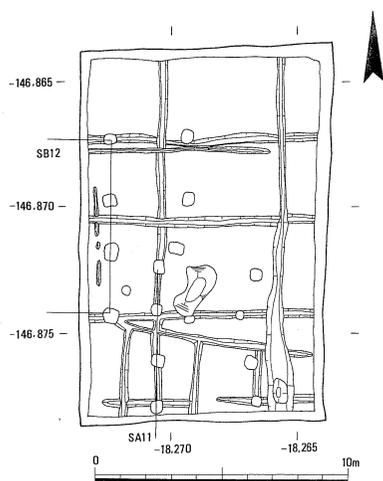
III 検出遺構

検出した遺構・遺物としては、東一坊坊間路および同東西両側溝、十一坪の西を限る築地および雨落ち溝、四条条間路および同南北両側溝、掘立柱建物3棟、掘立柱塀1条、素掘り溝である。以下で概略を記す。

S F01 第1・3・4発掘区で検出した東一坊坊間路である。路面の幅は13.9mである。第3・4発掘区では路面は地山面で舗装などの痕跡はなかった。路面は西側溝に向かってなだらかに下がっている。一方、第1発掘区では路面は地山上面に茶灰色粘土で整地されている。

S D02 第4発掘区で検出した東一坊坊間路西側溝である。発掘区西端が西肩である。幅8.9m、検出面からの深さ1.5mである。埋土は上下2層にわかれる。上層は橙灰色粘質土、灰橙色粘土、灰色粘土で、下層は暗灰色粘土、黒灰色粘土、灰色砂である。灰色粘土からは、12世紀初頭の瓦器片が出土している。灰色砂からは、8世紀末～9世紀初頭の土師器杯・皿・甕・壺B、須恵器長頸壺・甕片、刀子の柄・斎串が出土した。

S D03 第1・3発掘区で検出した東一坊坊間路東側溝である。南北方向の素掘りの溝で、第1発掘区では幅0.9m、検出面からの深さ0.05～0.4mである。S D09との合流付近では幅4.5mと広がっている。8世紀後半の土師器片、須恵器片、丸瓦、平瓦、軒丸瓦3点、軒平瓦4点が出土した。土器は摩滅を受けている物が多い。軒丸瓦の型式・種・点数の内訳は、6281B 2点、型式不明1点である。軒平瓦の内訳は、6663F 2点、6721H c 1点、型式不明1点である。第3発掘区では幅2.3m、検出面から



第2発掘区 遺構平面図 (1/300)

の深さ0.6mである。

S A04 第3発掘区東一坊坊間路東側溝の東で検出した、東側溝とS D05に挟まれる幅約4.5mの空闲地であり、十一坪を限る築地塀が想定される。築地版築は残っていない。

S D05 第3発掘区S A04の東側で検出した幅3.6m、検出面からの深さ0.3mの南北方向の素掘りの溝である。十一坪の西を限る築地塀の雨落ち溝の可能性はある。

S B06 第3発掘区の東端で検出した南北1間(3.0m)以上の掘立柱建物である。発掘区外に続くため建物規模については明らかではない。

S B07 第1発掘区の東端で検出した東西1間以上、南北1間(1.8m)以上の掘立柱建物である。発掘区外に続くため建物規模については明らかではない。

S F08 第1発掘区で検出した四条条間路である。路面幅7.9m、東西2.5m分を検出した。路面には舗装などの痕跡はみられなかった。

S D09 第1発掘区で検出した四条条間路北側溝である。東西方向の素掘りの溝で幅0.9m、検出面からの深さ0.3mである。

S D10 第1発掘区で検出した四条条間路南側溝である。東西方向の素掘りの溝で幅0.6m、検出面からの深さ0.1mである。

S A11 第2発掘区中央で検出した3間(5.4m)以上の掘立柱塀である。柱間寸法は1.8m(6尺)等間である。

S B12 第2発掘区中央東で検出した南北3間(6.9m)以上の掘立柱建物である。柱間寸法は2.4m-1.8m-2.4mである。発掘区外に続くため建物規模については不明である。

IV まとめ

今回の調査においては、当初の目的の通り東一坊坊間路および同東西両側溝を、なおかつ東一坊坊間路と四条条間路の交差する部分を検出することができた。東一坊坊間路側溝心心間の距離は19.65m、四条条間路側溝心心間の距離は8.65mである。両者の数値は大尺・小尺ともに完好な数値とならない。今回検出した条坊関連遺構についての国土座標を記して今後の調査の資料とする。

(山前智敬)

検出遺構	X	Y	備考
東一坊坊間路西側溝心	-146,875.000	-18,324.370	S D 0 2
東一坊坊間路心	-146,875.000	-18,312.950	S F 0 1
東一坊坊間路東側溝心	-146,875.000	-18,304.720	S D 0 3
十一坪西限築地雨落溝	-146,875.000	-18,297,210	S D 0 5
四条条間路北側溝心	-146,811.850	-18,301.000	S D 0 9
四条条間路心	-146,816.250	-18,301.000	S F 0 8
四条条間路南側溝心	-146,820.500	-18,301.000	S D 1 0

第344次調査 条坊関連遺構国土座標一覧

4 平城京左京四條二坊三坪の調査 第346次

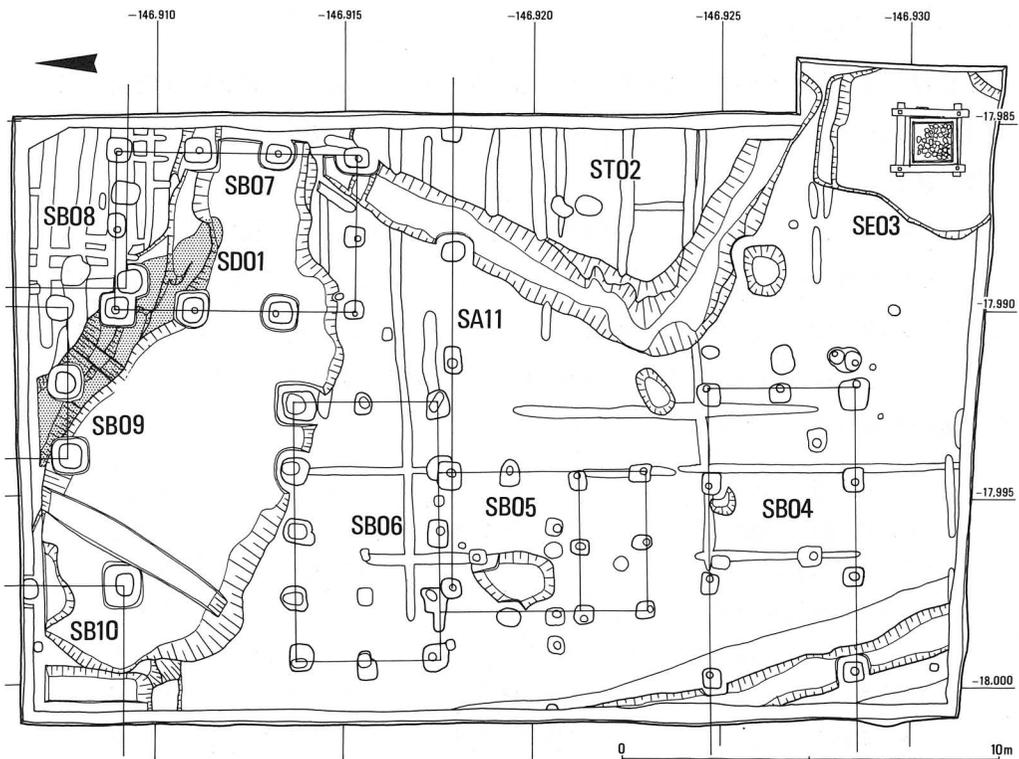
調査地 奈良市四條大路一丁目12番1
調査期間・面積 平成8年2月26日～3月29日 400㎡
調査原因 店舗建設（良家株式会社届出）

I 調査の目的

調査地は、平城京条坊復元では、平城京左京四條二坊三坪の南辺中央にあたり、調査地南側の道路は三・四坪の坪境小路に想定されている。また、調査地の西側では、近年奈良時代の遺構とともに竪穴住居や方形周溝墓群などの弥生時代の遺構が確認されている。このことから今回の調査は、三坪の宅地南辺部の様相の確認とともに、弥生時代の遺跡の拡がりの確認をも目的とした。

II 調査地の層相

層序は、黒褐色粘質土（作土）、灰色砂質土、黄色粘質土（遺物包含層）と続き、現地



第346次調査 遺構平面図 S = 1 / 200

表下0.3mで黄灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は、概ね58.6mである。

Ⅲ 検出遺構・遺物

弥生・古墳時代の遺構 弥生時代の溝1条（S D01）、古墳1基（S T02）がある。遺構は、地山上面で検出した。

S D01 幅約1.4m、深さ約0.6mの断面V字形の溝。長さ8 m分を確認。発掘区北へ続く。埋土から弥生土器片が数点出土した。

S T02 やや南北に長い長方形の方墳。墳丘の西辺及び南辺の一部を検出し、南北9 m、東西5.2m分を確認した。墳丘は溝底からの高さ約0.4mが残る。すべて地山であり、墳丘盛土は確認できなかった。墳丘の周囲には、幅約1.6mの周濠が巡る。周濠の埋土から、須恵器片とともに5世紀末葉の甲冑埴輪が1点出土した。

奈良時代の遺構 掘立柱建物7棟（S B04～10）、掘立柱塀1条（S A11）、井戸2基（S E03A・B）がある。また、発掘区北辺には幅約6.5mの自然流路があり、これを奈良時代に埋立て、整地していることを確認した。遺構は、地山およびこの整地上面で確認した。

S B04 桁行3間（7.2m）以上、梁間2間（3.6m）の掘立柱東西棟建物。

S B05 桁行3間（5.4m）、梁間2間（3.6m）の掘立柱南北棟建物。

S B06 桁行4間（6.8m）、梁間2間（3.6m）の掘立柱東西棟建物。西から1間に間仕切がある。

S B07 桁行3間（6.3m）、梁間2間（4.2m）の掘立柱南北棟建物。

S A11 東西4間以上の掘立柱塀である。柱間寸法は、西から3.2—2.8—3.0—3.2mである。発掘区外東に続く。

S E03A・B 発掘区東南隅で検出した井戸。自然流路埋土の灰色砂を掘り込んで作られているため崩落が著しく、掘形はほとんど原形をとどめない。当初、縦板組であったもの（S E03A）を、井籠組（S E03B）に作り替える。S E03Aは、上下2段につくる。下段の縦板組枳材の上に一辺2 m、幅0.2m、厚さ0.14mの長方材を井桁状に組む。上段の基礎組とするものか。四隅の組合せ部分に四隅柱を立てる枳穴を穿つ。上段の枳材は失われており、構造は不明。湧水が激しく周壁の崩落が著しいため下段の掘下げは断念した。S E03Bも同じく上下2段につくる。下段に、一辺1.1mの井籠組の井戸枳を1段据え、その外側に上段の一辺1.3mの井籠組の枳材を2段重ねている。下段枳内には、浄水のために拳大の石を敷く。S E03A・Bの埋土からは、奈良時代の瓦磚類、土器類、木製品が出土した。

出土遺物の中で、特記すべきものにS B03Bから出土した多量の埴がある。掘形及び枳内埋土から総数61点が出土した。これらは、大型品（縦27cm、横19cm、厚さ7cm）・中型品（縦25cm、横16.5cm、厚さ7.5cm）・小型品（縦22.5cm、横14.5cm、厚さ6.5cm）の3種類の大きさに大別できる。

（立石堅志）

5 平城京右京一条二坊十一坪の調査 第348次

所在地 奈良市西大寺栄町2317-4他
 調査期間・面積 平成8年4月25日～7月30日 718㎡
 調査原因 近鉄西大寺駅北区市街地再開発事業（奈良市長通知）

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では右京一条二坊十一坪と一条々間路南侧溝にまたがる位置に推定されていた。一条々間路を挟んだ北側は西隆寺境内である。

しかし、過去の周辺発掘調査によって、一条々間路は推定されている条坊復元よりも北へ10数m、西二坊大路と西二坊々間西小路は西へ5m前後ずれていることが判明している。このことから、調査地は十一坪内に位置する。

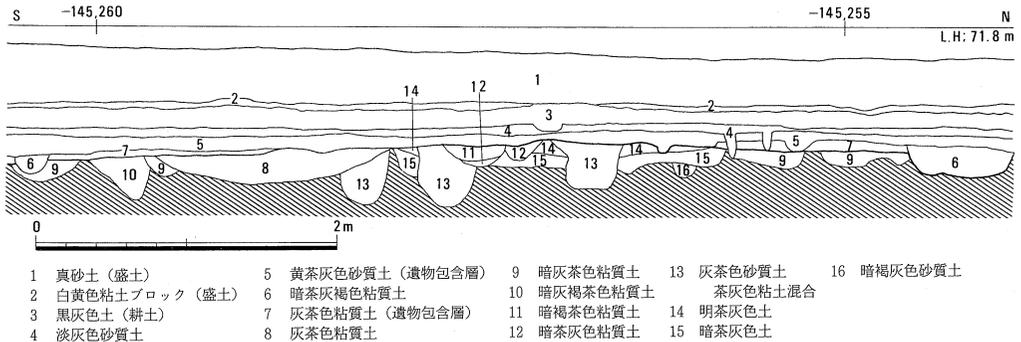
また、周辺の調査では、時期不明の建物としてまとまらない多くの小柱穴や、古墳時代の自然流路、土坑が検出されている。以上をふまえて当調査地における坪内の様相、古墳時代の遺構の分布範囲確認などを調査の目的とした。

II 調査地の層相

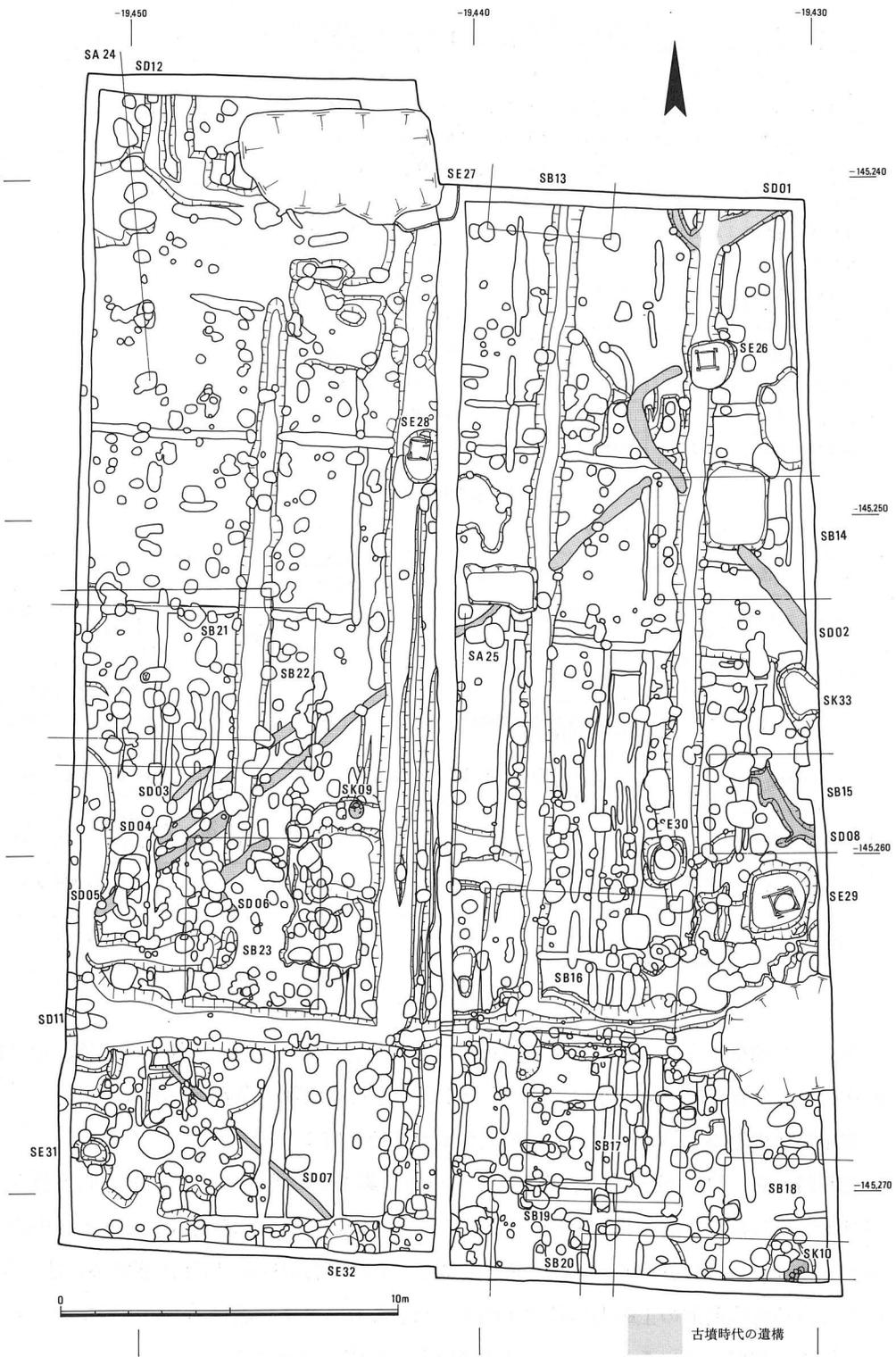
層序は、真砂土・白黄色粘土ブロック（盛土）、黒灰色土（旧作土）、淡灰色砂質土、黄茶灰色砂質土、茶灰色粘質土と続き、地表下0.6～0.8mで灰茶色砂、灰茶色砂質土あるいは黄灰色粘質土の地山に至る。

中世以降の耕作によると思われる素掘りの溝や小土坑は、茶灰色粘質土上面で、古墳時代や奈良時代などの遺構は、地山上面で検出した。地山の標高は概ね71.0mである。

III 検出遺構



第348次調査 西壁土層図（1/50）



第348次調査 遺構平面図 (1/200)

遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m(尺)	梁行全長 m(尺)	梁行柱間 寸法(m)	梁行柱間 寸法(m)	廊の出 (m)	備考
S B13	南北	1以上×2		3.6(12)		1.8等間		
S B14	東西	1以上×2	2.4(8)以上	3.6(12)	2.4	1.8等間		
S B15	東西	2以上×2	3.0(10)以上	3.0(10)	1.5等間	1.5等間		
S B16	東西	3×2	6.0(20)	4.2(14)	2.0等間	1.8-2.4		S D11より新しい
S B17	東西	2×2	4.8(16)	3.2	2.4等間	1.6等間		
S B18	東西	1以上×2	2.7(9)	3.6(12)	2.7	1.8等間		
S B19	南北	1以上×2	1.5(5)以上	3.6(12)	1.5	1.8等間		
S B20	東西	1	6.3(21)以上		2.1等間			
S B21	東西	2以上×2	4.8(16)以上	4.5(15)	2.4等間	2.4-2.1		
S B22	東西	3以上×2	5.4(18)以上	4.8(16)	1.8等間	2.4等間		
S B23	南北	3×2	5.1(17)	4.0	1.5-1.8-1.8	2.0等間		S D11より古い
S A24	南北	4以上	7.2(24)		1.8等間			
S A25	南北	3	8.1(27)		2.7等間			

掘立柱建物・塀一覧表

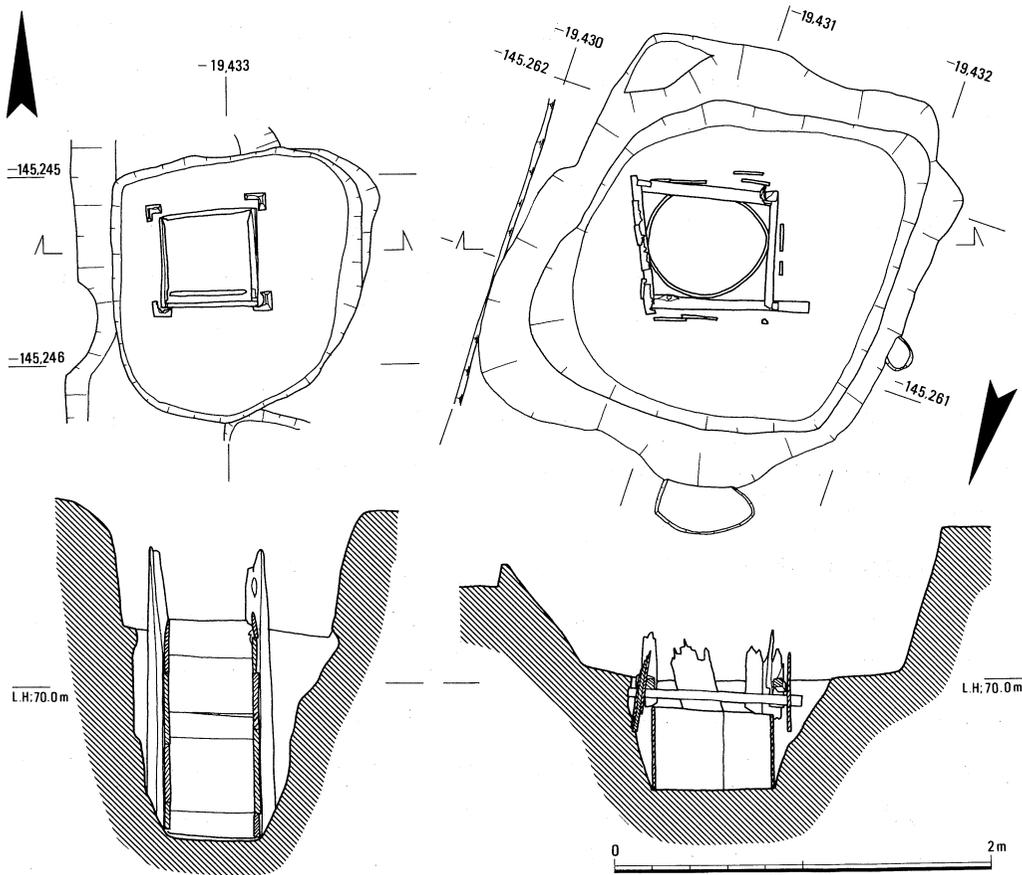
遺構番号	掘形			枿			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	平面形・構造	内法 (m)	水溜・濾過 装置等		
S E26	不整円形	東西 1.35 南北 1.42	1.75	方形横板組隅柱 留	0.45 × 0.47		製塩土器 土製玉 桃種	南側4段分北・東・ 西5段分残存
S E27		東西 1.95以上 南北 1.10以上	1.43					攪乱でほとんど壊されている ため詳細は不明。 掘形底上10cm残存。隅丸方形
S E28	楕円形	東西 1.00以上 南北 1.49以上	1.85	方形縦板組隅柱 横棧留	0.54 × 0.45			枿材はほとんど抜き 取られている。
S E29	隅丸方形	東西 2.04 南北 2.25	1.39	方形縦板組隅柱 横棧留	0.52以上 × 0.63以上	曲物	製塩土器	枿材は一部抜き取ら れている。
S E30	不整円形	東西 1.25 南北 1.47	0.58		径 0.57	曲物・礫敷	墨書土器 桃種	枿材は抜き取られて いるが、曲物の箍の み残存
S E31	不整円形	東西 0.82 南北 1.02	1.01					枿材は抜き取られて いる。
S E32	不整円形	東西 1.06 南北 0.84	1.07					枿材は抜き取られて いる。

井戸一覧表

検出した遺構の主なものには、古墳時代の溝8条、土坑2、奈良時代の溝2条、掘立柱建物11棟、掘立柱塀2条、井戸7基、土坑1、平安時代以降の溝5条がある。

古墳時代の遺構 溝、土坑ともに埋土は暗紫褐色粘質土である。

S D01~08 幅は0.2~0.5m、深さ0.02~0.2mの素掘りの溝である。国土方眼方位北でほぼ50°東に振れる溝S D01・03~06と、それらに対して直交する溝S D02・07・08がある。そのうちのS D01・02・06は平面L字型で、それぞれの片端は直角に曲がる。S D05・06から古墳時代前期の土師器の破片が出土した。これら8条の溝は同一の方眼にのっており、埋土も酷似していることから、ほぼ同時期の遺構と思われる。



井戸SE26 平面・立面図 (1/40)

井戸SE29 平面・立面図 (1/40)

S K09・10 S K09は、平面不整形で南北0.5m、東西0.4m、深さ0.25mのすり鉢状の土坑である。S K10は、周囲をいくつかの柱穴に壊されているため、平面形は不明であるが、南北0.66m以上、東西0.7m、深さ0.28mである。S K09・10とも、古墳時代前期の土師器の破片や完形に近いものがまとめて廃棄されていたが、S K09の方が遺物の状態は良好である。

奈良時代の遺構 掘立柱建物・堀については、概要を一覧表にまとめた。

S D11 発掘区南部で検出した東西溝である。両端とも発掘区外へつづく。長さ19.6m以上、幅0.9~2.5m、深さは0.1~0.3mで溝底は西へ下る。溝心の座標はX = -145,265.080m、Y = -19,440.000mである。埋土は暗茶灰色粘質土である。奈良時代前期から中頃と思われる土師器、須恵器が出土したが、破片のため詳細な時期は不明である。

S D12 発掘区北西部で検出したL字型の溝である。北端は発掘区外へ続く。東端は攪乱に削平される。長さ5.3m分、幅0.6~0.7m、深さ0.18m。埋土は暗灰色粘質土で、奈良時代の土師器、須恵器が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

S E26~32 S E26は方形横板組隅柱留め井戸枠を持つ井戸である。枠は、断面L字型

の柱の切り欠きが枠の中心を向くように四隅に立て、その切り欠きに横板を落とし込んだものである。各井戸から出土した土師器、須恵器の時期は次の通りである。S E 26は奈良時代前半。S E 27・32は遺物がほとんどなかったため不明。S E 28は奈良時代前半の高杯が掘形から出土。S E 29・30は奈良時代後半。S E 27・31・32は奈良時代だが、土器が少片のため詳細な時期は不明。また、S E 26の井戸枠底部付近から大型の平瓶が正位置で、S E 28からは同じく大型の平瓶正位置のものと、そのすぐ上部から中型の平瓶が逆さまで、S E 30からも同じく底部付近から中型の平瓶が逆さまで出土した。いずれも口縁や肩の一部を打ち欠いて井戸廃棄時に入れられたものと思われる。

S K 33 発掘区中西部で検出した平面不整形の土坑である。長径1.9m、短径1.3m、深さ0.22m。埋土は上層は暗灰色砂質土、下層は地山ブロックの2層である。上層から奈良時代前半の土師器、須恵器が出土した。

平安時代以降の遺構 4.1~4.5mのほぼ等間隔に並ぶ南北溝5条がある。出土遺物のほとんどは奈良時代の土器で摩滅した埴輪片や瓦器片も微量含まれ、平安時代以降の軒丸瓦もこれらから出土した。遺構の重複関係は、土層観察から中世以降の溝や小土坑よりも古く、奈良時代の遺構よりも新しい。しかし、明確な時期を決定づける資料には欠ける。

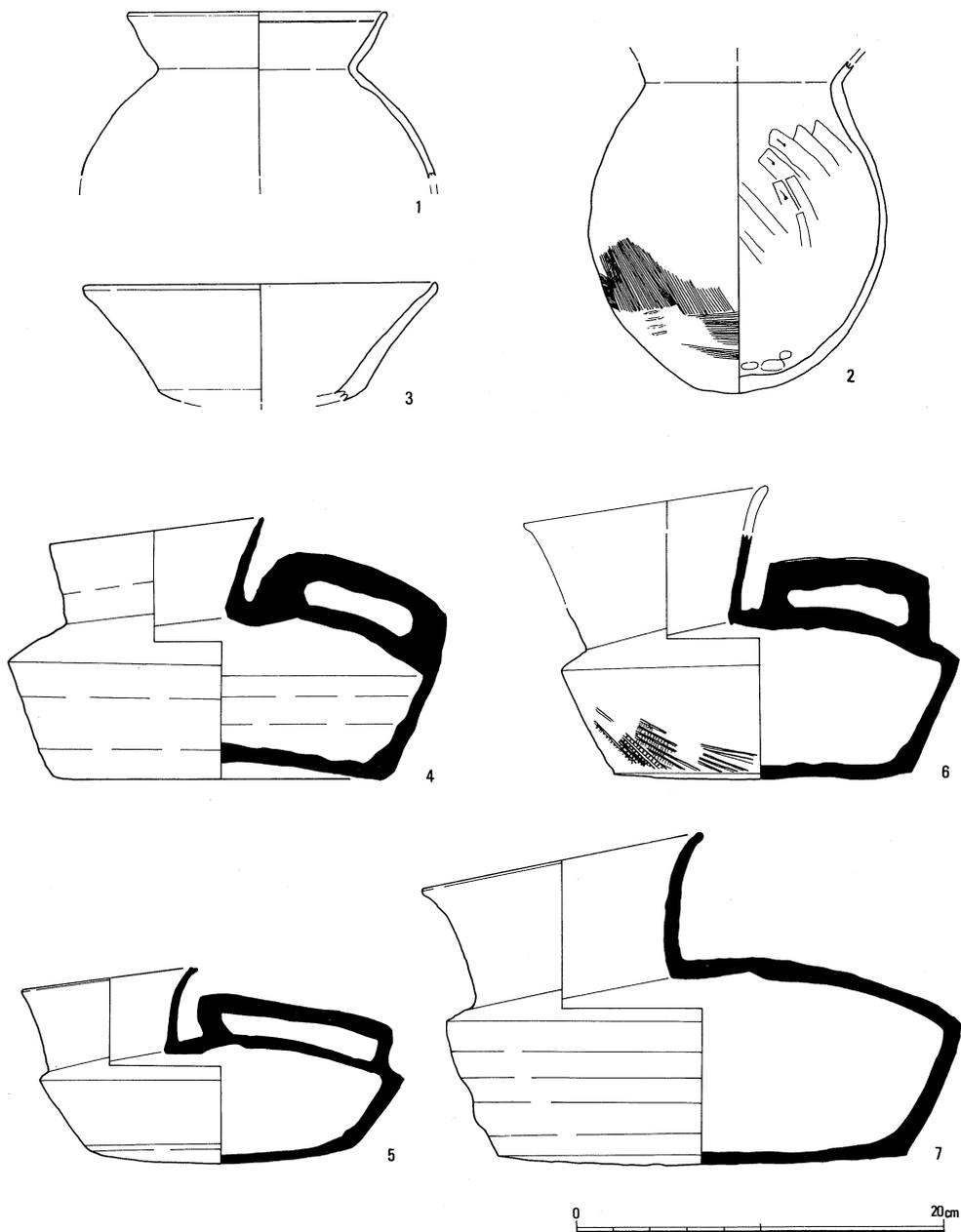
小柱穴 なお、発掘区内全体で直径0.2m前後から1.0m弱の柱穴を多数検出した。多数の小規模な建物の建て替えを想定できるが、柱穴のほとんどは建物としてまとまらない。柱穴掘形から出土した土器は細片のため詳細な時期は不明であるが、奈良時代と思われるものがほとんどであり、瓦器や古墳時代以前の土器はごく少数である。井戸の時期と合わせても、柱穴の多くは奈良時代のものと考えられる。しかし、古墳時代前期の区画のためと思われる溝や土坑も検出しており、同じ暗紫褐色粘質土の埋土の小穴も数個確認していることから、その当時の掘立柱建物の柱穴も含まれている可能性がある。(田林香織)

IV 出土遺物

主に、包含層から軒瓦、古墳時代の土坑、奈良時代の井戸から土器が出土した。

瓦類 遺物整理箱で16箱分出土した。軒丸瓦8点、軒平瓦1点、丸瓦、平瓦、埴がある。軒瓦について記す。軒丸瓦には6225種別不明1点、6236種別不明1点、型式不明4点、平安時代以降2点である。軒平瓦は6641Cである。平安時代以降の軒丸瓦のうちの1点は時期不明の南北溝から、その他は包含層から出土した。(原田憲二郎)

古墳時代の土器 土坑S K 09から出土した土器について記す。器種は、土師器甕・短頸壺・高杯がある。1は土師器甕で、口縁端部の内面がわずかに丸く肥厚する。器表は風化し、調整は不明である。2は土師器短頸壺で、口縁部を欠く。体部下半の外面には板状工具によって施されたとみられるナデ調整とかすかなタタキ目がみられる。体部内面の上半にはヘラケズリ調整がみられ、下半には指頭圧痕が残る。3は土師器高杯で口縁部はわず



古墳・奈良時代の出土土器（1／4）

かに外湾する。いずれも古墳時代前期のもので布留式の特徴がみられる。 （安井宣也）

奈良時代の土器 図示したものは、いずれも井戸から出土した平瓶である。4はS E 26から、5はS E 30から、6・7はS E 28抜き取り穴から出土した。5・7は底部外面をロクロケズリしている。6の体部外面には格子目タキの痕跡がみられる。4・5・6は青灰色を呈し、硬質の焼き上がりのもの、7は白灰色で、外面に灰緑色の自然釉がかかる。口縁部が完存するものはなく、意図的に打ち欠いていると思われる。 （池田裕英）

6 平城京右京七条一坊十五坪の調査 第349次

所在地 奈良市六条町94・99
調査期間・面積 平成8年5月15日～7月12日 1,080㎡
調査原因 老人保健施設建設（医療法人 康仁会届出）

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では右京七条一坊十五坪の北東隅にあたり、調査地の東側には十・十五坪の坪境小路西側溝が想定されている。これまで十五坪内では、昭和60年度に本市教育委員会が十五坪の西辺部で市平城京第97次調査を行っており、西一坊大路東側溝、奈良時代の掘立柱建物6棟、掘立柱塀2条、井戸1基、平安時代の井戸3基を検出した。平安時代の井戸のうち1基には、井戸枠に「湯屋□延久参年四月十日」と墨書きされた曲物が転用されており、出土遺物の実年代を知る手がかりを得るなどの貴重な成果を挙げている。調査は、これらの成果を踏まえ、小路西側溝の検出及び奈良～平安時代の宅地の様相を把握することを目的に実施した。

II 調査地の層相

発掘区内の層序は、作土（厚さ0.2m）の下に淡黄灰色砂（0.05m）、暗褐色土（0.05m）が続き、地表下0.3mで黄褐色粘土の地山となる。発掘区南西隅では暗褐色土の下に黄褐色細砂または灰色細砂が堆積している。これらの砂層は、旧河道の堆積とみられ、一時期この地点が河道になっていたことが判る。遺構は、地山上面と砂層上面（標高概ね57.2m）で奈良・室町時代の遺構を検出したが、平安時代の遺構を検出することはできなかった。

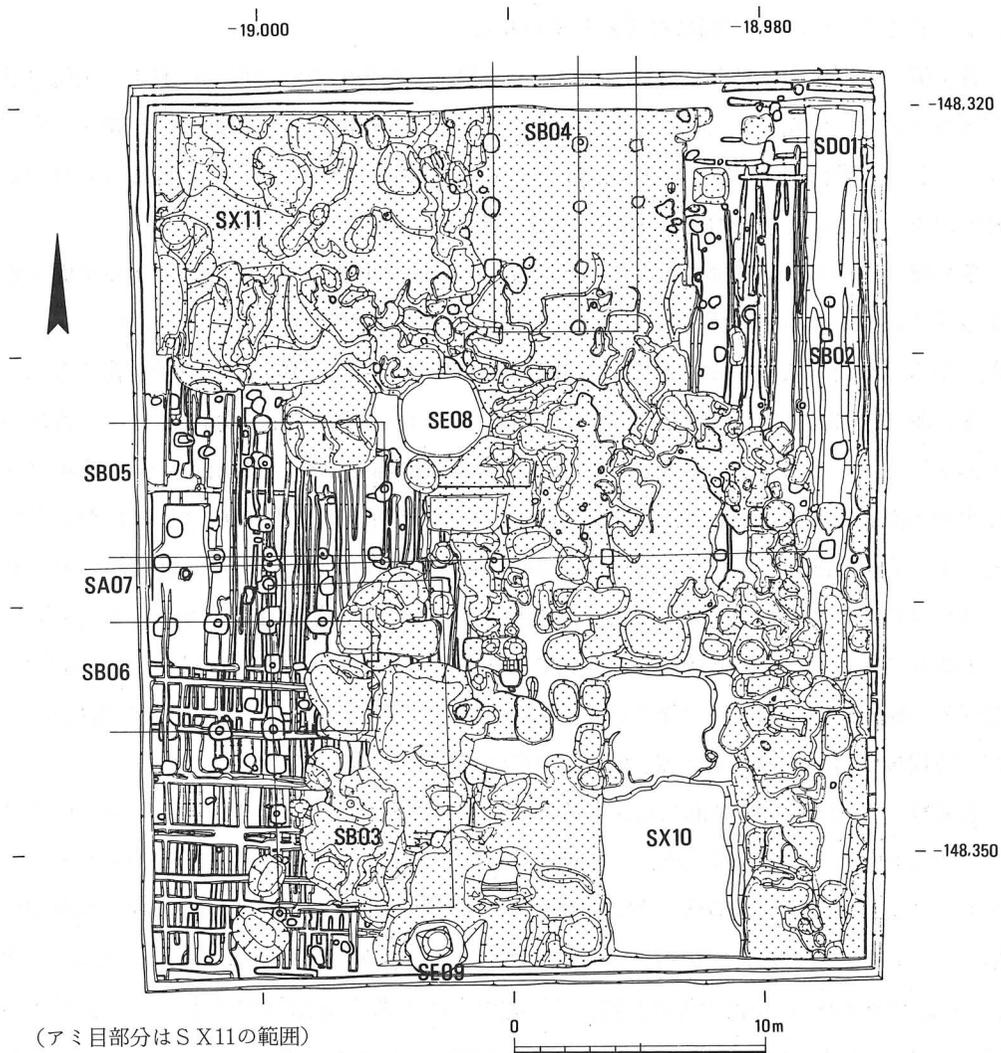
III 検出遺構

検出した主な遺構には、十坪・十五坪坪境小路西側溝1条、奈良時代の掘立柱建物4棟、掘立柱塀1条、橋、井戸2基、土坑1、室町時代の粘土採掘坑がある。

S D01 発掘区東辺で検出した南北方向の素掘りの溝で、十坪・十五坪坪境小路西側溝である。南北ともに発掘区外へ続く。後述する室町時代の粘土採掘坑で壊されている箇所もあるが、幅2.1～2.3m、検出面からの深さ0.2m、長さ34m分を検出した。埋土は茶褐色土である。溝内埋土から奈良時代後半の土師器・須恵器、丸・平瓦が少量出土した。溝心の国土座標は、 $X = -148,322.000$ 、 $Y = -18,977.100$ である。

S B02 S D01溝底で検出した1間分の掘立柱列である。柱間寸法は1.4m。橋脚の痕跡と考えられる。

S B03 発掘南西隅で検出した桁行6間、梁間3間の掘立柱南北棟建物である。柱間寸



(アミ目部分はS X11の範囲)

第349次調査 遺構平面図 (1/300)

法は、桁行が北から3.0-2.1-2.0-2.0-2.0-2.0mと不揃いである。梁行は、柱穴が壊されている箇所もあるが、おそらく2.3m等間になると考えられる。

S B04 発掘区北半部で検出した桁行4間以上、梁間4間の掘立柱南北棟建物で、東側に廂がつく。柱間寸法は、桁行が2.5m等間、梁行は妻柱を欠くため身舎は不明だが、廂の出は2.1mである。柱掘形から、土師器・須恵器片が少量出土した。

S B05 S B03の北側で検出した桁行4間以上、梁間2間の掘立柱東西棟建物で、西側は発掘区外へ続く。柱間寸法は、桁行が2.1m等間、梁行は北東隅の柱穴を欠くが、残存する柱穴から2.7mの等間になると考えられる。

S B06 S B03と重複して検出した桁行4間以上、梁間2間以上の掘立柱東西棟建物である。柱間寸法は桁行が2.1m等間。梁行は、妻柱の柱穴が壊されているため詳細は不明

だが、おそらく2.1mの等間になると考えられる。

S A07 発掘区中央付近でS B05と重複して検出した東西方向の掘立柱塀で、西端は発掘区外へ続く。東端の柱穴は、S D01溝底で検出した。柱間寸法は、東から1間～3間目までは4.2m等間、それ以外は2.1m等間である。おそらく1間～3間目の間にはそれぞれ柱穴があったものと思われる。重複関係からS B05よりも古いことが判る。

S E08 S B05の東で検出した井戸である。掘形は、東西3.4m、南北3.6mの平面方形を呈する。検出面からの深さは、3.1mである。井戸枠は抜き取られており残存しない。埋土からは奈良時代中頃の土器片が少量と奈良三彩小壺蓋、瓦類および木簡が出土した。

S E09 発掘区西端で検出した井戸である。掘形は、東西2.4m、南北2.2mの平面隅丸方形を呈する。検出面からの深さは2.7m。掘形は二段掘りされ、検出面からの深さ0.9mで東西・南北ともに一辺1.2mの掘形になる。井戸枠は抜き取られて残存しないが、井戸内埋土から幅0.12m、長さ2.0m、厚さ0.03mの板材が2枚出土しており、縦板組の井戸枠が構築されていたものと考えられる。奈良時代の中頃の土師器・須恵器が若干出土した。

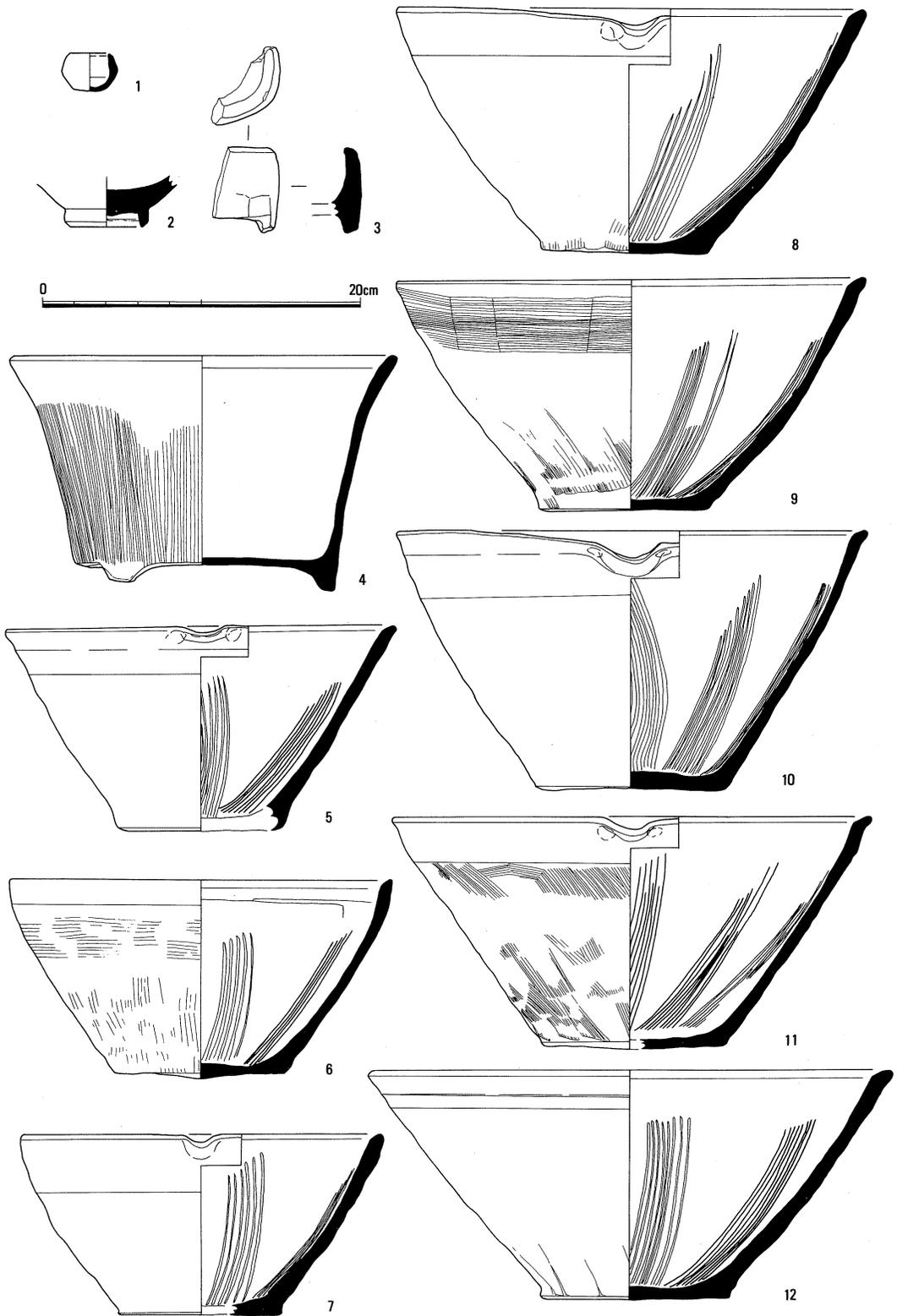
S X10 S E09の東側で検出した土坑である。東西6.0m、南北12.0m以上で、南側は発掘区外へ続く。検出面からの深さは、約0.4mである。土坑内には茶褐色粘土が堆積する。奈良時代後半の土師器・須恵器、軒平瓦(6702A)が少量出土した。

S X11 発掘区のほぼ全面に及んで検出した粘土採掘による土坑群である。発掘区全体の約70%を占めている。検出面からの深さは、浅い所で0.3m、深い所では1.0mもある。S X11により奈良時代の遺構の多くが壊されたものと考えられる。土坑内の埋土は黄褐色粘土のブロックを含んだ灰色粘土である。埋土からは、奈良時代の土師器・須恵器、軒丸瓦(6225種別不明)、13世紀代の瓦器、15世紀後半の瓦質土器播鉢が出土した。瓦質土器播鉢は、意識的に据えて埋められたかのような状態で6ヶ所で検出した。(三好美穂)

IV 出土遺物

遺物整理箱で43箱分の瓦類、土器類、石製品、木製品が出土した。大半が奈良時代と室町時代の土器類と丸・平瓦である。以下、土器類と石製品、木製品について記す。

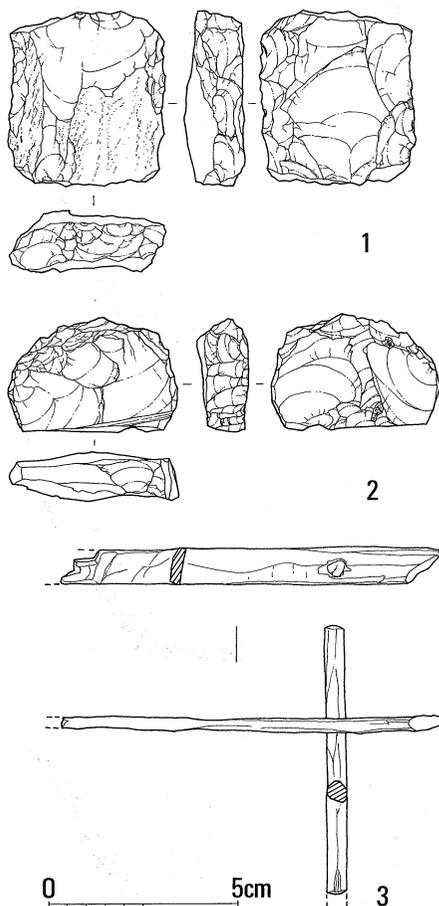
土器類 遺物整理箱で22箱分出土した。ここでは、粘土採掘坑S X11出土の土器について記す。S X11からは遺物整理箱で13箱分の土器が出土した。大半は奈良時代の土師器・須恵器と室町時代の土器で、鎌倉時代瓦器椀・土師器皿が少量あるだけである。室町時代の土器には、瓦質土器播鉢(5～12)・深鉢(4)・方形浅鉢(3)、ミニチュア壺(1)、風炉等、青磁碗(2)、天目茶碗等がある。瓦質土器播鉢・深鉢はいずれも完形またはそれに近い状態で、播鉢18個体、深鉢1個体が出土した。瓦質土器播鉢は、口径が25cm以下のもの(5～7)、30cm前後のもの(8～11)、32cm以上のもの(12)の3種類があり、さらにそれぞれ器高が浅いものと深いものに分かれる。口縁部が全周残るものには必ず片口



粘土探掘土坑S X11出土土器 (1/4)

があることから、口縁部が一部欠損して片口が分からないものも、おそらく片口があるものと想定できる。内面の拵目は1単位5～10本で6～11条あり、拵目の単位と条数の組合せは11種類ものバリエーションがあることが判る。体部外面にはハケメ調整（または板状の工具のナデ調整）があるものもないものがあるが、いずれも外面には指または掌で押さえ付けた痕跡が残る。内面はナデ調整であるが、板の小口痕跡を残すものが数個体あることから、おそらくはコテで調整しているものと思われる。なお、7と8は入れ子状になって出土した。5・7は底部の中央を穿孔していた。深鉢は口径24.3cm、器高14.8cmで、底部には3足がある。外面は縦方向のヘラミガキで調整する。ミニチュア壺は口径2.4cm、器高2.4cm、最大径3.5cmである。表面の炭素の吸着は部分的にししか見られない。方形浅鉢は角の部分の破片で、内面には炭素の吸着が見られない。青磁碗は龍泉窯系青磁で、高台内側まで施釉する。これらはいずれも15世紀後半のものと考えられる。（中島和彦）

石製品・木製品 石製品には石鏝の未製品がある。1は巡方の未製品である。厚手の剝片を用いて、平面形がほぼ正方形の板状に加工している。縦4.6cm、横4.2cm、厚さ1.6cm。硅岩製。遺物包含層出土。2は丸柄の未製品である。厚手の剝片の一端に切込みを入れて折取った後、厚さを整え、周縁を調整して半円形状に加工している。折取りに失敗し、折れ面を再度調整している。縦3.1cm、横4.5cm、厚さ1.3cm。安山岩製。S X11出土。3は用途不明品の木製品である。厚さ0.4cm、幅0.9cmの細い板状に、直径約0.5cmの棒を差込んだもので、図の左端と下部は欠損している。棒状部分はなにかの軸として機能していた可能性もある。S E09内出土。



木簡 木簡は3点出土した。3点とももとは同一の板材と思われる。このうち2点は文字が接合し、墨書後に割裂いて短冊形に整形したものである。墨書は方位と数字を記したもので、用途は不明。いずれもS E08出土。

1 「西一三四五六七 (220)×(23)×5 019

・「北一三四^{五六}□□

2 ・「□□□□□□ (158)×(8+9)×6 019

(松浦五輪美)

石製品・木製品 (1/2)

7 平城京左京五条四坊九坪の調査 第350次

所在地 奈良市大森西町145-1
調査期間・面積 平成8年5月20日～6月25日 382㎡
調査原因 共同住宅建設（奥田照雄氏届出）

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では、左京五条四坊九坪北端部のほぼ中央にあたる。したがって、坪内の様相に加えて、四条大路の南側溝及びそれに関わる遺構の検出を目的として実施した。また、調査地の北西では、弥生時代後期の溝が（平城京第266次）、北東でも同時代の溝・土坑が（平城京第208・335次）検出されており、周辺に弥生時代の集落が存在することは疑いが無い。したがって、その範囲を確認することも目的とした。

II 調査地の層相

層序は、作土（黒色土・暗灰色土・暗茶灰色土・灰色土）の下が、黄褐色土あるいは黄褐色砂（標高62.7～62.8m）で、この上面で奈良時代、弥生時代の遺構を検出した。また、発掘区南端でこの遺構面を掘り下げたところ、淡茶灰色粘土あるいは灰色砂が現われ、この上面から掘りこんでいる遺構を検出した。

III 検出遺構

弥生時代の遺構 竪穴住居2棟、溝2条がある。

S B 01 発掘区北端で検出した平面隅丸方形の竪穴住居。南端部を確認した。一辺4.5m以上。壁溝がめぐる。

S B 02 発掘区中央で検出した平面隅丸方形の竪穴住居。東半部を確認した。一辺5.5m以上。壁溝を確認した。

S D 03 S B 02と重複した位置で検出した素掘りの蛇行溝。S B 02より新しい。北から南西方向にのびる。15m分を確認した。幅0.3m、深さ0.1m。

S D 04 発掘区南端で検出した緩やかに蛇行する素掘りの溝。自然河川であろうか。東北東から西南西方向にのびる。10.5m分を確認した。幅2.8～3.5m。深さは最も深い部分で0.6m。埋土の状況は粘土と砂の互層である。

奈良時代の遺構 掘立柱建物7棟、掘立柱塀4条、溝4条、土坑1基がある。

S F 05 発掘区北端で検出した道路。南端を確認したにとどまるが、検出位置からみて四条大路と思われる。幅3.5m分を確認した。

S X 06 S F 05を横切る溝。暗渠と思われる。長さ2.5m分を確認した。幅0.4m。

SD07 四条大路SF05の南側溝。長さ2.5m分を確認した。幅1.8m。深さ0.15m。なお、溝心の国土座標は $X = -147,085.75\text{m}$ 、 $Y = -16,656.32\text{m}$ である。

SA08 SD07の南で検出した東西方向の築地塀。堰板留の添柱とみられる柱穴を確認した。

SD09 SA08の南で検出した東西方向の素掘りの溝。築地塀SA08の雨落溝とみられる。幅1.0~3.6m、深さ0.3m。後述のSA12より新しい。

SK10 SD09と重複した位置で検出した土坑。先後関係は不明。平面は隅丸長方形で、東西2.1m、南北3.4m、深さ0.15m。

SD11 SD09と重複した位置で検出した素掘りの溝。SD09より新しい。改修されたのか段状に掘られている。長さ4.5m分確認した。幅は4.6mだが、岸が削られたものと思われ、本来は2m前後であろう。深さ0.5m。

SA12A・B SD09南岸沿いで検出した東西方向の掘立柱塀。2間(2.2m)分確認した。柱間は1.1m等間。同位置で建替があり、Bは東から2本目の柱を欠く。

SB13 SD11の南で検出した南北2間(4.0m)の掘立柱列。掘立柱建物の東側柱列と思われる。柱間は2.0m等間。

SB14A・B SB13と重複した位置で検出した東西棟の掘立柱建物。桁行2間(3.6m)以上、梁間2間(4.2m)の身舎に南廂が付く。柱間は桁行1.8m等間、梁間2.1m等間。廂の出は2.4mである。同位置で建替があり、Bは東から2間目に間仕切りがある。

SB15 SB14と重複した位置で検出した南北棟の掘立柱建物。桁行2間(4.5m)、南北2間(3.3m)。柱間は桁行が北から2.4m、2.1m、梁間が西から1.5m、1.8m。

SB16 発掘区南端部で検出した南北2間(3.6m)の掘立柱列。掘立柱建物の東側柱列と思われる。柱間は1.8m等間。

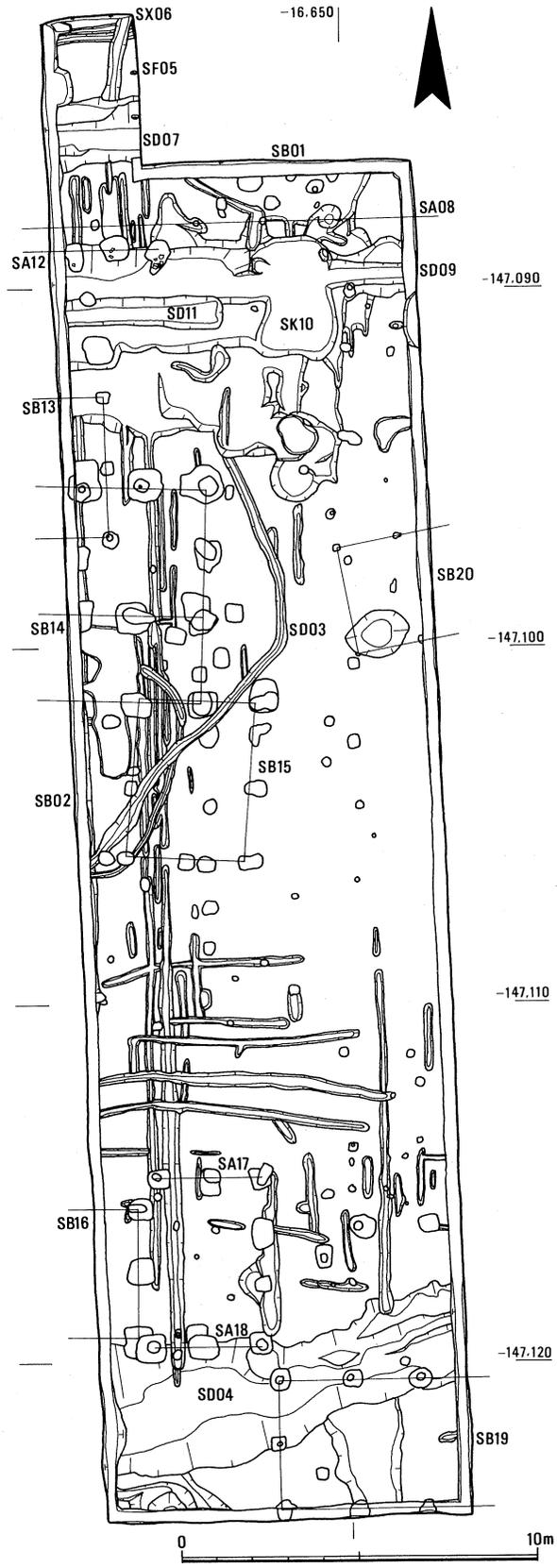
SA17 SB16の東で検出した東西2間(3.0m)の掘立柱塀。柱間は1.5m等間。

SA18 SA17と平行して検出した東西2間(3.0m)の掘立柱塀。中央の柱穴の柱位置は不明である。

SB19 SA18の南で検出した東西棟の掘立柱建物。桁行2間(4.2m)以上、梁間2間(3.6m)。柱間は桁行2.1m等間、梁間1.8m等間。

SB20 SB14の東で検出した掘立柱建物。建物主軸は北でやや西に振れるため、奈良時代より遡る可能性がある。東西1間(1.8m)以上、南北2間(3.0m)。西側柱列の中央の柱穴を欠く。

なお、下層で検出した遺構は、溝1条と土坑1基である。溝の埋土は灰色砂礫で、自然河川と思われる。出土遺物がなかったため、遺構の時期は不明だが、上層遺構の時期からみて、弥生時代以前の遺構であることは間違いない。



第350次調査 遺構平面図 (1/200)

IV 出土遺物

弥生時代の土器・石器（スクレイパー・剥片）、飛鳥時代の須恵器、奈良時代の土師器・須恵器・瓦・埴がある。このうち、まとめて出土した弥生時代の溝SD04出土の土器について説明する。

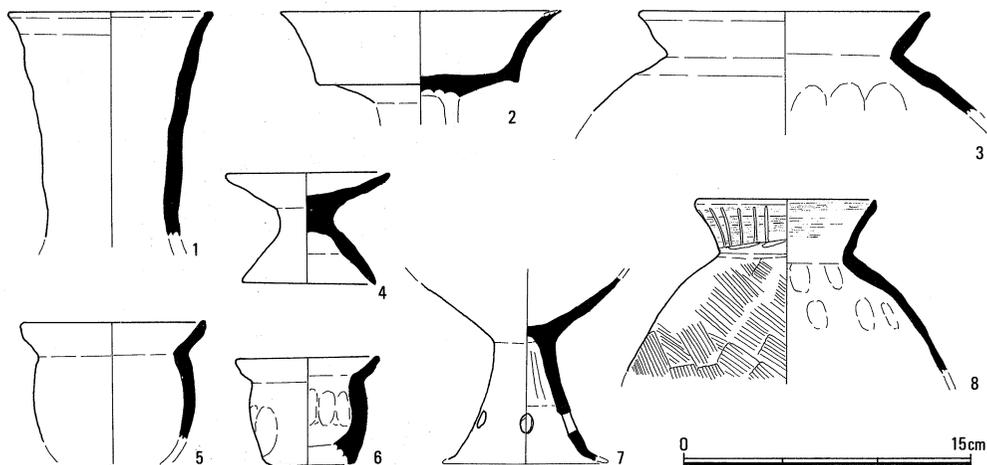
1・2・8は壺である。1は長頸壺の口頸部である。口径10.2cm。やや緩やかに外に広がる。端部は外反し、内側にやや肥厚する。調整は、外面にわずかにミガキがみられる。2はいわゆる二重口縁壺の口縁部である。端部を欠く。口径14.8cm。外反して外に広がる。8は広口壺である。体部下半を欠く。口径9.3cm。体部と口縁部の境は、くの字に屈曲し、口縁部は外に広がる。端部は外にやや肥厚する。体部外面は斜め方向のハケメ、内面は指頭圧痕がみられる。口縁部外面はヨコナデののち、縦方向のミガキが間隔を開けてみられる。

3は甕の口縁部である。口径15.2cm。体部と口縁部の境は、くの字に屈曲し、口縁部は外に広がる。端部は丸い。

4は小形器台。口径8.6cm、脚径7.0cm、器高5.9cm。受部は浅く、大きく外に広がる。脚部はほぼ直線的に外に広がり、端部では器壁が薄くなる。

5・6は小形鉢。いずれも底部を欠くが、6は平底とみられる。口径は5が9.5cm、6が7.3cm。6の器高が5.7cm、底径が4.7cmである。いずれも体部と口縁部の境はくの字に屈曲し、短い口縁部はやや内彎気味に外に広がる。口縁端部は丸い。6は体部内外面に指頭圧痕がみられる。

7は高杯である。口縁端部、脚端部を欠く。口縁部はやや内彎気味に外に広がる。脚はほぼ直線的に外に開き、端部は外反する。円形の透かしが4孔みられる。（森下浩行）



溝SD04出土土器（1/4）

8 平城京左京五条六坊八坪の調査 第352次

所在地 奈良市南新町19-1・4

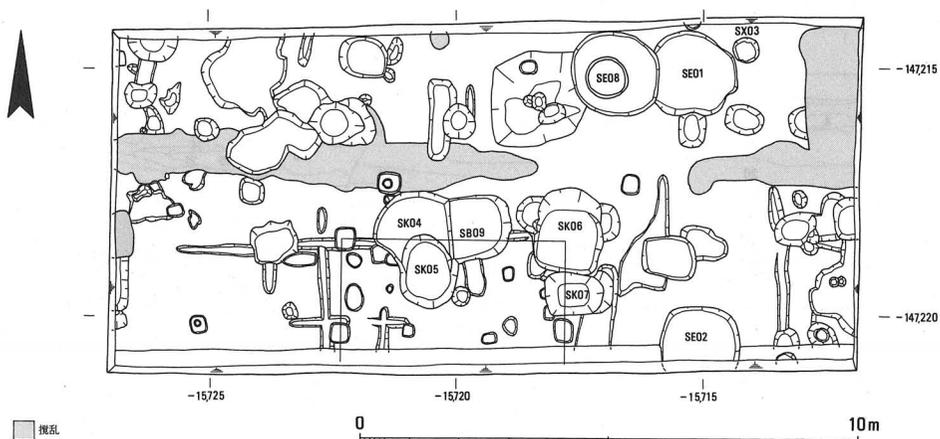
調査期間・面積 平成8年5月30日～6月13日 105㎡

調査原因 共同住宅新築（松川公明氏届出）

I 調査の目的 調査地は平城京左京五条六坊八坪の南端中央部にあたる。周辺での調査が少ないため、遺構の把握を目的とした。

II 調査地の層相 層序は上から砕石、真砂土（盛土）、黒灰色砂質土、橙褐色粘質土、暗灰色砂質土、淡茶灰色砂質土と続き、現地表下約0.8mで黄褐色砂礫の地山となる。地山の標高は概ね71.6mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

III 検出遺構・遺物 検出遺構には近世の井戸2基、埋甕1、土坑4、近代の井戸1基、時期不明の掘立柱建物1棟がある。SE01・02は石組の井戸枠が抜き取られている。前者から17世紀代の土師器皿・鉢・炮烙、国産陶器碗・瓶・播鉢・壺・甕、後者から18世紀初頭の土師器皿・炮烙、国産陶器碗・皿・瓶・壺・甕・香炉が出土した。SX03は瓦質土器甕を埋めたもので、用途は小便器である。SK04～07は平面隅丸、あるいは不整形な土坑で、深さ約0.4～0.7mである。遺構の性格は不明で、17世紀後半の土師器・国産陶器類が出土した。SE08は近代の井戸である。SB09は東西2間（4.4m）、南北1間（1.8m）分を検出した。東西柱間寸法は2.2m等間である。土師器片が出土した柱穴もあるが、時期は特定できなかった。そのほか、建物としてはまとまらなかったが、8～9世紀初頭の土師器・須恵器片が出土した柱穴と瓦質土器片が出土した柱穴がある。 （宮崎正裕）



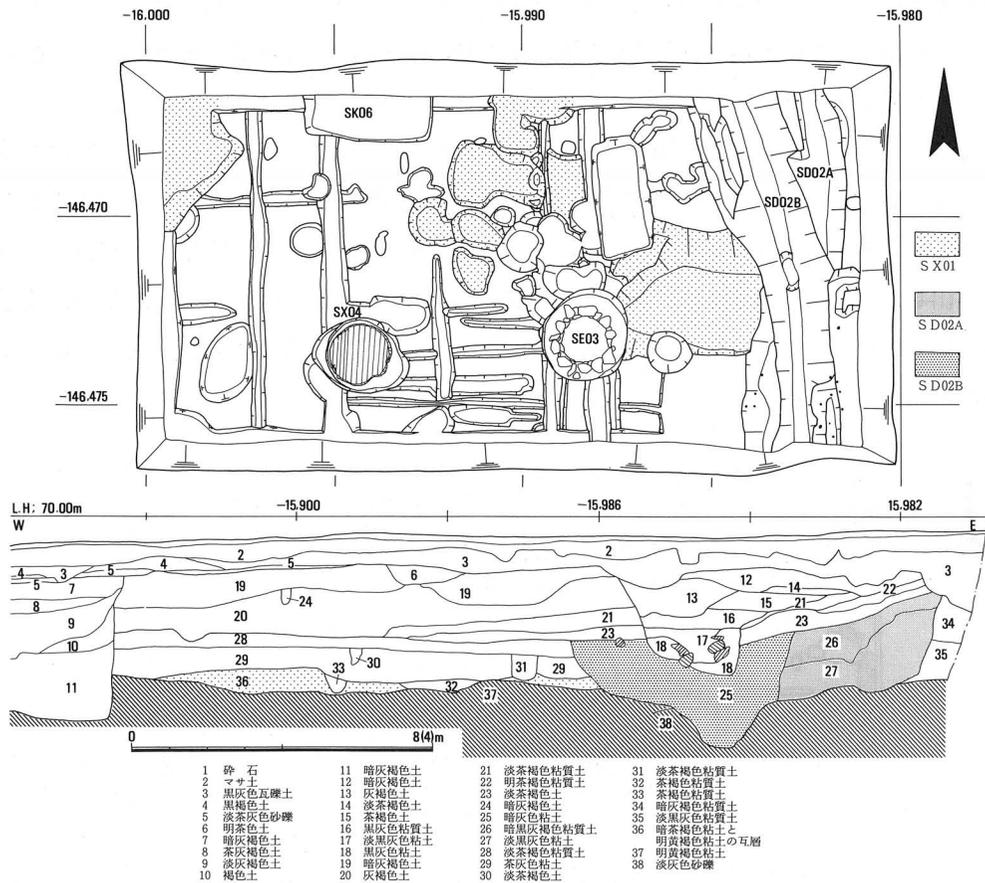
第352次調査 遺構平面図（1/150）

9 平城京左京三条五坊十三坪の調査 第354次

所在地 奈良市西之阪町5-1他
 調査期間・面積 平成8年7月15日～8月21日 220㎡
 調査原因 (仮称)西之阪児童館他建設(奈良市長通知)

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では左京三条五坊十三坪のほぼ中央に位置し、また近世奈良町の西端に位置する。十三坪内では過去2回の調査が行われている。発掘区の西約80mの第117次調査では江戸時代の土坑を10数基検出し、北東約60mの第287次調査では平安時代後期から鎌倉時代の遺構と整地土を検出している。今回の調査においても中近世の遺構の検出が予想され、奈良町縁辺部の様相を知る資料の確認が期待された。



第354次調査 遺構平面図(1/200) 北壁土層図(1/100)

II 調査地の層相

発掘区内の層序は、上から近現代の盛土、江戸時代の整地土の暗灰褐色土・淡灰褐色土、室町時代の整地土の淡茶褐色粘質土・茶灰色粘質土で、現地表下約1.8mで地山の明黄褐色粘土または淡灰色砂礫になる。地山の標高は約67.8mで、発掘区内の地山はほぼ水平である。また発掘区北東端で瓦器を含む整地土暗灰褐色粘質土と淡黒灰色粘質土を確認した。発掘区内西側にはこの整地土がないことから、第287次調査で確認した平安・鎌倉時代の整地土はこのあたりで終わると考えられる。

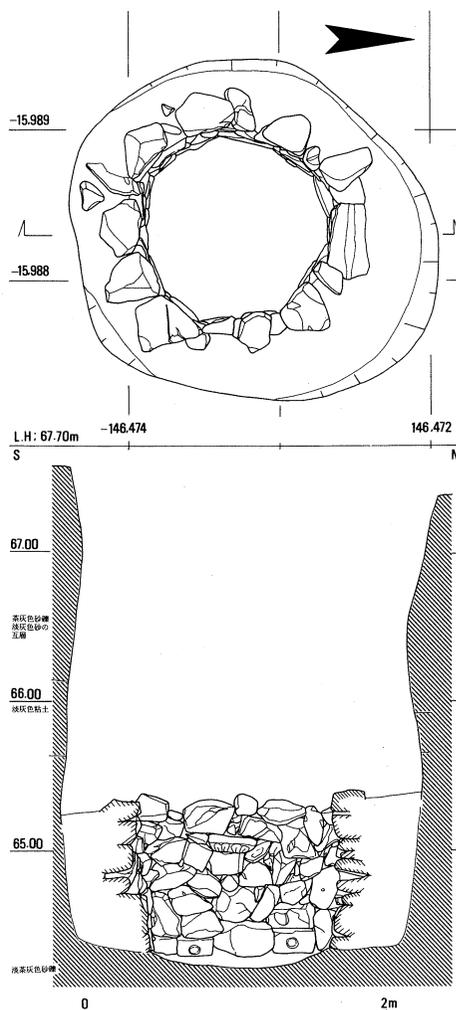
III 検出遺構

地山上面で奈良・鎌倉・安土桃山・江戸時代の遺構を検出した。

奈良・鎌倉時代の遺構 SX01がある。平面不正形で、深さは約0.1~0.5mある。土師器、須恵器の細片が出土した。黄褐色粘土の地山の部分のみに広がっていることから、この粘土の採取坑と考えられる。

また地山上面で幅約0.5mの耕作に伴うと考えられる東西南北方向の素掘りの溝を数条検出した。出土遺物に瓦器碗の破片が1片あり、室町時代の整地土に覆われていることから、鎌倉時代頃のものと考えられる。

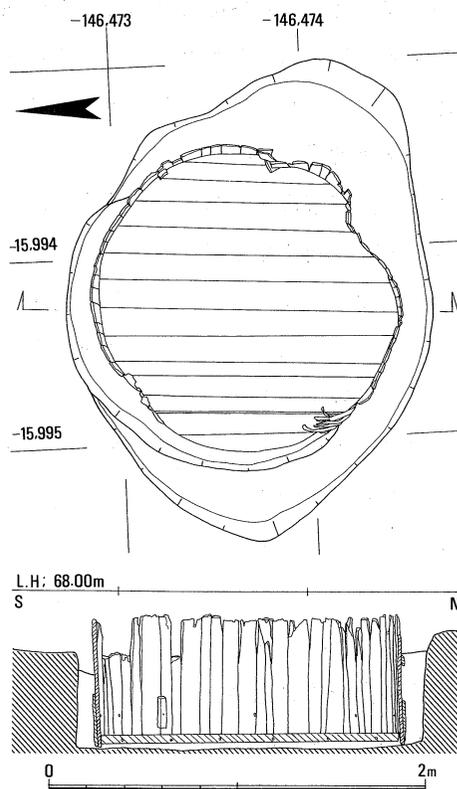
安土桃山時代の遺構 溝SD02A・B、井戸SE03、埋桶遺構SX04、平面不正円形の土坑がある。SD02は南北方向の素掘りの溝で、溝の主軸は北でやや西へ傾く。ほぼ同じ場所にA・Bの2時期の溝が重複しており、いずれも発掘区南北へ続いてゆく。古い溝SD02Aは、新しい溝SD02Bで西の肩が壊されているが、幅約2m分、深さ約1m分を確認した。SD02Bは幅約3m、深さ約1.4mである。いずれも埋土から16世紀後半の遺物が多数出土した。井戸SE03は円形石組井戸である。掘形は径約2.4mの平面円形で深さは約3.3mである。石組は内法径1.3mの平面円形で、底から1.1m分残る。石組には五輪塔等が使用されている。埋土から土器が少量



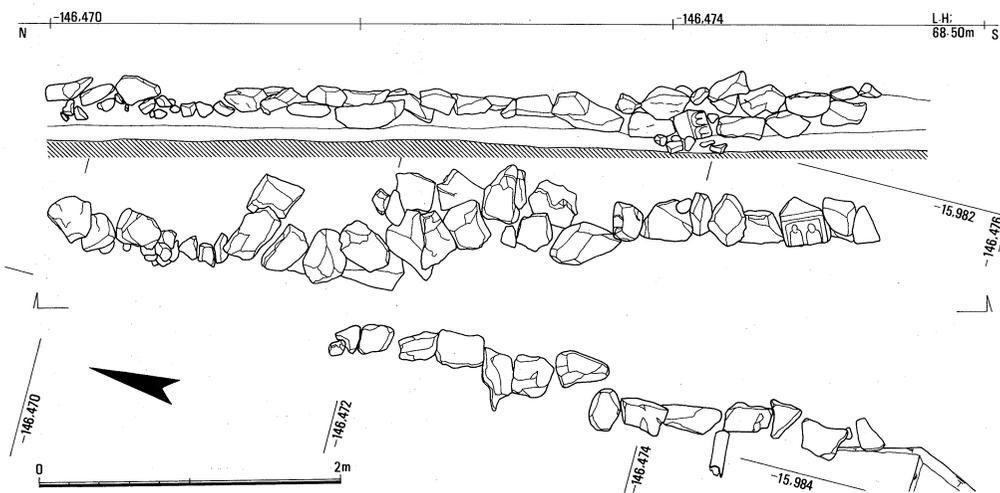
井戸SE03 平面・立面図 (1/50)

出土した。埋桶遺構 S X04は長径2.6m、短径1.9mの平面楕円形の掘形に、桶を据えた遺構である。桶側は底から0.7m分残存しているが、西側の桶側の一部が現代の攪乱で壊されている。桶は径1.57mの底板に桶側を立て、竹のタガが巻かれる。底板は厚さ約5cm、幅8cmか15cmの板を木の合釘でとめ、全部で14枚ある。桶側の内面には幅約5cm、長さ約15cm、厚さ約2cmの角材が鉄釘で10個以上打ち付けられている。角材は小口面の一方を底板に向け、底板から5cm上の所にすべての小口面が揃うようにしている。埋土からは土器と共に獣骨等が出土している。

江戸時代の遺構 石組溝 S D05と土坑 S K06がある。S D05は S D02の埋没後ほぼ同じ位置に掘削された南北方向の溝で、長さ5.5m分、石組1～2段分（高さ0.2～0.4m分）を検出した。溝の内法の幅は北で約0.3m、南で約1.2mで、南に行くにしたがい広がる。発掘区北壁の土層観察から溝は深さ約1.2mあり、石組の上の部分は抜取られていることがわかる。石組には五輪塔や板碑仏等の石造物が使われる。S K06は東西3.4m、南北1.2m以上、深さ1.9mの平面方形になると考えらる土坑で、発掘区外北に続く。18世紀後半の土器が出土した。



埋桶遺構 S X04 平面・立面図 (1/40)



石組溝 S D05 平面・立面図 (1/50)

IV 出土遺物

土器類は、奈良・平安時代後期～江戸時代の各時期のものがみられる。土師器・瓦質土器・国産陶器・輸入磁器があり、大半はS D02から出土した。

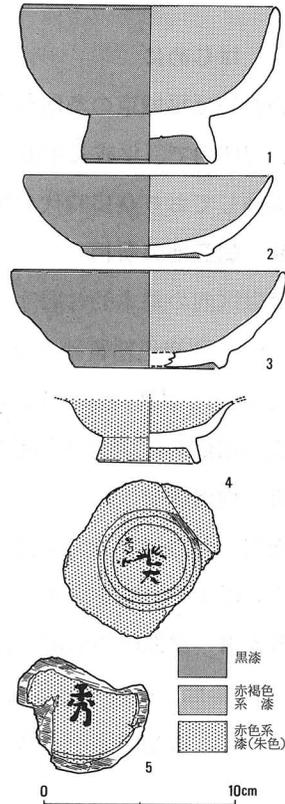
瓦類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦がある。軒丸瓦は平安時代以降の巴紋瓦4点、型式不明1点、軒平瓦は平安時代以降の唐草紋3点である。 (中島和彦)

木製品は16世紀後半の溝S D02A・Bと、井戸S E03・S X04、江戸時代の石組遺構S D05・中近世の包含層から合計30点出土している。出土したのは漆碗(9点)、曲物(8点)、箸(7点)、その他(6点)である。

出土遺物のなかで溝S D02A上層出土の漆碗が比較的まとまった資料であるため、主なものを図化し、報告する。

溝S D02出土の漆碗はすべて高台付きである。漆の塗方から大きく2種類に分けられる。1～3は厚手で、外面は黒漆内面は赤褐色系漆を塗る。塗りは粗く漆の残存状況も不良である。1は口径13.6cm、器高8.4cm。底面に「井」が線刻されている。2は復元径14.5cm、器高5.1cm。3は復元径13.2cm、器高4.3cm。4・5はいずれも底部しか残存していないが、1～3よりも薄手に仕上げ、内外面とも赤色系漆(朱色)を丁寧に塗る。共に底部に黒漆で字または文様がかかっている。4は高台径5.5cm、残存高3.2cm。5は残存高1.9cm。

動物遺存体 S X04、土坑S K06、溝S D01、S D05から哺乳類、魚介類の動物依存体が出土している。そのうち、S X04から比較的まとまりのある資料が出土しており、種類と部位、点数を以下の表としてまとめておく。 (久保邦江)



S D02出土漆碗(1/4)

種類	部位	左右	点数	備考	種類	部位	左右	点数	備考	種類	部位	左右	点数	備考
イヌ	頭骨		1	大型、脳を取り出している。	イノシシ	肩甲骨	右	1		ウマ	肋骨		1	
"	上腕骨	右	2	1点は刃物の痕跡あり。病気であったことが判明。もう1点は中央で割られている。	"	上腕骨	右	3	うち2点に刃物痕跡うち2点近位未骨化、遠位化骨済	シカ	大腿骨	右	1	近位・遠位あるが中央を欠
"	尺骨	左	1		"	橈骨	右	1	近位端化骨済、遠位端未化骨	"	中足骨	右	1	
"	橈骨	左	1		"	尺骨	右	1	近・遠位未化骨	"	脛骨	左右	各1	左のものは体部
"	肋骨	左	1	刃物痕跡	ウマ	頸椎		1	半載される	マダロ	前上顎骨	左	1	
"	寛骨	左右	3	右1-刃物痕跡・左2-斧の痕	"	基節骨	左右	3	右1・左2	"	擬鎖骨	左右	各1	
"	大腿骨	左	1	骨端部未化骨	"	中節骨	左	2		"	椎骨		1	
イノシシ	椎骨		1		"	末節骨	左右	4	右2・左2	アワビ	貝殻		2	何れも破片。接合するか?

S X04出土動物遺存体一覧表

10 平城京左京四条三坊六坪の調査 第355次

所在地 奈良市三条松町168-1
調査期間・面積 平成8年8月2日～9月12日 380㎡
調査原因 共同住宅建設（大西弘氏届出）

I はじめに

調査地は平城京の条坊復元では、左京四条三坊六坪の中央やや南西よりに位置する。また、同坪内で、平成6年度に奈良県立橿原考古学研究所が本調査地の北約50mで発掘調査を実施しており奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土坑などの遺構を検出している。

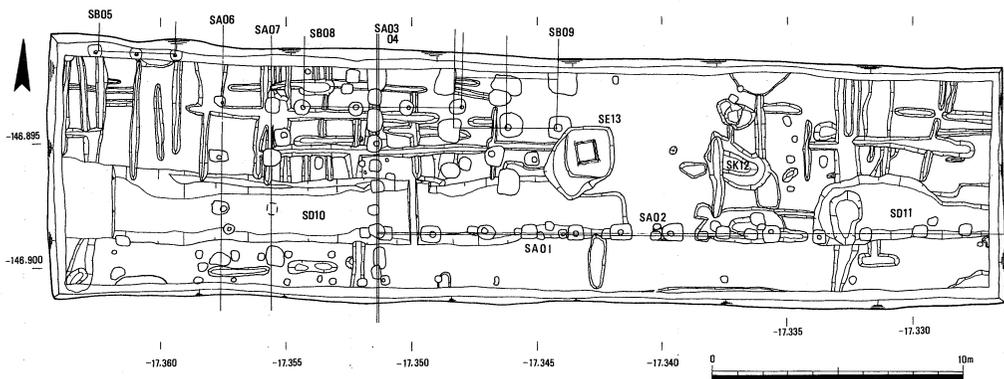
II 調査地の層相

発掘区内の基本的な層序は、黒色土（作土、厚さ0.1m）以下、明黄灰色砂質土（厚さ0.15m）、灰褐色粘質砂（厚さ0.2m）、灰褐色粘土（厚さ0.2m）、淡灰茶色シルト（厚さ0.1m）、青灰色粘土（厚さ0.2m）と続き、現地表下約1.0mで暗褐色粘土の地山に至る。奈良時代の遺構面は地山の上面で、標高は概ね59.1mである。

III 検出遺構

検出した遺構には、奈良時代の掘立柱建物3棟、掘立柱塀6条、井戸1基、溝、土坑がある。以下で概略を記す。

SA01 発掘区中央南で検出した東西塀。東西8間（14.4m）である。柱間寸法は1.8m（6尺）等間。西から2番目の柱穴はSA02の柱穴で壊されている。西は後述のSA03に取りつく。重複関係からSA02およびSD10・11より古い。



第355次調査 遺構平面図（1/300）

S A02 発掘区南で検出した東西塀。13間 (23.4m) 分を検出した。西は後述の S A04 に取りつく。柱間寸法は西から2.1-2.1-1.8-1.8-1.8-2.1-2.1-1.8-1.8-2.1-2.1-1.8mである。重複関係から S A01より新しく S D10・11よりも古い。S A02は S A01にほぼ重複して建てられていることから、S A01を建て替えたものである。また、S A01・02ともに坪境小路心南から北へ3分の1付近の位置にある。

S A03 発掘区中央西で検出した南北塀。6間 (10.8m) 分を検出した。柱間寸法は1.8m (6尺) 等間。重複関係から S A04、S D10よりも古い。

S A04 発掘区中央西で検出した南北塀。5間 (9.0m) 分を検出した。柱間寸法は1.8m (6尺) 等間。重複関係から S A03よりも新しく、S D10よりも古い。S A04は S A03にほぼ重複するように建てられていることから、S A03を建て替えたものである。

S B05 発掘区北端で検出した東西2間 (3.0m) の掘立柱建物。柱間寸法は1.5m (5尺) 等間。発掘区外に続くため建物規模については不明である。

S A06 発掘区中央西で検出した南北塀。5間 (10.5m) 分を検出した。柱間寸法は2.1m (7尺) 等間。重複関係から S D10より古い。

S A07 発掘区中央西で検出した南北塀。5間 (10.5m) 分を検出した。柱間寸法は2.1m (7尺) 等間。北から3番目の柱穴は S D10に壊されている。重複関係から S D10より古い。

S B08 発掘区北辺で検出した東西3間 (6.3m) の掘立柱建物。柱間寸法は2.1m (7尺) 等間。発掘区外に続くため建物規模については不明である。

S B09 発掘区北辺で検出した南北1間 (2.1m) 以上、東西2間 (4.2m) の総柱建物。柱間寸法は東西・南北ともに2.1m (7尺) 等間。発掘区外に続くため建物規模については不明である。

S D10 発掘区中央で検出した東西方向の素掘りの溝。幅2.2m、検出面からの深さ0.3m、長さ23m分を検出した。西は発掘区外に続く。埋土から奈良時代中頃～後半の土師器・須恵器・製塩土器、軒平瓦6664D 1点、6721H 1点、6691A 1点、漆器が出土した。

S D11 S D10の東で検出した東西方向の素掘りの溝。幅1.5～2.5m、検出面からの深さ0.2m、長さ7.5m分を検出した。東は発掘区外に続く。S D10・11共に灰褐色粘土で埋まっており、幅も同じで位置的にみても S D10と一連の溝であると思われる。S D10・11とも坪境小路心南から北に3分の1付近の位置にある。

S K12 発掘区中央東で検出した平面が不整形の土坑。南北約2.0m、東西約2.6m、検出面からの深さ0.15mである。埋土から8世紀末頃の土師器片、須恵器甕・杯Bが出土した。

S E13 発掘区中央で検出した掘形の一边が約2.0mの平面が隅丸方形を呈する井戸で

ある。検出面からの深さ1.4mである。枠組構造は縦板組隅柱横棧留めである。井戸枠内法は南北約0.68m、東西約0.65mで底部から約1.0mほどが残存する。横棧は3段分確認した。井戸枠の隅柱と横棧は桝で組み合うものではなく、井桁状に組んだ横棧の上に高さ0.4mの隅柱をのせるもので、2段分確認した。この枠で縦板を支持している。縦板は一辺に8～12枚が使われている。枠内から8世紀末～9世紀初頭にかけての土師器、須恵器、墨書土器、土馬、木錐、斎串、木把付き刀子などが出土した。

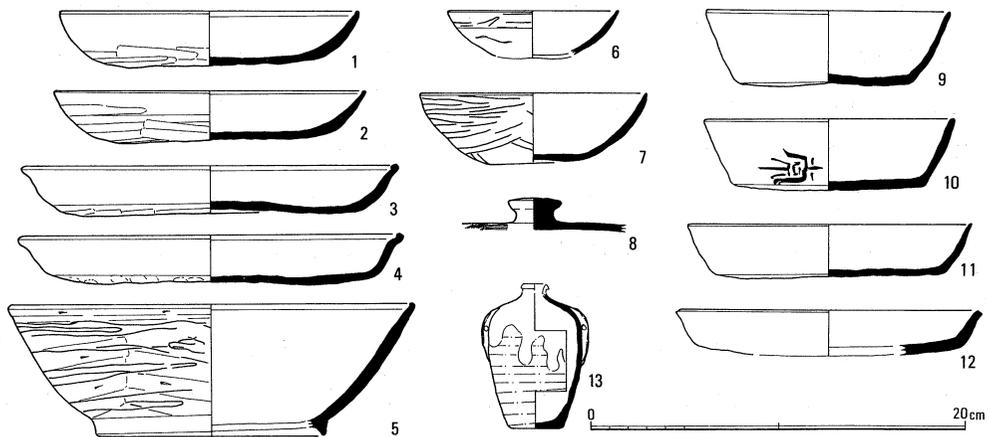
IV 出土遺物

今回の調査では、土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、軒瓦、木製品、金属製品など遺物整理箱で15箱分が出土した。以下、S D10およびS E13から出土した遺物について概要を記す。

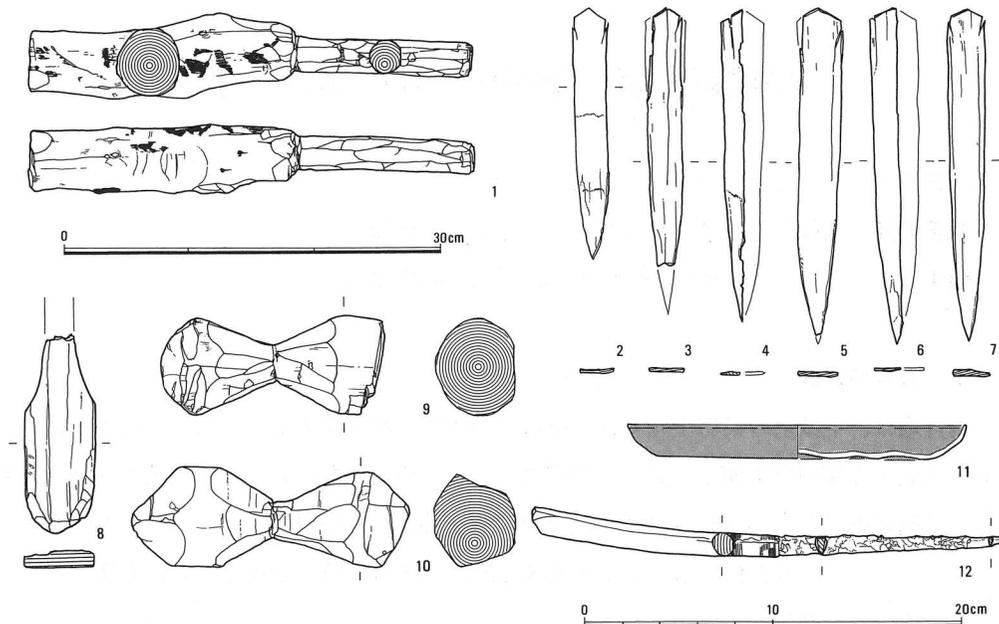
土器類 S E13井戸枠内から遺物整理箱で3箱分、掘形から1箱分の土師器・須恵器が出土した。これらは、南都I期中段階（8世紀末～9世紀初頭）の特徴をもつ土器群である。枠内出土の土師器には杯A・B、杯蓋、皿A・C、椀A、高杯、壺B、甕、製塩土器が、須恵器には杯A・B、皿A・C、ミニチュア壺、甕がある。その他に、土馬の顔面部分が1点出土した。掘形出土の土師器には甕、杯片、皿片、高杯、須恵器には甕、杯片、皿片がある。土師器皿類には、河内系の特徴をもつものが多く見られる。土師器皿A（3）と須恵器杯A（10）には、「胤(常)」と読める文字が墨書きされている。（三好美穂）

木製品・金属製品 木製品は井戸S E13と、溝S D10（奈良時代中～後半）から出土している。S E13の掘形から匙状木製品1点、箸1点、糸巻き1点、斎串3点が出土、枠内から木錐2点、曲物底板1点、曲物蓋板1点、斎串9点が出土している。S D10からは黒漆塗りの皿1点が出土している。以下主なものについて概要を報告する。

1は横槌である。節の多い芯持ちの丸太材を使用している。身は両端に加工痕がある他は、樹皮を除いただけで、両面に敲打痕が残る。また、材質の強化のため黒く焦がした痕



井戸S E13枠内出土土器（1／4）



出土木製品・金属製品（1は1/6、2～12は1/4）

跡がある。身と柄の境目は明瞭で、その部分で折れて出土した。

2～7は斎串である。いずれも両端が圭頭状で、上部の左右各一ヶ所に切り込みを入れるBⅡ型式に属する。

8は匙状木器の身の部分である。先端の平面形は半円形で、先縁を両側から削りだしている。表面は平滑に加工されているが、割り裂いた際にできた段差が残る。

9・10は木錐である。円柱状の材の側面中央を左右から荒く削り込み細くする。9は樹皮を除いた丸太材を用いている。片端は材を切り離した際の加工のままであるが、もう一方は材の角を取るように斜めに削り込まれている。10は両端の角を落としている。

11は漆器皿Aである。器壁は非常に薄く仕上げられており、黒漆を全面に丁寧に塗布する。木取は縦木取りである。

金属製品はS E 13の枠内から木把付きの刀子が1点（12）出土した。刀身を固定するため、細い糸を幅1 cmで2箇所密に巻き付け漆で固めている。（久保邦江）

V まとめ

今回の調査では、坪内を南から3分の1に区画する東西塀SA01・02、東西溝SD10・11を検出した。重複関係からSA01→SA02→SD10・11の順で作られている。SD10からは奈良時代中頃～後半にかけての遺物が出土している。坪は分割され使用されていたことがわかる。またSD10とSD11の間には約7.5mの空闲地がある。通路として利用されていたと思われる。坪内を西から3分の1付近を南北に区画する溝や塀はない。SD10の国土座標はX=-146,897.730、Y=-17,355.000である。（山前智敬）

11 平城京左京三条四坊一坪の調査 第357次

所在地 奈良市芝辻二丁目10-2・3
調査期間・面積 平成8年10月2日～10月23日 136㎡
調査原因 事務所付共同住宅建設（西田嗣氏届出）

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では、左京三条四坊一坪の北東部にあたる。しかし、調査地の北側を佐保川が東流しており、氾濫によって遺構が損なわれている可能性があったため、試掘調査（96-5次調査）を行なったところ、北半部は損なわれていることが判明した。したがって、調査は、南半部に発掘区を設け、坪内の様相を知るために実施した。

II 調査地の層相

層序は、上から造成土（0.6～1m）、黒色土（作土）、灰色粗砂、灰色粘土（約0.5m）、明茶灰色砂質土、灰色砂土、茶灰色砂質土、暗褐色粘砂土とつづく。明茶灰色砂質土上面で耕作に伴うと思われる数条の素掘りの溝を、茶灰色砂質土上面（標高64.0m）で奈良時代の遺構を、その下の暗褐色粘砂土上面（標高63.7m）で蛇行する溝を検出した。

III 検出遺構

時期不明の素掘りの溝数条、蛇行する溝1条と、奈良時代の掘立柱建物5棟、掘立柱塀2条、溝1条がある。

S D01 蛇行する東西方向の素掘りの溝。溝底は西に下る。幅0.8～1.0m。

S D02 東西方向の素掘りの溝。溝底は西に下る。幅1.2～1.8m。

S B03 東西2間（4.2m）以上、南北2間（3.6m）以上の掘立柱建物。東の1間は廂になると思われる。柱間は東西2.1m等間、南北1.8m等間。

S B04 S B03の東で検出した掘立柱列。南北2間（3.4m）を確認した。掘立柱建物の西側柱列と思われる。柱間は1.7m等間。

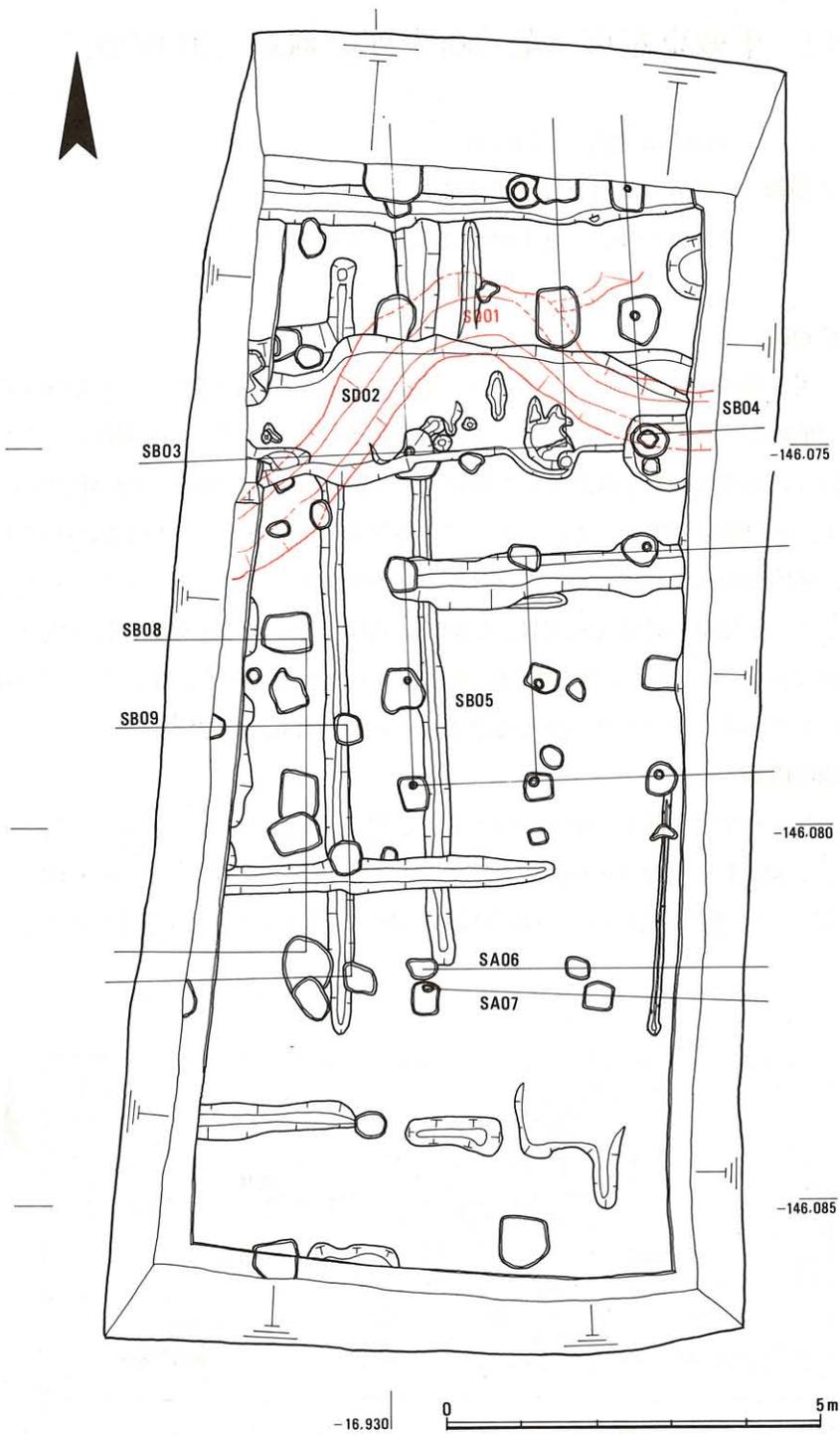
S B05 梁間2間（3.0m）、桁行2間（3.3m）以上の東西棟掘立柱建物。東の1間には間仕切りがある。柱間は桁行が西から1.6m、1.7m、梁間は北から1.6m、1.4m。

S A06 S B05と平行する東西方向の掘立柱塀。1間分（2.1m）を確認した。

S A07 S A06と平行する東西方向の掘立柱塀。1間分（2.4m）を確認した。

S B08 南北2間（4.2m）の掘立柱列。掘立柱建物の東側柱列。柱間は2.1m等間。

S B09 南北2間（3.3m）、東西1間（1.8m）以上の掘立柱建物。柱間は南北1.65m等間。
(森下浩行)



第357次調査 遺構平面図 (1/100)

12 平城京左京二条六坊十坪の調査 第359次

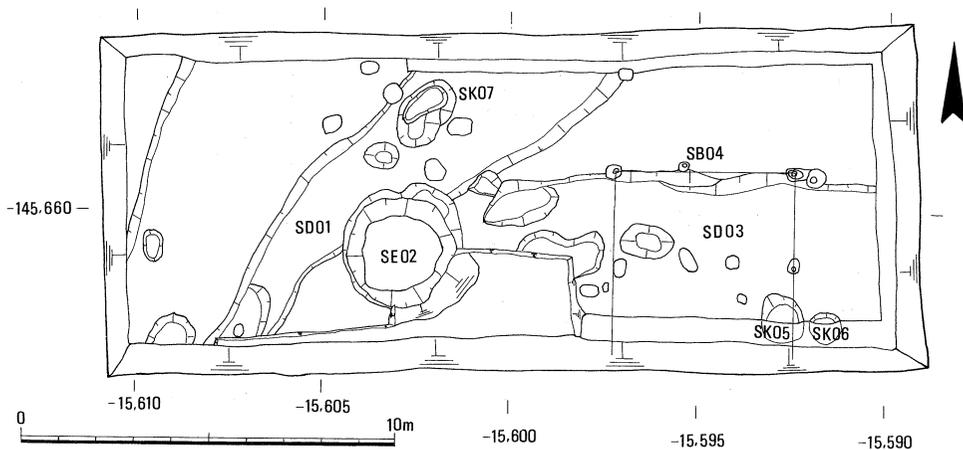
所在地 奈良市法蓮南二丁目1144-1
調査期間・面積 平成8年9月25日～10月24日 189㎡
調査原因 共同住宅建設（五十鈴建設株式会社届出）

I 調査の目的

調査地は、現佐保川の北側に位置しており、地形からみて川の氾濫によって遺構が削平されている可能性が考えられた。そこで、奈良市教育委員会では96-4次調査として平成8年7月31日に、遺構の有無を確認するために3カ所にトレンチを設定し試掘調査を行なった。その結果、届出地の北半で一段高くなっている部分のトレンチで井戸と思われる遺構を検出した。届出地の南半は川の氾濫をうけており遺構はなかった。その成果に基づき本調査を実施した。平城京の条坊復元では、左京二条六坊十坪のほぼ中央部に位置する。また、天地院が天喜元年（1053）に焼失以降に移建されてきたとされる法蓮寺¹⁾や、江戸時代の絵図に描かれているエンマドウ²⁾の推定地とされているが詳細は不明である。

II 調査地の層相

発掘区内の基本層序は、盛土（厚さ0.1m）以下、黒色土（作土、厚さ0.1m）、黄褐色土（厚さ0.3m）、灰褐色色土（厚さ0.35m）、暗茶褐色粘質土（厚さ0.45m）、灰茶色粘土（厚さ0.4m）と続き、現地表下約1.7mで茶灰色砂礫の地山に至る。地山の標高は概ね、75.0mである。



第359次調査 遺構平面図（1/200）

Ⅲ 検出遺構・遺物

弥生時代の自然流路1条、奈良時代の井戸1基、平安時代末～鎌倉時代にかけての土坑3基、溝1条、掘立柱建物1棟である。いずれも地山上面で検出した。

S D01 発掘区中央西で検出した弥生時代の流路。最大幅3.5m、深さ約0.2mの断面かまぼこ形を呈する。埋土は黄灰色粘土で畿内第Ⅴ様式でも新しい様相を示す弥生土器の甕・高杯が出土した。

S E02 発掘区中央西で検出した掘形の一边が約3.0mの平面隅丸方形を呈する井戸である。検出面からの深さは1.8mである。井戸枠は抜き取られて存在しない。抜き取りの埋土から奈良時代の土師器杯・皿、須恵器杯・壺が出土した。遺構の埋積時期の上限が奈良時代と考えることは可能である。

S D03 発掘区中央東で検出した東西方向の溝。南肩が発掘区外にあるため幅員は不明であるが、幅4.5m以上、深さ0.2m、長さ10m分を確認した。埋土は黄灰色粘土で奈良時代の須恵器片、12世紀前～後半にかけての瓦器椀、土師器皿、羽釜が出土した。

S B04 発掘区中央東で検出した桁行2間(4.8m)、梁間2間以上の南北棟建物。重複関係よりS D03より新しいことがわかる。

S K05 発掘区南辺東で検出した平面が隅丸方形の土坑。東西1.1m、南北1.4m、深さ0.2mである。埋土は暗灰色粘土で13世紀後半～末の土師器皿、羽釜が出土した。

S K06 発掘区南辺南で検出した平面が円形掘形の土坑。東西0.8m、南北0.9m、深さ0.2mである。埋土は暗灰色粘土で14世紀初頭の土師器皿、羽釜、須恵器鉢と、巴紋軒丸瓦1点が出土した。

S K07 発掘区北辺で検出した平面が不整形の土坑。東西1.3m、南北1.6m、深さ0.3mである。埋土は暗灰褐色粘土で13世紀末～14世紀初頭の土師器皿、羽釜、須恵器、国産陶器(常滑甕)が出土した。

Ⅳ まとめ

今回の調査地から北西約700mで行なわれた調査(市第264次)でも、同じように自然流路から弥生時代後期の土器が出土しているので、近接地に集落遺構が存在する可能性がある。また、調査地の南半は南側を流れる佐保川の氾濫によって、奈良時代の遺構面は削平されていることがわかった。この地域は13世紀後半に住居地として南都の一部として再度宅地化されたことがわかる。また、平安時代中頃以降に成立したとされる法蓮寺や、江戸時代のエンマドウにかかわる遺構は検出できなかったが、今後の周辺地域の発掘調査成果を待って検討していきたい。(山前智敬)

1) 奈良市『奈良市史 寺社編』1985 P.259

2) 永島福太郎氏に御教示頂いた。

13 平城京左京五条二坊十五・十六坪の調査 第361次

所在地 奈良市大安寺西一丁目
調査期間・面積 平成8年10月7日～11月15日 300㎡
調査原因 大安寺西一丁目緑住まちづくり推進事業

I 調査の目的

本調査地は大安寺大池と呼ばれる明治時代に造られた溜池に位置し、奈良時代の条坊復元では平城京左京五条二坊十五・十六坪に相当する。また周辺の調査で弥生・古墳時代の遺跡が確認されており、これらの時代の遺跡が存在する可能性もある。本調査は、大安寺西一丁目緑住まちづくり推進事業に伴い、池内の遺跡残存有無確認を目的とした。このため第1・2・4・6・10発掘区（各50㎡）、第3・5・7～9発掘区（各10㎡）の計10箇所の試掘坑を設け、さらに図中に○印で示した地点で、検土杖によるボーリング調査を行った。

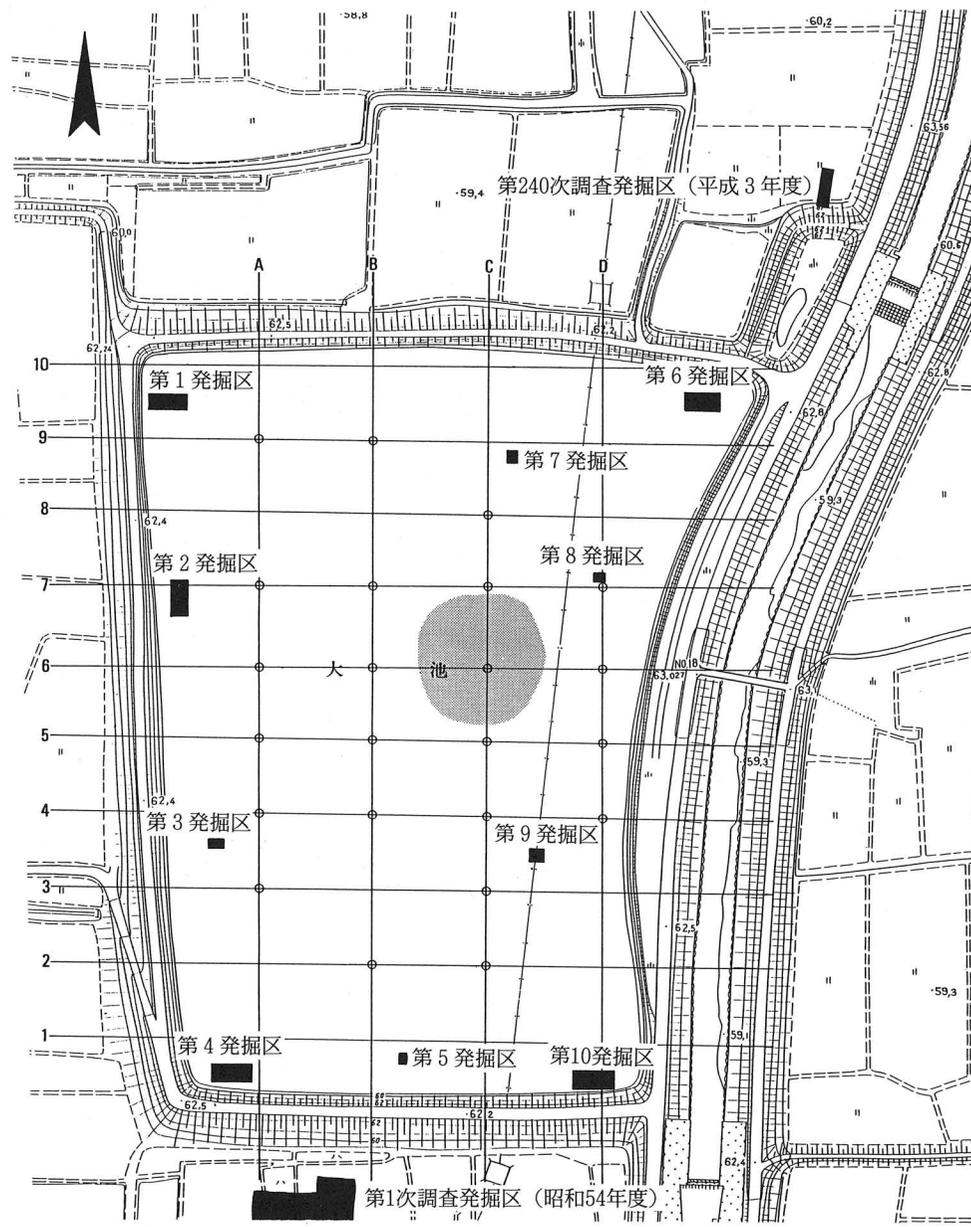
II 調査地の層相

第1～10発掘区においては、浅褐灰色細砂（表土）、灰色細砂、灰色砂質シルト（作土）、燈褐色砂質シルト（床土）、灰白色砂質シルト（作土）、暗燈色砂質シルト（床土）、褐灰色砂質シルト（遺物包含層）、浅褐灰色砂質シルト（奈良時代遺構面）、黄白色砂質シルト（弥生時代遺構面・地山）が基本である。これに対し、池の中心付近は大幅な削平のため、灰色泥（ヘドロ）直下に奈良時代遺構面、あるいは弥生時代遺構面があると考えられる。また奈良時代遺構面の検出レベルから、旧地形は池の西側中央部が最も低く、そこから周辺へ緩やかに高くなり、池の東側に向かって緩やかに低くなっていたと考えられる。

III 検出遺構

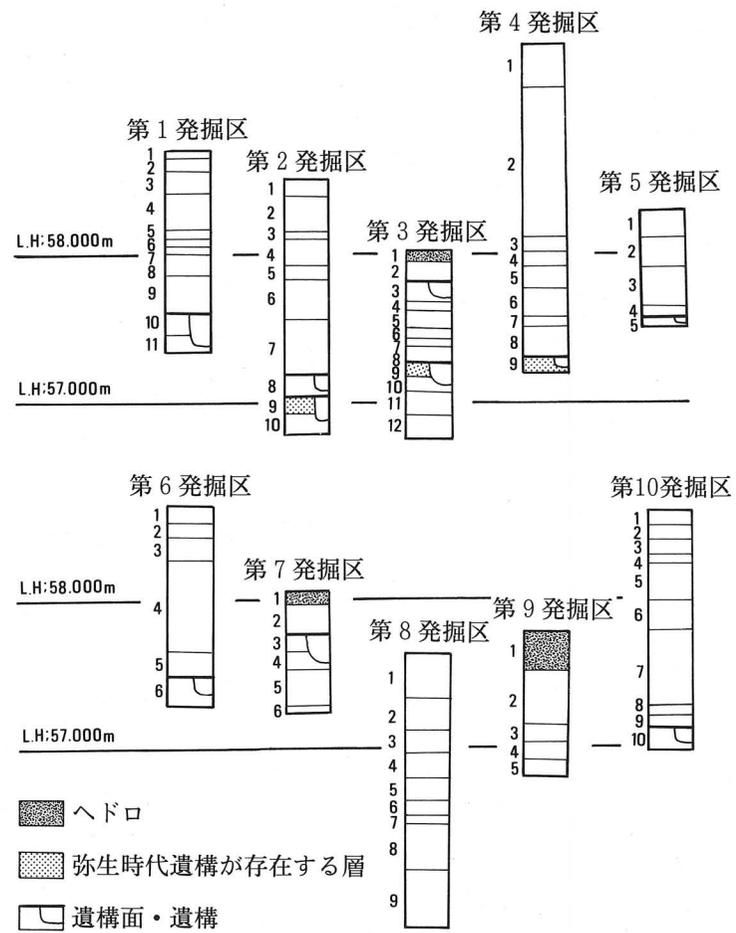
大きく分けて3時期の遺構がある。奈良時代の遺構としては第1・2・4～7発掘区で柱穴および土坑、第10発掘区で溝を検出した。奈良時代の遺構は、ほぼ池の全面に残存していると考えられる。ただ、C-6付近ではヘドロ層が厚く、遺構が20～30cm削られている可能性が高い。弥生時代の遺構としては第2・3発掘区に土坑、および第4発掘区に溝を検出している。なお第4発掘区では奈良時代の遺構面と同一面で、第2発掘区では奈良時代の遺構面のさらに下層でこれを検出した。奈良時代以降の遺構としては第3発掘区に土坑を検出した。これらの遺構は池内の地形から考えて、堤防付近にのみ残っていると考えられる。

（大窪淳司）



※網掛部分は奈良時代遺構面が20cm~30cm削平されていると考えられる。また、○印を付けた地点では検土杖によるボーリング調査を行なった。

第361次調査 発掘区位置図 (1/2,000)



- 第1発掘区**
- 1 浅褐色細砂
 - 2 灰色細砂
 - 3 灰白色シルト質細砂
 - 4 浅褐色シルト
 - 5 灰白色砂質シルト [作土]
 - 6 暗褐色シルト [床土]
 - 7 灰白色砂質シルト [作土]
 - 8 暗褐色シルト [床土]
 - 9 褐色砂質シルト [遺物包含層]
 - 10 浅褐色シルト [奈良時代遺構面]
 - 11 黄白色砂質シルト [地山]

- 第2発掘区**
- 1 浅褐色細砂
 - 2 灰白色細砂
 - 3 浅黄灰色砂質シルト
 - 4 浅褐色砂質シルト
 - 5 灰白色砂質シルト [作土]
 - 6 褐色砂質シルト [床土]
 - 7 褐色砂質シルト [遺物包含層]
 - 8 褐色砂質シルト [遺物包含層]
 - 9 灰白色砂質シルト [弥生時代遺構面]
 - 10 浅褐色シルト質極細砂

- 第3発掘区**
- 1 灰色泥 [ヘドロ]
 - 2 浅褐色砂質シルト [床土]
 - 3 黄白色砂質シルト [奈良時代以降の遺構面]
 - 4 浅褐色砂質シルト
 - 5 浅褐色砂質シルト
 - 6 浅褐色砂質シルト
 - 7 浅褐色砂質シルト
 - 8 浅褐色砂質シルト
 - 9 浅褐色砂質シルト [弥生時代遺構面]
 - 10 褐色細砂質シルト [地山]
 - 11 黄白色砂質シルト [地山]
 - 12 暗褐色砂質シルト [地山]

- 第4発掘区**
- 1 淡褐色中砂
 - 2 褐色中砂
 - 3 灰白色極細砂
 - 4 灰色砂質シルト [作土]
 - 5 灰白色シルト (やや赤色気味) [床土]
 - 6 灰白色シルト [作土]
 - 7 青灰色シルト [床土?]
 - 8 明褐色シルト [遺物包含層]
 - 9 淡黄白色砂質シルト [地山・奈良時代遺構面]

- 第5発掘区**
- 1 暗褐色砂質シルト
 - 2 浅褐色中砂
 - 3 青灰色シルト (黄白色シルトブロック)
 - 4 浅褐色砂質シルト
 - 5 浅褐色砂質シルト [地山・奈良時代遺構面]
- 第6発掘区**
- 1 暗褐色砂質シルト
 - 2 淡灰白色細砂
 - 3 淡灰白色粗砂
 - 4 淡灰白色シルト
 - 5 灰白色砂質シルト
 - 6 灰色中砂 [地山・奈良時代遺構面]
- 第7発掘区**
- 1 灰色泥 [ヘドロ]
 - 2 浅黄褐色砂質シルト
 - 3 浅黄褐色砂質シルト (Mnやや多) [奈良時代遺構面]
 - 4 浅黄褐色砂質シルト (Mn多)
 - 5 褐色砂質シルト (Mn著しく多)
 - 6 浅黄褐色砂質シルト
- 第8発掘区**
- 1 褐色細砂
 - 2 明灰白色シルト (やや砂質化)
 - 3 明灰白色シルト
 - 4 灰色シルト
 - 5 灰白色シルト
 - 6 灰白色シルト (やや砂質化)
 - 7 灰白色砂質シルト
 - 8 浅黄灰色砂質シルト
 - 9 暗黄灰色砂質シルト
- 第9発掘区**
- 1 灰白色泥 [ヘドロ]
 - 2 浅黄褐色砂質シルト [床土?]
 - 3 浅褐色砂質シルト
 - 4 淡褐色シルト質細砂
 - 5 浅褐色細砂
- 第10発掘区**
- 1 淡褐色中砂
 - 2 灰色極細砂 (橙白色極細砂混入)
 - 3 灰色極細砂 (褐色極細砂混入)
 - 4 暗褐色粗砂
 - 5 青灰白色シルト
 - 6 青灰白色シルト (Feの斑紋多)
 - 7 青灰白色シルト (浅褐色シルトブロック多)
 - 8 青灰白色砂質シルト
 - 9 青灰白色シルト (青緑色シルトブロック多) [遺物包含層]
 - 10 青緑色シルト [地山・奈良時代遺構面]

第361次調査 各発掘区土層柱状図 (1/50)

14 平城京左京四条五坊十三坪の調査 第360次

所在地 奈良市杉ヶ中町11-2 他
調査期間・面積 平成8年10月1日～10月11日 80㎡
調査原因 事務所ビル新築（松川公明氏届出）

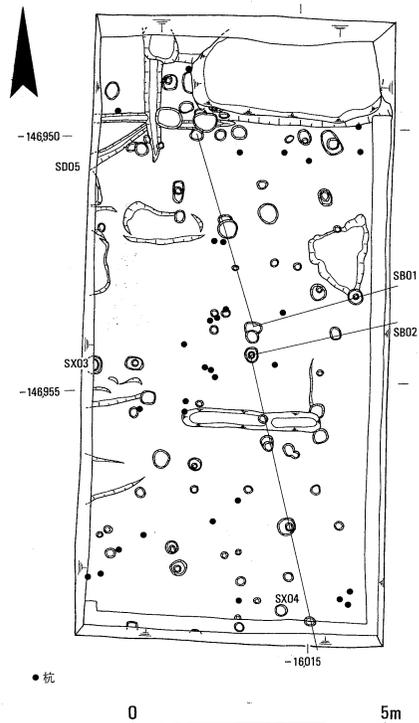
I 調査の目的 調査地は平城京左京四条五坊十三坪の北西隅にあたり、調査地の北端に十三・十四坪境小路が想定される。条坊遺構と十三坪内の様相の確認を目的とした。

II 調査地の層相 層序は上から暗灰色砂質土、茶灰色砂質土、淡黄灰色粘砂と続き、現地表下約0.6mで黄褐色粘土の地山となる。地山の標高は概ね67.8mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

III 検出遺構・遺物 掘立柱建物2棟、土器埋納遺構2、溝1条があるが、確認できるものはすべて古墳時代以前の遺構である。そのほか、建物としてまとまらなかったが、多数の柱穴および小柱穴がある。SB01は南北2間（4.0m）、東西1間（2.1m）分を検出した。南北柱間寸法は2.0m等間である。SB02は南北3間（5.4m）、東西1間（1.8m）分を検出した。南北柱間寸法は1.8m等間である。

SB01・02ともに北で大きく西に振れる建物で、土師器片が出土した柱穴もあるが、時期は判然としなかった。SX03・04はいずれからも弥生時代後期～古墳時代初頭の髹杯脚部、あるいは鉢底部の細片が出土した。特にSX04からは鉢1個体分がまとまって出土している。SD05は深さ約0.1mの素掘りの斜行溝で、長さ1.4m分を検出した。埋土は灰褐色粘砂であるが、遺物がないため時期は不明である。そのほかの柱穴および小柱穴から、土師器片が出土したものもあるが、時期は特定できなかった。

条坊遺構は確認できなかったが、遺構の遺存状態から、坪境小路の南側溝が削平されたとは考え難く、発掘区外北にあると考える。また、周辺の奈良時代以降の遺構は古墳時代以前に比べ、稀薄になることが判明した。（宮崎正裕）



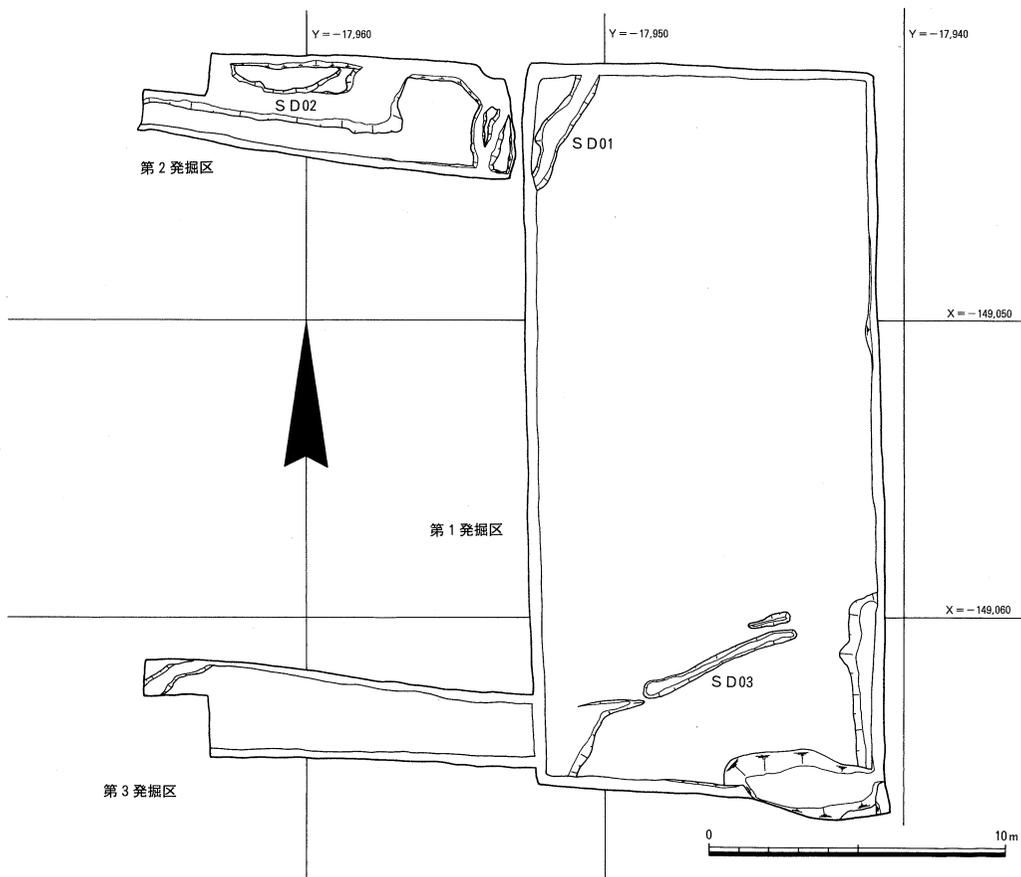
第360次調査 遺構平面図（1/150）

15 平城京左京八条二坊三坪の調査 第362次

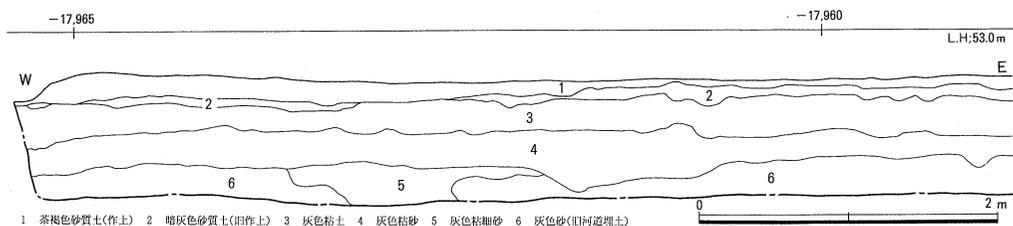
所在地 奈良市杏町427-1
調査期間・面積 平成8年10月23日～11月15日 323㎡
調査原因 杏南第11号市営住宅建替（奈良市長通知）

I 調査の目的

調査地は平城京の条坊復元によると左京八条二坊三坪の南西辺にあたる。また、このあたりには奈良時代の佐保川が流れていたと想定されている。今回の調査は三坪内の様相の確認を目的とし、敷地内東側に第1発掘区を設けた。調査の結果、第1発掘区全体が旧河道であることが判明したため、西岸の検出を目的として、敷地内北西に第2発掘区を、敷地内南西に第3発掘区を設けた。



第362次調査 遺構平面図 (1/250)



第362次調査 第3発掘区北壁土層図 (1/50)

II 調査地の地形と層相

いずれの発掘区もほぼ同じ層相で、茶褐色砂質土（作土）、暗灰色砂質土（旧作土）、灰色粘土、灰色粘砂と続き、現地表下約0.6mで灰色砂または灰色粗砂の旧河道堆積物となる。旧河道は東西約25m、南北約25m分を検出した。旧河道上面からの深さは約1.9mまでは確認できたが、湧水とそれによる壁の崩壊のため、河底を確認することはできなかった。堆積物中には奈良時代から室町時代にかけての土器片を含む。旧河道上面の標高は51.9～52.1mである。

III 検出遺構・遺物

検出した遺構は溝7条で、すべて旧河道上面で検出した。主なものについて記す。

SD01 第1発掘区で検出した北で東に振れる素掘りの溝である。第3発掘区で検出した溝と1連のものとおもわれる。幅は約1.0m、深さは0.1～0.15mである。埋土は灰色粘細砂である。埋土から漆塗木椀が出土した。

SD02 第2発掘区で検出した北から西へ屈曲する素掘りの溝である。幅は1.2～1.8m、深さは約0.18mで、長さ約10.0m分を検出した。埋土は緑灰色砂である。

SD03 第1発掘区で検出した北で東に振れる素掘りの溝である。幅は約0.5m、深さは約0.1m、長さは約5.5mである。埋土は灰色粘砂である。

遺物は遺物整理箱で1箱分出土した。須恵器、土師器、瓦質土器、陶器、漆塗木椀がある。出土遺物の大半が旧河道出土のものである。

IV まとめ

平城京の条坊復元によると奈良時代の佐保川は、本調査地周辺では北東から南西方向に流れており、今回検出した旧河道も佐保川の一部とおもわれる。旧河道埋土から14世紀代の土器が出土したことから、14世紀以降に耕作地に変わったと考えることができる。なお、今回の調査地の南西の調査でも、佐保川の一部と考えられる旧河道の南岸を検出しており、位置関係からみて一連のものと思われる。 (原田憲二郎)

註) 奈良市教育委員会「平城京左京八条二坊四坪の調査 第305次」『奈良市埋蔵文化財発掘調査概報 平成6年度』1995

16 松林苑跡の調査 第367次・第369次

第367次調査

所在地 奈良市佐紀東町内
調査期間・面積 平成8年11月18日 13㎡
調査原因 市道中部194号線拡幅（奈良市長通知）

調査地は八上池から南へ延びる道路の北端部で、調査地の現状は水田である。約0.2mの作土直下が小礫の混る橙色粘土の地山となっており、地山面の標高は79.4m前後である。奈良時代以前の遺構・遺物は検出できなかった。

第369次調査

所在地 奈良市佐紀中町二丁目他
調査期間・面積 平成8年12月10日～12月13日 69㎡
調査原因 公共下水道築造（奈良市長通知）



第367次調査位置図（1/2,000） 第369次調査位置図（1/2,000 網目は西面築地推定ライン）

調査地は瓢箪山古墳の東に建並ぶ住宅
 地内で、松林苑の西を画す築地が痕跡を
 残している地域である。下水道管理設
 予定地に大小8カ所の発掘区を設定した。

第1発掘区 西面築地の推定延長上に
 設定した。厚さ約0.4mの、瓦片を含む
 褐色土の下に小礫と粘土の混じる橙褐色土

が1m以上続いている。橙褐色土層上面は標高84.3m前後で東へ緩やかに降っており、南へ急激に落ち込んでいる。橿原考古学研究所の第2次調査の結果から考えると、この部分では築地本体は削平されているようであり、橙褐色土層が築地基壇部の盛土の一部と考えるのが妥当と思われる。築地の雨落溝や瓦の集中堆積は確認できなかった。

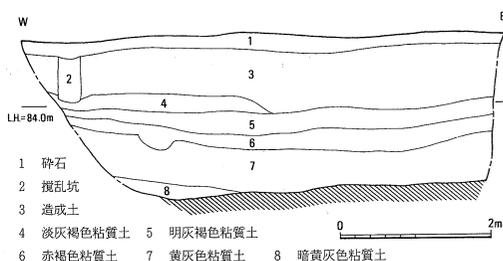
第2発掘区 第1発掘区から北東へ約4m離れた地点に設定した。ここでは瓦片を含む層が深さ約2mまで達している。地山は砂礫混じりの赤色粘質土で、上面の標高は82.8m前後である。しかし後述する第3発掘区から東は地山上面の標高が急激に上がっていることから、第2発掘区付近は谷状になっていたと推測される。このことは、この付近が猫塚古墳の周濠を利用した池の一部と推定されていることと一致するが、水が溜まっていたような状況は観察されなかった。第2発掘区の第5層には江戸時代の遺物が含まれており、ここが完全に埋まるのは近世になってからと考えられる。

第3～6発掘区 猫塚古墳の北部に設定した。これらの地点では、地山が削平されて現地表面となっている。標高は各発掘区とも85.0m前後であるが、第6発掘区北端は地山面が北に落ち込んでおり湧水も激しい。崩落のため掘削不可能となったが、地山面は1m以上上下がっているものと思われ、池がこの辺りまで広がっていたことが推測される。

第7・8発掘区 西面築地のすぐ東脇に沿う位置に設定した。地表下約0.7mで地山となり、上面の標高は87.5m前後である。その直上に瓦小片を含む橙褐色粘質土が約0.1m堆積しており、築地本体はもとより、基壇状盛土も確認できなかった。

松林苑跡については、県立橿原考古学研究所が昭和54年から継続して調査を行なっているが、推定範囲が広大なこともあり、その大部分は未解明と言わざるを得ない。奈良市教育委員会においては、これまで試掘調査等を行なったことはあったが、本調査としては今回が初めてである。ただし、いずれの調査も工事の性格上調査対象地が極めて制限されており、十分な成果を得るには至らなかった。ただ、少なくとも現道路部分は築地本体が全て削平されているものと思われる。

(松浦五輪美)



第369次調査 第2発掘区北壁土層図(1/100)

17 平城京左京四条五坊十二坪の調査 第372次

所在地 奈良市杉ヶ町23番地
調査面積・期間 平成9年1月10日～1月20日 144㎡
調査原因 奈良市生涯学習センター建設（奈良市長通知）

I 調査の目的

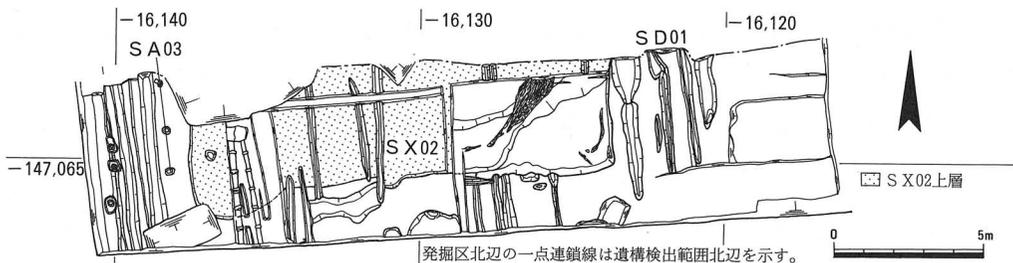
調査地は平城京左京四条五坊十二坪の南辺部に相当し、四条大路の確認を主目的とした。

II 調査地の層相

層序は、造成土・作土の下、褐灰色砂質シルト、褐灰色砂質シルト（1～2 cm礫多含）、明褐灰色砂質シルト（1～2 cm礫多含）と続き、地表面下約0.9mで橙灰色シルト質極細砂（以下A層）に達する。この上面が奈良時代から平安時代の遺構面で、標高は概ね66.6 mである。以下灰白色シルト質極細砂（以下B層）、灰色砂礫（以下C層）と続く。A・B層からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器に加え、須恵器も出土しており、A層の形成時期の上限は古墳時代中期と考えられる。堆積状況からA・B・C層は河川等の水成堆積層と考えられる。河底は現地表面下約2 mまで掘削したが、検出できなかった。

III 検出遺構

主な検出遺構は、奈良時代後半から平安時代初頭の素掘りの溝S D01、方形土坑S X02で、他に時期不明の掘立柱塀S A03、柱穴3基がある。四条大路に関連する遺構はなかった。S D01は幅0.3m、深さ0.1m。奈良時代中期以降の土器が出土した。S X02は東西13.9 m、南北3.8m以上、深さ約0.4mであり発掘区外へ続く。東1/3部分を掘削したが、上層・中層（3層に分かれる）・下層があり、中・下層から奈良時代末から平安時代初頭の土器が出土した。また土馬の破片が4点あり、条坊関連の遺構の可能性もある。堆積状況からいずれも水成堆積層の可能性が高い。（大窪淳司）



第372次調査 遺構平面図（1/250）

18 平城京左京七条一坊五坪の調査 第374次

所在地 奈良市八条四丁目369-1,370-1,371-1,377-1,378-1,378-4,379-1,380

調査期間・面積 平成9年2月10日～2月25日 502㎡

調査原因 (仮称) 奈良市灰からセンター建設 (奈良市長通知)

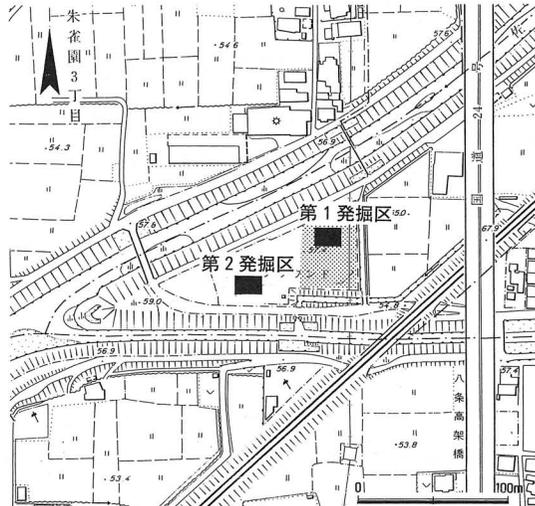
I 調査の目的

調査地は佐保川と岩井川が合流する堤防上に位置し、運動場に造成される以前、敷地の東半部は溜池であったことが地籍図よりわかる。調査は遺構在存状況の確認のため、東と西の2カ所に第1・第2発掘区を設け行なった。

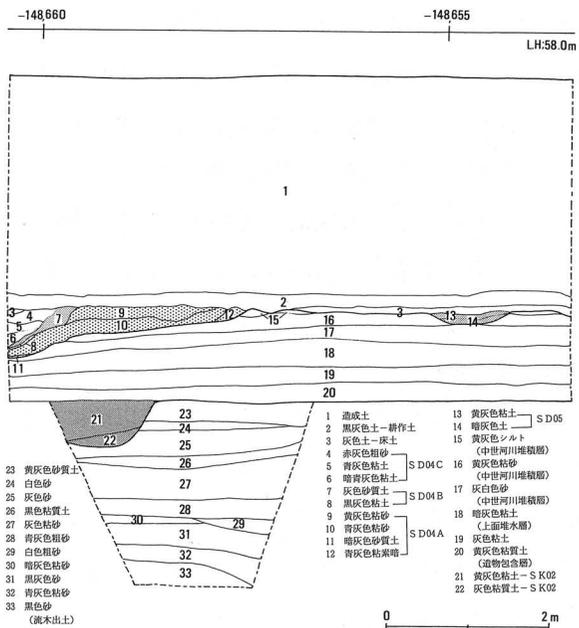
II 調査地の層相

第1発掘区 現地表から盛土(4.1m)、溜池埋土である黄灰色粘土(1.0m)、黒灰色粘土(0.2m)の順であり白色砂の地山に至る。地山は発掘区北東隅で標高53.1m、南東隅で標高52.0mで北から南へ下降する。

第2発掘区 現地表から盛土・作土・床土の下、黄灰色シルト、黄灰色粘砂(中世河川堆積層)、灰白色砂(中世河川堆積層)、暗灰色粘土、灰色粘土、黄灰色粘質土(奈良時代遺物包含層)、黄灰色粘質土、白色砂、灰色砂、黒色粘質土、灰色粘砂、青灰色粗砂、白色粗砂、暗灰色粘砂、黒灰色砂、青灰粘色砂、黒色砂の順で堆積する。遺構は黄灰色シルト上面(標高54.5m)で江戸時代の遺構を、黄灰色粘質土上面



第374次調査 発掘区位置図 (1/5,000、網目は旧溜池)



第374次調査 第2発掘区西壁堆積土層図 (1/100)

標高53.4m)で奈良時代の土坑を確認した。

Ⅲ 検出遺構・遺物

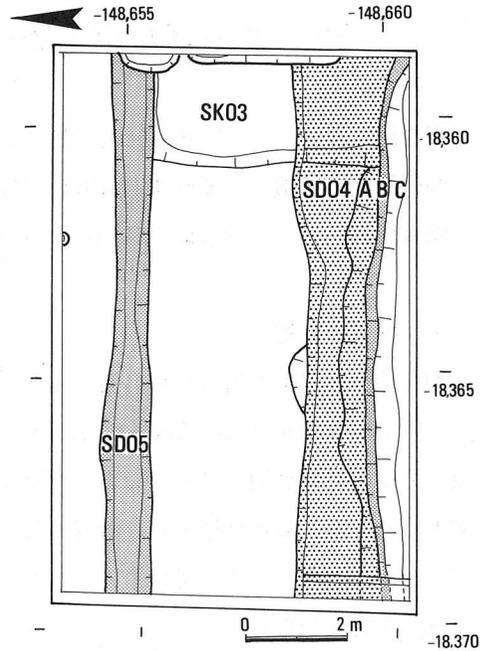
第1発掘区 発掘区全面で溜池S X01の南堤と池底を検出した。S X01は発掘区全域から発掘区南側へ広がり摺鉢状を呈する。池の埋土は上層が黄灰色粘土、下層が黒灰色粘土である。池底は、白色砂の地山である。遺物は出土しなかった。

第2発掘区 奈良時代の土坑S K02、中世の河川堆積、江戸時代の土坑S K03と溝S D04・05を検出した。S K02は黄灰色粘土質上面で検出した南北1.2m以上、深さ0.6mの断面U字形土坑である。埋土は上層が黄灰色粘土(0.5m)下層が灰色粘土(0.1m)である。遺物は奈良時代の土師器、須恵器が出土した。

S K03は、東辺と北辺が発掘区外へ広がるが、東西2.2m以上、南北4.6m以上、深さ0.2m以上の平面不整形掘形の土坑である。埋土は灰色粘土で江戸時代の土師器皿が出土した。重複関係からS D04・05より古いことがわかる。S D04は発掘区南で検出した幅3.0m分、深さ0.6m、長さ10.8m以上の南北方向の素掘りの溝で、南肩は発掘区外である。埋土の堆積状況から3時期に分けることができる。S D04Aは幅3.0m以上、検出面からの深さ0.6m。埋土から19世紀前半の伊万里焼染付け椀が出土した。S D04Bは幅0.9m以上、検出面からの深さ0.5m、断面U字形を呈す。S D04CはS D04Bを改修した溝である。幅0.6m以上、検出面からの深さ0.45m、断面U字形を呈す。埋土から18世紀後半の土師器皿・炮烙が出土した。S D05は発掘区北側で検出した幅1m、深さ0.15m、長さ10.8m以上、断面U字形を呈す東西方向の素掘りの溝である。遺物は出土しなかった。重複関係から土坑S K03より新しいことがわかる。

Ⅳ まとめ

調査の結果、第1発掘区は運動場造成以前には溜池であったことがわかった。この池は、第2発掘区で検出した奈良時代の遺構面(標高53.4m)より深いことから、奈良時代の遺構面を掘削して築造されたものと思われる。また第2発掘区では、地表下4.0mの深さで奈良時代の土坑を確認し、地表下3.0mから3.3mの深さで中世の河川堆積、地表下2.8mの深さで江戸時代の溝を検出した。このことから、調査地東半は池のため奈良時代の遺構面が残っておらず、西半では奈良時代遺構面が残っていることを確認した。(秋山成人)

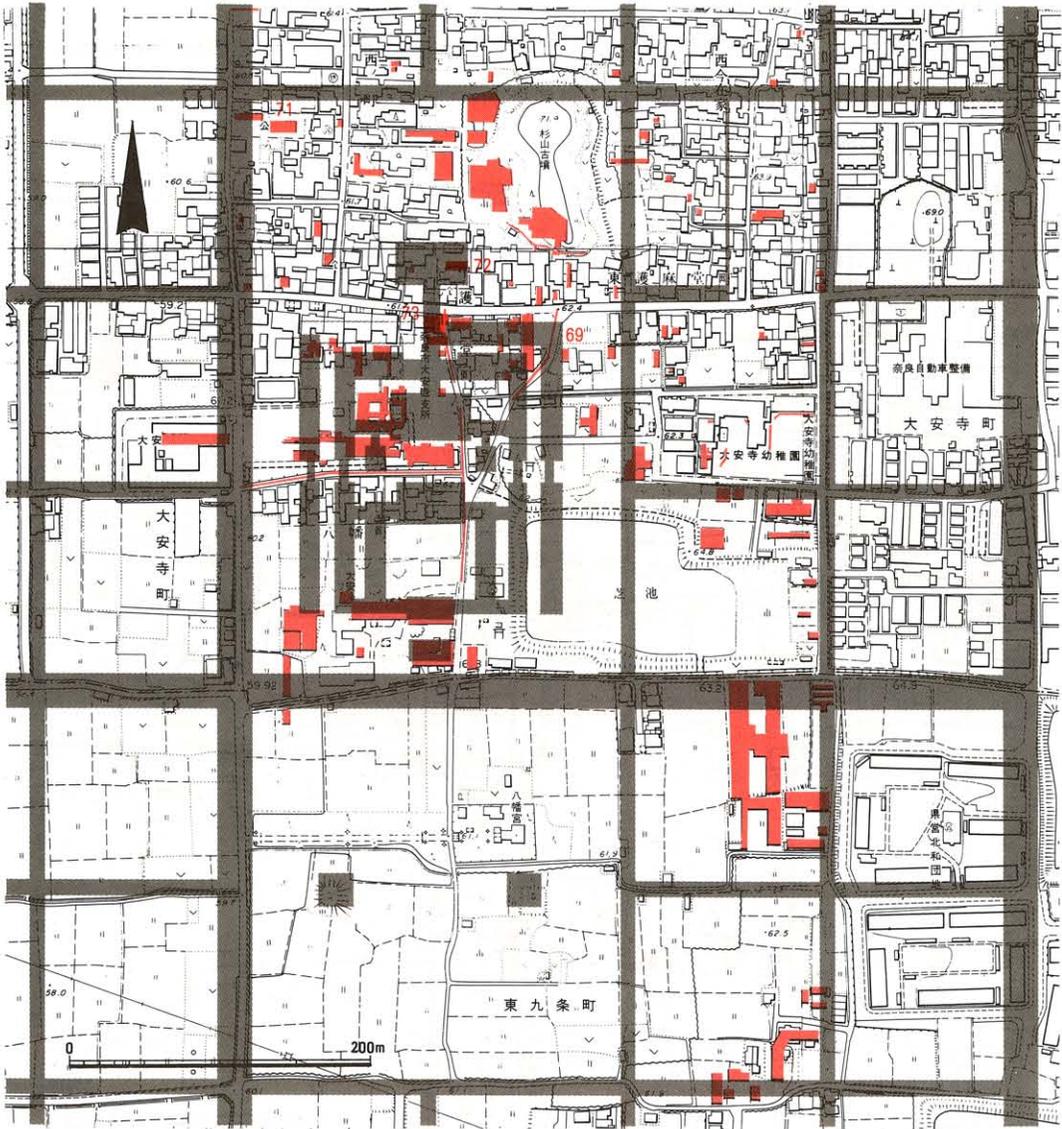


第374次調査 西発掘区遺構平面図(1/150)

Ⅱ 平城京内寺院の調査

1 史跡大安寺旧境内の調査

史跡大安寺旧境内では、本年度、第72・第73次調査の2件の発掘調査を実施した。第72次調査は食堂并大衆院地区で実施した現状変更許可申請に関わる調査である。第73次調査は保存整備事業に関わる調査で、北西中房の基壇東端部及び北東中房の基壇西端部を確認した。本書では、昨年度実施した第69・71次調査と本年度実施した第72次調査を報告する。なお、第73次調査の成果は保存整備事業完了時に報告する予定である。



史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図 (1/5,000)

(1) 講堂、回廊、僧房の調査 第69次

所在地 奈良市大安寺一丁目地内
調査期間・規模 平成8年2月1日～3月8日 延239.4m (A:68.5m B:51.8m C:119m)
調査原因 公共下水道築造（現状変更等許可申請 奈良市長提出）

I 調査の目的

当該工事は、東面僧房地区（位置図A）、北面僧房地区（同B）、講堂・回廊地区（同C）の市道に公共下水道管を埋設するもので、主要伽藍に関連する遺構に影響が及ぶことが予測された。そこで、文化庁長官の指示に基づき、遺構の状況を確認する事前の発掘調査を実施した。発掘区は、工事の性格から工事の掘削範囲に設定した。

II 調査地の層相

遺構は地山上面もしくは伽藍構築時の整地土面で検出した。講堂回廊発掘区の層序は、



伽藍復元と調査位置 (1/3,000)

地表下0.34mまでは盛土、以下0.1mの暗灰色砂質土、0.25mの橙褐色土（焼土層）、0.14mの灰褐色砂質土、0.1mの黄褐色砂質土とつづき、地表下0.93m、標高62.46mで地山の黄褐色砂礫に達する。

地山の標高は東面僧房地区で61.7～62.1m、北面僧房地区で61.5～61.7m、講堂地区で61.3～61.9m、回廊地区で60.7～61.5mである。

Ⅲ 検出遺構

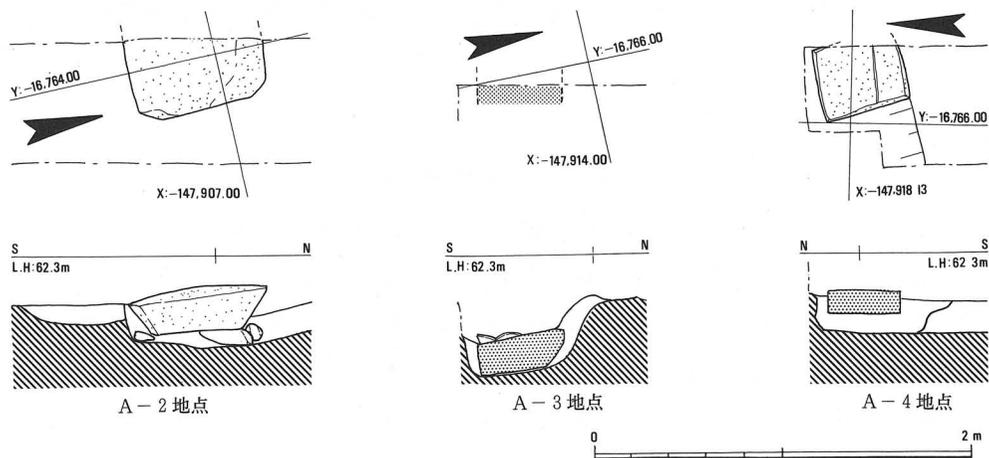
今回の調査で検出した主な遺構は、古墳時代の杉山古墳の外堤斜面の葺石と周濠、大安寺の基壇がある。杉山古墳外堤斜面の葺石は、東面僧房地区のA-1地点で確認した。大安寺の主要伽藍に関する調査成果は、以下のとおりである。

北東・東中房推定地 東面僧房地区では、A-2～4地点で凝灰岩の切石を検出した。各地点の検出状況は図に示すとおりである。位置関係から、いずれも東中房の礎石の可能性はある。なお、北面僧房地区では既存の水道管の掘形で遺構が破壊されていた。

北東・東太房推定地 東面僧房地区では、A-5地点で凝灰岩の切石を検出した。検出状況は図に示すとおりである。位置と形状から、東僧房東側の基壇外装の一部の可能性はある。なお、北面僧房地区では既存の水道管の掘形で遺構が破壊されていた。

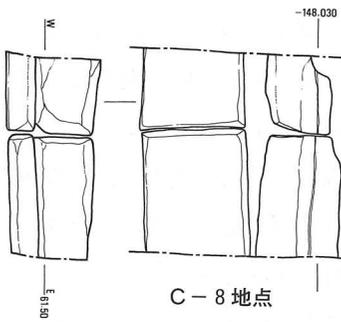
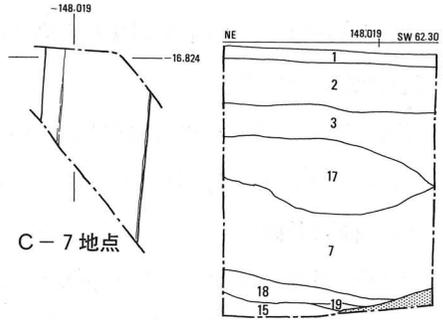
講堂・回廊推定地 推定講堂の東端から北面回廊東辺を横断し、回廊内部に達する位置にあたる。調査区の北半は既設の水道管の掘形と重複しており、講堂の遺構は検出できなかったが、講堂の推定位置で廃瓦を処理したと思われる瓦溜りを、講堂と金堂の間と推定される位置では厚さ25cmあまりの焼土層を確認した。

位置図のC-6～8地点で北面回廊東辺を検出した。C-6・7で基壇北辺を、C-8では南辺を検出した。いずれも延石と地覆石が遺存することから、基壇外装が凝灰岩切石

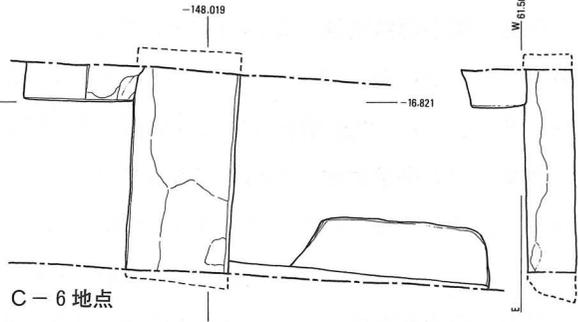


第69次調査 北東・東中坊推定地凝灰岩切石検出状態（1/40）

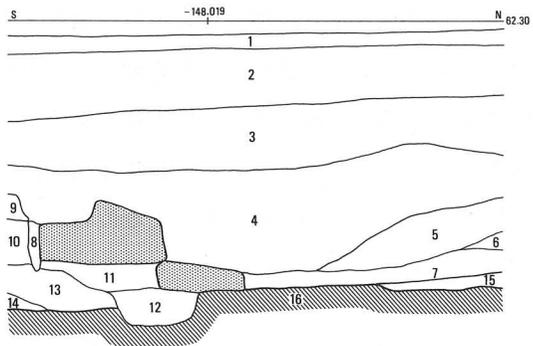
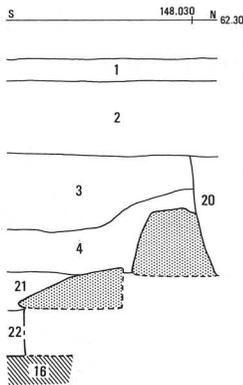
- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------|
| 1 アスファルト | 9 暗茶褐色土 | 16 茶褐色土 |
| 2 暗灰色礫（路盤） | 10 黒灰色砂 | 17 黄茶灰色土 |
| 3 暗灰色土 | 11 黒灰色砂 | 18 炭、焼土 |
| 4 黒灰色砂質土 | 12 暗灰色砂 | 19 淡灰色土 |
| 5 焼土 | 13 黄褐色土 | 20 水田用暗渠 |
| 6 淡黄褐色砂質土 | 12 暗灰色砂 | 21 淡灰色砂 |
| 7 淡黄褐色土（土器、瓦多含） | 14 暗灰色粘土 | 22 茶褐色砂質土 |
| 8 木杭 | 15 凝灰岩粉混じり淡茶灰色土 | |



C-8 地点



C-6 地点



第69次調査 北面回廊東辺基壇 (1/25)

の壇上積であったことがわかる。延石は幅35cm、厚さ10cm、長さは確認できたC-6のもので84cm。C-7・8のものは上面前角の風化が著しい。地覆石は幅29~40cm、厚さ22cm、長さは40cm以上。上面後角に、羽目石を納めるための幅10~20cm、深さ1~5cmの欠込みがある。基壇築成土は版築されていない。基壇北辺では地山上に数層の築成土を積上げる。基壇南辺では地山が南に向かって下降することから、地山の上に厚さ15cmほどの整地土を置き、そこに築成土を積上げている。基壇規模は、C-6とC-8地点間で地覆石外面間の幅員11.0m、羽目石、葛石が残っていないので高さは不明である。

また、C-6地点には、調査区外へつづくので全体は不明だが、基壇北辺の延石に直交する上下二段の凝灰岩切石がある。下段は幅19cm以上、長さ67cm以上、厚さ5cmの板状であるが、側縁が割れておりもとの形状は不明。上段は一部を下段に重ねて据えられ、長さ87cm、幅10cm、厚さ10cm。石階か軒廊の延石、地覆石と考えられなくはないが、下段が薄い板状であることと、上段を地覆石とみた場合、その上面が回廊基壇の延石上面とそろっていることに疑問が残る。

南面回廊推定地 調査では、基壇上で礎石の据付け痕跡を、基壇北側では雨落を検出しているが、本発掘区ではどちらの痕跡もなかった。中門への取付き部での回廊の桁行柱間寸法は14.8尺であることがわかっているので、その成果からみて、本発掘区は柱筋に位置しておらず、桁行の柱間にあるものと思われる。

C-9地点以南は地山面が徐々に下降する。発掘区の南端では現地表下1.2m以下は軟弱な灰色粘土と砂層で、地表下1.5mまで確認したが地山には達しなかった。大きな窪地状の地形が伽藍構築時に埋められ、整地されたものと考えられる。

なお、この他に講堂・回廊地区において地山上面で古墳時代中期後半の土坑を検出した。埋土中から須恵器蓋杯が出土している。(安井宣也)

(2) 西面大垣推定地の調査 第71次

所在地 奈良市大安寺四丁目1037-3~9
調査期間・面積 平成8年3月15日~3月20日 22.5㎡
調査原因 住宅建設(現状変更等許可申請 森田真和氏提出)

I 調査の目的

申請地は史跡大安寺旧境内の北辺西端にあたり、一部が寺域の西を限る東二坊大路にかかる可能性があることから、これの確認と北辺西端の様相の確認を目的とした。

II 調査地の層相

調査区内の基本層序は、現在の表土である厚さ0.2mの淡黄色土、0.2mの暗灰色粘質土の順で、地表下0.4mで地山の黄褐色砂質土に達する。地山の標高は概ね60.5mである。

III 検出遺構

東二坊大路東側溝が想定される発掘区西端で、幅3.3m以上、深さ1.3mの南北方向の溝を検出した。溝内の堆積物は6層ある。最上層は緑灰色砂質土で染付磁器片を含む。以下灰色の泥質土が4層あり、最下層は灰色砂礫である。上から3層目以下には奈良時代の瓦・土器片を含む。調査面積が小さく、東側溝かどうか断定できない。(安井宣也)

(3) 食堂推定地の調査 第72次

所在地 奈良市大安寺四丁目1127-1・4
調査期間・面積 平成8年7月16日～8月13日 98㎡
調査原因 個人住宅建設（現状変更等許可申請 榊谷紘氏提出）

I 調査の目的

調査地は、大安寺の伽藍復元によると、講堂の北、食堂の推定地にあたる。しかし、これまでの周辺の調査ではそれに相当する遺構は検出されておらず、また、食堂の位置を講堂の東と考える意見もある。したがって、今回の調査は、食堂にあたる遺構の確認を主目的とした。また、調査地は杉山瓦窯から西へ約50mの位置にあり、これと関連する遺構も予想された。また、杉山古墳の周濠および外周にもあたるため、今回の調査は、これらの遺構の確認も目的とした。

II 調査地の層相

発掘区内は、近現代の攪乱によって大きく乱されているが、基本的な層序は、上から、表土（0.1～0.5m）、中世の茶褐色整地土（0.2～0.5m）、平安時代の灰褐色あるいは黄褐色整地土（0.1～0.2m）で、黄褐色粘土の地山に至る。平安時代の遺構面は、最も残りの良いところで、地表下約0.3m、標高約62.0mである。

III 検出遺構

検出した遺構の時代は、古墳時代、平安時代、中世、近世である。

古墳時代の遺構 杉山古墳の周濠S D01の外岸を検出した。周濠は平安時代に埋められており、埋土を部分的に掘り下げ、底、及び外岸の葺石を確認した。底面には凸凹があり、深さは最深部で0.9mである。葺石は、南半部は攪乱されていたが、北半部の岸斜面上半部に遺存していた。斜面中腹には、基底石と思われるやや大きな石が葺かれており、下半部には当初より存在しなかったものと思われる。周濠底にたまった暗茶褐色土から、外堤あるいは外周に置かれたと思われる円筒埴輪、形象埴輪が出土した。

平安時代の遺構 杉山古墳の周濠S D01は、平安時代に暗灰色砂土、灰色砂で埋められ、さらに灰褐色あるいは黄褐色整地土が、地山上、及び周濠外岸上端から東へ幅約5mまでを覆っていた。周濠上の整地土中には、部分的に平瓦、丸瓦の破片を敷きつめ、東端では、周濠外岸に沿って軒平瓦を瓦当面を東側に向けて並べてあった。おそらく整地を行なう範囲を示した区画であろう。なお、整地土中から、奈良三彩の破片が散らばった状態で出土した。

発掘区の西端では、整地土上面で、掘立柱穴2個からなる掘立柱列S X02を検出した。

発掘区外に続いていくものと思われる。掘立柱建物の東側柱列であろうか。掘形は、ともに平面隅丸方形で、一辺1.2mである。柱間は2.7m（9尺）である。建物主軸は北でやや東に振れる。

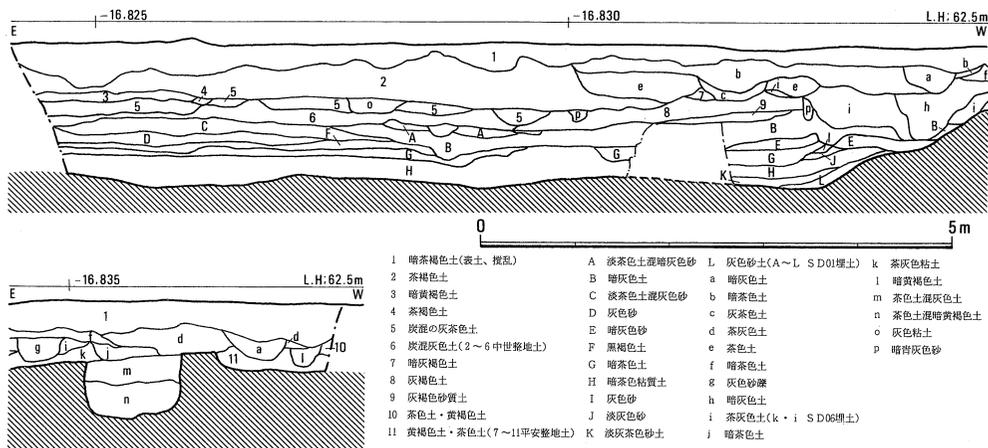
掘立柱列S X02のすぐ東の、杉山古墳の外周部分で、土坑群S K03を検出した。杉山古墳の外岸上端に沿って、一列あるいは二列に重なるように掘られている。土坑はいずれも平面円形で、直径は1.5mほどである。深さは0.3~0.5m残存する。粘土採掘坑と思われる。

杉山瓦窯操業時の粘土採掘坑であった可能性が高い。掘立柱列S X02と重複しており、それよりも新しい。

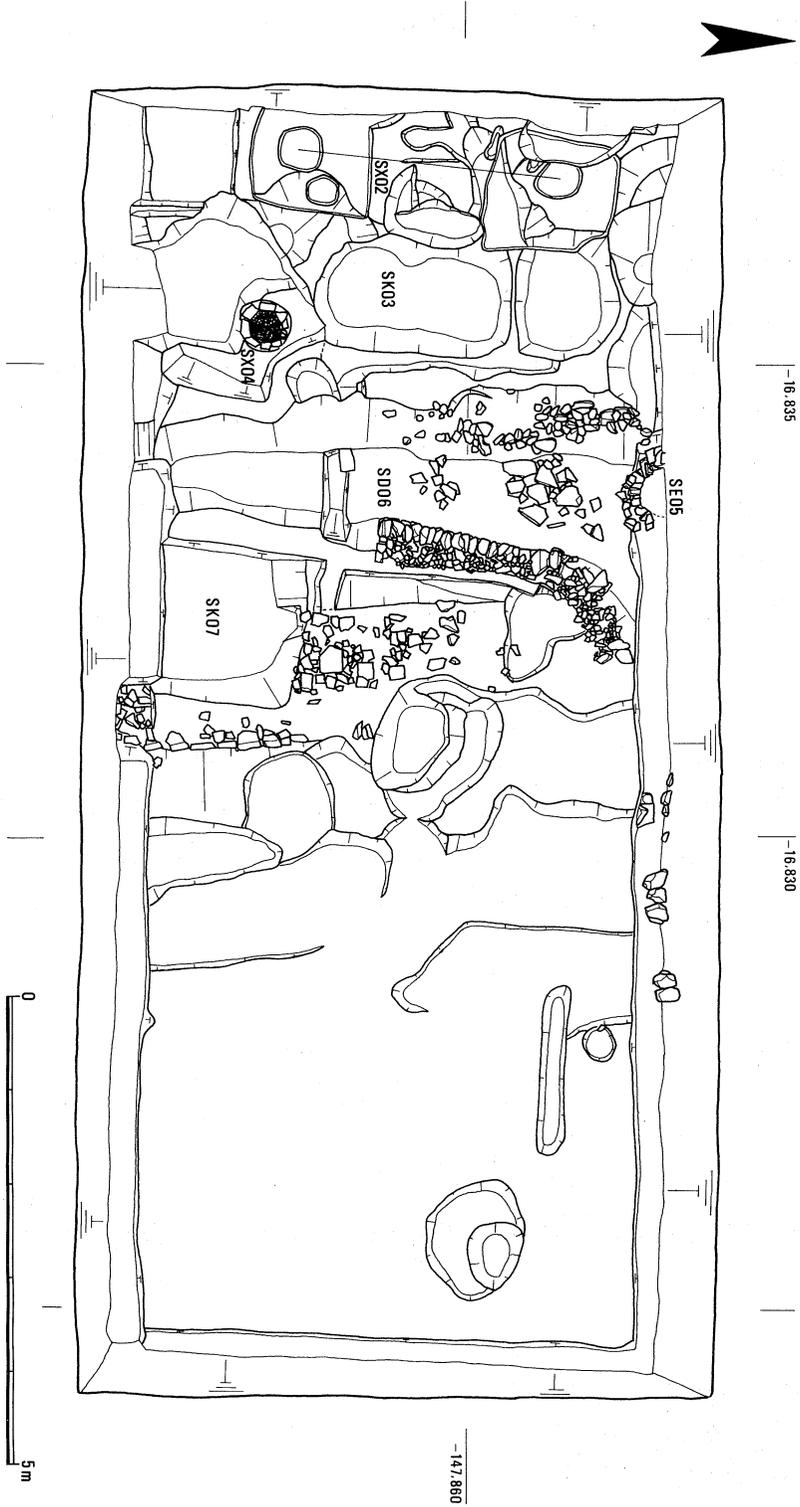
また、土坑群S K03の底で、平面円形掘形の土坑S X04を検出した。直径0.55m、深さはわずかに0.06m残存する。底には、掘形の内側に沿って、長方形あるいは三角形に打ち欠いた平瓦を置き、さらにその内側に、バラスを敷きつめている。土坑群S K03によって、上部は大部分が破壊されていると思われ、瓦は少なくとも数段は積まれていた可能性がある。性格は不明である。

中世の遺構 杉山古墳周濠埋土上面で土坑、溝を検出した。なお、周濠埋土の一部から14~15世紀の土師器皿が集中して出土した。遺構は認識できなかったが、土坑あるいは落ち込みが存在したものと理解する。

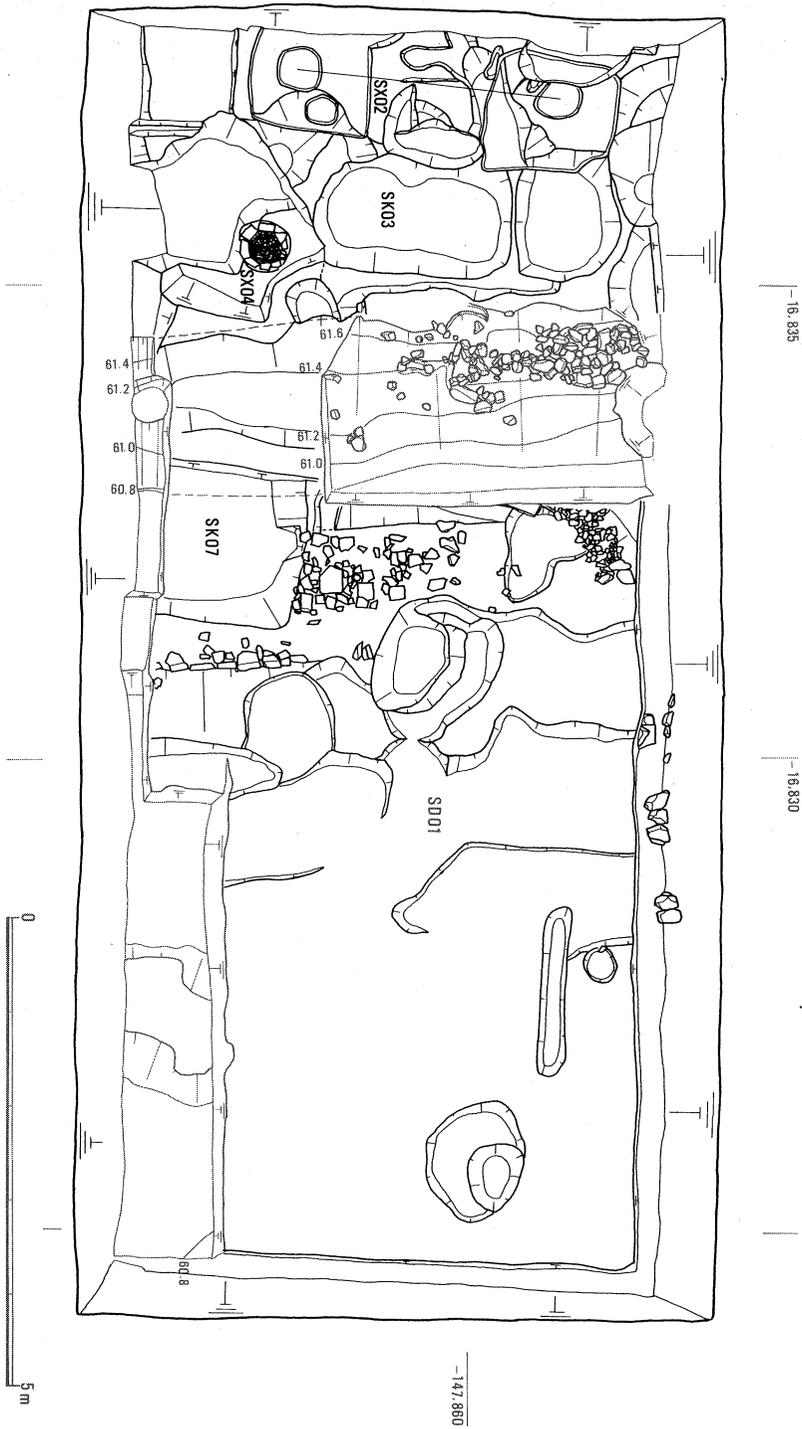
また、発掘区北端の周濠外岸で、平面円形掘形の井戸S E05を検出した。掘形の半分以上が発掘区北壁にかかるため、底まで掘り下げることができなかった。したがって、出土遺物は皆無だが、奈良、あるいは平安時代の瓦を小口積みして井戸側を作っており、付近の調査例からみて、中世のものと思われる。掘形の直径は1.1m、井戸側の直径は0.7mである。



第72次調査 北壁土層図(1/80)



第72次調査 遺構平面図 (1/80)



第72次調査 杉山古墳周濠平面図 (1/80)

近世の遺構 発掘区のほぼ中央で、南北方向の溝S D06A・Bと平面方形の土坑S K07を検出した。溝S D06は改修されており、新しい溝Bは、南半部は素掘りであるが、東岸の北半部に護岸の石積みをとともう。石積みは小口積みで、掘形との間に小礫を充填している。西岸では、東岸の石積みに対応するように、北半部に杉山古墳の葺石が残存しており、あるいは、そのまま護岸の石積みとして利用したのかもしれない。溝Bは南北に直線的のび、底には部分的に平瓦が敷かれている。幅は0.9m、深さ0.25mである。また、古い溝Aは発掘区の北端で大きく東に曲がる。溝Aも、溝Bと重複していない湾曲部の岸に、やや乱れているが、護岸の石積みと思われるものが残っている。

土坑S K07は東西1.6m以上、南北1.7m、深さ0.4m。遺構の重複があり、S K07がS D06より古い。

IV 出土遺物

古墳時代の埴輪、奈良時代の瓦類・土師器・須恵器・奈良三彩・銅箸・水晶玉、平安時代の瓦類・土師器・黒色土器・緑釉陶器、中世の土師器、近世の土師器・瓦質土器があり、ほかに鉄釘・鉄滓・石製硯・砥石がある。遺物整理箱140箱分出土した。

このうち、122箱分は瓦類で、大半は丸瓦・平瓦である。ほかに、軒丸瓦・軒平瓦・凸面布目瓦・埴がある。軒丸瓦は、奈良時代のもの5型式6種12点、型式不明のものが5点、平安時代以降のもの3点である。軒平瓦は、奈良時代のもの5型式8種27点、型式不明のもの5点、三重弧紋1点、平安時代以降のもの8点である。軒丸瓦の型式、種、数量の内訳は、6091A 1点、6137A 3点、6138C 4点（うちC a 2点、C b 1点）、6138 J 1点、6231C 1点、6304D 2点である。軒平瓦の内訳は、6664A 5点、6690A 1点、6712A 9点、6712B 1点、6712C 1点、6716C 4点、6716F 1点、6717A 5点である。

また、奈良三彩は整理箱1箱分である。また、銅箸2点、水晶丸玉1点は周濠埋土の暗灰色砂土、灰色砂から出土した。なお、出土遺物の詳細については、『史跡大安寺旧境内I』奈良市教育委員会、1997年に報告している。

V まとめ

これまでの食堂推定地の調査では、奈良時代の遺構は検出されていなかったが、今回の調査でも、奈良時代の遺構は検出できなかった。今回の調査地では、奈良時代でも依然として杉山古墳の周濠が存在し、平安時代になって初めて、周濠が埋められ、整地されて掘立柱建物あるいは扉が建っている状況がうかがえる。食堂の位置をめぐることは、講堂の北に配されたとする説と講堂の東に配されたとする説があるが、奈良時代の食堂が想定される位置では、杉山古墳の周濠が埋まっていないことから、少なくとも講堂の真北に想定するのは困難なように思われる。講堂の北に配されたと考えるならば、これまでの想定位置よりも、杉山古墳の周濠から離れた、西に想定せざるをえないだろう。（森下浩行）